

---

# Chase!

秋月 榎莫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Chase!

### 【Nコード】

N3202Q

### 【作者名】

秋月 榎莫

### 【あらすじ】

刑事3人は、ある青年を追う。その青年は普通のひとは持たないふしぎな「力」を持っていた。

舞台は私たちが住んでる世界のパラレルワールド。

普通ではない規制のゆるい法律、ありえない警察組織、不思議な世界観、どこかが明らかにハズれてる人々…。

彼らは青年を追って色々な街を訪れ、色々な事件に巻き込まれる。

果たして彼らの任務に終わりは来るのか。

そして、青年が刑事たちから逃げる本当の理由とは…？

目次の下に人気キャラ投票を設置しました。(パソコンのみ)よければどうぞ。

はじめに

この小説はフィクションです。

ありえない事ばかり起こったり、筆者の幼稚な思考が文面に出てる  
気がするので（笑）、苦手な方はスルーしてください。

この物語が本格始動するのはおそらく：第一章からだと思われます。  
出来れば一章すべてに目を通していただくと、これがどんな物語  
なのかわかるかと。

第二章あたりからBL要素を入れるつもりで考えています。さら  
に第三章からはR15に。なので最初はただのコメディだと思って  
ください！苦手な方は引き返してください。

3

あと、この世界観は微妙にわかりづらいかもしれませんが後々わか  
る様にはしたいと思っています。なので最初はあまり気にしないで  
ください。文章がたたくてすみません！（ちなみに、コメディ―  
とシリアスが混在してます。）

そして最後にひとつ。

この物語の主人公メンバーは特定のツツコミ役がないという致命  
的な状況です。

なので代わりに多少口調の荒い筆者が突っ込む場合があります。ご了承ください！

それでは本編へどうぞ。

夕暮れの雑踏を掻き分けながら2人の男はせまい路地に逃げ込んだ。

1人は背の高い30代半ばの黒人の男、もう1人は東洋系の顔立ちの良い若い青年である。

黒人の男はパーカーを着ていて、青年は白いワイシャツに黒の長いスーツパンツをはいていた。黒人は禿頭、青年は少し長めで毛先が所々はねた黒髪だ。

激しく息をきらしている黒人の男は水が入ったペットボトルを一気に飲み干し、荒々しく口を手でぬぐって傍らの青年に声をかける。

「はあっ…助かったぜ。一時はどうなることかと思っただが、お前のお陰だ」

そんな男とは逆に息切れさえしていない青年は「いえ、たいしたこととしてはませんか」と落ち着いた口調で言った。

「もしあの時お前が刑事をやり過ごしてくれなかったら…俺はこれを得られなかった。つか、捕まっちゃまうしな」

男は自分の手の中にあるビニール袋に入った少量の白い粉をうつとりとながめた。…そう、ドラッグだ。

青年はそんな男の様子を一瞥し、さらっと声をかける。

「…交換条件、覚えてますね？」

「ああ、もちろんさ。でも本当にこんなもんでいいのか？」

男がポケットから取り出したのは夜行列車のチケット。それを受け取った青年はしっかりと確認し、

「…充分です」と、かすかに笑った。

本音を言ってしまうえば、こんな男の近くからは一刻も早く離れたい。

青年が手を貸したのはこのチケットを得るためであって、犯罪者の手助けがしたかったわけではないのだ。

黒人の男は多分、彼を犯罪者の味方だろうと勘違いしている。それは青年自身にも予感があった。

ふと男は何かを思い出したように口を開く。

「ああそうだ、お前とさっき話していた女が居ただろう」

「…アマンダさん、ですか？」

アマンダとは、青年がこの街に来たときに道案内をしてくれた気さくな女性のことだ。

男はその名前を聞いてうなずき更に質問する。

「アイツはお前の知り合いか？」

「いえ、数時間前に出会ったばかりだったので特に親しくはないですが」

「そうか、それなら良かった」

男の言葉に青年はいぶかしげな表情をする。

何がよかったというんだ。

「なぜ、そんなことを聞くんです？」

その青年の問いかけに、待ってましたと言っても言つように男は答える。

「これから殺すからだよ」

「…は？」

「アイツは俺と敵対してる男の女なんだ。アイツを殺せばいい見せしめになる」

敵対してる男の絶望した顔を想像してるのか、男は楽しそうに残酷なことを言う。

…目つきを変えた青年に気づかずに。

青年の記憶の中で、アマンダとの会話が繰り返される。

『…私ね、今子どもがお腹にいるの。最近わかったことなんだけどねえ…』

彼女は嬉しそうに、後に生まれる子どもと、そして夫と一緒に旅行に行きたいと話していた。

これで、青年の予感には裏付けられた。この男は青年を犯罪者の味方だと考えている、と。

そうでなければ、殺人予告なんてするわけがない。

この男は今、馬鹿なことをした。

青年は静かに口を開く。

「この世界の『正当防衛』は、殺人する可能性が高いと判断すれば例え殺人予告であっても適応されます。知ってますか？」

青年の言葉を聞いた男は気づく。

己の間違いと、『正当防衛』という言葉が示す、この後起こる自分の末路を。

「う…ウソだろ、だってさっきは俺を助けて…」

「…」 口は災いのもと ” って言いますよね？」

その直後、青い光が路地を包んだ。

\*\*\*

人だかりができた路地の近くに3人の刑事がいた。

彼らは白いワイシャツを着て、黒のスーツパンツをはいている。 )  
先ほどの青年と同じ格好である。 )

1人は30歳で無造作なオールバックの黒髪を持つ背の高い男…刑事のゲイル・ガルシア。

あとの2人は彼の部下である。

片方は背丈は標準（だがしかし周りの身長が高いので小さく見える）、少しハネた金髪を持つ男、ラストイウス・フォルカ。

もう1人は背が高めで紺色の髪を持つメガネをかけた男、シリウス・レイター。

この部下2人は共に22歳だ。

この3人がなぜここにいるのかというと、殺人事件が起こったからである。

ラストイウス・フォルカ…通称ラスは、今さっきその現場の状況を地元の警察から聞いたところだった。彼ら3人はここから遠く離れた都会のロンドンから任務のために来たため、この地域の人間ではない。

「ラス!どうだった?」

ゲイルがたずねるとラスは軽い敬語を使って答えた。

「ん」と、どうやら地元の警察が追っていた薬物所持の男が遺体となつて発見されたみたいっすね。担当の刑事から許可をとつたので俺たちも見に行きましょう」

その言葉にゲイルとシリウスはうなずき、3人は現場がある方向へむかった。

すると、彼らに気づいたのか地元の刑事がやってくる。

「ガルシア刑事！ー良いところに来てくれましたね！わざわざ警察本部からいらっしやるとは我々も驚きました…」

「任務の途中でこの街に立ち寄っていたところなんだ。任務の性質上、旅をしながらこうやって地域の色々な事件に首を突っ込んでい  
る」

彼らの任務…それはある青年を追うことだ。だがこの話を一般人に話すと混乱を起こしかねない。

なにしろ、非現実的なのだから。

任務の内容を細かくは言わずに簡単に身の上の説明をしてゲイルは現場に向かう刑事の横に並んで歩き始める。2人の部下はその後に続いた。

刑事との会話は続く。

「そうなんですか…。いやあ、ここらは普段殺人なんてめつたに起きない地域なんで久々に緊張してしまつて。お見苦しい事件現場なのですが…」

刑事の言葉にゲイルは「いいや」と首を横に振り、苦笑を彼に向けた。

「最近警察の組織自体が壊れてしまつて今や警察は『なんでも屋』

扱いだ。地域部や刑事部とかいう括りも無くなって色んな事をさせられるから本部の奴らも日々奮闘してるよ」

「そうなんです。この前通報が来たときなんて『飼い猫が居なくなつたから探してくれ』ですよ？馬鹿にしてるとしか思えません」

ゲイルの言葉にうんうんとうなずきながら愚痴をこぼすあたり、彼も色々奮闘しているのだろう。

それを感じ取ったゲイルは、あまり愚痴を言わせ過ぎたらこれから仕事に精が入らないだろうと考えて話を戻す。

「では、早速遺体を見せてもらおうか。死因はわかっているか？」  
「ああ、それが…死因がわかっていないのです」

地元の警察と話しながら現場の路地に入った、そのとき。

カッ！！

「！！」

部下の1人のシリウスはすばやく反応して歩く歩調をとめた。そして自分の左斜め上のコンクリートの壁を見る。

そこにはカードが、『突き刺さって』いた。

「…先パイ、これは」

シリウスはそのカードを取ってゲイルに見せる。

ゲイルはそれを見て目を見開き、「メッセージカードだ」と、そう言った。

\*\*\*

「視点：ゲイル」

「バルサイド通り9条5-34に住む、アマンダ・エ・スノーレという女性の生存を確認してください」…何ですか、コレ？」

カードの文字を読みながら首をかしげたラスに俺は「『レスト』からのお願ひさ」と答える。

『レスト』…それは俺たちが追っている青年のことを指す。

本当の名前がわからないからそう呼んでいるのだ。

そして今回のこの事件はレストが引き起こしているのではないかと俺は確信してさっき後輩の2人にも伝えた。

今俺たちはカードに書かれた女性の家に徒歩で向かっている。空は日がすでに暮れて街灯の明かりが付きだす頃あいだ。

シリウスは缶コーヒを飲みながら思考をめぐらせる。

「何か不思議ですよ。コンクリートにカードが『刺さる』時点でおかしいし、第一カードの角度から考えてありえない刺さり方だった。被害者の死因も不明だし……」

「つーか俺たち、その『レスト』って子を追つてもどんな子が知らないし。…先パイ、改めて聞きますけどどんな子っスか？」

「どんな子って聞かれてもなあ…どうせ今から会いに行く女性に聞けばいいじゃないか」

俺がそう言つと隣でシリウスが「…確かに」とうなずく。

だがラスは納得のいかない顔をして俺をまじまじと見た。

「え〜…なんかこーいうのってすぐ聞きたいんですよ！先パイは『レスト』って子見たことあるんですよね？」

「そりゃあ見てるが…」

…見てるっていうか、一時期一緒に暮らしていたこともあるんだが。まあ言わなくてもいいか。

とりあえずどんな容姿かはわかっている。だが…

「俺は、文章で説明するのが苦手なんだ」

「えー！？そんな理由！？」

そんなって…れっきとした理由だろう！

「ラス、先パイが困ってるぞ。22にもなって駄々をこねるなよ。  
…まあ童顔だから違和感はあまりないけど」

シリウス…たぶんそれはフォローじゃない…

「童顔ってゆーな！俺は俺なりに頑張ってただよ！！」

「何を頑張るのやら…」

「何って…老け顔とか？」

「ちよつとやってみろ」

「……………、…どうだ！！」（彼なりの老け顔を実践中）

「ああ、それは老け顔じゃない。変顔の間違いだ」

「んだと、もう一回言ってみろ！」

「変顔。」

「何回も言っなあ〜！！」

…なんなんだ、お前ら。（あえて口には出さないが。）

俺は煙草に火をつけて空を見上げた。

話の軸を戻して、『レスト』のことを考える。そして後輩の2人に告げた。

「まあ顔の話はいいとして『レスト』のことだが・・・あえて言うなら、昔はいつも自分の存在を探してるような悲しい目をしてた」

……。

俺の言葉の後に変な沈黙。そしてラスがきつぱりと言った。

「先パイ、なんか格好良く言い切った感じっすけど、抽象的すぎて全然わかりません」（失礼極まりない発言。）

「とりあえず悲しそうなんだろ」（小声）

シリウス、その小声は丸聞こえだ。まったく、これだから説明は苦手なんだ…。

「お前らも一度『レスト』を見ればわかるはずだよ。…ほら、そろそろ女性の家に着くぞ。身だしなみ整えとけ」

後輩2人「ういっす」「はい」

\*\*\*

…ピンポーン。

「はい」

ドアを開けた女性は茶色のパーマがかった長髪を持っていた。声の感じからして明るい女性のようなのだ。

「アマンダ・エ・スノーレさんですか？」

「ええ。 ……あなたたちはどなた？」

そう聞かれたので俺たちは警察手帳を彼女にみせた。

「刑事のゲイル・ガルシアです。いきなり訪ねて申し訳ない」

「後輩のシリウス・レイターです」

「同じく、ラストイウス・フォルカです」

「刑事の方？ いったい何の用？」

「実はある青年にあなたの生存を確認するように頼まれましたね」

「青年…？ 誰かいたかしら」

「知っていると思います。黒髪で東洋系の…」

俺がそうつけ加えると、彼女はなにかひらめいたようだ。

「ああ〜！わかったわ、キョウウゴ君ね！」

「キョウウゴ…？確かにそう名乗ったんですか？」

それは聞きなれない名前だった。レストがそう名乗ったのか？

「ええ、東洋系の子はあまりこの地域に居ないからたぶんあってると思うわ。けどなんであたしの生存を…？」

それは…、と俺が説明しようとしたとき。

「あのっキョウウゴ君ってどんな子でしたか!？」

目の前に金髪が割り込む。アマンドは「えっ？」と、目をしばたか

せてから答えた。

「そうねえ…まず静かな子だって思ったわ。それに結構かつこよかつたわよ。かつこいいってよりも『美形』の方が正しいかしら。あとは…どこか魅力のある子だった。結構長い時間をかけて道案内してあげただけど、あの子全然自分の話をしてくれなかったわ。まあ、そこが魅力なんだろうけど」

「へえ…」

「ああそういえばあの子、『今 街に入ってきたばかりで…』って言って宿の場所を聞いてきたけどその時何も荷物を持っていなかったの。不思議よね」

「えっ？」

「だって普通どこかに泊まるなら、少なくとも何か荷物を持っているはずでしょ？」

「あー確かに…!!ヤベえめっちゃソレ気にな…うおっ!？」

視線をそらしていた俺が、どうしたのかと思ってみてみればシリウスがラスを引っ込ませていた。

「申し訳ありません、同期がうるさくて…」

そんなシリウスの謝罪の言葉にアマンドは「いいのいいの〜！元気な証拠じゃない！」と笑って手をひらひらと振った。

なんて良い女性なんだ。

「はあ…ありがとうございます。…それで、彼はその宿にいるかもしれないんですね？場所を教えてくださいませんか」

「ええ。その角をまがって…」

シリウスが話を戻したお陰で捜査が進みそうだ。

そして…アマンドが道を教えている間、俺の隣では。

「なんなんスか、アイツ！俺を人形のように突き飛ばしといて…  
！…！」

…ラスがシリウスを指差して文句を言っていた。

目がわずかに潤んでいる気がする。さっきのあれだけでか…？

「まあいいじゃないか、レストのことを聞けたんだし」と優しくなだめるとラスは若干うつむいた。

「うう…」

「そんな顔しないでくれ…」

「だってえ…」

「…子どもに泣かれても困るが、二十歳を過ぎた後輩に泣かれるのも困る」

「うう…先パイって…なんかアレですよね」

「なんだ？」

「一見すると怖いのに喋ってしまえばすごく優しいじゃないスカ！  
もう、なんなんスカ!？」

「なんで…怒ってるんだ？」（キョトンとする。）

「怒ってないです！感極まってるんですよ!！」

「ああーそうかそうか。…とりあえず泣き止んでくれよ…」

俺は苦笑してラスの肩をポンポンとたたいた。

「先パイ、初対面の人の前では黙って煙草吸ってたほうがいいっスよ。絶対そのほうがカッコイイですからっ!！」

…おいラス、それはいったいどういう意味だ…

「…」  
「…」  
「忠告どうもありがとう」（渋々）

そんな会話をしてるうちにシリウスの方は宿への道を聞き終わった

らしい。  
シリウスが俺の方に真剣な視線を向ける。

「先パイ、宿に向かいますよ！」

「ああ。 ……アマンダさん、ご協力ありがとうございました」

「いえ…あの、それよりキョウゴ君が、何か悪いことでも…？」

…ああその質問の回答をまだしていなかったな。

俺は彼女を安心させるように、

「いや、あいつはあなたを護っただけですよ」

と、言い残して後輩と共に再び歩き始めた。

\*\*\*

「視点：筆者」

しばらくアマンダから聞いた道を歩いていくと宿に着いた。  
2階建ての造りで、特に目立つ目印も無いシンプルな外装である。

ゲイルはふうつと息を吐いて後輩2人を一度振り向き、

「じゃあ俺が行ってくるからお前らはここで待っていてくれ」

そう言い残して建物の中に入っていった。

後輩2人は特にやることもないので近くのガードレールに腰掛ける。

シリウスはすっかり飲み干したコーヒーの空き缶をほんの数メートル先に設置されたゴミ箱に向かって投げて…見事に空き缶はその中に入った。

そして口元に笑みを浮かべてただのゴミ箱にドヤ顔を向ける。

…こいつ真面目そうな顔して中身はガキだ。

その様子をまったく見ていなかった相方のラスは「あ、なあちよつとシリウス」と言って自らの左手の薬指の第二関節を曲げて見せ、

「この状態にしていると第一関節に力が入らなくなる！すごくね？」

…こいつも、ガキである。（ラスの言葉に「…本当だ」と素直に驚嘆したシリウスの態度は言うまでも無い。）

しかもたわいのない話だったからか会話はすぐに途切れた。

「そついえばさっきの挨拶、あれでよかったのかな」

ふとシリウスがどこを見るわけでもない目をして眩き、ラスは首をかしげた。

「何が。」

「アマンダさんのところに行つたときに警察手帳を見せて名乗つた  
だろ。あの時俺、『後輩のシリウス・レイターです』って言ったけ  
ど実際の公式的なやり方にあつてたのかわからない」

「ああ、アレのこと？ ……さあな。だつて俺ら…基本の挨拶の仕方、  
警察学校で教わつてないじゃん。」 つーか、それ教わるもんなの？

カアアアカアアア

(カラスの鳴き声を聞きながら2人して遠い目。)

「俺たちってこの数年間あそこで何学んだっけ。」

「……………筋トレ？」 あと、その他もろもろ？

シリウスはため息をひとつ。

その横でラスが「あ、」と言葉を漏らしてから相方の方を見る。

「ところでさ、先パイってホントに『刑事』なのかな。…確かもうちよっと階級高くなかったっけ？」

「本人もよくわからないらしい。たぶん『警部』くらいは軽く超えてるんじゃないかな。ただ、今の俺たちの組織ってなんか色々アバウトだし不思議だから、どうだろう」

「うーん、確かに。俺たちが所属してる『警察庁特殊捜査班』も一応新設だし、階級とかしっかりしてないのかも」

「見切り発車でよくもまあ警察の組織立て直したよな…」

そして再び沈黙。この2人の会話は長続きしないのだろうか。

シリウスが腕時計を見ると、時刻は午後7時を過ぎていた。未だゲイルは戻ってこない。

「いよいよキョウゴ君に会えるんだな」  
「んー…どんな子だろ…」

「おい…お前確かにアマンドさんに聞いたよな？」

次の瞬間、バンツ！！と豪快な音をたてて宿の扉が開き、ゲイルが出てきた。

「ラス、シリウス！！ 『レスト』はここに居ない！！」

後輩2人「はいいつ！！！！？」

ゲイルは大股で近くのベンチまで歩き、どかっとな腰をおろして盛大なため息をついて目を閉じる。

「数時間前にここをキャンセルしたらしい。くそ…今回はあいつに『負けた』かもしれん」

「先パイ…」

後輩2人がゲイルに近づき、どんな言葉をかけようかと目を合わせていた時。

ゲイルはカッと目を開いた。

「あ」

「「あ？」」

後輩が不思議な表情をしているその目の前でゲイルは何かを確信したように表情が晴れていき、

「よし…よし！夜行列車乗るぞ！走れ、遅くなっちまう！！」

「「はいっ！？」」（本日2回目）

そんな後輩の言葉など聞かずに2人の間を突っ切っていった。

…30代とはいえ、あなどれない速さである。

だが。

ラス「とりあえず訳わからんけど、いくぜ!!」

本部で鍛え上げられてまだ間もない2人の方も、  
…あなどれない速さである。

\*

その頃青年『レスト』…いや、キョウゴは一足先に夜行列車に乗っていた。少し古びた列車で道も旧道なのかあまり手を加えられていない。

列車は今、長いトンネルを抜けた。

くぐもった轟音が一気に耳を抜けるとそこには先ほどの夕焼けはなく、夜の空が現れて広い海は月の光を受けて紺碧に輝いている。

この列車はこれから海沿いの林道を抜けて海の上を走るのだ。

キョウゴは列車内の電気のスイッチを探して電気を消す。すると月明かりがいつそう綺麗に見えた。

（彼以外にその車両に乗っている者は居ないので電気を消しても支障はない）

彼はつり革につかまって海を眺める。昔からこういう景色は好きだった。

ふと、ある人のことが頭をよぎる。そして微笑した。

「…今回は俺の『勝ち』ですね、刑事さん」

月に雲がかかって、光を覆い隠した。同時に彼の表情が曇る。

ただなんとなくさっきの景色をしばらく見ていたかった彼は右手を空にかざして…雲を払いのけた。

そう、彼は普通の人間とは少し離れた存在だった。

\*\*\*

「はああああ…」

聞こえてきたのは盛大なため息。

ラスは列車の座席に死んだようにもたれかかっている。

「結局間に合いませんでしたね、走ったのに…」

その隣に座るゲイルは前かがみで俯いている。

「運が悪すぎた。まさか次の街のセリスキュオレート行きが1本しか列車がなかったとは…」

さらにその隣のシリウスはちゃんと座席に座ってはいるものの、顔に一切の表情がない。なるほど、限界を超えると人は無表情になるのか。

「…しかも駅についてからホテルに荷物を置いてるのを思い出すし…」

「…はあああ…」「」（げっそり）

…情けない刑事3人の無様な姿である。

それもそのはず、先ほど彼らが駅に着いた時には夜行列車はもう発車していて（おそらくキョウゴはそれに乗っていた）、深夜の今頃になってようやく往復してきたこの列車に乗ったのだ。

無論体力はピークにきている。

しばらくしてラスはゲイルに聞いた。

「あ、先パイ、なんでわざわざ電気のついてない車両を選んで乗ったんですか？どうせあの後すぐに電気つけたんだし、この車両じゃなくても…。ってかそれ以前になんで夜行列車に？キョウゴ君はどうするんですか！」

「ああ、そのことだが。『レスト』はなんとなくセリスキュオレートに行くだろうと思った。で、あいつは必ずこの車両に乗っていた気がするんだ」

隣のシリウスはいぶかしげな表情をする。

「なんとなくって…根拠はないんですか？」

するとゲイルは自信ありげに言い切った。

「刑事のカンだ」

シリウス「……」（なんだこのドラマみたいなセリフ……）

ラス「……うっわーウソだろー……？」（小声）

「いやいや、前からこのやり方なんだ。外れたことはない」

「よく当たってましたね、今まで……」

「まあな。ああそつだ、ところで今日の今回がお前らの初任務だったわけだが……どういう経緯で入ったんだ？大学はどこを出た？」

そう、紹介を忘れたがこの後輩2人は今回新しくこの任務に就いたのだ。

出会ったのは今朝のことで当然ゲイルはまだこの2人のことを把握

しきっていない。

そこで、おそらくこいつらは良い大学を卒業してるのでは、と考えたのだ。

そんなゲイルに、

「ああ、それなら……」

2人は真面目かつ自信あり気にこう言った。

「高卒です!!」

……………。

…終わった。何かが終わった。

ゲイルの期待が崩壊へ向かったのは、まさにこの時である。

\*

「視点：ゲイル」

「え、先パイ！なに無言になってんですか！中卒よつかマシでしょ！？」

「…まあお前らの年齢を聞いたらそれが普通だよな…」

「ですが先パイ、安心してください。俺たちは一応ちゃんと独学で色々な知識は知ってるつもりです」

…真面目そんなシリウスがこう言うならば、大丈夫か…？

「そうか…。あ、ならばこの任務に就く際に使われた書類はどうだ！本部がそれを見てお前らを採用したんだ、きっと魅力的な趣味や特技があったんだろう？」

そうだ、本部のやつが適当に人を採用するはずがない。何かあるはずだ。

俺の言葉を聞いたラスは考え込む動きを見せる。

「んーと、何だっけ… …あ、思い出した！！！」

そしてラスとシリウスが順に答えた。

ラス「旅行が趣味です!!」

シリウス「鬼ごっこなど、追いかけるものの全般が得意です」

……期待、粉碎。

「…聞かなかったことにしてほしい」

「ラス、特技の欄に何か書いたか？」（ゲイルをスルー。）

「なんかありすぎて書いてない。お前は？」（同じくゲイルをス

ルー。)

「俺もだ。本当はピッキングとか薬草調合とかあるんだけど、さすがに…」

「…怪しいね」

…ああわかった、俺はお前らの話についていけない…。

だからとりあえずその警察らしからぬ言葉を慎んでくれ…

「警察庁は一体何考えてやがんだ…」

俺は無意識に片手で顔を覆っていた。この俺の落胆さを誰かわかってくれ…

「あ、先パイ、そーいや班長から手紙を渡されてたんすよ。…ど

うぞ

「ん…？」

あいつから、手紙？

あいつと言うのは、某チエコ出身のハゲ頭（頭頂部のみ）：俺たちが所属している『警察庁特殊捜査班』の班長のことだ。

俺の口調でわかるとおり、昔から俺をいらだたせている男だ。ちなみに、50代。メタボ。

それはいいとして、あいつから俺に手紙だと？何か本部であったのだろうか。

俺はラスから手紙を受け取り、緊張した面持ちでそれを開く。

そしてそこに書いてあった言葉は。

『まあガンバ!』

…およそ5文字のザツな文体。

『まあほどほどに頑張つて!』ではない、『まあガンバ!』という軽さがなんともいえない。

あああいつはそういうやつでした。すっかり忘れてました。あれだろ、いつもみたく親指立てて「H A H A H A」って笑ってたんだよな？

……って、ふざけんじゃねえ!!!

あいつ本気で頭頂部だけでなく全てハゲあがればいい…そう、全て

…!

第一そんな言葉をいい年して使ってんじゃねえよ、アホか!

「あ、あのー…先パイ、先パイ?」

後輩の声が聞こえる。だが気にしない。たとえさっきの手紙が俺の  
手の中でぐちゃぐちゃになろうとも、気にしない…

\*

「視点・筆者」

……。

ラスは、車両の隅にあるゴミ箱を眺める。

「いいんですかー？手紙捨てちゃって……」

その問いかけにゲイルはスツキリとした笑顔で、

「俺としたことが、腹が立ってしまっただけ……」

……自分のかばんをバシバシ叩いていた。隣のシリウスが引きつった笑みを浮かべたのは言うまでもない。

\*\*\*

しばらくして列車はトンネルに入った。

座席の順は変わり、後輩2人が並んで座ってその隣がゲイルである。

ラスは、ぼんやりと列車内の蛍光灯を見ながら唐突に呟いた。

「俺さあ、いつか『幻想都市 日本』に行ってみたい」

それを聞いたシリウスは首をかしげる。

「日本に？あそこはパラレルワールドの境界だぞ？ふつとばされたらどうする」

「だって見たくない？あそこは原因不明の消滅から鎖国状態になって…人間が消えたはずなのに、狐のお面をした謎の一族が住み着いてるって話だ。それに『時空の象徴』の桜や池のまわりの紫苑に、山にかかる春霞！神秘的なもんばっかで気になるじゃん！」

「でもパラレルワールドじゃあ『核』っていう危険な兵器を作ったりしてるんだろ？その情報も確かじゃないが…」

「んー、まあな。でも、それでもいいや。とにかく全然違う日本も、俺たちの世界の日本も見たいんだよね」

「違う日本、か。この世界の日本でさえよくわかってないのに」

「いつかの話だつて。だつて俺、今はこの任務で結構ワクワクしてるもん。…あ、先パイ、こんなこと言っているのかわかりませんけど、この任務って旅行みたいで楽しいですね!!」

ラスはゲイルのほうに無邪気な少年のような瞳を向けた。少し遅れてシリウスもうなずく。

その言葉にゲイルは微笑した。

「そつだな。お前らも楽しんでくれて嬉しいよ」

「キヨウゴ君に感謝ですね」

「まあな。たまに結構疲れることもあるが……」

そしてゲイルの言葉をさえぎるように　ゴオツと轟音が鳴り、  
列車はトンネルを抜けた。  
ラスは歓声をあげる。

窓の向こうには月に照らされて綺麗に光る海が広がっていた。

それを見た瞬間ゲイルは何かを感じ取り車両内の電気のスイッチを  
探して、消した。

シリウスはその時、窓にメッセージが現れるのを見る。

「先パイ、窓にメッセージが！」

それは、『レスト』からのメッセージだった。

\*

そこに書かれていたのは、さっきまで刑事たちが居た街での殺人に関する内容だった。

『レスト』が黒人の男を殺した理由も、それまでのいきさつも丁寧な言葉で書かれている。

ゲイルはそれを見てひとつうなずいた。

「…なるほど、確かに『正当防衛』は成立している」

「つまりあの黒人の男は『レスト』…いや、キョウゴ君に殺されたんですね」

「まあそうだが…結果的にあいつはアマンダさんを護ったんだ。この世界の法律では許される」

ゲイルがそう言いきった後、そのメッセージはまるで溶けるように消えた。

ラスは目を見開く。

「あの…、先パイ。黒人の男の死因が不明だったり、カードが壁に突き刺さったり、メッセージが消えたり…それってまさかのまさかですけど、キョウゴ君って超能力者とか!？」

……ラスの言葉にしばしの沈黙。

そしてシリウスはため息をつく。

「ラス…今頃きづくなよ」 俺だって予感はしてた。

「え、マジかよ!!」 つつか分かってたなら言えよ!

そんな後輩にゲイルは、

「あいつは…人とは違う『力』を持ってしまった人間なんだ」

と、そう言った。異質だと後輩は思うかもしれない。

でも心の奥では信じている。こいつらが『レスト』に出会ったとき、そして彼がどういう人間か分かったとき、きっと優しいやつだと分かってくれる。

\*\*\*

…月が水平線に沈むころ。

後輩2人はついに疲れ果てて横長の座席に寝転がり、自分のかばんを枕代わりにして眠っていた。

59

ゲイルは暗い表情で窓の外を眺めている。

夜になるとどうしてか人の死について考えてしまう。嫌なクセがついてしまったものだ。

彼は自分のかばんから毛布を2枚とりだして眠る後輩に不器用ながらにかけてやった。

そして呟く。

「お前らは 死なないでくれよ」

毛布をかけた反動で微かに目を覚ましていた後輩2人にとつて、その一言は忘れられないものだった。

序章

F i n .

序章 I H e l i v e s s o m e w h e r e n o w . . . I m u s t

小説を読んでくださった方、ありがとうございます！

今回はついにキョウゴとまさかの大騒ぎのなかで対面します。

少し文字数が多いので、次回の更新は1ヶ月ほど先になるのでは…  
と思っています。申し訳ありません！

感想などをいただければ嬉しいです。

もし何かご要望があれば可能な限り取り入れたいと思っていますので、  
よろしくお願いします。

## 第一章 I Runaway

．．．Part 1 (前書き)

ついに本格始動の本編！

今回の街はセリスキュオレートです。

最初からややこしい事件がからんできますが、なんとか耐えて読んでください！

もちろん、コメディー要素はあります。

あと、キョウゴの一人称が「僕」と「俺」で違うのは仕様です。なんとなくどういう使い分けなのか詮索してくださいw

果たしてゲイルとキョウゴはどのタイミングで出会うのか。

それでは、本編へどうぞ。

「視点：キョウゴ」

前の街を出て、夜行列車に乗って。  
たどり着いたのは、セリスキュオレートという街だった。

この世界は地域によって季節が全然違う。その地域の緯度や暦に関係なく季節が勝手に移ろうのだ。今回のこの場所は夏のような。  
(この世界で季節が暦どおり正常に移ろうのはロンドンである。)

真夜中にセリスキュオレートに着いた俺は早速宿を探し、その時間帯でもチェックインできるところに泊まった。

そして今…窓の外には朝の景色が見える。俺は簡単に身支度をして部屋を出て、階下につながる階段を下り始めた。

この宿は二階建てで、二階は客室。一階は従業員が住み、厨房や食堂がある。

今は朝食を食べに食堂に向かっているのだ。

俺は階段を下りながら今一度建物の内装を見渡す。

…特に豪華で目を引くものはない。どこにでもありそうな物ばかりだ。でも、心地いい。こういうのをアットホームって言うのかな。

それでいいんだ。俺が宿に求める最低条件だけ満たしていればそれで。

1・テレビ、新聞がある（見ることは少ないが情報があるに越したことはない）

2・騒がしくない所または部屋が防音（静かなところで早く寝たい）

3・最高1週間すごせそうな所（部屋の設備、環境、食事の鮮度などの点で）

4・食事を宿で食べれるなら嬉しい…（もはや条件というより願望）

5・今にも崩れそう、もしくは崩れるということがない宿（必須条件）

…若干3・4・5の条件がどこかおかしい気がするのは自覚している。でも5は過去に一度だけあった。

（俺が入り口にあるカウンターでチェックインをしようとした瞬間にカウンターから後ろの部分が全壊した）

あれの原因は…地盤沈下だったか…？

とりあえずこれらの条件がそろえば良いから、料金が高い宿には泊

まることがない。

金に困ってるわけじゃないけれど、結局日雇いのバイトをして宿代を払う分を作るからそういう意味での無駄はしないことにしている。

前の街でバイトはしてないから、一応ここら辺でバイトを探さない  
と。

そんなことを考えていたが、フツと昨夜聞こえた会話を思い出して  
その方に思考が向けられた。

俺は一階のエントランスホールにあるソファに腰掛ける。

どうやらこの宿では客が知らない水面下で面倒なことが起こってい  
るようだ。

…遺産相続問題、というやつだ。

\*

「視点：筆者」

簡単な事の発端は、先々週にももとの宿主が亡くなったことであ  
る。

彼は遺書を書いている途中で急死したためにその遺書は使い物にならず、全ての遺産は息子のセオールが受け取ることになっていた。（セオールの母はすでに亡くなっている）

しかし、その遺書の書きかけの文が問題を引き起こした。

遺書の最後には『私の遺産は、私が経営している宿の従業員』…と、かなり重要な部分で途切れていて、遺産相続人が明確に分からないのだ。

とはいえ、それでも遺書は使い物にならないから遺産は息子に渡されるべきだろう。

それなのに息子であるセオール以外の宿の従業員は彼に全ての遺産が渡されることをあまり良く思わず、批判した。

それは、遺産はセオールに渡されるべきだと分かっているも金に対する欲が収まらなかったからだろう。

金とは人を狂わせてしまうものだから。

そんなこともあり、セオールは何日間も考え込んだ。

彼の生活は決して豊かではない。遺産は彼の今後の生活も左右させるのだから考えるのは当たり前だろう。

彼には若い割りに宿主の息子としての十分な責任感があった。だからこそ考えてしまう。息子の立場にいる自分が出せる最善の結論とは一体何か、と。

そして彼は従業員たちに伝えた。

「父の遺産の半分をあなた達で分けてください」

彼は、従業員達の幸せを優先したのだった。

…これでこの問題は解決かと思われた。

しかし、さらにおかしい事態に発展する。ここで登場するのが宿の支配人の位置に立つ女、パトリシアである。

遺産相続の話が済み、次の宿主を決める際に彼女は言った。

「やっぱり次の宿主は私よね。私がいたから今までこの宿はやってこれたのよ!! そうでしょう? もしかしたら遺産だって私のものになるかもしれないのに…!!」

この言葉を聞いて分かるだろうが、彼女は性格が悪い。美しい顔を  
してるといふのに台無しだ。

美しいバラにはトゲがある、とはよく言うがここまでトゲばかりで  
あれば近づく人も少ないに決まっている。

実際、その言葉を聞いたとき従業員の大半は反論したかったのだろ  
うが、言えなかった。

そんな興奮気味に言った彼女に唯一反論する者がいた。この宿のシ  
エフであるゴールドだ。非常に体格が良い男である。

「何言ってるんだ、お前は全然働いてねえだろ！！俺は見てたぞ。  
セオールや親父さんが根気つめて壊れた客室直してる時だって、お  
前は遊び歩いてた！しかもその部屋壊したのはお前が連れてきた男  
だったじゃねえか！！」

それに対しパトリシアはゴールドをにらみつける。

「うるさいわね。壊したのは私じゃないわ。そういうことはアイツ  
に言ってちょうだい。言っとくけど私は今宿主の代わりなのよ？ク  
ビにするくらい簡単にできるわ」

権力を盾にするとは、まさにこういうことだ。セオールとしてもゴ

ルドをこんなことでクビにするのは許せない。

「やめてください、パトリシアさん！そんな簡単に人をクビにするのは宿主失格です！あなたの決断で人の人生を乱すことになるんですよ！？」

「あなたは分かってないのね。宿主は亡くなったの。だから今のあなたは普通の従業員。…ゴールドと一緒にクビにしてもらいたいのかしら？」

「…っ」

つまり、口出しはできないのだ。

セオールは唇を噛んで言葉を嚙む他なかった。他の従業員も、セオールの味方ではあるが『クビ』という言葉をかかげられては何も言えない。

それからというもの、宿主となったパトリシアは変わらず遊び歩き、セオールは支配人となって皆を取り仕切ることになり、今に至る。

…ここまでは、遺産相続問題の背景。

セオールはこの一件でかなり気疲れがあったものの、それを懸命に支えてくれる者がいた。

それは、パトリシアの妹であるカトレアだ。（彼女も宿の従業員。）

カトレアは内密であるがセオールの恋人である。

そして彼女は、パトリシアが唯一信頼している人物なのだ。つまり彼女は宿の中でただひとりの中立的立場の人間だということになる。

（今はセオールとパトリシアが対立しているような状況のため、彼女もあまり居心地はよくないだろう。）

話を戻してセオールとパトリシアについて考えると、

要は セオールは周りからの信頼があるが、権力はない。

パトリシアは周りからの信頼はないが、権力はある、ということだ。

セオールは遺産の分け方を決めたが、パトリシアはまだそのことに執着しているようだ。

結局のところ、まだ遺産は誰にも渡ってない。

しかし、あさつての夜、ついに遺産が手元に来る。両者の対立がこの問題に入りこんだため、一筋縄でいきそうにないだろう。

\*

そこで、キョウゴが聞いた会話の内容の話となる。

その会話は2つあってそれぞれ別の場所での会話で、昨日の夜にキョウゴが、嫌な予感がしたため『力』を使って一部を聞かせてもらったのだ。

1つはカトレアとパトリシアの会話。

パトリシアがカトレアに話しかける。

「ねえカトレア、もう少しで来るのよね?」

「? 何が?」

「何がって…遺産よ、遺産!」

彼女の声にかトレアの声音は沈んだようだった。

「…お姉ちゃん、またその話? やめた方が良くよ…遺産、遺産っ

て」

「何言ってるのよ。お金はあるだけ良いのよ？それくらいわかるでしょ？　ねえ、もう少して来るわよね？」

「来る…けど」

「ずいぶん乗り気じゃないのね。カトレアは欲しくないの、お金。良いものたくさん買えるのよ？」

パトリシアはうつとりとした声音でささやくと、カトレアは怒ったように、

「もう、お姉ちゃんやめてよ！！　…私はお金なんて欲しくないわ！！」

そう言い放って、次にドアがバンツと閉まる音が聞こえた。おそらく部屋を出て行ったのだろう。

残された部屋に静寂が戻る。

パトリシアは驚いているのか呆然と呟いた。

「…なによ、あの子…」

…そこで会話が途切れた。

もうひとつはセオールとゴルドの会話だ。

話題は、やはりこちらも遺産相続の話である。

会話は途中から聞こえた。

「セオール、またこの話で悪いんだが…」

「遺産相続の話？」

「ああ。カトレアとパトリシア以外の従業員と話して決めたんだが、やっぱり遺産はもらえねえよ。俺らなんかよりお前のために使うべきだ」

「ゴルド…」

「俺たちはお前がどれほど頑張ってるか知ってる。他のやつらも」  
あの時は悪かった、どうかしてたんだ』って言ってたぞ」

…『あの時』とは、セオールの遺産相続を従業員が批判したときのことを指しているのだろう。

セオールはそれを聞いて感慨をこめた声音で

「…そうか、みんなが…」

と呟いて、一度言葉を切り、優しく明瞭に言った。

「でも、いいんだ。遺産の話はそのまま、みんなと分けよう」

「…セオール！」

「父も、こんなに優しい従業員達には幸せになってほしいと思ってるぞ」

「…だからって、やっぱりあいつが一番幸せになってもらいたいの  
は息子のお前に決まってるんだろ。あいつと長年仲が良かった俺には  
わかる」

ゴルドの言葉の後に数秒の間。

「…僕はもう幸せだよ」

「お前はそう言うがな、顔に疲れが見えてる。…本当は疲れてんだろ？あいつと同じだ」

「心配してくれてありがとう、ゴルド。でも大丈夫だ。さ、今日は早く寝て明日もお客さんのために頑張らないと。僕はもう行くよ」

イスがきしむ音が聞こえた。セオールが座っていたイスから立ち上がったようだ。

「待て、セオール！ …パトリシアにも、同じ扱いするのか？」

「うん、もう決めた」

「そうか… …おやすみ」

「おやすみ、ゴルド」

そのあと、ドアがパタンと閉まる音が聞こえた。

その2つの会話を聞いたキョウゴは難しい表情をして押し黙り、ベッドに体を横たえる。

…もしこんな状況を刑事さんが知っていたら彼はどう動くのかな、と想像して。

目を閉じたキョウゴはそっと固かった表情を和らげた。

「きつと居ても立ってもいられないんだろっな…」

あの人は困ってる人がいればすぐ助けたくなくなってしまっただろうから。セオールさんが困っているなら、たとえ他人の遺産相続だろうと割り込んでしまいそうだ。

ほんの少しキョウゴの心の奥が暖かくなる。

とりあえず今回はもう少し様子を見よう、そう思って彼は目を閉じたのだった。

\*\*\*

「視点…キョウゴ」

「あれ？…あの、お食事の時間ですけど行かないんですか？」

突然、頭上から声が聞こえた。俺はハツとする。

その声の方向を見るとカトレアさんが不思議そうに俺を見ていた。

「気分でも悪いんですか…？」

いけない、長いこと考え込んでしまっていたらしい。

俺は微笑して「いえ、大丈夫です」と、立ち上がる。

カトリアさんは「そうですか」と笑って食堂の方を手でうながした。

「朝食の準備ができてますので、お早めに。シェフがお客様をお待ちしています」

「すみません、今行きます」

俺が食堂に入るとそこには長いテーブルが縦に3つ並んでいて、すでに食事をとっている客の2人がそれぞれ別のテーブルに座っていた。

「……………」

…これは…同じテーブルに座らない方が良いのかな…？

旅をしてる人の中には孤独を好む人も居る。

なんとなくそんな気がして俺は誰も座ってないテーブルについた。

\*\*\*

「視点：筆者」

食事を一番遅く食べ終わったキョウゴが食堂をでるとカトレアがいた。

キョウゴは彼女に話しかける。

「さつきはありがとうございます」

「え？ … ああ朝食のことですね？ どういたしまして！」

「あの… 少し聞きたいことがあるんですけど」

「なんででしょう？」

「バイトを探してるんですが…」

そして、アルバイトを探す場所を聞いたのだった。

さすがに大事なことは忘れない。それがキョウゴだ。

\*

その頃。

「あー！ だだだだああつ！ ！！！！ 痛え！ だだだ！ ！」

… ラスの悲痛な叫びが列車の中に響いていた。

(列車は未だセリスキュオレートに着いていない)

「お前さあ！！お前ねえ！？ちよつとぐらい寝起きの俺に対する手加減つてもんを…いだだだっ！！」

その怒声を浴びせられたのは他の誰でもなくシリウスである。  
当の本人は、しれっとした態度で

「俺はただ、お前が体を(ストレッチ的な意味で)伸ばしてくれって言ってるからやってあげてるんだけど？」

…つつぶせのラスの腰を、上から容赦なく腕を引っ張って伸ばした。

「だからってよお… … あだだだだだだっ！！！！」

昨夜列車の座席の上で寝た2人の後輩は長時間不自然な体勢のまま  
でいたため、翌日はこうなるのだ。

ゴキッ (ラスの腰から)

「ぎゃあああああっ！！！！」

「…鳴ったな。」

そう言ったのはゲイルだ。煙草を吸っている。

シリウスはひとつづなずいた。

「…鳴りましたね。 さて…ラス、俺も頼む」

ここでストレッチのバトンタッチ。ラスはその言葉に悪そうな笑顔を見せる。

「ハハッ…いいぜ、めっちゃくちゃ痛くしてやるから覚悟しとけよ！！……うおおおらあっ！！」

そして同時に、座席にうつぶせの体勢でいるシリウスの両腕を上へと渾身の力で引っ張りあげた。

(…ただしこれが本当のストレッチのやり方であるのかどうかは定かではない。アホだ。)

そんな懸命(?)なラスをよそにシリウスは涼しい顔を一度も崩さず、苦痛をまったく受けていないようだ。  
おそらく体がもともと柔らかいのだろう。

その様子に、ラスの怒りのボルテージが更に上がったことさえ気づいていないようだ。

そこに追い討ちをかけるようにゲイルは銃の手入れをしながら

「何を怒ってるんだ、ラス？」

…と呑気な一言。ここにも空気の読めないヤツがいた。

「先パイ！！空気読んでくださいよ！この状況見て分かるでしょ！？」

「…？ ……シリウスが、オットセイの真似を…」

「うん、そう！ ……じゃなくて！！何言ってるんすか、聞き流すところでしたよー！！」

「…すまん間違えた。 ……シャチホコ、だよな？」

「……先パイに聞いたのが間違いでした、すぐにでも忘れてください…」

ラスがまるでコントの一部のような会話を強制終了すると、いつの間にかラスの下から這い出していたシリウスが銃を片手に持って、

「よし、俺も銃の手入れを始めよう」

と、あっさり場の雰囲気を受け流した。

「…っておい！！テメエさっきの「ト」といい今の言動といい…ふざけん（略）」

もうすでに何に対してラスが怒っていたのか分からなくなってきたところで後輩2人の変な口論が勃発した。

朝から凄まじいテンションの高さである。

『若さ』とは、ある意味朝を制するものなのだろうか。

そしてゲイルはため息をついて一言。

「…こいつらで本当にこの先やっていけるのか…？」

…彼が遠い目をしているのは、言うまでもない。

\*

… 10分後。

後輩の口論は結局、自然鎮火に終わった。

ラスは列車の窓を開けて列車の行く先を見る。

ようやく海の向こうに次の街が見えてきた。そろそろ到着だろう。

「先パーイ、ネクタイしなくてもいっすかー？」

「別にかまわないけど、何が起こるかわからないから一応持って動  
けよ」

「了解！」

ラスの返事は威勢が良くていい。こいつの良いところのひとつだろ  
う。

しかし、シリウスの一言でこの雰囲気はぶち壊される。

「ラス…、お前刑事なってからネクタイしたことあったか？就任式  
とか、正式な場でもしてなかったろ」

……。

「おい…それは本当か？」

ゲイルが小声でシリウスに尋ねると、うなずきが返ってくる。

「はい。それで、就任式の際にコイツが『自由の女神の像の上にネ

クタイ忘れてきたんです』ってウソの言い訳したんです。 まあそれが班長の笑いのツボに入っこの任務に採用されたんですが…」  
ラス、それは…社会的にどうだろうか。

しかしゲイルの脳内ではラスではない別のことに気をとられていた。

…『班長』という言葉聞いてゲイルの頭に浮かぶのはあの手紙…

『まあガンバ!』

思い出すだけで再び湧き上がる怒りが頂点に達し、ついに叫んだ。

「…あんのハゲ頭があっつ!…!…!」

\*

…その頃。

「はーっくしょん!…!」

誰かのくしゃみが盛大に響いた。ここは…そう、ロンドンにある警

察庁特殊捜査班本部である。

今のくしゃみをした人物は、もうわかるだろう。…この班の班長本人だ。

わりと高級なイス（しかし安物のキャスター付き）に座って机にだらしなく突っ伏している。

『偉い人物だとは到底思えない』と思ったそのあなた。…大丈夫、それは正常な判断だ。

彼の様子を近くで見っていたアジア出身の12歳の少年、李園<sup>リエン</sup>は自分の、まるでウェイターのような服のネクタイをきっちり締めなおしながら、

「なんです？風邪ですか、班長」

と大人びた口調で声をかけた。

ちなみに容姿を説明すると、背が低くて小柄。髪は短髪の黒髪で、両耳のあたりから少し長めな髪が垂れている。まつげが長い美少年だ。

しかし、可憐な容姿とは裏腹に言うことは何気にキツイ。

李園のその言葉に対し班長は鼻をズブーツとすすりながらぼんやりと答えた。

「いや〜？風邪じゃないはずなんだけどなあ…。誰か私のウワサでもしてるのかな？」

そこにまた別の男の声。

「ああ〜ぜってーそれだわ。ゲイルの兄貴とかさあ？…たぶん良いうワサじゃねえな、ソレ」

今度は長い金髪を持つ20代前半のラックスという男。アメリカ出身で、ゲイルを『兄貴』と呼んで慕っている。

彼は身長がそこそこ高く、李園とはすべてが正反対である。

着ている服はまるで暴走族（筆者の見解的に。）のようで、愛刀は大きくて長い反り身の剣『ZERO-SIX Cutliss』だ。

カトラス  
Cutlissとはもともと刀身が短いものなのだが、この刀の全体の形がそれに似ていたために名づけられた。

李園はラックスの言葉に目を一度伏せてうなづく。

「確かにゲイルさんなら言いそうな気はしますね」

「だろ？今頃どこに居んのかねえ、兄貴は」

ふと思い出したことがあり、李園は班長のほうを見た。

「そういえば新入りの方が2人、新しくゲイルさんの任務に就きましたね」

班長はその言葉にピンときて豪快に笑う。

「あの2人ね！いやぁ面白いよ、あの子たちは〜！！」

そしてラックスは遠い目。

「よくアレで最終審査までいったよなぁ…」

「ああアレ？ 最終審査のエントリーはクジひいてみたらそうなたんだよねー」

……  
クジ？

「おい…ちょっと待てや班長。なんで、兄貴についていくヤツ決めるっつー大事な審査で！呑気にクジひいてんだよ！！」

「ラックスさんはゲイルさんに執着しすぎだと思えますが…班長、なぜです？」

「そりゃあ私がクジ引きたかったからだよ。だってワクワクするじゃないかあ！！」

「アホかあああああつ!!!」(近くにあったティッシュの箱を班長に投げつける)

ラックスは座っていたソファから並みではない速さで飛び上がり、班長にうらめしそうな表情を向ける。

「兄貴は…、兄貴は頑張つてひとりのヤローを追いかけてるつてのに!!!そんな決め方してんじゃねえよ、バカ!!!」

「うーん、ちよつと小さい声で話してくれよお。お年よりは大事に扱つものだよー?」

「うるっつせえ!!!」

「はあ…班長は本当に実績を積んでこの位置に就いたんでしょうか…」(何気にキツイ言葉。しかし正論)

李園はため息をついたのだった。

\*\*\*

…さて、再び刑事3人の方かというと。

「先パイ先パイ！見てくださいよ、この写真！！」

ラスは隣に座っていたシリウスを前のめりに押し倒して2枚の写真をゲイルに見せた。

「これは？」

「就任式の後に行った旅行のときの写真です！俺のカバンの底に入ってたんすよ。懐かしいなーっ」

その2枚の写真を見たゲイルは…固まった。

1枚目の写真は、海岸で撮った写真のようだ。  
輝く綺麗な海、雲ひとつない快晴の空、優雅に飛ぶカモメ、なびく旗には「太漁」。

ゲイル（…「太漁」…?? 「大漁」じゃなくて？）

そして大漁網を持って蝶を追いかけてはしゃぐラスの姿、手前で不機嫌そうな顔でピースをしているシリウス、宙を飛んでいる昆布、海面を漂うどこかで見たようなハゲ頭…

……あえて気にせず2枚目に目を通すゲイル。

2枚目はおばけ屋敷のようだ。よほど性能の良いカメラで撮った写真なのか、暗いはずの場所でもだいたい見える。

血塗られた壁に「呪うぞ」の文字、不気味な人形、骨格標本…の横の意味不明な大根。

そしてカメラの手前で眠そうなのか不機嫌なのかよく分からない表情でピースをするシリウス、その背後でおばけ役の女性から必死な形相で逃げ惑うラス、そして暗闇の中でぼんやりと写りこんでるどこかで見たようなハゲ頭…

……。

「ね！？こいつ嫌そうな顔してるクセに、ちゃっかり手前でピースしてるんすよ！！」

写真に写っているシリウスに指を差しているラスの下でシリウスは苦しそうな声を出す。

「おい…おいよけろ、ラス…苦しい」

「ん？あー悪い。…で、どうつすか、先パイ？」

「いや…ツツコミ所が多すぎてそれに気づかなかったよ　　ってか  
誰がこれ撮ってんの？」

「俺…写真うつるの苦手で…」

「…って言ってる割にはきっちりポーズとってんじゃねえか！俺よりも！」

そしてゲイルは険しい顔をしてラスに写真を返す。

「それよりも…今俺がもつともムカついてる奴が、この2枚両方とも  
に写り込んでいる気がする…」

後輩2人（先パイがもつともムカついてる人…？）

思考をめぐらせる2人。

そして。

「あ…班長…

……居たのっ!!?」「

…早く気づけといっ話である。

\*

「…へ…つくしよん!…!」

再びロンドンの本部。

ラックスはソファに体を横たえて本を読んでいたが、ついに怒りが沸点に達したらしく本をぶん投げて怒鳴った。

「あーもう! いい加減病院行って来いってんだ!!」

それに対し、班長はまたズビーツと鼻をすすり…

「え〜…やだよお。私はもう年だからね、動きたくないんだよ」

…いつもの言い訳。

ラックスはその言葉にうんざりしたような表情を見せる。

「外見てみたらあんたより年いったじーちゃんばーちゃんが元気に運動してんだけど」

「まったく、すごいよねー。…李園、しょうが湯を」

「はい、ただいま。…どうぞ。ですが班長、やはり病院に行くべきでは？」

「ほーら、李園だって俺とおんなじコト言ってるぜ？」

「えー…君までそう言うのー？」

そして再びズビーツと鼻をすする音。

そんなぐうたらな班長を見かねた李園はひとつため息をつく。

「僕はただ… …あなたがもう年だから、風邪こじらせてない

でとつとと治せと言ってるんです。なにより今歩かずにいつ歩くと  
言うんです？だから胴回りがキツくなるんですよ。気にしているの  
でしたら、あなたの…」

「うっわー…李園の毒舌が始まったぞー…?」

平然とした顔でつらつらとキツイ言葉を言い続ける李園に班長は固  
まり、そして色素の消えうせたような顔で言った。

「ごめんよ、李園…。…それ以上は言わないでくれ…。私は泣き  
そうだよ、うん。この前娘にも同じ事を言われたんだ…」

「ジェニファーさん?」

「ああ…そうさ。でもって私は精神的ショックで死にそうだよ、う  
う…。…ジェエニイイー!!!」

「元気あり余ってるじゃないですか。…さ、病院へ行きますよ」

「…えっ!?私の叫びが聞こえてないのかい!?!」

「聞こえはしましたが相手にする必要はないと判断しましたので」

「ひびい!…!」

李園は班長が座っているイスをズリズリと引っ張って部屋のドアを

開ける。

そしてラックスの方をすました笑顔で振り返り、

「では、僕は班長を病院に連れて行くので後はよろしくお願いします」

「おう。看護師に『この人にデカイ注射打ってください』って頼みな」

「はい、お任せを」

…ラックスの言葉を受けて部屋から出ていったのだった。

この2人の結束力は並大抵じゃない。

李園が最後にみせた冷ややかな笑みは、もはや素敵だと言える。

…ロンドンでは毎日を楽しく(?) (過ごしているようだ。

\*

場所は変わってセリスキュオレートでバイト探し中のキョウゴは。

「えーっと、日雇いのアルバイトはこちらに書いていて、今のところ時給が高いのはこちらですね」

差し出されたリストを見てキョウウゴは目を丸くした。

「…バーテンダー…ですか？」

もう一度リストを見る。いや、見間違いではない。

「…本当に、日雇いですよね？掃除とかではなく？」

受付の女性はにこやかに答える。

「いえ、本当に働きますよ？」

「でも…バーテンダーってお酒の知識やテクニクが必要ですよ？僕はそういったものはないんですが…」

「いーんじゃありませんかねえ。そんなにここは高級な場所でもないですし、客もそれを知って来てるようですよ」

「え…… そうなんですか…？」

キョウウゴ（なんて適当な…）

…さすがは規制のゆるい世界である。考え方の基準がすごい。

「ああでもその代わり大変ですよ？午前中から最低限の知識とテクニクを学んで、店長に認められないと夜の開店の時に使ってもらえないから……」

キョウゴはその言葉に顔をしかめる。

それにしても魅力的な時給である。断る理由さえ失せてしまいそうだ。たとえ店のマスターに認められずとも掃除くらいで使ってくれるかもしれない。

そう考えた彼は受付の女性にさらに質問する。

「あの、この『午前中から』って何時ですか？」

「そうですねえ……あ、9時ですね」

9時……？

キョウゴはバツと壁の時計を見た。

時刻は…午前8時53分。

「……えっと、ここ……ここにします！！場所を教えてください」

か!？」

さて、このバイト先であるバーの開店は午後9時。

それまでに最低限の技術を獲得できるのか、というのが問題である。

しかし。

「えっとー…ここを左に曲がってー」

「すみません、急いでのので、てっとり早く教えてください!！」

…それ以前に午前9時までにはそこにたどり着けるのかが最大の問題である。

\* \* \*

「視点：ゲイル」

ようやく俺たちがセリスキュオレートに着いたのが、午前9時をまわった頃だ。

夜行列車とはいえ、深夜だったからなのか運転手の休養のために、俺たちが寝ている間少し止まっていたらしく、到着が遅くなった。

海の上を走っていた列車はなかなか気持ちがよくて少し降りたくない気がしたが：まあしょうがないだろう。

ざっと駅を見渡すが人の気配がない。というか、駅と言う割りにはまったく物がない。

灰色のコンクリートで作られている駅はボロボロで、かなり古いのがわかる。

『セリスキュオレート』と表記された板も端のほうが錆びていた。

「ここは無人駅なのか…？」

「ずいぶんと静かですよね」

俺は煙草に火をつけながらシリウスとまわりを見ているとラスがつぶやく。

「確か…十何年前まではここにも人が居たんですよ」

「そうなのか？」

「ラス…なんで知ってるんだ？」

「独学」

「ああ…なるほど」

早速後輩の知識が使えた。学歴でものを言いたくはないが、まあ高卒でも結構やるじゃないか。

「ちなみに、このセリスキュオレートは『美しい街 ベスト5』に入ってるんです。人々の活気があってスローライフにもオススメらしいっすよ?」

「ほう…良いな」

「他にも海の幸がおいしいし、宿も多いし。あとは…街の所々に建てられた古代の小さな塔があって、それもまた神秘的で良いですね」

ラスが知ってる街の知識を自慢げに話している様子を、シリウスはじっと見る。

「ラス、鼻が高くなってるぞ」

「へへーん!」

「…威張るなよ」

その時。

「お客様！！ お金を払ってください！！あつ…誰かその人を！！」

駅からつながっている路地の方から女性の声が響いた。

俺たちはその声に素早く反応して、

「行くぞ！」

「了解！！」

すぐさま声の方へ向かった。

\*

俺たちが路地に入って持っていた荷物を放り投げ（無用心であると思うが）、犯人を捜そうとしたその瞬間。

「…いつてえ！！！」

さっそく犯人らしき男とシリウスがぶつかった。探す手間は省けたが…何かやっかいなことになりそうだ。  
ふと、後輩2人の実力を見てみたいという気持ちがあふれる。

俺たちは、警察庁特殊捜査班のメンバー。

なにかの特殊な技術もしくは高い戦闘力がないと、希望しても配属さえ拒まれる組織だ。

そこに2人は配属された。

昨日聞いた感じだとこの2人にたいした能力は無いように思えるが、やはり、そんなことなど有り得ない。

…今はあえて、黙っておこうか。

俺は後輩たちと自分の荷物の近くに立って、行く末を見守ることにした。

そしてシリウスにぶつかつたガラの悪い男は早々シリウスを近いところからにらみつける。

「なんだあ兄ちゃんよお、どこ見て歩いてんだあ？」

さっそくヤクザの決まり文句を言うてくる。…ベタだな。

シリウスはその言葉に対しメガネをはずしながら

「申し訳ありません」

と、軽く謝った。わかっているだろうとは思うが、それで相手が納得するはずはない。

「おいおい、それで済むと思ってんのかあ!？」

「いえ、そんな奇跡のような事が起こるわけがないと思いますが」

「…つふざけんじゃねえ!！」

キレた男はシリウスに向かって殴りかかろうとする。…が、シリウスはそれを軽く受け流して、

ゴツ!!

その何倍という威力で男の腹を殴った。あれは痛そうだ…

「ぐっ… …このおおおっ!!!」

のけぞった男は完全に怒りが頂点に達したらしく…腰元からナイフを取り出した。

!!

「シリウ……」

後輩の名を呼ぼうと思って言葉が途切れる。

俺の脳内に浮かぶあの映像が、

…嫌な記憶が、流れだす。

…暗い室内

赤黒い血

汚れた刃

男の笑み

奪われた

俺の家族…

「 シリウス！！ 」

ラスが叫ぶ声でハッと我に振り返りその方を見ると…

シリウスから少し離れた後方でラスが、腰をかがめていた。  
…馬とびの姿勢で。

「 いったい、何を…？ 」

俺の嫌な記憶の映像を消し去るほどの訳がわからない光景。

するとシリウスはちらつと後方を見てそれを認識し、相手を数秒やりすごしてからラスの方へ駆け出す。

「 逃がすかぁ！！ 」

ついで男もシリウスの後を追う。

「 行くぞ、ラス！！ 」

次の瞬間、シリウスがラスの上を、跳んだ。

！！？

俺は啞然としてしまう。いや、実際俺の近くに集まり始めていた人だかりも口をあぐりと開けていた。

そしてラスはシリウスが上を飛んだあとに即座に立ち上がって男の顔面を殴る。

次に男がラスの足を蹴ろうとすると、

「うおっっ！？」

とってラスはジャンプしてそれをかわし、シリウスの首に掴まって抱きかかえてもらったまま男の顔面にさらにもう一発食らわせた。

(この時、俺の近くにいた少女が母親に『あのお兄ちゃん、お姫様だったこしてもらってる！ いいなあー』と言ったが…ときめいたらダメだ、あんなので)

男は顔面に2発パンチを食らった。おそらくもうノックアウトだろう。

そう思ったその時。

「…よくもっ…！！！！」

予想に反して男が力を振り絞ってナイフをふりかざす。  
後輩のあの体勢では…ダメだ、よけられない…！！

「なにっ…！！？」 「ヤベえ、死ぬ…！」

…その時、俺は走りだしていた。

\*

「視点・筆者」

ゴッ…！…ゴキッ…！…グッ…！…ドゴッ…！！…

連続する鈍い音。

そして数秒後、わずかにあがる砂煙の中、倒れ伏した男を踏みつけて立っているゲイルがいた。

その光景に後輩2人は目を見開く。

「先パイ…!!」

…「瞬息の間」とは、まさにこのことである。

自分たちの目の前でナイフを振りかざしていた男が数秒後にこの様なことから、驚くことは無理もない。

ゲイルはくわえていた煙草を地面に捨てて踏み潰しながら手首をコキコキと動かして、

「こりゃあ、ちょっと腕がなまったな…」

と呑気な一言。

この時後輩は思った。 …この人を怒らせたら怖い、と。

相手に対してゲイルが腕をひねり上げた時に「ゴキッ…!」と言ったのだ、確実に脱臼もしくは骨折してるだろう。

これはむしろ相手に合掌してやりたくもなる。

「あのっ…」

近づいてくる足音に刑事3人は顔を向けた。  
若い女性である。

おそらく声からしてさっき叫んでいた人物と同じ人だろう。

確かこの男に、金を払えと言っていた。

ゲイルは男の服のポケットを探ってサイフを取り出し、いくらか金を抜き取って彼女に渡した。

「とりあえずこのくらいで勘弁してやってくれ。痛い目見たから多分二度とこんなことはしないさ」

その言葉にパアツと表情が晴れた彼女はゲイルに2回ほど頭を下げる。

「ありがとうございます!! あ、あのっ…私この近くの宿で働いてるんですが、もし宿をお探しならぜひお越しください! 無料にします!!」

同時にラスが最後の言葉に食いつく。

「無料！？」<sup>タダ</sup>

シリウスはメガネをかけなおしながら一言。

「すごい…」

「では、どれくらい空き部屋が？」

「えっと…いけない！2部屋しか…」

2部屋か…俺たちは3人だ。

そう考えていたが、すぐにその問題は解決する。

「ああ先パイ、俺ら同室でいいっすよ。もともと寮で一緒だったし、せっかくだから…（タダだし）」

シリウスもラスの言葉にうなづく。（タダだし）

「じゃあ、その2部屋をお願いするよ。（タダだし）」

\*

とんとん拍子で宿が決まった事に満足して、宿の者に荷物を預けて。ようやく一息つける状態になったため、ゲイルは煙草を取り出す。そして後輩たちに疲れと安堵を含ませた微笑を向けた。

「お前たちはなんだかんだ言って良いコンビなんだな。安心したよ」

そんなゲイルがライターを取り出そうとしてるとラスが先に火をともしてくれた。  
ラスもまた微笑を向ける。

「…どうぞ」

「ああ、ありがとう」

ゲイルは煙草をふかしてフーツと息をはく。その表情はさすがにいい。

強くて、格好良くて、優しい。

そんなゲイルが2人にとっての憧れになったのは、まさにこの時である。

\*\*\*

時刻は12時を過ぎた。

刑事3人はあれから街を散策して歩き回り、今はとあるレストランで昼食をとっていた。

ラスはむしゃむしゃとハンバーグ定食を食べながらどうしようもない不満をもらす。

「お前さあ、ホント背え高くて腹立つんだけど!!」

「それはお前が低いんじゃないか?」

「…むはあ!?!ふふへー、ははっへふっへほー!!」

ゲイルは不思議そうな表情をラスに向ける。

「なんて言ってるんだ…?」

その疑問に対してシリウスは、

「『はあ!?!うるせー、黙って食ってるー!!』…:…です」

と冷静に翻訳。さすがはラスの相棒だ。

「そうか。それじゃあ俺は外で煙草吸ってくるから、後から来い」  
金払つとけよ、あとで俺がその分出すから。

「了解!!」

\*

セリスキュオレートとは、ベール海という海の沿岸の港街だ。

傾斜が比較的やや高い坂に作られた街だということもあって、街のどこからでも海が見える。  
建物も古典的なものが多くて暖かみが感じられ、ラスが言っていた通り、スローライフに適している。

刑事3人は路地を歩く。

ラスはあたりをキョロキョロと見て感嘆の声を発した。

「へー、また宿だ。もう9件目ですよ」

「本当だな」

こんなに宿ばかりあって、宿の営業は大丈夫なのだろうか。

そんな時、近くの宿の外で花壇の花に水をやる少女がいた。彼女は刑事たちに気づいて声をかける。

「お部屋空いてますよー！宿はお決まりですか？」

…カトレアである。

無論、刑事たちはこの少女を知らないし、ここにキョウゴが泊まっていることも知らない。

ゲイルは彼女に丁寧に謝る。

「ああ、もう宿は決まっているんだ。せつかく声をかけてもらったのに申し訳ない」

「そうですか！ここは宿が多いから、それもそうでしょうね。この街は本当に良いところなので、ぜひ楽しんでいってください！！」

「ありがとう」

そして彼女は宿の中へと入っていった。

ふと、思い出したようにゲイルは後輩2人を見やる。

「そういえば…レストランの金、いくらだった？」

.....。

妙な沈黙。

これはなんだ？嫌な予感しかしない。

そしてラスとシリウスは互いに目を合わせて、ため息。（笑顔で。）

「ま、こーいう日もありますよねっ！」

『こーいう日も』、ある？

「おい、ちょっと待て、ラス……」

「たぶん気づいてないですね……アレは」

後輩がほのめかしている事実とは、まさか……

ゲイルは後輩に低い声音で言葉を発した。

「お前ら…『刑事として』以前に『人間』としてどうかと思っぞ…」

\*

再び、レストランにて。

「…という訳で、本っ当に申し訳ありませんでした！！！」

ゲイルは後輩2人の頭を押しして頭を下げさせた。

警察という正義の人間が、食い逃げなんて信じられない。

それなのにレストランの店長は爽やかな笑みを見せた。

「いいんですよ！！実際払っていただいたんですし。それに先ほど無銭飲食を繰り返していた男をこらしめたって聞きました！まったく悪くなんて思いませんよ」

なんて人の良い店長なんだ。

ラスはポツリと

「あいつはかなりのワルだったんだ…」  
と呟いた。

…しかし故意ではないとはいえ、食い逃げをしていたお前がそれを  
言えることだろうか。  
いい加減、気づけ。

\* \* \*

3人はさっきと同じように街を散策し始めた。

…ただ、ひとりのテンションの低さを除いては。

「先パーイ、元気出してくださいよ…」

「もう二度としませんから…」

「…絶対だと、約束してくれ…」

…この男の心身の疲れ様は、きっと後輩が想像してる量の倍はある  
だろう。

ラスはそんなことさえ気づいてないようで、「お！」と声を上げた。  
坂の下方に『大通り』と呼ばれる、セリスキュオレートを東西に伸  
びる大きな道が見えたのだ。

…その時。

「人が、人がひかれたぞ！！」

男の、声。

3人はハツとして大通りを見ると、1台の暴走するトラックが。

そしてその向かう先に…6・7歳ほどに見受けられる、少女。

「！！」

「先パイ!!」

ゲイルはくわえていた煙草を投げ捨て、走りだしていた。

少女は不思議そうな瞳で自分に向かってくるトラックを見つめたまま動かない。

…このままだと、ひかれる。

「……ッ」

グッ!!

その前にゲイルは少女の体を抱え込んで道の脇へと連れていった。これで大丈夫だ、と息をついたのもつかの間、再び人々の悲鳴があがる。

ゲイルがハッとして路上を見ると、

「おねーちゃん、まってー」

こちらに向かって、とてとてと走ってくる幼い少年がいた。おそらくこの少女の弟。

トラックは走り続けていて、止まることはないだろう。

「……っ危ない！！！」

ゲイルが叫んだ、その瞬間。

ガッ！！

目の前を見慣れた金髪が割り込んでいき、少年を抱え込んで反対側の路肩へと滑り込んだ。

今のは、ラスだ。

そしてトラックが目の前を通過した時、ラスが大声を張り上げる。

「シリウス、はずすんじゃねーぞ！！！」

「……シリウス……？」

ゲイルは展開の速さについていけないまま、トラックの行く先を見ると、そこには。

銃を構えて立っている、メガネをはずしたシリウスがいた。

「まさか今日一日で二回もこれはずすとは…」と、呑気にメガネのことを言っている。

ゲイルはラスに大声で聞いた。

「おい、あいつは大丈夫なのか!？」

すると向こうからラスが大声で答える。

「大丈夫っスよ! あいつの射撃の腕は先パイを裏切りません!」

「…!」

…なんて、力強い言葉だろう。

ゲイルはそうか、と呟いてシリウスを見守った。

トラックは蛇行運転を始めてシリウスへと迫っていく。

おそらく銃を構えている彼を見た運転手が、撃たれないようにしよ

うと考えたのだろう。

しかし、シリウスの技量はその考えを凌駕していた。

パンパンパンパンッ！！！！

立て続けに4発の発砲音。

トラックはそのまま数メートルは走り続けたものの、やがて止まった。

車体が少し沈んでいることから、タイヤがパンクしたことが分かる。

…トラックを止めることに成功したのだ。

ゲイルは緊張がほぐれてため息をつく。

シリウスの方には地元の警察が駆け寄り、トラックを止めてくれたことに礼を言っ、男を逮捕していた。

シリウスもまた、ひと仕事を終えたのでため息をひとつ。そしてメガネをかけた。

…あのメガネには何かあるのだろうか。わからない。

刑事3人が集まると同時に幼い姉弟は母親の元へかけより、

姉「おかーさん、あのひとたちがたすけてくれたんだよー」

弟「だよー」

…と、刑事たちを指差して言った。母親はそれを聞いて彼らに頭を深くさげる。

「本当にありがとうございました…！なんてお礼をすればいいのか…」

「いや、何もお礼はいらないですよ。その子たちが無事で、なにやりだ」

ゲイルがそう言って笑うと幼い姉の方が駆け寄ってきたので、かがんで目線をあわせる。

「…今度からは気をつけるんだぞ」

「…うんっ」

少女のはにかむ笑顔が可愛らしい。そして少女は、勢いよくゲイルに抱きついた。

「…!!?」(驚いてる)

「おじさん、すっごくかつこよかったよ!! わたしおとなになったら、おじさんとけっこうんするー!!!」

「…なにいいいつ!!!!?」 ってか、おじさんって!!

…叫んだのはラスである。いや、驚くのも無理はないが。

「結婚つて…年の差がすごいことになるぞ…? 先パイは罪な人だ…」

まじめに考えているお前も、どうかと思うが。

ゲイルはその少女の言葉に照れくさそうな笑みを浮かべて、少女の頭にぽんと手を置いた。

「それはまた素敵なお嫁さんだ」

少女もまた、恥ずかしそうに笑った。なんとも微笑ましい光景だ。

その横でラスの服をぐいぐいと引っ張る幼い弟にラスは目を丸くした。

「ん？なした？」

「おにーちゃん、きず、ち」

なにやら心配そうな表情である。しかし言っていることがイマイチわからない。

ラスはその言葉に黙ったまま。シリウスは不思議に思っただけで考える。

「…木槌？ き…傷…ち？ ……傷、血？ 傷から血が出てるってことか？」

シリウスの問いに少年はうなずく。つまり…

「おい、ラス。そっちの隠してる方の腕、見せてみる」

「別に隠してねーよ」

そう言ったラスはわずかに左腕の方を背に隠した。

「隠してるじゃないか。…見せろ」

シリウスが語気を強めたため、ラスはため息をつきながら腕を見せ  
てくる。

「あーあー、わかりましたよ」

「…!!」

それは予想以上にひどいものだった。

さっきはとっさの判断で少年を助けたため、路肩に滑り込む時に腕  
を負傷してしまったのだ。実際、今も歩き方が不自然だった。

じんわりとはあるものの、血がゆっくりしたたり始めている。

「意外と…ひどいな。俺が調合した薬草でも塗るか？」

気をつかってかけられたその言葉にラスは、

「ぜってー嫌だ…!!効くけどアレはマジで無理、しみるもん…!!」

…即答。

「そんなのは病院でも同じだ。『良薬口に苦し』って言葉もある」

「それは味…!これは痛み…!」

…そもそも『良薬口に苦し』とは、良い忠告の言葉は聞くのがつらいけれど、身のためになる。という意味である。  
語源は薬だったかもしれないが、実際に薬がどうとかの意味ではない。

ラスの傷のありさまを見たゲイルは目を見開く。

「ラス…！大丈夫か！？ …気づくのが遅くて、悪かったな」

本当に申し訳なさそうに言葉を紡ぐゲイル。

そんな姿にラスは自然と微笑んでいた。

…ああ、この人は本当に優しい人だ。 …そう思いながら。

前にいた警察学校での教官は生徒たちを物のように扱っていたから、どこにいてもそれが当たり前なのだと定着してしまっていたのかもしれない。

「先パイ、大丈夫ですよ。そう言うただけで充分嬉しいですよ」

先パイが、俺たちの『先輩』で、よかった。

\*

「視点：ゲイル」

「えっとじゃあ…救急車を呼んできますね！」

話の区切りを見つけた母親がそう言い残して、その場を離れていったその時。

「　　ッお母さん！！！」

突然響いた、少年の声。無論近くにいる幼い弟ではない。

大通りの路上の先にいる、別の少年の声だ。

そこで俺はハツとした。

…思い出してみろ、俺たちが大通りに向かうときに聞いた言葉を。

「…人が、人がひかれたぞ！！！」

人が、ひかれるぞ。ではない。人がひかれたと、そう言ったのだ。つまり本当の犠牲者が、他にいたのだ。

「……!!」

…行かなければ。はやく、そこへ。

けれど足がすぐ動き出せない。

ラスは今、機敏に動ける状態ではない。置いて行かなければならぬのだ。

俺には負傷した後輩を簡単においていけるほど、刑事としての判断力はない。

「ラス……」

戸惑いを隠せず俺はラスを見つめる。

しかし、ラスは俺以上に自分の身の上をわきまえていたらしく、必死な形相で叫んだ。

「何やってんスか！！！ 俺のことはいいから、はやく！！！」

「…っすまない！！！」

そして俺は声がした方へ走っていった。

\*

「視点：作者」

ふとラスはさっきからシリウスの声を聞いてない気がしてその方を見ると、なにやら箱を用意しているようだった。

「??? …おいシリウス、ちょっと遅れてるけど俺たちも先パイのところに行くぞ！！！」

「……………」

「聞いてんのかよ！？ あー、もう！！」

それでもすぐに動かないシリウスに痺れをきらしたラスは走り出そうとしたが。

「!?!」

ぐらつと体が傾き、バランスを崩して倒れてしまった。

「…っ」

「ラスー!!」

そこにシリウスが駆け寄る。

ラスはさっきの一件で全身を軽く打撲したようだ。脚が思うように動かず、悲鳴を上げていた。

「くそ…俺の体の回復スピード速いはずなんだけどな… シリウス、先行け」

その言葉にシリウスはうなずかなかった。

「…早くあつちに向かうために、応急手当させてくれる?」

「は…?」

その時、ある言葉を思い出した。

『パートナーを見捨てるな、共に動け』

警察学校で習った、懐かしい教訓。

ラスはシリウスの顔を見て苦笑した。

「つくづく無理させんね」

シリウスは近くの箱から取り出した消毒液でラスの傷口を消毒し、包帯を巻きながら目を伏せて笑う。

「俺たちは昔から、こういう性分だったろ」

「ハハツ…それもそうか」

…理解ある唯一のパートナーは、決して相棒を見捨てたりなどしないのだ。

\*

「視点：ゲイル」

俺が駆けつけたその先で見たのは、凄惨な事故現場だった。

路上を囲む人々の間を割り込んでいくと、血が飛び散った跡が生々しく残る路上と、言葉にできないほど悲惨な姿になった横たわる女性。

そして…その傍らで女性の血に染まった少年がいた。

俺は急いで女性の脈を確認する。

生きてはいるが…もうすでにその脈は弱い。

そして周りの人だけに声をかける。

「おい！！救急車は呼んだんだろうな！？　もうかなり危険だぞ！！」

その俺の言葉にハツとした彼らは思い出したかのように、

「きゅっ…救急車！！誰か救急車を呼べ！！」

「電話しなきゃ…！！」

などと言い出す。

…誰一人も、呼んでなかったというのか！？

「呼んでないのか！？一人も！？　人が死にそうになってるっての

に黙って見てただけだとも言うのか!」

怒りが、苛立ちが抑えきれない。

「お母さん…お母さん、起きてよ…」

傍らの少年の声はすでに弱々しくなっていた。  
ダメだ、希望を捨てたらそこまでだ。

「…悪かった。俺がはやく気づいていれば…」

『はやく、気づいていれば。』

昔の俺と同じことを言った気がする。  
俺はまた、人を助けられないのか…?

そこに遅れてラスとシリウスがやってくる。

「先パイ、これが…さっきの…?」

「ああ、あのトラックにひかれたんだ」

「ひでえ…」

そこに今度はさっきの姉弟までやってくる。

それに気づいたラスはすぐさま両手で2人の視界を塞いだ。

姉弟「「うわっ」「

「お前らは見るんじゃないねえ!! …… ったく、なんでついて来てんだよ…」

そしてシリウスが路上を見て声を張り上げた。

「先パイ、救急車がきました!! 先ほどラスのために呼んだものです!!」

「よし、こっちに誘導してくれ!!」

「はい!!」

やがてシリウスの誘導によりやってきた救急車の隊員は目を丸くする。

「これはひどい…。でも、通報の内容と違うのですが…」

その言葉に俺が怒鳴りつけようとしたが、その前にラスが怒鳴った。

「つべこべ言ってるじゃねーよ!! 俺よっか明らかにこっちの方が

ヤベえだろ!!」

「は…はい、すみません!!」

救急隊員は一喝されて女性のもとへ担架を運んできたため、俺はその体を担架に乗せるのを手伝った。

服が彼女の血で汚れていくのを見ていた周りの人間がどんな目を見てきているのかなど、見なくても分かる。

しかし、人が死にそうなのを黙ってみていたその行動よりも明らかに俺の方が正しいはず。

未だに怒りは収まらない。

心中は、複雑だ。

俺がはやく気づけばこんな状態にはならなかった。だが、周りの人間はなぜ動かなかった？

他人だから、死んでもいいとも思っているのか？

そんなことが、あつてたまるか…!

「先パイ、その子も病院に連れていきましょう」

「……」

「先パイ」

後輩の声で我に返った俺はあいまいな返事をした。

「ああ……」

ラスとシリウスは少年と共に救急車に乗り込む。  
俺もその後が続いて乗ろうとしたとき。

その救急車の手前にさっきの姉弟がいて。

「……すまない」

……俺は謝ることしかできなかった。

おそらく誰もこの意味を知るものは居ないだろう。

これは過去のある事件を知っている俺が告げる、2人の未来への謝罪。

後に危険な目にあうかもしれないという、暗に示した、忠告。

第一章 Part 1

Fin .

第一章 I Runaway

・ ・ Part 1 (後書き)

Part 2 に続く!

## 第一章 I Runaway . . . Part 2 (前書き)

Part 2は主にゲイルの過去の話です。

かなり場面転換が多い部分なので、「\*\*\*」の表記が時間的にも大きく場面が変わったのだと考えて読んでください。「\*」は簡単な場面転換です。

あと、たいした描写ではありませんが少し流血表現があります。ご注意ください。

最後にコレだけは言わせてください。

∴ 食い逃げと飲酒運転はいけません!!

第一章 I Runaway . . . Part 2

ピピッピピピッピピッ...

…救急車の中で規則的な電子音が流れている。

少年は母親の手を握ったまま動かない。

心配したゲイルが車内に設置されたモニターを見ると、彼女の脈はギリギリの境界線をさまよっていることが確認できた。

再び表情に陰りが浮かぶ。

救急隊員はラスの腕に巻かれていた包帯をとりかえながら感嘆の声を発した。

「…にしても、こんな傷の状態でよくあんなに動きましたね。きつと応急処置がよかつたんでしょう。これは、あなたが自分で？」

「ああいや、こいつが…」

ラスは隣に座っていたシリウスを指差す。

「そうでしたか。応急処置をしたのは良い判断ですね。　　なにか医

療関係のお仕事でも？」

救急隊員の質問にシリウスは柔らかく首を横に振った。

「いえ。…俺たちは、ただの刑事です」

「へえ……すごいですね！ ああでは……この女性とは関係がないんですか？」

「はい。この子が彼女の子どもなのですが、他の親族は…」

そこでシリウスが言葉を詰まらせたため、ラスは少年に聞く。

「…君、父さんは？」

その問いに少年は首を横に振った。

「…いない。昔、病気で死んじゃった…」

「そっか…。じゃあ母さんと2人暮らし？」

「…うん」

…この少年にとって、母親は唯一の家族なのだ。

ラスは少年がうつむいたのを見て何と言葉をかけていいのか分から

ず、その頭をくしゃくしゃとなでることしかできなかった。

\*\*\*

この病院は街の東端にあり、海の近くに建てられたあまり大きくない建物だ。

病院についてすぐ、母親は手術室へ搬送された。

ラスが診察を受けている途中、ゲイルが血で塗れた服を着替えて女性の病室となる部屋で待っていた時にシリウスと少年が部屋に戻ってきた。

今まで少年はシリウスと共に手術室の前で手術が終わるのを待っていたのだが、かなり長い手術になるようなので帰ってきたのだ。

ゲイルの「どうだった？」の問いにシリウスはただ首を横に振るしかなかった。

…この街にきてまだ一日も経ってないというのに、色んなことが起

きている気がする。

さすがにゲイルやシリウスの表情には疲れが見え始めていた。

その時病室のドアが開いて診察を終えたラスが入ってくる。

「ふー、終わった…」

「ラス、大丈夫か？」

「あー、全然平気ですよ。むしろ俺の丈夫さに医者が驚いてたくらいです、心配いりません」

「それなら、良かった…」

「ってか、ここめっちゃ暑くないっすか？じめっとしてるっつーか…」

それもそうだろう、セリスキュオレートは夏まっ只中だ。

しかも窓を閉め切っているのか、病院内は廊下も病室もすべて独特の生暖かい湿った空気で満たされている。

これでは気分が悪くなるだろう。

ゲイルは立ち上がり、一度外に出ることを提案したが少年だけはそれを断った。

病院から出るドアを開けると少し涼しげな潮風が一気に通り抜ける。

外はすっかり夜になり、目の前の低い石垣からは月明かりを映した  
ベール海が広がっていた。

今まで閉鎖的な場所にいたこともあって、この開放感がすごく気持ち  
良い。

「すっげえ、良い眺めだよなー…」

「ああ…」

後輩がその景色に魅了されている横でゲイルは煙草に火をつけて、  
聞いた。

「…少し、昔話をしてもいいかな」

「？ …昔話って、先パイの？」

「ああ。過去にある事件があつてな、それがあまりに今回と似て  
る状況だったから一応退屈しのぎに話しておこうと思って」

「…わかりました。聞きます」

そしてゲイルは話し始めた。

「あれは、アルジゴという街だった…」

…研修生時代の、苦い思い出を。

\*\*\*

「視点：ゲイル」

俺は当時、まだ警察の研修生だった。

たまたま同期のヴィトと路地を歩いていた時のこと。

「…でさー、さっきの話に続きがあつて…」

俺の隣を歩くヴィトは赤い髪を持つ、やや小柄の男だった。そいつは俺のパートナーで、よく一緒に行動していた。

その時アルジゴにはある任務のために来ていて、俺たちが待機場所に帰ろうとしてた途中…路上から叫び声が聞こえたのだ。

「なんだ!!?」

俺が路上の方を見ると、せまい路地を一台の暴走車両が走ってきていた。

そしてその先には脚を骨折していたらしい姉とその少女を支えている弟、さらにその先には脚が悪いのか速く動くことができない女性がいる。

どちらも速く歩けないなんて、そんな不運なことがあるのか…!

俺は瞬時の選択を迫られた。

相棒のヴィトはすでに動き出していて路上にいたひとりの少年を助けに向かっている。頼ることはできない。

どうすればいいんだ…!!

おそらくどちらかを助ければ一方はひかれる。

それほど難しい状況だということは分かっていた。

だが…そのときの俺は無鉄砲だったのか、どちらか助けることを選んだ。

「くそっ…間に合え!!」

俺は走りだして2人の姉弟を路肩へ押し出し、そのまま女性の方へ向かう。

あともう少し。

もう少しで、間に合う…!!

俺の手が女性の肩に、触れた。

しかし、その瞬間。

ドンッッッ!!!!

俺の体に耐え難い衝撃。

そして体が持ち上がり、宙を舞うような感覚がして。

…すべてがスローモーションのように見えて。

血が飛び散っているのが見えた。これは俺の血か？それとも彼女の？…わからない

ガラスの破片が俺の頬を切った感覚がして。

目の前を跳んでいる彼女の脚がおかしな方向に曲がっているような気がした。すでに折れていたのかもしれないな

…ある程度体が浮き上がったら今度は降下していく。

一体彼女はどうなってしまっただろう。

自分は、どうなってしまっただろう。

地面に打ち付けられるときの恐怖感があるはずなのに思考自体が働かなくなっていく感覚。

…俺、死ぬのかな？

視界が白く染まる……

…誰かの泣き叫ぶ声と救急車の音がする……

ゆっくりと俺が目を開くと、ぼんやりと綺麗な赤い髪が見えた。

おぼろげな視界がだんだんくつきりして、またぼやける。  
目のピントがあっていないようだ。

「…イル……ゲイル、しっかりしろ……おい、頼むからっ……」

ぐらつく視界の中で見たのはヴィトの顔。  
逆行でよく見えないが、あいつは泣いているようだった。

「…ゲイル！？気づいたのか！！？ 良かった…良かったあ…！！」

がっしりと俺の右手を握っていたらしいその両手は俺の血で染まっていた。

俺は微笑する。

「…ヴィト…これくらいで…なんて顔、してんだ…？」

これくらい、と言ったがなんとなく自分の生暖かい血が体から抜けていくのを感じた。

正直、頭もぼーっとしてきている。やばいのかもしれない。

ヴィトは涙をぬぐって声を詰まらせながら怒る。

「バカ言ってるじゃ、ねえよ！！ …お前が…死ぬんじゃないかって、本気で考えてたんだからな！ …オレはっ…オレは…」

「すまない…悪かった」

そこまで言った瞬間、突発的に咳き込み血を吐き出す。

「ゲイル！？ おい！！！」

俺は咳き込んだ拍子に路上の光景を見た。

人だけが見える…。

そして、赤い血溜りの中に横たわるさっきの女性がいた。

長いブロンドの髪が、血で染まっている。

…守ることが、できなかった。

ひどく心が痛む。

くそ…もう少し…もう少しだけ、

…はやく、気づいていねば。

俺は舌打ちをして口元の血をぎこちない左手でぬぐい、ヴィトを見た。

「なあヴィト…もし、俺が死んだら…」

その言葉を聞いたヴィトの表情が凍りついたのが分かる。でも、言わせてくれ。

「死んだら、その時は」

「喋んな…!! 頼むから…っ」

その時、

「…お母さんっ…!!」

突然聞こえた叫びにぼやけていた視界がピンと戻った。

おそらく女性の子どもの声だ。

一言、その子どもに謝っておきたかった。

…お前の母親を守れなくて悪かった、と。

けれど、俺はまた

「……………っゲイル！！！」

…意識を失った。

\*\*\*

「…それで、俺が次に目覚めたのはアルジゴの病院の中だったんだ」

シリウスは俺の言葉を聞いて、一度うなずいた。

「…確かに状況は今回と似てますね」

ラスは石垣にもたれかかって話の続きを俺に促す。

「それでそれで？」

「俺は医者に全治5ヶ月だと言われたよ。かなりの重症だったらしい。右腕が複雑骨折してたけど、アルジゴには腕の良い医者がいた

から運よく治った」

シリウスは「アルジゴ…」と呟く。

「確かあそこは軍隊と医療が発達してると、本で読んだことがあります」

ラスはシリウスに驚愕の表情を向ける。

「シ…シリウスが街のこと話してる！！ 一体どうしたんだよ、すげー！」

…ラス、驚くところはそこなのか…

とりあえず俺は話を戻す。

「それで俺は、まあ…リハビリとか色々やって4ヶ月でそこを退院した」

その言葉にシリウスが、「4ヶ月!?!」と反応する。こいつにしては珍しい反応だ。

「えっと…先パイ、アルジゴは確か…医者が言った期限は絶対ですよね…?」

うっ……

俺はギクリとする。

ラスはそんな俺の様子とシリウスを交互に見て首をかしげた。

「なにそれ、どーいうこと？」

「つまり、医者が『全治5ヶ月』と判断すれば、どんなにその患者が完全に回復してもその期限より早く退院することは出来ないんだ」

「先パイの場合だと、5ヶ月をきっちり病院で過ごさせてこと？」

「ああ。しかもその病院の制度は昔から一度も変わってないはずなのに……」

「え、じゃあ先パイ……？」

後輩からの疑いの目が俺に突き刺さる。

「ああ、いや、その……」

そして俺はそのまま視線をそらして、

「……抜け出しました」

……自供。

シリウスはさらに込み入ったことを言う。

「あそこは軍隊と連携してますから、簡単には出られないはずですが？」

…ですよね。

「ちょっと…強引だった…かな？」

……。

そう俺が付け加えると沈黙が重くなった。  
ああ分かってている、俺が悪い。

でもその冷めた視線はやめてくれ…

\*  
\*  
\*

「視点…筆者」

ダッダッダッダッ……

暗い病院の中に響く足音。

ゲイルは患者用の服から私服に着替えて病室を抜け出し、ひたすら病院内を走っていた。

体は完全に治っているというのに退院させてもらえないことに苛立ったゲイルは、相棒と脱走を決め込んだのだ。

向かう場所は、ただひとつ。

現在は東病棟の2階を走っている。

時刻は深夜2時ほど。西病棟3階のゲイルの病室にナースが見回りに来る時間だ。

…ここからは時間との勝負である。

ゲイルがそう思った時。

「誰だ!!!」

さっそく監視係の男に見つかり、追いかけられる。

ゲイル（やばい…バレたな）

男を後方にして走り続けるゲイルは東病棟の階段を駆け下り、急いで踊り場の窓の鍵を開けた。

「おいお前、何をしている…!」

「…っ」

もう男はすぐ後ろに来ている。

そしてゲイルは男に捕まえられる寸前ですぐさま窓から飛び降り…

「 S t a r t ! ! 」

空中で、真下に停めていた一台の軽トラに向かって叫ぶ。

そして合図と同時に軽トラのエンジンがかかり、荷台に着地したゲイルを乗せて一気に爆走し始めた。

監視の男は窓から下を覗き込み、

「嘘だろ…?」

と、呆然と呟いたのだった。

\*

しばらく軽トラの荷台の上から病院の様子を見ていたゲイルは、ひとまず安全を確認するため息をつく。

「まったく…過保護過ぎなんだ、この病院は…」

そして走行している軽トラの側面に飛び移り、片手で助手席側のドアを開けて中に滑り込んだ。

「おかえり」

運転席から声がする。

…ヴィトだ。

ヴィトの笑顔にゲイルは疲れきった表情でつられて笑い、

「ああ、ただいま」

ドアを閉めて座席にちゃんと座った。

ヴィトはサイドミラーで後方を確認しながら運転を続ける。

「待ちくたびれたぜ、ホント」

「そうか？ 俺は走ってくたびれたよ。…つまり、おあいこってことさ」

久々の軽口が繰り返される。

そして、軽トラはただっ広い病院の敷地内を爆走し続けるのであった。

\*

…どうしてこの病院はこつも無駄に広いのだろうか。

ゲイルとヴィトの脳内にその言葉が浮かんだのは、病院敷地内Dブロックを走行しているときだった。

「ずいぶん長いな…」

「…でかいんだよ、この病院」

しばらくしてCブロックを走行中。

「おいヴィト…まだか？」

「うるせー、んなことオレに聞くんじゃない」

さらに数十分後、Bブロックにて。

「今頃どうなってんだろな、病院内。ゲイルが居ないって騒いでんじゃないね？」

「安売りセールまつ只中のスーパーみたいなんだろうな…」（遠い目）

……。

「……お前相変わらず文章力ないよな。どっちかつつーと、表現力？」

「一応カモフラージュのために俺の病室のベッドにはカカシを入れておいたんだが……大丈夫だろうか。処分とかされたら嫌だな……」

「……やっぱり訂正。 ……お前聞く耳も無<sup>ね</sup>え!!」

「え……？ 何を怒ってるんだ、ヴィト？」

……いつ、やっぱり聞いてねえよ。

\*

みづらにしばらくして病院敷地内Aブロックにて。

「……………」

「……………」

…もつ言葉もでない。

この病院の広さは異常だとさえ思う。

ふとゲイルが口を開いた。

「そういえば、お前がケータイを持ってきてくれて助かったよ。病院内への持込禁止になってたのによく検問を抜けられたな」

その言葉にヴィトはニヤツと笑う。

「ハツハツハ、そりゃあ任務の一環だからな。チープな失敗なんて言語道断！」

「任務だと？脱走するのはお前と俺の独断じゃないのか？」

「んーと、警察本部でオレが『あーゲイルを脱走させられたらなあ…』的なことをぼやいてたら『それは名案だ』ってGOサインをくれた人がいたってこと」

「…？ それは誰だ？」

「オレたちの憧れ、ケイオス教官だよ」

「ケイオス教官が…！？」

ケイオス教官とは、ヴィトが述べたとおり2人の憧れの人物で研修生のチームを束ねる教官のひとりだ。

「そう。…で、教官が『ゲイルを俺たちの所に…病院からなんとかでも奪い返せ！』って言うて。まあそのお陰で本格的な計画になったわけだ」

ヴィトはケイオス教官の真似をしながらセリフを言うて伝え、それを聞いたゲイルはため息。

「奪い返せって…物かよ、俺は」

「いいじゃねーか。そう言われるほど俺らは頼られてんだよ」

「そうか…。ってかお前本当にケイオス教官の真似がヘタだよな」

「はあ！？お前のそのつたない表現力よっか数倍マシだろ！！」

「いいや。俺の方が良い線いってる」

(…どこからその根拠が出てきたかは不明である。)

「あーもうお前マジ病院戻れや…」

そう口では言うているヴィトだが、なんだかんだ言うて楽しそうだ。

しかしその後、すぐにその声音が変わる。

「…ゲイル、番人キパーの皆さんがお出ました」

ヴィトが見る前方には見張りの男が6人、横一列に陣形をとって並んでいた。

軍隊が発達してるアルジゴにはぴったりである。

ゲイルはそれを見て、

「…なるほど？」

首と手首を回して軽い運動をする。

「ちょっとハンドル頼む」とヴィトに言われてゲイルがハンドルを支えると、同じように彼も軽い運動をした。

「相手は6人。オレたちは2人だから3…3だな。ゲイル、行けるか？」

「ああ。久々の戦闘だから楽しみだ」

「上等。…んじゃ、あの伝説の戦法でもやるとするか!..!」

ゲイルの頭に浮かぶ、『伝説の戦法』。

「アレか…。地味で卑怯な戦法だが、しょうがないか」

ヴィトはハンドルの近くのボタンを操作してニヤツと笑う。

「バンズじいさん（警察本部直属のメカニック）特製の新機能、使わせてもらっぜー！」

その言葉に目を見開くゲイル。

「新機能…？ …なんかすごそうだ」

そして2人はそれぞれ車のドアに手をかけた。  
ヴィトは叫ぶ。

「その名も…」

（敵まで残り数メートル）

…自動ブレーキ…！！」

「…地味っ」

その会話を最後に、トラックは番人の陣形の真ん中にいる2人めが

けて突っ込もうとする。

もちろんのこと、ひかれそうになる2人は両端に逃げるが、

ドンッ！！

ゲイルとヴィトが同時に開け放ったドアによって吹き飛ばされた。

(ここが卑怯)

トラックは地味な新機能のお陰で自動で止まり、まともにドアの打撃を喰らった2人の番人は数メートル離れた路上で気絶。

これで敵の数は減り、ゲイルとヴィトは2:2の持分で敵を倒せば良い。

地面に降りたゲイルとヴィトは格闘を繰り出す。

「いめんよ」

といて相手に蹴りをくらわせるゲイルだが、言葉とは裏腹にその威力は一般の男の蹴りをかなり超えている。

研修生であったこの時でさえ、ヴィトと共に上からのお墨付きがあったほどだ。並大抵であるはずがない。

ゴッ！！！

…鈍い音を残して最後の敵が倒れた。

「どうだ？感想は」

先に敵を倒し終えていたヴィトが車に乗り込みながら聞いた。  
ゲイルも車に乗り込み、笑う。

「…良い運動だった」

\*

一難去って、また走行している。

さっきのは病院敷地内Aブロックの中間にあるゲートの番人だった  
ようだ。

本当の外につながるゲートはこの先である。

「ところで、ちょっと疑問があるんだが」

「なんだよ、ゲイル」

「さっきの地味な新機能によって人がひかれる恐れはないのか？」

ゲイルの問いにヴィトは少し黙り込んでから答えた。

「それはない！！……わけじゃない」

「…あるんだろうが。」

「んー、でも使うこと自体あんまりないからいーんじゃない？」

「使わないなら作るなよ……」

…あの地味な新機能の必要性がいまいになつてきた。

ゲイルは呆れて、暇つぶしに双眼鏡をとりだして進行方向を見る。  
すると…

ゲイル（ん…？）

目をこらして数秒後、この先に何かがあるのが見えた。  
そこにあるのは数人の人影と巨大な鉄の門。おそらくあれが外への  
ゲートだ。

「…！！　おいヴィト！どうする？　この先には大きな鉄

の門と監視人が8人ほどいるが…!？」

その言葉にヴィトは片手を頭にあてて『しまった』のポーズをする。

「あーヤッベ、鉄の門って夜になると閉まってんだもんな。忘れてたわ」

2人の頭上に浮かぶ言葉は、

『作戦、失敗?』

…いやいやいやいや。

「どうするんだよヴィト!! つか夜閉めないでいつ閉めると思ってたんだよ、あの門! 使わないなら作らないだろ!!」

『使わないなら作らない』。その類の言葉は二度目である。

「いや、なんとかなるんじゃないかね? オレ運強いから」

「どんな根拠だ!?!」

ヴェイトはあたりを見回す。

そして…あるものを見つけた。  
彼の口元がニツと弧をつくり、ハンドルを強く握る。

「いーもんめっけ」

ゲイルは「はあ？」と言いたげな表情でヴェイトを見て呆然とした。

「…一体どうするんだ？何もないだろう！！」

明らかに焦っているゲイルを一瞥したヴェイトはハンドルを右にきる。  
そして軽く言った。

「…そうあわてなさんな。 …なあゲイル、ケイオス教官の名言覚えてる？」

「…？」

…何を言い出しているんだ。

意味が分からずゲイルは何も言わずに車の向かう先を見る。

そこには廃品らしきドラム缶が大きな山のように積み重なり、用途は分からないが大きくて丈夫な鉄板が斜めにたてかけられていた。

続いて鉄の門を凝視する。かなり大きく見えるが、鉄の部分は8メートルほどでその上からはガラスである。

そこでようやく彼はピンときた。

無意識にその手は軽トラの後部座席に置かれたマシンガンを掴む。案の定軽トラは斜めに立てかけられた鉄板の上を走り出した。

お気づきの方もいるだろうが……つまりは『ジャンプ台』である。

ゲイルはそのガラスめがけてマシンガンを連射する。防弾ガラスであるそれに、たくさんのヒビができた。おそらくこれくらいで充分だろう。

ヴィトはアクセルを全開にしながら教官の名言を口にする。

「『任務の遂行中に、邪魔をするようなものがあれば』?」

ゲイルは好戦的な笑みを浮かべてその言葉に続ける。

「……』ぶち壊せ『!」

「That's right!」

同時に車は宙を跳び、ガラスをバリバリと突き破った。

ゲートの先はかなり急な下り坂で、跳んでるこの車はすぐに着地しないだろう。

ワイトは笑顔で歓声をあげた。

「Fuuuu!!! Mission Complete!!」

だがその時ゲイルが気づく。

「おい、ちょっと待て。車が着地するのと同時に大破…なんてことないよな？」

それを聞いたワイトは笑顔から一気に素っ気ない顔になり、

「…さあ?」

…の一言。

ゲイルは片手で顔を覆って眩く。

「マジかよ…」

車はどンドン降下して、地面はもつすぐそこだ。  
ゲイルは目を閉じる。

車が地面に着く、その寸前に聞こえたのは

「あ  
」

…ヴィトの間抜けな声だった。

\*

「視点：ゲイル」

ドンッ！…！ドンッ！…！ドドンッ！…

ボールがバウンドするような音と大きな衝撃に体が揺れる。

ああ、これはまるで遊園地のアトラクションのようだ。  
死ぬ直前に遊園地気分って、なんだよ。

あ、なんか今の衝撃で唇噛んだかも。少しヒリヒリする。

もう、死んだかな。

いや普通なら即死だろ。結構高いところから落ちたからな。

うん、きっと即死だ。

なんで俺、こんなに冷静で居られてんだろ。

今の痛みで気分がさえたのかな。

…ん？痛い？ 即死で？

「あーこれこれ!!」

ヴィトの音がする…

……ってこれ、死んでないんじゃないか!!??

俺はカッと目を開く。

まわりを見ると隣にはヴィトがいて、俺たちが乗っている軽トラは普通に道路を走っていた。

えー……？

たぶん俺は間抜けな顔をしてると思う。

それはそうだろ。だって今さっきまで生死の境目にいたはずだったんだから。

「…あのー…ワイトさん？」

「なに」

「この状況なに？ってかさっきお前何やったんだよ！！」

ワイトは俺の言葉にケロツとした笑みを返した。

「いやーすっかり忘れてたわ。新機能その2『下方強力エアバッグ』。もしもの時は着地時に使うようについて教官と打ち合わせしてたんだった。あつぶねー」

なっ…こいつ…

「『あつぶねー』…じゃねーよ！！…そんな大事なことでくらい忘れんな！！…」

「やーだなあゲイル、人生山あり谷あり、これが一番面白いんだって」

「お前といると谷ばっかだ!」

ヴィトは片手で運転しながら手探りで、後部座席になぜか乗せていた小型冷蔵庫からビール缶を取り出して俺に渡した。

「そう怒るなつて。無事なだけいーじゃん？」

確かに、唇を噛んだ以外のケガはない。それは一理ある。

「…まあ、そうだな」

俺がひとまず落ち着いてそう言うとヴィトは優しく笑って、あらためて取り出した自分の分のビール缶を俺のものに軽くぶつけた。

「いま生きていることに乾杯」

俺もなんとなくヴィトにつられて笑う。

「ああ、乾杯」

…そうして車内に缶を開ける音が響いた。

\*\*\*

「視点：筆者」

「…ここまでは、病院脱出までだ」

ゲイルの言葉にラスとシリウスは目を見合わせて、

「なんてゆーか、なあ？」

「…ああ」

…そしてアイコンタクトをはじめた。

『先パイでもこーいうコトやるんだな』

『紳士なのは時と場合によるんだろつか…』

『さあね。ってか絶対ぶっ飛ばされた番人は重症じゃね？』

『俺もそう思う。結構手荒だよな』

これは…もはやアイコンタクトというより、テレパシーだ。

ゲイルは目を見合わせたまま動かない2人を不思議な表情で見っていた。

「おい…何やってるんだ…？」

その言葉に後輩はため息をつく。（柔らかな笑顔で）

「先パイも、そーいう頃があっただな」

「…だな」

「……何が？」

…意味が分かってないのはゲイルだけである。

\*\*\*

「視点：ゲイル」

アルジゴの病院を脱出して数時間後、軽トラはロンドンの市街に入った。

「なあ、あの新機能って他にもあるのか？」

「そりゃあな。オレもあんまり覚えてないけど、『自動タイヤ交換』、『高速ワイパー』、『映画見るやつ』、『それと……』

「…すまん、もういい。ってか『高速ワイパー』って逆に前見づらと思う」

車が赤信号で止まる。

俺は窓から久々のロンドンの景色を眺めた。

ちよつと今止まっている道路からは大陸と大陸を？く煌びやかで立派な橋が見える。

信号が青に変わった。再び車は走り出す。

グイトは髪をいじりながら俺に言った。

「これでお前はオレに2つ借りができたな」

2つ、だと？

「？ ……ひとつじゃないか？」

「いや違う。今回のと、この数ヶ月間オレに心配させたこと」

「……。それも借りに入るのか……」

俺の言葉にヴィトはムツとする。

「他に、言うことは？」

「…心配かけて悪かったな、ヴィト」

素直に謝ればヴィトは嬉しそうな顔をして、

「…いちごパフェ、2つな」

…と意地悪く言った。つまり買え、と。

俺はため息をつく。

「…相変わらず可愛い好みだ」

\*\*\*

「ゲイルの復帰に乾杯！！」

高らかに響く酒のジョッキがぶつかる音。

明け方の空に響く、声。

ここはロンドンの一角にあるビルの屋上で、警察の訓練を俺と一緒に受けた同期たちや教官が集まっていた。

彼らは深夜の3時にヴィトから『任務に成功した』との知らせを受けて、急な話だと言っのにわざわざ集まって歓迎会の準備をしたくれたのだ。

もちろん皆私服で、その中でも特にすごいのはパジャマを着たままここに来たやつだろうか。どうやらぐっすり眠っていた所に歓迎会の連絡が来たらしい。

なんでこうも皆の結束力があるのかといえば、任務のやり方に理由がある。

このチームは、色んな年齢層の人々や、新人や教官などの階級が混ざって構成されている。

重要なのは年や階級じゃなくて、その人個人の能力だからだ。

無論指令を出すのは教官であるが、部下にはきちんとした発言権がある。

ここでは皆がほぼ同等の権利を持っているのだ。

それゆえ、人々がそれぞれの意見をぶつけたり、時には認めあったりすることが多い。

これが皆の結束力を強くしている理由。

…チームのメンバーが明るく騒ぐ中、俺はビルの鉄柵に寄りかかって複雑な表情でその光景を見ていた。

そして、疑問に思う。

皆が俺のために集まってくれたことは本当に嬉しいんだ。

だが。

なんでわざわざ帰ってきてから直で歓迎会をやる!!!？

普通は病み上がりのやつに休養をすすめるだろうが!!アホか!!

しかも。

… 主役（自分）よりも他の奴らが盛り上がってるこの状況!!

なんか向こうでは踊り始めたやつがいるし!

……どういふことだ……。

目線の先にいるヴィトなんてのはさつきも車内で酒を飲んだのに、  
今度はジョッキ（大）を4杯以上飲んでいる。（つてか乾杯をする  
前にすでに2杯は飲んでいた）

飲んでいる酒は…『いちごビール』…どんなチヨイスだ、あのいち  
ごマニア…!

「はあぁ……」

ため息の度合いが濃くなる。

いや…まあ、結構好きなんだけどさ、このチーム。

そのとき。

「おかえり、ゲイル」

久々に聞く声でした。

俺はその方を見て目を見開いた。

「…ケイオス教官!!」

教官は黒のシックなスーツを崩して着こなしていて、ワックスで所々固めた金髪もさまになっている。

一見、キザに見えるだろう。

しかし、違う。この人はありえない伝説を作る男として有名だ。キザとはほど遠い、伝説を。

最近作った伝説は…カップ麺一気飲み…だったような。

よい子はマネをしてはダメだ。悪い子でも…やらない方がいいと思う。

教官は赤ワインがそそがれたグラスを持って俺の隣に立ち、ロンドンの街並みを眺める。

「ケガの具合はどうだ？」

「ああ、すっかり治りました。迷惑かけてすみません」

彼は俺の言葉を聞いて微笑した。

「まったくだ。…お前がいないとこのチームは本領発揮できないし攻撃役は減るし…肝心なツツコミ役がいなくなる」

「そこですか」

「そこですよ、ゲイル君」

そしてわざとエリートっぽい口調で返した教官に俺は笑い、ボソツと言っ。

「…俺、大抵ツツコミされる方なんですけどね」

……。

「そうだったか？」

それくらい忘れないでくださいよ！！

「そういえば教官、俺が巻き込まれた事故なんですけど、あの後被害者がどうなったか知りませんか？」

その言葉に教官の目がスツと細められた。

「…知りたいのか」

声も、まじめな口調になった。

「あの女性は亡くなったよ。ほぼ即死状態だった。向かってきた車の速度が速かったんだろ？。正直お前だって危険な状態だった。いま生きてることが奇跡なくらい、な」

「そう、でしたか」

やはり、女性の命はもう無かったか。なんとなく予想はついていた。

「それにしても、今回の作戦は結構よかつたろ。無事に帰って来れたんだからな！」

「無事につて…、俺、あなたが考え出した作戦で死ぬかと思っただけですけど…」

「…まああの事故で生き残れたのも俺の訓練のお陰だな！」  
G  
o o d j o b ! !

えっ、俺の言葉スルー!!!?  
しかもG o o d j o b って!!

「ま、ふざけるのはこの程度にしておいて…彼女の息子なんだが」

「?…はい」

「…孤児院に預けることにした」

「え…親族は、居なかつたんですか…!?!」

「ああ。彼女はシングルマザーで、親戚も見当たらなかつた。…遠いところから子どもをつれてここに亡命したのかもしれない」

「…」

そんな。

俺が事故にあつて気を失う寸前に母を呼んでいたあの少年は、あの瞬間に唯一の家族を失つたのか。

「ゲイル…そこまで背負いこむな。心に刻んで、これからに生かせばいい。世の中…都合の良い事ばかりじゃない。これが世の当然だ」

俺は、唇をただ噛み締めることしかできなかった。

\*\*\*

「その少年の母親は…亡くなつたんですね」

シリウスは少しうつむき加減で言った。

ラスも苦い表情をして背後の病院を見上げる。

「…なんか嫌つスね。こつも状況が似てると、繰り返しそうで」

…たしかに、そうなんだ。

だけど、この過去の事件はまだ続きがある。

「まあそれで、俺は警察に復帰したんだ。だが、俺が警察に復帰して数年後のある日…予想もしてなかった事件が起きた」

\*\*\*

その頃になると俺はもう研修生ではなく、本格的な警察官になっていた。

俺とヴィトは共にエリート並みの実績をあげて（決して自慢じゃないのだが）、昔と同じようにパートナーとして行動していた。

ちなみにケイオス教官は昇格して上官になり、警察の上層部で活躍している。

俺はあの時の…病院から抜け出した日を思い出して少し笑いながら銃の手入れをしていた。

すると、

「ゲイル!!!」

すっかり聞きなれた声がする。

… ヴイトだ。

「ケイオス教官から出勤要請が出た!!!早く行くぞ!!!」

「… ヴイト。 もう教官じゃなくて上官だよ」

「四の五の言うな!!!オレのいちごパフェがかかってんの!!!」

「またいちごかよ! しかも俺、四の五の言ってるな…!」

「いいから行くぞ!!!」

俺の言葉はさえぎられ、 ヴイトに引つ張られながら警察署を後にした。

\*

昔と同じようにヴイトが車を運転する。

「…で、今回の事件はなんだ」

「襲撃事件らしい。街中で士官学校に通う少年がナイフ持った少年に襲われそうになって、他の人に危害が及ばないように使われてない立体駐車場に逃げ込んだとか」

「賢明な判断だと思うが…その襲われてる少年は大丈夫なのか？」

「いや…負傷はしてるかも。確かそのナイフ持ったやつは最初に女の子に襲いかかるうとしてたっばくて、それを少年がかばったことが発端だとか」

「…さつきから』とか』ばっかりだな」

「だってオレ、教官から聞かされただけだもん」

「『上官』だ、ヴィト」

「あー…、…無理！！ケイオス教官は『上官』であつて、ケイオス上官は『教官』だったんだから…ケイオス…ん、どっちだ？  
…とりあえずオレの中では『教官』なの！永遠に！！フォーエバー教官！！」

「…あ、今日弾薬が安い特売日だ。ヴィト、あとで買いに行こうか」

「人の話聞けや!!!」

「? すまない。けどあまり出回らない弾が売ってるから先に言っておこうと思って。確か『EX-200...』」

そう言いかけた俺の言葉にバツと振り向くヴィトが、怒るかと思いきや。

「『EX-200 Special Edition』か!!!? どこ?!?どこの店!!!?」

...。絶対いま買う気だろ、お前...。

\*

「視点：筆者」

シュツ!!

ナイフが空を切る音。

長い間使われなかったがために明るくない蛍光灯の光の下に3人の

人影があつた。

10代半ばか後半の2人の少年と、同じくらいの年齢の少女。

1人の少年は少女を背にかばって相手の少年をやり過ごしていた。その体のいたるところに切り傷があり、わずかに血がにじんでいる部分もある。

16歳になつた少年は刃をかわしながら問う。

「あなたは一体誰なんですか？」

「……」

17歳になつた少年はそれに答えずに、ひたすらナイフを振り回す。

「どうして、僕たちを襲うんですか？」

その瞬間ナイフを持った少年は肘うちで相手を突き飛ばした。

「くっ……!!」

「ユウ!!大丈夫!？」

そこに駆け寄る少女は突き飛ばされた少年を『ユウ』と呼んだ。この少年の名前だろう。

きつとユウはかなりダメージを受けている。しかし彼はそれよりも必死に言葉を紡いだ。

「ユリ、大丈夫だから…僕に近づかないで、逃げて」  
その言葉に17歳になった少女、ユリは首を横に振った。

「できるわけじゃない!!」

彼女が背後で聞こえる足音に振り向くと、そこにはナイフを握りなおした相手の少年がいた。

ユリは唇を噛み締めてユウをかばう体勢になる。

ユウはその行動に驚くがそれでも冷静な言葉をかけた。

「…そつちこそ何やってんの。強がなくて、いいんだよ」

震える少女の肩に両手を置いて力を入れたユウは自分と少女の体勢を、入れ替える。

…刺されるのは、僕でいい。とでも言いたげな表情で微笑を残して。

背後の少年はナイフを振り上げた。少女は恐怖で叫ぶ。

その時。

「ちょっと待ったあああつ!!!」

同時にバンツ!!と一発の銃声音。

「!!!?」

少年のナイフを持つ手がピタリと止まる。  
その場の3人は一斉に声の方を見た。

そこには、バイクに（なぜか）乗ってきた2人の若い男がいた。

運転するのはやはり赤い髪の男で、銃を威嚇のために撃つたのは後方の黒髪の男。

ついでに言うとそのバイク、明らかにピザ屋の配達用のバイクである。

.....。

少年たちが突然のことに絶句していると、現れた男2人はバイクから降りてすぐに話し出す。

「…なあ、前から思ってたんだけど…ゲイル、気をそらせるためだけに銃撃つのやめねえ？」弾もつたいねーし。

「…そうかな？　だってこれ刑事の憧れじゃないか。迫力も風格もあるし…」

「はあ…そういうと思ったぜ。それでオレ、そんなお前にプレゼントを用意したんだ。先に渡せば良かったな…」

そう言つて赤髪の男、ヴィトはゲイルにある銃を渡す。  
ゲイルはそれを手に取つて数秒ながめたあとに首をかしげた。

「…これ、偽物か？」

「いや、違うよ」

「だってなんか弾とか違うじゃないか」

その言葉を待っていたらしくヴィトはニヤツと笑った。

「フッフッフ…よく気がついたな！！これはだな…小学校の運動会とかで使う、定番の『アレ』だ！！！」（自慢げ）

定番の、『アレ』…。 ……スターターピストルとさえはいいだろ  
うが。

ゲイルは感心したようにうなずく。

「『アレ』か……。確かにこれ聞けば動揺するな。それよりもなんか、意味も無く走んなきゃって気になる」

「へへんっ！！そーだろー！」

「…んじゃ、コレはランニングの時に…」

「だから今みたいな時に使えって言うてんの！！！」

「だが……ってか、そんなことよりもだ、ワイト！！…なんで途中で車乗り捨ててピザ屋のバイクに乗り換えた！？ピザ屋の人が困ってたぞー！！」

…任務の話じゃないのかよ！！

ワイトはゲイルに反論する。

「じゃあねえじゃんか！！今の時期、あの高速道路は帰省ラッシュで、さっきだつて渋滞してたんだから！！！」

「だからってピザ屋の人に俺たちの車預けてどうすんだよ！どう見たってピザの配達に似合わんだろっが！いくら俺たちが任務で急いでいたからと言って…

…忘れてた」( 任務を。 )

「 ……だな」

そう言つて2人はようやく少年たちの方に向かい、ヴィトがユウとユリのところへ、ゲイルはナイフを持つ少年の前に立ちはだかった。ナイフを持つ少年は問答無用で襲いかかろうとするが、ゲイルの顔を見て踏みとどまる。

そして呟いた。

「…その顔、覚えてる。確か、母さんを助けようとした人だ」

「…え？」

ゲイルはその言葉に、

( 母さんを、助けよう？…？ ……まさか…！ )

ようやく気づいて目を見開いた。

しかし。

「だけど…結局母さんは死んだ。あんたも…嫌いだ！」

少年は再びナイフをふりかざす。

「…ゲイル！！？」

ヴィトの声が聞こえる。

分かっている。でも。

動けない。

そうか、この少年はあの時俺を見た…

「ゲイル！！！！」

ゲイルの耳にいきなり近いところからヴィトの声が聞こえて、少し長めなその赤髪が目の前を埋めた。

次の瞬間。

ゴッ！！！！！

同時に鈍い音が強く聞こえて、ナイフを持っていた少年が後ろへ倒れる。

… ヴイトが少年を殴りつけたのだ。割と小柄なその体形からは想像がつかないほどの威力の強さである。

そのまま少年が持っていたナイフを遠くへ蹴飛ばしたヴイトは、倒れたままの少年の上でかがんでその胸倉を掴み、怒鳴る。

202

「 …… テメエ、何しやがんだ！！！！！！」

その場所一帯に響いたその声に沈黙が起こった。

… あのヴイトが、本気で怒っている。

ゲイルはそのことに一番驚いていた。

ヴィトの下の少年は驚きながらも口を開く。

「あんたの顔も、覚えてる。あんたは、確か…」

「…そうだよ。数年前の事故のときにお前を助けた研修生だ。…バ  
カな事しやがって」

「……」

ヴィトはそのままうなだれて、言葉を続けた。

「ゲイルは…あいつは、お前の母さん助けのために自分の身を犠牲  
にしてまで道路に飛び出したんだ…!!あの後どうだったか知って  
るか!!?あいつ重症で、1週間以上目覚めなかった!複雑骨折も  
してたけど、それより植物状態か脳死、あるいは近々死ぬかもしれ  
ないとまで言われた!!!」

「……」

「そんな危険な状態からあいつは戻ってきたんだ!なのにお前はナ  
イフを向けた!!つぎけんじゃねえ!!こいつは…お前なんかに殺  
されていい様な人間じゃねえんだよ!!!」

そこまで一気に言い切ったヴィトは他にも何か言いたそうなのを唇  
を噛み締めて抑え、怒りで震える手をなんとか開いて少年の上半身  
を床に下ろした。

\*

「視点：ゲイル」

…これは、どういふことだ。

俺は未だに動揺していた。

あの少年が、自分が昔救えなかった女性の子ども…。

しかも、聞かされていたことよりもかなり酷だったらしい事故当時の自分の状態。

ヴィトはそんなことをひとつも言わなかった。

いや。あいつは強いやつだから、どんなに自分を心配してたかなんてそこまで口にしなかったのだ。

そのことに俺は、はじめて身にしみるように実感した。

グッ！！

考えこんでいると突然体が上に持ち上がるような感覚に襲われる。

「!」

それは、ヴィトに胸倉を掴まれていたからだ。

そして怒鳴りつけられる。

「お前もお前だ！なにブーツと突っ立ってんだよ！！殺されたら救えるはずの人も救えなくなるんだぞ！！」

必死に訴えるヴィトに申し訳なく思っただけ俺は顔を背けた。

「…悪かった」

再び、沈黙。

すると俺の後方から「あの…」と声がする。

その方を見れば、襲われていた2人が俺をじっと見ていた。

少女が口を開く。

「あの…まさか、昔私たちを助けてくれた方…ですか？」

「…え？」

俺は2人をよく見る。

俺が、助けた…？

そして気づいた。

「！！ あの時の…：姉弟か！！」

その時。

キイイイツ！！！！

すさまじいドリフト音がその場に響き、奥から黒い高級車が2台、こっちに向かってくる。

「なっ…：なんかこっち来るんですけど…！！」

ヴィトがそう言って自分が殴り飛ばした少年をかばう体勢をとった。

「なんなんだ、一体…！！」

…俺も姉弟をかばうようにする。

すると、                   キイイッ！！とまたドリフト音をたてて、車  
は俺たちの目の前で止まった。

そして車から降りたのは。

「よおゲイル、久しぶりだな。ワイトには…『また会ったな』か？」

ゲイル「ケイオス上官！！？」

ワイト                   教官！！？」

まさに、その人だった。

「さっそくだが、俺はお前らに怒らなきゃならん。                   ピザ屋  
の人に謝れ！！！」

…やっぱりそこかよ！！

「お前らの車についていたGPS使ったら、なんか道路の渋滞に巻き込まれてないかという話になって、心配して追ってみたらこのザマだ」

ケイオス上官の車の後ろについてきた車は、俺たちが乗っていたものだ。

ヴィトはその言葉に口を尖らせる。

「細かいコトは気にしないでくださいよー、教官」

「…馬鹿野郎。人様にできるだけ迷惑をかけるなって言ってるんだ」

上官はそこで一度言葉を区切り、今一度状況を見て確認した。

「…。こんなこともあるのかと車を1台多く連れてきて良かった。ヴィト、その少年を俺の車の後部座席に乗せる。ゲイルはもう1台にその2人を。…俺たちが病院に送り届けよう」

「了解」

「そしてお前らは」

「「？」」

「ピザ屋の人にバイク返すついでにピザ買ってこい。帰りは反省の意味もこめて徒歩でな」

「えっそれオレらも食べます!？」

「しょうがねえな…ああ買ってこい買ってこい」

「よっしゃあ!!教官大好き!!」

\*

その事件が終わったあと、帰りの道で俺はヴィトに謝った。

「…ヴィト、悪かった」

「なにが？」

「さっきのことと、…昔事故に巻き込まれたときのこと」

ヴィトは両手いっぱいピザの箱を持ちながら「あー…」と呟き、

「んじゃ、いちごシェイク1つとストロベリーカクテルとストロベ  
リーアイス2個といちごパフェ4つな」

と、軽く笑った。

やっぱりこいつは強い。こっやって笑い飛ばせるのだから。

だけでもそれは…

「…食い過ぎだ」

\*\*\*

「視点：筆者」

ゲイルは話を続ける。

「もとを辿ってその事件の発端を調べてみると、どうやらナイフを持っていたあの少年は孤児院に預けられていた時にひどい扱いを受けていたらしい。その長年の恨みが矛先を変えてついに向けられてしまったのが、あの姉弟だったんだ」

ラスはゲイルを見る。

「…自分の母親の代わりに、助かったから？」

「ああ。それで俺は…今病院にいるあの子がさっきの幼い姉弟に将来、殺意を抱かないかが心配なんだ」

シリウスは難しい顔をした。

「あの女性が回復すれば心配ないんですけど…」

「そうだな…。今はそれを信じるだけだよ」

すると突然ラスがふと、「あー！」と声を出す。

「あのっ、気になったんですけどケイオス上官イコール班長アイトってことはないんですかね!？」

……。

ゲイルの表情が凍りついたのは言うまでもない。

「ラス…笑えない冗談はよしてくれ…。ケイオス上官あの人を班長あいつと一緒にしたら…悲しすぎる。たしかに親戚どうしだが…」

「えっ!!? そうなんスか!？」

「…まあな」

「ってかラス、班長とケイオス上官は名前違うだろ」

シリウスのその言葉にムツとしたラスは逆に問い詰めた。

「じゃあお前班長の名前知ってるのかよ」

……。

…無言。そして悔しそうにシリウスは顔を背けた。

「ほーら、わかんねーだろ？だって班長、自己紹介するとき『班長でーす、誕生日は10月だからよろしくー』だったもん」

「…まあそつだが…」

「先パイは、知ってるんですかー？」

ラスの無邪気な問いかけにゲイルはいたって優しく微笑して言った。

「知ってるよ。でも… …口に出したくはないかな」（腹立つから）

\*

「へーっつくしょん！ー！」

再び、ロンドンの本部。

「なあー…本当に病院行ったんだよな、この人」

「はい、しっかりとこの目で見ました」

ラックスはもう怒る気力も失せたのか、呆れている口調になってい

る。

李園は先ほどと変わらない反応なのだが…。

そして相変わらずズビーッと鼻をすする班長。

その様子を見たラックスは班長の机にバンツと両手を置いて身を乗り出した。

「なあ班長、もう今日は帰れ!!! (うるさいから)とっと帰つてすぐ寝ろ!!!」

その言葉に机上に頭を預けている班長はげっそりとした表情で口を開く。

「ハハハ…ラックス…今の私には聞こえてるぞお？ 君の言葉の中からカツコ書きの『うるさいから』がハッキリとね…」

「げっ…バレてるし」

「口で言わずとも顔に出ていますよ、ラックスさん。でも班長、机に向かって倒れてないでしっかりとイスに座つたらどうですか？ 仮にも『班長』なんですから。それができないのなら今すぐ帰ってください」

「またまた…君までそう言う…。 気遣ってくれるのは嬉しいけれどねえ…」

「いえ、まったくその気はありませんが」（キツパリ）

「ううう…」

「いい年したおっさんが『ううう…』って全然同情沸かねえから。むしろ鳥肌しか立たねーから」

「とりあえず班長、どちらかにしてください。しっかりと職務をやるか、一度休養をとるか」

「……」

「何黙ってたんだよ、班長。 休んだ方がいいって。俺らも一応心配してんだぜ？ ……班長？」

班長の反応がない。

目を開いているが、その目に光は映っていなかった。

……まさか、死んだ？



「…ん、何か聞こえたか？」

海の向こうを見てゲイルは言ったが後輩は何も聞こえなかったらしく、不思議な表情をした。

そしてラスが笑う。

「ドーセロンドンでまた、ラックスが班長に怒鳴ってんでしょ」

…まったくその通りなのだが。

「そつえば、先パイは班長と何か悪いことでもあったんですか？」

「え？」

シリウスの問いにゲイルは目を見開く。シリウスは言葉を続けた。

「あ、いや…班長は先パイよりも年上だというのに、先パイが『あいつ』呼ばわりするので…」

「あーソレ確かに俺も気になってた」

2人の興味ありげな視線を受けてゲイルは苦笑してしまう。

「いや…そこまで重い話じゃないよ。腹立つヤツだけど憎めないし、借りもたくさんあるからな。…あいつと出会ったのはさっきの話の後のことだ。それから警察の組織が崩壊するんだが…機会があれば今度話そう」

「そうですか…。まあ確かに結構長く外に出てましたから、そろそろ戻りましょうか」

「さーんせい！ …ん、あれ？先パイ、あの子が…」

ラスの言葉を聞いてゲイルとシリウスが振り向くと、病院からさっきの少年が出てきた。

「母さんは、どうだ？」

ラスは少しかがんでそう訪ねるが少年は首を横に振る。

「…まだ。でも、刑事さんたちは帰っていいよ。この街の人じゃないんでしょ？」

ゲイルは少年の言葉にうなづくことが出来ない。

「この街の人間じゃないからとか、そういうのは関係ない。君をここにひとりで置いてはおけないよ」

だがその優しげな言葉にも少年は首を横に振る。

「…大丈夫、ひとりじゃない。母さんがいる。まだ生きてる。…お願い、帰って」

…最後の一言が強く心に響き、刑事たちはそこを去る他なかった。

\*

病院から市街地へ向かう海沿いの坂を3人は下りる。

シリウスは少し視線を落として言った。

「きつとひとりにしてほしかったんでしょうね…」

その言葉にゲイルは納得の行かないような表情をする。

彼はあの少年をひとりにはしたくなかった。  
なぜなら…昔のあいつに少し似ていたから。

思い出すのは雨に打たれて震えていた黒髪の少年。  
ゲイルが今、追いつけているあの青年の過去の姿。

黙り続けているゲイルを心配したラスは声をかける。

「大丈夫っすよ、先パイ。あの子なら大丈夫です」

そしてもう一度、自分自身に言い聞かせるように彼は呟いた。

「  
…あの子なら、大丈夫」

\*

…同刻、某所にて。

「あの子たち、頑張ってるかなー…」

そう呟くのはロングコートに身をつつみ、ある廃墟の窓辺に座る赤髪  
の男。

その近くに立っていた全身黒尽くめの、フードで顔を隠した男は聞

き返す。

「誰のことだ？」

「んーと、昔にオレとゲイルが助けた少年2人のこと」

「ああ…昔の事故がどうとかって話のやつか」

「そうそう。…あいつらさー、今一緒に軍で働いてんの。すげえよな…昔は殺そうとしてきたやつと、仕事なんて」

「案外気が合ったんだろ。めったにない事でもない」

「まあな。…にしてもゲイルはどこにいんだろ。こっちは冬だけど、向こうは夏かもな」

ふと、黒尽くめの男は『ゲイル』という単語から何か思い出したらしく、うつむいていた顔を上げた。

「…ワイト、まじめに聞きたい事がある」

「?…なに」

「…この前ロンドンの本部で昔の写真を見たよ。班長やゲイルさんたちも少し若かった。…お前を除いては、だ」

「……」

「お前だけが、気味悪いくらい今と何ひとつとして姿が変わってなかつた。それはどういうことだ？お前…年をとってないんじゃないか？」

ヴィトはその言葉に軽く笑う。

「あーあ、ロシア（ロシア）はずいぶん寒いな。イチゴもってきたら凍るかも」

「…ごまかすな。ゲイルさんとパートナーを解消したのもそれと関係があるんだろ？」

黒尽くめの男が口調を強めるとヴィトは人差し指を口の前に示した。

「後々教えてやるよ。ただそれまでは、秘密」

\*

…ヴィトは内心苦笑していた。

だって簡単に言えるわけねーだろ。

∴ 自分は年をとることも、寿命が来ることもなくなった、なんて。

第一章 Part 2

Fin .

## 第一章 I Runaway . . . Part 2 (後書き)

暗い感じで今回も終わりました…。

ですがこの後のPart 3から一気にテンションが(筆者的に)あがります！

しかし…文字数によっては今回の章、三部構成のつもりが、まさかの四部構成になってしまうかもしれません…！

筆者の活動報告通りにできず、すみません！

次回もよろしくお願いします！

## 第一章 I Runaway . . . Part 3 (前書き)

いよいよ今回のサブタイトル「Runaway」という言葉がもつとも似合うPartへ突入！

( 時間軸はPart2からそのままつながっているので、冒頭から「？」と思った方は一度Part2の最後辺りへ戻って読んでいただくことをオススメします。 )

このPartでは色々な物事がめまぐるしく絡み合って、ひとつの大騒ぎを引き起こします。

筆者の願いとしては、『読者の皆さまがこのテンションについていてくれますように』…ただそれだけです。よろしくお願ひします！

## 第一章 I Runaway . . . Part 3

「おっ、君…すごいよ…！素質があるんじゃないか？これなら店にだせるよ…！」

その頃キョウゴは、

「…本当ですか？ありがとうございます」

…あっさりとバーテンダーの技術を獲得していた。

\*

夜の9時から開店したその店に来る客たちは、カウンターの向こうに立つ見たことがない東洋系の若い男に目が釘付けになっている。

スラッとした細身に端正な顔立ちは特に女性客に人気があった。

「ねえねえ、キミ新入りでしょ？名前なんてゆーの？」

「…キョウゴです」

「キョウゴ君かぁ〜！これからどっか行かない？お姉さんたちと遊ぼうよー」

女性客がカウンター席に身を乗り出して誘ってくるが、彼は困ったように微笑み、

「申し訳ありません、仕事なので…」

…と、軽く受け流す。すると店の奥の方からキョウゴの名を呼ぶ声が聞こえてきた。

先輩のバーテンダーの声だ。なにか問題でもあったのかもしれない。

「すみません、僕はこれで。どうぞごゆっくり」

そしてキョウゴは女性客に軽く頭を下げて声がしたほう…従業員の休憩所へ向かった。

扉を開けて「どうしましたか？」と言いながら部屋に入ったその瞬間。

ズイツ。

……。

キョウゴの目の前に不気味な茶色のカクテルが差し出された。

キョウゴ（…これは…一体…？）

彼の笑顔が引きつる。

するとカクテルを差し出した本人、ブタの絵が描かれた緑のバンダナ（センス無し）をつけた先輩バーテンダーのバントは熱意をこめた声で言った。

「……………飲め。」

「…は？」

「俺の新作カクテルなんだ、飲んでくれ…!!」

そのカクテルは濁った茶色でグラスの底には何か沈殿している。  
この一見『危険物』と言っても過言でないものを、飲め、と。何を  
言っているんだこいつ。

そんな彼に後ろから強烈なハリセンの一撃が。

…スパアアアッ!!!

「…いつって…!!!」

…叩いたのはこのマスターだ。

「…バント、それ却下な」(ニッコリ)

その笑顔は中年の渋さがある。『マスター』という言葉がいかにも

似合う容姿だ。ちなみにバントは20代後半である。

ハリセンで叩かれたバントは痛む頭を押さえてマスターのほうを向いた。

「なんでっ!?!?せつかく作ったのに!?!」

…これはラスよりさらに上に行く、目上に対するタメ口。  
社会に出ている方は、こんな真似はしない方が身のためだ。

「当たり前だろ!?!なんでこんな飲めるかさえ分からんものを新人に飲ませるんだ!?!」

「だってキョウゴ君は他の子と違って優しいもん!?!」

「お前な!?!キョウゴ君はお前に気を遣って…!」

マスターがバントに再び言い返してる最中。

ゴク。

2人の耳に聞こえる、音。

…『ゴク』？

2人は同時にキョウウゴを見る。

彼は無言になって数秒後、真顔で答えた。

「…トン骨の、味がしますね…」

マスター「飲んだの！！？」

その言葉に渋々うなづくキョウウゴ。  
類まれなるその勇気は、どこから来たのだろうか。

バントは嬉しそうに目を輝かせてキョウウゴの片手をがっしりと握り、

「お前：なかなかやるな！！俺が飲めなかったやつを飲むなんて、お前すごいよ！ありがとう…ありがとう！！」

その危険物を作った本人だというのに『なかなかやるな』という発

言。

というかそれ以前に、お前が先に飲めという話である。

彼に悪意はまったくないようだが…ある意味後輩イジメだ。

キョウゴの行動にあっけにとられていたマスターは、ふと何か思い出したことがあつたらしくバントに怒鳴る。

「そついえば思い出したぞ！！お前また保管庫のブタ小屋に新しいブタ連れてきたろ！！ブタ好きにもほどがある！！」

キョウゴは頭をかしげた。

キョウゴ（ブタ小屋…？ …バーなのに？）

…そう、このバーの酒のためにある保管庫にはブタ小屋があるのだ。

あまりにブタが好きだと言うバントにマスターがしょうがなく置いてやったもので、コンテナにブタのための空気穴がいくつか開いている。

ブタ小屋を置かせてくれるなんて、なんだかんだ言つてマスターも人が良い。

…これが後になって、この街でのキョウゴの利点になるとは誰も思わなかっただろう。

もちろん、本人も。

キョウゴはマスターとバントの言い合いを見ながら口を軽く手で押さえてうつむく。

キョウゴ（トン骨のカクテル……初めて飲んだ…）

今の彼には、『この後味の悪さを何で払拭しようか』という事が重大であるようだ。

\*

その頃、ある宿の一室。

「あー…疲れたー……」

ボスツとラスはふかふかのベッドにダイブする。  
昼間に全身を打撲したはずなのに、わざわざベッドにダイブするの

はどうだろうか。

シリウスは隣のベッドに腰掛ける。

「今日は想像以上に動いたからな……」

この任務の過酷さを2人は今日ようやく知ったのだった。

ラスは布団に顔をうずめてシリウスに同意する。

「ホントだよ、もー……。だって今日一日で俺ら2人も捕まえてるんだぜ？」

「……でも、その分人も助けた」

「まーな」

「……にしてもやっぱり……」

「ん？」

ラスが聞き返すとシリウスは微笑して言った。

「……先パイは、格好良いと思う」

ラスもつられて笑う。

「…ったりめえだろ。」

…戦闘力の高さはもちろんある。でもゲイルは同時にどんなリスクがあっても突発的に行動できる勇気も持っていた。

彼を見ていると自然に分かるが、見た目と違って案外穏やかで天然なところがある。それを知っているからこそ逆に後輩は彼の強さを実感させられたのかもしれない。

\*

…数時間後。

寝る用意をした2人はベッドに横たわりながらぼんやりと考え事をしていた。

ラスは呟く。

「先パイ、起きてるかな」

「さあな」

「昨日の夜の先パイの言葉…聞いてたろ」

「……………ああ」

昨夜、夜行列車に揺られて寝ていたときにゲイルが呟いた言葉。

『……………お前らは、死なないでくれよ』

もちろん、後輩には聞こえていた。

「あれ、どーいうイミかな。だって俺らの前に先パイと一緒にキヨウゴ君を追いかけてた人たちって……………」

「……………ああ、死んでない。任務から下ろされたただけだ。さっきの話に出てきた姉弟でもないだろうし、ナイフで襲ってきた少年の方もたぶん違うと思う。もっと……………先パイの身近な人じゃないか？」

「ヴェイトさんとか？」

「いや、それも無いと思う。俺たちがこの班に配属された時、ちらっと見たメンバー表にその名前があった気がする」

「んー… 『お前らは死なないでくれ』 って… 一体誰が先に死んだってんだよ…。 俺たち分らないコト多すぎだって！」

答えの見えない問いにラスはモヤモヤした様に片手を両目の上に置き、こぶしを握り締める。

「…」

シリウスは何か考え込んだ後にスツとベッドから立ち上がった。

その音を聞いたラスは横たわっていた状態から上半身だけを起こして聞く。

「…シリウス？」

「少し… 心配だ。先パイはきつと、抱え込む事が多いと思う。そういう人には少しの間だけでも誰かが傍に居た方が良い」

つまりゲイルのところへ行くのだ。

シリウスの言葉を聞いてラスも立ち上がった。

そして言う。

「俺も行く」

… 2人はうなずきあって部屋を出て行った。

\*

ゲイルは部屋の奥にある窓際で煙草を吸っていた。

そして近くの丸テーブルの上にある灰皿に煙草を押し付けて、そろそろ寝ようと考えたちようどその時。

コンコン。

控えめなノックが聞こえた。ゲイルが不思議に思ってドアを開けると後輩2人の姿がある。

「どうした？」

そう聞くと後輩は目を見合わせたあとどこか薄っぺらい笑みを見せた。

「いや…なんとなく来てみました」

さすがに『心配になって来てみました』とは言えない後輩が、少し無理のある理由を言う。

その言葉にゲイルは、

「…なんだそれ。ここに来ても何もないんだが…まあいい。入れよ」

優しい暖かみのある苦笑を見せて2人を部屋に招き入れたのだった。

\*

シリウスは丸テーブルの上に置いてある灰皿に目がいった。

そこにある吸った後の煙草の量はかなり多く、なんとなく彼の予想は当たっていたことをほのめかす。

刑事というものは職業柄、心に抱え込む事が多い。

ましてやこの班は普通の警察より危険な任務を課せられるから、自然とその量は多くなるだろう。

ラスはゲイルに薦められてテーブルの近くにあるイスに座り、前から疑問に思っていたことを聞いた。

「そついえば先パイ、ちょっと疑問だったんですけど…なんでキョウゴ君を追っているんですか？」

シリウスもその疑問があったため、言葉を添える。

「なんだか任務の雰囲気的に、キョウゴ君が悪いことをしたから追っている…という感じではありませんよね。それに、キョウゴ君は何故俺たちから逃げてるんですか？」

かなり根本的な質問ではあるが、それはしょうがない。  
なにせこのアウトすぎる班は大事な事もたいして告げないままこの2人を任務に送り込んだのだ。

…普通ならばありえないだろう。

だが2人の問いかけにゲイルはさらにありえない回答をした。

「……………、なんでだろうな」

……………。

…は？

2人は絶句した。

「まさか…先パイも、わかってないんですか…？」

「班長あいつがちゃんとした理由を言わなかったからな…」

…いや、実は少しは分かっているんだ。

と、そう思うゲイルは過去の班長の言葉を思い返した。

『…あの子を追いなさい、どこまでも。君が納得するまでここには戻らなくていい。どうせ行く先々でも事件はある。それを解決するだけでも良い経験になるだろう』

あまり見せない真剣な表情で言ったその言葉は確かに優しさがこめられていた。

その当時…心が限界にいたるほどズタズタになっていたゲイルを包みこむほどの、優しさが。

しかし、その『納得』とは何を示しているのかが未だわからない。しかもその口ぶりでは『納得』さえすれば戻ってきて良いと暗に示している。それならば何故、任務にする必要があったのか。

ゲイルも、彼なりにこのことについての疑問が多いようだ。

「…まあとりあえず『レスト』を追っていれば後々何かは起こるだろうから、それでいいと俺は思っている。…すまないな、後輩の前らとしては納得がいかないだろ」

その言葉に後輩2人は目を合わせる。

目的があいまいなのは正直驚いたが、今のところは嫌気のひとつもない。

「いえ…確かにキツイ任務だったのは今日痛感しましたけど…なあ、シリウス」

「ああ。…始まったばかりではありませんが昨日の感想と同様に結構楽しい任務だと思います」

「……そうか」

後輩の言葉にゲイルは安堵する。

なぜならこの後輩2人の前に彼と共にキョウゴを追っていた2人は、任務のあいまいな目的を知った後、もともと強かった不満をさらにつのらせたからだ。

なにしろ前の2人組は班長が選んだ人間ではなく、警察の組織が崩壊する以前の上層部の人間が、新設された『特殊捜査班』の任務の内容を偵察するために送り込んだ人物なのだ。無論彼らには最初からやる気がなかった。

…だからこそゲイルは今の後輩2人が素直に任務を楽しんでくれることを嬉しく思える。

任務に対して楽しみを感じるのを良くないと思う人間もいるだろうが、シリウスとラスには彼らなりの誠意がある。ならばそれでいいのだ。

しかし次の質問で少し暖まっていたゲイルのその思いも寂しいものに変わった。

「えっとじゃあ…どうしてキョウゴ君が逃げてるかもわからないんすか…？」

「……」

ゲイルの表情が固まり、やがて少しうつむく。

「……ああ、さっぱり分からない。何年か前までは、ロンドンに……確かに俺の近くに居たんだ」

後輩は驚く表情をした。ゲイルは今自分たちが追っている彼と、おそらく長い付き合いがあったという事実を知ったから。

ゲイルは表情に陰りを見せながらさらに言葉を続ける。

「あいつに何か不満があって出て行ったのか、それともただの好奇心か。あるいは俺が何かあいつに悪いことでもして嫌われたのか……それさえわからないんだ。あいつを追いかけ始めてからというもの、少し近い距離までいって一言二言話せば次の瞬間にはもう居ない……これの繰り返しだ。その機会さえ少ないから理由さえ聞けない」

「……。……でも、ひとつくらいはハッキリしてんじやないスカ」

「？」

ラスの言葉にゲイルは反応して顔をあげた。するとラスは柔らかく笑って答える。

「キョウゴ君は先パイのこと、嫌いじゃないです」

シリウスもうなずいた。

「嫌いであれば、昨日だってアマンダさんの生存を確認するようにわざわざお願いしないでしょーし、列車の窓にメッセージを残すこともしないでしょー」

「フーまーり、キョウゴ君にはきつと別の理由があるってことっスね」

「……………！」

今だけは、その言葉に安心していいだろうか。

ゲイルは心が暖かくなる気がして嬉しそうに微笑む。

この2人の言葉には説得力がある。

そして、人の心を支える力がある。

彼はこのとき、本当に良い後輩を持ったということを実感した。  
…後輩たちが彼に対してそう思ったのと同じように。

「そうかもしれないな。…ありがとう」

きっと彼は今夜、つらい思いを抱いて眠ることはないだろう。

\*

自室に帰ってきたラスとシリウスは再びベッドに体をゆだねた。

「シリウス…今度こそ寝ような」

「ああ。…俺の予感だと明日も忙しい気がする」

そして沈黙が訪れる。シリウスはストーンと眠りに落ちる…はずだった。

しかし。

「…あ！…！」

いきなり発せられたラスの声にビクッ！として目を開き、体を起こす。

「なんだ、ラス」

ラスはあわあわとした様子でシリウスを見た。

「俺…昼間の昼食代、10円少なく払っちゃったかも…！！いや、絶対少なかった！あそこレシートねえんだもん！今さら金額思い出した…！」

……。

シリウスは眠そうに目をこすって再び布団にもぐり、一言。

「…もう……忘れる。これ以上先パイを困らせるのも気がひける…。」

それは…良い判断だと言えるのだろうか。いや、社会的に間違ってる。

る。

そんなこんなで、いたるところがグダグダの刑事たちの長い一日は幕を閉じたのだった。

\* \* \*

翌日…セリスキュオレート2日目の朝。

宿での朝食を終えた刑事たちは早い時刻のうちにそこを出た。外の空気は早朝だからなのか澄んでいて、少し肌寒い気さえしたのでゲイルだけ上着として黒のジャケットを着ている。

彼らが今向かっているのは、昨日訪れた病院だ。

港街の朝は早く、民家の隙間から街の人々が店の開店準備をしている様子が見えた。

ラスはちよろちよろと動き回ってはその様子を感じした様なまなざしで見ている。

朝から元気ハツラツだ。昨日の全身の打撲はすんなりと回復したらしい。腕も包帯はしてるものの痛みはあまりないようだ。ゲイルはその様子を遠い目で見つめる。

「…ラス、お前はなんでそうも朝から活発なのかな」

「えー？だって面白いじゃないスカ！俺こーいうの見るの好きなんです」

「…まあ悪くはないが…」

…若さには、勝てない。

ゲイルは心のなかで淡い苦みを感じる。  
彼は少し遅く寝ると頭の回転が鈍くなるのだ。年のせいだとは決して思いたくはない。

そのまま数秒ラスを見た後に横のシリウスを見たら…彼はラスと違ってどんよりとしていた。

「…シリウス、大丈夫か？」

「…なかなか疲れってとれないものですよね…」

ゲイルの気遣った声の返答は、ぼんやりとした眩き。

その表情はどこか（妙に）虚ろで、『口から魂が半分抜け出ている』という表現がいちばんしっくりくる。これは昇天でもするんじゃないだろうか。

「お前本当に大丈夫か…？」

「メロンって何で『メロン』って言うんでしょうね…」

「……………（絶句）」

すでに会話が成立していない。

…さすがにこの刑事たち、雲行きが怪しくなってきた。元からだが。

\*

病院の中は昨夜のような湿った生ぬるいものでなく、新鮮な空気に満ちていた。おそらく窓を開けて風を通してしているのだろう。

刑事3人が昨日少年と共に待っていた病室へと入ると、規則的な電子音とともに眠る女性とその隣の丸イスに座ってうつむく少年の後ろ姿がある。

ゲイルが少年の顔をのぞきこむと、少年はこっくりこっくりと眠りに落ちそうなくさをした後ハツとして目を開けた。

その目は充血している。

「…寝てないのか」

ゲイルが静かに聞くと少年は目をこすりながら答えた。

「…うん」

声に眠気が混じっている。

「彼女の意識は？」

「まだ…戻ってない」

「そうか……」

重い沈黙が病室に生まれる。

するとシリウスが提案を持ちかけた。

「先パイ、一応医者に話を聞いてみたらどうです？」

ゲイルはその提案にうなずく。

「ああ…そうするか。お前らはここで待っていてくれ」

\*

ゲイルが出て行った後、シリウスがベッドに横たわる女性の脈を機械で見たりして、なにやら色々と診ていた。そして呟く。

「…一度は悪い状況を越えたようだな」

その言葉にラスと少年は顔をあげた。

「わかんのか？シリウス」

「なんとなく…だけど」

少年は少し安堵してため息をつく。

そして丸イスから立ち上がり、ラスが座っている長イスに座って背を壁に預けた。

ラスは隣に座った少年に微笑みかける。

「よかったな。ちょっとは安心したろ」

その言葉に少年はうつむいたままではあるが、

「…うん」

…顔に微笑を浮かばせてうなずいた。

\*

「視点：ゲイル」

「…そうですね、わかりました」

話を聞き終わって医者がいる部屋から出た俺が女性の病室に戻ると、少年は長イスの上でラスに寄りかかってすやすやと眠っていた。

ラスは俺の視線に気づいて苦笑を向けてくる。

「こいつ、安心したのか眠っちゃいました」

その言葉に俺は微笑を返した。

…いつの間に仲良くなったんだか。

まあとりあえずこいつが眠れる状態になったことは良い。

「先パイ、医者は何と言っていましたか？」

聞いてきたのはシリウスだ。

俺は医者から聞いたことを簡潔に後輩に伝えた。

「…まだ安心できないようだ。意識が戻ったとしても後遺症の恐れがある」

「…そうですね…」

やはり、あの時と同じことが繰り返されるんじゃないかと俺は心配してしまっ。

過去の傷は癒されないうままでいると恐怖心を抱かせてしまうものだ。

ラスは少年の頭をぽんぽんと優しくなでた。

「でも意識さえ戻れば、きっと…こいつも少しは安心できるんでしょうね」

\*\*\*

「視点・筆者」

いつの間にか太陽は空高くのぼり、午後の暖かな日差しが病室を包んだ頃。

「…ん」

…少年は目を覚ました。周りに刑事たちの姿はない。

少し暖かさを感じて目を眠そうにこすりながら辺りを見渡すと、この暖かさは日の光だけでないことに遅れて気づく。

少年の体には黒髪の刑事が着ていた黒のジャケットがかけられていたのだ。

そして傍らの丸イスの上には食事とメモがおかれていた。そのメモを見て少年は自然と笑顔になる。

そこにはザツな字で『たくさん食べて元気になれ!!』と書かれていた。おそらくあの金髪の刑事の字だ。

「ハハツ…なんだコレ。」

その字のあまりのザツさに笑いがこみ上げてくる。へただな。でも、優しい。

あと、この食事はメガネをかけた刑事が用意してくれたんだろう。

さつき食事のことを話していた気がする。

…そして少年はメモをもう一度読み直し、大事そうに自分のカバンにしまった。

\*

その頃刑事たちはセリスキュオレートを東西にのびる大通りを歩いていた。

昨日の事故が思い浮かぶが…いつまでもそのことを引きずっていてしょうがないと考え、あまり思い出さないようにしている。

ラスは街のマップを開いてながめる。

「どつやらこの先に『ちゅうつうり中通り』があるみたいっすね」

その言葉にゲイルは首をかしげた。

「…『中通り』?」

「はい。大通りの『大』にちなんで『中』通り。そのほかの小さな路地は『小』通りって言うらしいですよー？」

シリウスは少し呆れた表情を見せる。

「そんな単純な…」

「いーんじゃねーの？わかりやすいし。…あ、それで。中通りってのはセリスキュオレットを南北にのびていて食べ物とか武器とか、とにかく色々なものを露店で出してるみたいっすね。で、その通りを下へおりていけば海の近くに出て、港があります」

「露店か…。じゃあその中通りとやらに行ってみるか」

「そうですね」

\*

少し大通りを道なりに進んでいくとすぐに中通りに入る。

「この通りか…。ひとまず坂を上へのぼってみよう」

ゲイルの言葉に後輩2人が同意した後、ラスが「あ…」と声を漏らした。

ゲイル・シリウス 「「？」」

ラスは道の右側に何かを見つけたらしく、ゲイルとシリウスがその方を見るとそこにはスケボーの練習をしている少年がいた。

その少年の下方：大通りに近いところにはベニヤ板で作ったらしいジャンプ台があり、見たところこの少年はジャンプ技の練習をしているようだった。

ゲイルはそれを困ったような表情で見て呟く。

「少し…危険だな。失敗したら大通りを走る車にひかれる可能性がある」

シリウスもそれにならずくと、ラスがその少年の方に向かっていった。

このときゲイルとシリウスは、ラスが少年に注意するのだろうと思っていた。

…が、しかし。

「なあ、そのスケボー俺に貸してくれよ」

スケボー少年「? : 別にいいけど。あつ壊すなよ!？」

「だーいじよぶだーいじよぶ。壊さねえって」

この男はゲイルとシリウスの考えを大いに裏切った。

「よいしょつと!」

少年に笑いかけたラスが掛け声をかけてスケボーに乗り、巧みな技トリックを始めたのだ。

周りの人々「!!!!!!」

オーリーというジャンプや、ベニヤ板を使ったブランドフェイク、さらにはキックフリップ、ステア：など、多種多様な技を連続して繰り出される様子にゲイルとシリウスはもちろん、周りの人々まで驚いた。

スケボーを貸した少年は口をあんぐりと開けている。あごが外れな

いかが心配だ。

一方ラスは周りの視線に目もくれず子どものようにしゃぐ。

いや、『子どものように』ではない。…ガキそのものだ。

「おお〜これこれ、この感じだ！…やっぱりいいよなあスケボーは！  
」！

そして最後はスケボーを足で宙に浮かせてキャッチ。  
ラスの周りからは自然と拍手が鳴り響いた。

その様子を見てゲイルとシリウスは呆然と呟く。

「あいつは…『子どもが憧れるスーパー大道芸人』なのか…？」（  
表現がおかしい）

「……そんな感じのものなんじゃないですかね」（もはやゲイル  
の言葉にツッコミはしない）

ラスは周りの拍手に気分を良くしながら少年にスケボーを返した。  
すると少年は興奮したようにラスの目をじっと見て気合のこもった  
一言。

「でっ…弟子にしてくださいっ!!」

…弟子入り志願。

そんな少年の言葉にラスは…まあ言わなくてももだいたいい予想はつくだろう。

\*

しばらくしてゲイル達のところに戻ってきたラスの頭をシリウスがパコンツと叩いた。

「つつて!!!なんだよシリウス!!!」

「バカか、お前は。あの子余計に練習熱心になっただろうが。事故に巻き込まれたらどうする」

「……あ」

…注意を忘れるなという話である。

そしてラスは弟子に向かって声をかけた。

「おい、弟子！練習は簡単なものから始める！ジャンプ技はそれからだ、気をつけるよ！！」

その言葉に弟子は嬉しそうにうなずいて手を振り返す。

「任せてください、兄貴！！」

会話を聞いていたゲイルが、少年の『兄貴』という単語からぼんやりとラックスのことを思い出したのは言つまでもない。

\*\*\*

一方、キョウゴはといて。

\*

「視点：キヨウゴ」

俺は昨夜働いたバーに来ていて、マスターに挨拶をしていた。  
マスターはさびしそうに笑う。

「本当に一日きりなんだね。君は客からも評判が良かったから、もつたいないよ」

名残惜しいようなその言葉に俺も笑みを返した。

「ありがとうございます。ですが、やっぱりここには居られません。  
僕は旅人まがいのことをしているので…」

「そうか…。ま、それならしょうがないよな。元気でやれよ」

「はい。…では僕はこれで」

マスターは良い人だった。話もすんなりと聞き入れてくれたし。

俺はマスターが居た休憩室を出て、裏口へと向かおうとした…その時。

カランカラン…

店の入り口のドアについた鐘の音を聞いた。

誰だろう、業者なら裏口から入ってくるはずなのに。…客か？

だとしたら、まだ開店時間ではないと伝えなければ。

もうここを辞めた身ではあるけれど、一応働いていたんだし。

俺はカウンターの方へ向かう。

すると店の奥に一人の見知らぬ男がいた。

「…？ すみません、まだ開店時間じゃないんですが…」

「バーにいる東洋系の若い男…お前か」

「え？」

男はギロリとにらみつけてくる。

「…よくも俺の女を奪いやがって…」

……は？

「…えっ？いや、あの…僕は誰も奪ってないはずなんですが…」

「とぼけんな！…昨日あいつは夜遅く帰ってきた拳句にお前のことばかり話してた…！」

そんなことを言われても…。それに『あいつ』って誰…？

俺は何を言うべきなのか分からなくて押し黙った。

するじ。

「…イラつくんだよ。その顔殴らせるや…！」

男がこっちに向かって走ってくる。

「…！…！」

俺は倉庫の方へ走り出した。

…どうして俺はこんな面倒なことに巻き込まれるのか、と内心ため息をつきたくなる。

そもそも『巻き込まれる』じゃなくて俺が引き起こしてるのかな…。

でも俺は誰かをこの人から奪った心当たりがない。

とりあえず、そんなことよりも。

この店内で大事おおいじを引き起こせばマスターやバントさん、その他の店員さんに迷惑をかけてしまう。

…ここはひとつ、逃げるが賢明。

酒などが保管されている倉庫に入る。この先が裏口だ。

かなり広い店内だから簡単に逃げられると思ったけど、あの人は足が速いらしくて俺が捕まえられるのも時間の問題かもしれない。

…やむを得ない。

最小限の『力』でこの状況を有利に進めるには……これだ。

\*\*\*

それは昨夜の閉店時間のときにさかのぼる。

ブヒーッブヒーッ!!

「バントさん…これ…」

「おうよ、俺が集めてきたブタ達だ!」

…俺は倉庫にあるコンテナの中でブタに囲まれていた。

バントさんはこれ以上はない笑顔で笑う。

「かわいいーだろおー??」

「え…あ、はい…」

そう言っつてバシバシ俺の背中を叩いてきた。  
悪気は無いのだろうけど…痛い。

すると俺の様子を察して怒ったのはマスター…ではなく…

「ブヒーンッ！…！」

…ブタさん。

そして一斉に彼らはバントさんに体当たりを始めた。  
俺はどうしていいのか分からないから少し離れているとバントさん  
は、

「なっ…なんだとお！？おい新入り！お前こいつらに気に入られて  
んなあ！！！」

…なぜか満面の笑み。

体当たりされているのに笑顔を見せるなんて…さすがは先輩さん。

だから俺は笑みを返した。笑みと言っても苦笑だが。

「えっと…良かった…です」

\*\*\*

…といつとで。

俺は倉庫を走りながら隅にあるコンテナの方へ片手をかざした。

その瞬間。

青い光がコンテナを包み…

カギが開けられた。

開いたドアからはブタの集団が出てきて、俺の後ろを追っていた男は彼らに囲まれて。

「なんだ！！？こいつら体当たりしてきやがる！！  
待て、テメエ！！」

あっ

…それでもなお、追いかけてようとしてくる。

なので俺は、

追われているのに『待て』と言われて待つバカがどこにいる…

そう考えて一足先に裏口から出て行った。

\*

「視点・筆者」

キョウゴが裏口から出た後、男もブタと共に遅れて出てきて追ってくる。なかなかしぶとい。

そして走りながらキョウゴは小声で呟く。

「役目が終わったら元のコンテナの中に戻ってくださいね。…頼みますよ、ブタさん」

直後、ブタの集団が青い光に包まれた。彼らが目の前の男を追う勢いが強まる。

そんなこんなで、キヨウゴ、男、ブタ（の集団）というひとつの小さな逃走劇が始まった。

…と、思ったらもうひとつ。

バント「あれっ？えっ…えええっ！！？なんでブタ外あいつらに出てんだ！  
！？」

さらにそのブタを追いかける男がひとり。（偶然この光景を見つけたのだ。）

…こうしておかしな逃走劇に新たな参加者が加わった。

一方ゲイルたちは。

「結構上の方に来ましたねー！もうセリスキュオレート上方の森が見えてきましたよ！！」

「長かったな、ここまで来るのにも」

「坂の傾斜がキツイから余計ですよ、きっと」

ようやく上りきった中通りの上にある、森へつながる階段に腰を下ろした。

坂をのぼっている間はジリジリと夏の日差しが容赦なく彼らを苦しめていたが、森の木々の影に入ったためになんとか乗り切った。海から吹いてくる爽やかな潮風が彼らのほてりを静めていく。

後輩2人と共にゲイルはワイシャツの腕をまくる。これで少しは良い。

ラスはうっすら汗ばんだワイシャツをパタパタと風を入れるように

扇いで海を眺め、呟いた。

「思い出すなあ… ロンドンにいた頃、警察学校の様子を見にきた班長とそのメンバーと一緒にやった『サウナ20時間耐久ゲーム』」

シリウスもうなずく。

「確かあれって班長の寒がりから始まったんだよな。」

ゲイルは呆れた表情をしてため息をついた。

「お前ら（ってか班長<sup>あいつ</sup>）は何をやってるんだ…。下手すりゃ死ぬぞ…？」

…その前に、寒がりだからといって何故それを行ったのかがまったく意味不明である。

『アホか』と思ったあなたも『よっしゃ、やってやる』と思ったそのあなたも、…どうか真似はしないでほしい。

ラスはシリウスの肩をつついてから坂を指差した。

「なあ、俺達がさつき居た大通りってどこらへんだと思う？」

その問いにシリウスは少し考えてから坂の一点を指差す。

「…あの辺、かな」

「え？あのもうひとつ手前の道が広がった部分じゃねえの？」

「あそこは違う。街の広場だ。さつき通ってきただろ？ …だからその向こうの、アレ」

「うつわ、あんな遠くかよ！！しかもこの坂、大通りの向こうまで結構続いてんじゃない？！体力持つかあゝ！？」

「先パイ、やはり大通りの向こう側へは下りないほうが良いんじゃないでしょうか。さすがにこの坂は長すぎると思っんですが…」

「…そうだな。店を見ながらそつちまで下りていたら日が暮れる。やめとこう」

会話が終わって、沈黙。

少し涼んだ後、ゲイルはゆっくりと立ち上がる。

「よし、じゃあここから自由行動にするか。露店はたくさんあるから、好きなところを見て来い。ただし、はぐれたら面倒だからこの通りの中には居るよ」

「了解！」

そして3人はバラバラな方向へ歩いていった。

\*

…ここで、3人はそれぞれどこへ向かったのかを坂の上方から順に見てみよう。

\*

最初はラスだ。

(自由行動かあ…どこ行こうかな…)

ラスは特に見たい店も思いつかずに少し歩いて足を止めた。

(先パイとシリウスは自由行動を決めたらすぐに坂をおりてっただし…何見ようかな…)

ふと彼の左側に野菜の露店が見えた。

「…お！！」

(みずみずしいトマトにキャベツに、なんか色々とおいしそうじゃあん？俺野菜好きだし、ちょっと見てみつか！！)

外見に似合わず料理が好きな彼は、八百屋に向かったようだ。

\*

続いてラスより少し下方に居るのはシリウス。

彼は武器を見に来ていた。

その品物を見る目は他の客とは明らかに違う。

（確かに価格は安い…。でも性能や質はよくないな。これならロンドンにある闇の露天商の方が…）（以下略）

そして売られているナイフを手に取り、再び品定めを始める。

ロンドンにいた頃は街中の武器屋を把握していたという彼の目に、狂いはない。

とはいえ…つくづく怪しい趣味を持つ男である。

\*

シリウスがいる所からいくらか離れた下方の店にいるのはゲイルだ。

彼は旅に必要なものを見ている。マップなどは次の街に移動する際に必要なので、すでに購入していた。

このセリスキュオレートでは物価が安いのが特徴なのか、なかなか

旅人には優しい街である。

「……！！このライトの安さ……そして質……ロンドンのタイムバーゲンでもやらない！掘り出し物か！！？」

この反応は……近所の奥さまレベルだ。ってかライトにタイムバーゲンなんてあるのだろうか。

一見かつこよく見えるこの男を残念な状態にしているのは、まさにこつこつ一面である。

筆者としてはこれ以上言うことがないので、ラスの方へ視点に移そう。

\*

「視点……ラス」

あのトマト本当につまそうだよなー……。でもあのキュウリもなかなか

か……。こういつの買ったたら先パイやシリウス、喜んでくれんのかなあ……。

やっぱり誰かを言ばせることが出来るなら、俺はとことん真剣になるんだよね。

そんな俺の熱意が届いたのか、野菜売りのばあちゃんは優しく声をかけてきた。

「お兄ちゃん、何か探しているのかい？」

「あ、いえ。どれもつまそうだなーって思って」

これは本音。マジでつまそう。

野菜売りのばあちゃんは俺の言葉を聞いて嬉しそうに笑った。

「……フフッ、そうでしょう。ほれ、ひとつ食べてくかい？」

そしてトマトをひとつ俺にさしだす。

「あーいや、俺買わないかもしれないし……」

「いいんだよ。こういつ若い子が野菜を見ることもすっかり無くな

ってしまったし…あなたは孫に似てるからね、あたしからの気持ちだよ」

…マジで！もらっていいの！！？

俺はパアツと笑顔になった。

「ばあちゃん良い人！！ありがとな！！」

そして思いつきトマトにかじりつき、一気に全部食べる。

これは俺の見込んだとおり、かなりうまい！！

「ばあちゃん、このトマトかなりおいしい！最高！！」

「そうかい、そりゃ良かった」

ばあちゃん的笑容がなぜか心にしみる。同時に故郷の田舎の景色が脳裏に浮かんだ。

なんたるな、これ。今会ったばかりの人なのに。

やっぱり笑顔っていいよなあ…。

そんな風にぼんやりと思っていた、その時。

「…テメエか！…！」

路上に響く荒々しい声。

途端にある予感がした。

…相方の危険を知らせる、嫌な予感。

俺はすぐさま坂の下方を見る。

すると案の定シリウスが2人の男に胸倉を掴まれて何か言われていた。

「…シリウス!!」

\*

「視点：シリウス」

突然胸倉を掴まれた俺は目の前の2人の男を見据えた。

「…一体なんでしょう?」

男A「お前だよなあ?昨日大通りでトラックの男を捕まえたのは」

男B「あれ俺らの大事な弟分なんだわ。返してくんねえ?」

ああ…昨日のあれか。

ってかわざわざ逮捕した犯人をかえす警察っているか?

俺は視線を男達からそらして素っ気無く答えた。

「たぶん無理ですねぇ……」

\*

「視点：筆者」

ラスがシリウスを助けに行こうとしたとき、あるラッキーアイテムが目映る。

283

それは荷物を運ぶときに使用するキャスター付きの大きな台車だ。たぶん学校や職場でもおなじみだろう。

これは、野菜売りの老女が野菜を運ぶために使ったものだ。

しかし大きさは標準の物のおそらく3〜4倍はある。

…この老女、かなりの腕力をお持ちのようだ。

…これしかない。

ラスの直感が告げた。

「ばあちゃん！…ちょっとコレ貸して！…！」

「？ …別にいいけどねえ」

老女の許可を得てラスはその台車をひつつかみ、坂の頂上へのぼって大声で叫ぶ。

「そこ歩いてる人たち、ちょっとよけて！…！」

そして彼はこの台車を通常で使う時とは反対に取っ手部分を持って走り出し…キックボードのようにその台車に乗った。

台車は坂の傾斜に任せて一気に駆け下りていく。

\*

シリウスの言葉に怒りが頂点に達した男達が彼に殴りかかろうとしたその時。

「……………どいたどいたあぁっつ！……！！！」

シリウスの耳に聞こえたのは、なじみある声とそれに続く正体不明のゴロゴロと響く音。

「……ラス？」

男A・男B「……はぁ？」

シリウスは目の前に男達がいるため何が起こってるかさっぱり分からなかったが、男2人が背後を振り向き血相を変えて逃げ出した瞬間、見えた。

……キャスター付きの台車で坂を滑走する、自分の相方。

しかもこっちに向かってくる。

「!!!!!!?」

このとき彼の頭の中に雷がとどろくほどの衝撃が走ったのは言うまでもない。

『相方が、坂を、台車で滑走』…なんて、意味が分からないのは当然だ。

『…ってかなんで普通に助けなくてわざわざ台車に?』と思った方が居れば、それは良い質問だ。

…残念だが筆者にも分からない。これはとんだ思い付きなので。

ラスはシリウスに向かって片手を差し出して叫ぶ。

「何があつたかは分からんけど、とにかく乗れええつつ!!!!!!」

シリウスは数秒の間ポカンとした後、ラスの突拍子も無い考えに「負けました」とでも言うように笑った。

自分に向かってさし伸ばされたその手を掴まないなんてこと、あるはずがない。

シリウスは台車と並ぶように走り出し、

…パシッ！！

やがて2人の手がぶつかる音。

ラスがグッとシリウスを引き寄せて、彼は台車に乗ることに成功した。

「…ナイスタイミング」

「…だろ？」

シリウスの言葉にラスが勝ち誇ったような笑みを向ける。

すると滑走する台車の後方から声が響いた。

男A「待てえっ!!」(必死)

男B「追いかけんぞ!!」(必死)

その言葉に後ろを同時に振り返ったラスとシリウスは「げっ…」と顔が引きつる。

「ちよっ…ちよっ」とシリウス!なんか後ろから来てんだけど!!」

「……チッ」(舌打ち)

「これどうなんのおおっ!!!??」

…ラスの叫びを残して、ここに新たな逃走劇が始まった。

\*

そしてそんなことさえ知らないゲイルは。

「…ん、これもなかなかいいじゃないか」

依然変わらず品物を物色中。

その時近くで男の声が聞こえた。

「待て、どろぼう!!」

「!!!?!」

ゲイルはその方を見る。

店主は同じく声の方を見て、またかと言うような反応。

「あー、また出たか。スリの常習犯。最近はここもずいぶん物騒になったねえ」

…呑気な一言である。

その言葉を聞いているのか聞いてないのか、ゲイルはすぐさま走り出

した。

犯人である2人組の男は走るにしては速度が速い。

…いや、走ってない。

正確には靴のかかどにつけたローラーで走っているようだ。  
ローラースケートもどきである。

ゲイルはそれを見て目を見開いた。

「靴にローラーだと!？」

…新製品か!?!」

…違います。

無論、いくらゲイルが本気で走っても追いつけない。

あっという間に犯人との距離はどんどん開いていく。

ゲイルは苦い顔をして舌打ちをした。

…その時。

ゴロゴロゴロゴロゴロッ…

「あ、先パーイー!!!!」

背後から急速に近づく後輩の声と、よく分からないゴロゴロとした音。

そして彼はその方を振り返り、

「……………」

…啞然。

どういうわけかラスとシリウスが台車に乗って坂を降下してくる。あまりの衝撃に走っていた体がピタッと止まった。

「なに突っ立ってんすか！ ほら、早く早く！！」

「とりあえず、乗ってきませんか？」

今度はシリウスが車にでも乗っている様な口調で（いやある意味車なのだが）、ゲイルに手をさしのべる。

ゲイルは、なんでこんな状況に？と疑問を感じるが、とりあえずそれを柵に上げて駆ける台車と並走し…

…パシッ！！

再び、手のぶつかる音。

シリウスの手に引つ張られてゲイルも台車に飛び乗った。

台車の上での立ち位置は前に後輩2人、後ろにゲイルだ。

ゲイルが前の2人の間から前方を見ると、ローラースケートの2人組との距離が縮まっていくのがわかった。

そして。

「…あれ？」

ふと目が移った後方には必死にこの台車を追いかけている男が2人いることに気づく。

もちろんゲイルは後方の男がなぜこの台車を追いかけているかは分からない。

そんな様子のゲイルにシリウスはサラツとした笑顔を向けて言った。

「…ま、色々あるんです」

こいつ、割と恐ろしい男である。

同時にラスは顔に「？」マークを浮かばせた。

「あれー？なんか前にローラースケートっぽいのを履いたやつらがいる…」

そんな様子のラスに今度はゲイルがサラツとした笑顔を向けて言った。

「…ま、色々あるんだ」

この男も、シリウスと同類である。

というか、この先輩と後輩たちはお互いの状況を理解するべきだろう。なぜ、今言わない。

とりあえず、これでまたおかしな逃走劇に新たな参加者が加わったのだった。

…路地を走るキヨウゴ。

これまで結構な距離を走っているが、

「…待てええっ!!」

追ってくる男はまだあきらめず、

「ブヒーッ!!」

もちろんブタも健在で、

「ちょっと…お前らホントどっ行くのぉっ!!…?」

\*

…この男…バントも相変わらずである。

キョウゴはそれなりに長距離を走ることが得意なのだが、さすがに息が上がってきた。

このまま行けば出店でみせが多い通りに出る。

キョウゴは意を決した。

…一いちか八はちか、賭けてみるか。と。

\*

坂を滑走する刑事3人。

「もー…これいつまで続くんだ？」

「まだ気を抜くな、ラス。あいつらはまだ追ってきてる」

「前の2人組に追いついてないしな…」

…話が微妙にかみ合っていないことといい加減気づけという話である。

台車はもう少しで街の広場に入る。

ゲイルはさっき坂の頂上でラスが指差していたのを思い出し、もうあんなところまで来たのか…と思っていた、その時。

「  
ツ！！！！」

彼の中で衝動的な感覚が湧き上がる。

「…先パイ？」

その様子に後輩は動揺。しかしゲイルはそんな後輩に目もくれずに辺りを見回して、つぶやく。

「いる…レストが…近くに<sup>あじ</sup>いる…！」

「「え!!?」」

そして、その時が来た。

突然、広場につながる横の路地から走って現れたのは、ゲイルが追っているあの青年。

この台車の左斜め前方である。

そしてその後ろを追うのはどういうわけか、見知らぬ男に、ブタの集団に、変なバンダナをした男。

ゲイルと青年の視線が交わり、

「…！」

2人は同時に目を見開く。

…青年の口元がわずかに動いた。

『…刑事さん』と、言った気がする。

あいつ、追われているのか？と考えている間に、ゲイルの手は無意識に青年の方へと差し出されていた。

そして叫ぶ。

「…………レスト……！」

その言葉に青年はハッとして、

「…………！」

さし伸ばされた手の意味を理解したらしく、台車と呼応するように走り出して。

…パシッ!!

ゲイルは思いつきり彼の手を引いた。

…それは互いが、追う側と追われる側という立場を超えた行動。

青年…キョウゴはゲイルによって引き寄せられて台車へと跳び、ゲイルはしっかりと、飛び込んできたキョウゴの体を抱きとめた。

\*

ようやく足場が安定したキョウゴがそっとゲイルを見上げると、思った以上に彼の顔が近くにあって、

「……………!!」

…すぐに離れた。どことなく顔が赤い気がする。

その様子にゲイルが不思議そうな顔を見せ、キョウゴはまじまじとその表情を見つめて口を開いた。

「……………刑事さん……………」

久々にその声を聞いてゲイルは柔らかな笑みを見せる。

「レスト……………いや、今は『キョウゴ』か。……………久しぶりだな」

「……………はい」

少し戸惑いを含んだぎこちない会話と、それでもなぜか暖かいその雰囲気は。

……………台車の背後で坂の上方からずっと追ってきた男2人と、キョウゴを追ってきた男、ブタの集団、ブタ好きなバーテンダーが衝突してもみくちやになったことでぶち壊された。

……。 (台車の上の4人、背後を見て沈黙)

ラスは一度片手を額に当てる。

「ちよっ……待て。 ……待て待て待て待て!!君がキョウゴ君!?

…あ、いや。それは後。とりあえず聞きたいコトその1!

…これどーいう状況っ!!?」 なに、あのブタ!

シリウスはその問いに対して考えるポーズをとりながら口を開いた。

302

「…まず俺が、昨日捕まったトラックの運転手の仲間2人に絡まれてて、そこからお前の機転で逃げ出すとそいつらが追ってきた。…で、次。先パイが…」

「スリ常習犯だ。 ……追いかけてる」

「…スリ犯を追いかけてて、キョウゴ君が、」

「少し訳ありな見知らぬ人に追いかけられてて、その後を追うブタ

さんに、さらにその後を追う一時的な職場の先パイさん…ですね」

「…に追いかけてられて、それぞれの理由から、お前が乗ってきた台車で坂の下方へ移動中。」

「うわぁ…何、この状況…」

シリウスの説明に顔を引きたらせたら、後ろからキョウゴが声をかける。

「あの…」

「なした？キョウゴ君」

「後ろの人たち…なぜかさっきよりも近づいてきてます」

……。

刑事3人がゆっくりと後方を見ると、確かに後ろの集団はさっきよりも迫ってきていた。

というより、彼らの熱気が強くなってる。

その様子をようやく理解したラスは叫んだ。

「……つつつそおお！！！！??？」

シリウスは呆然。

「……嘘だろ……？」

ゲイルはもはや、

「……」

……絶句。

2つの逃走劇がひとつになった時……それは大騒ぎを引き起こした。

\*

彼らの逃走劇の障害物は、まだあった。

口を開いたのはシリウスだ。

「…あ」

「今度はなにっ！…!?!」

「…聞きたい事その2。 …このまま行くと車の通りが多い大通りに出るが…」

……。

ゲイル「…忘れてた」(片手で顔を覆う)

キョウゴ「車にぶつかって大破…ありえますね」(冷静。)

ここで、ぶつ飛んだ発想力をお持ちのラスさんの頭にピコンツとひらめきのサインがあがった。

「……ひらめいた!!」

そしてすぐに大声を出す。

「おーい、俺の愛弟子!! ……ベニヤ貸せええつつ

!!……」

その声を聞きつけたスケボー少年はすぐ反応し…台車に乗ってゴロ

ゴロとでかい音を出しながら後ろに大群(?)を引き連れたラスたちを見て、口をあぐりと開けた後。

「……………りよっ…了解っ!!」

ラスの考えが通じたらしく、先ほどのベニヤ板を台車の進行方向に引っ張り出した。

それは大通りの手前だ。

これが何を意味しているか、皆さんはそろそろお気づきであるだろう。

キョウゴもその意味を理解したらしく、

「…なるほど。ジャンプ台ですね」

その横でゲイルは、

「……………」

…どことなく嫌な予感。

ラスは難色を見せるゲイルの表情に首をかしげた。

「…あれ？先パイ、どーしました？」

こいつ、意味がわかっていないようだ。

シリウスはその様子にため息をつく。

「ラス…お前昨日の先パイの話思い出せ。ベニヤで飛んだ後、俺らはどうなる？」

……。

このとき台車上の全員の頭に浮かんだ言葉は、

『着地と同時に、大破』。

ラスはようやく気づき、

「…あ」

…の一言。もうダメだ、こいつ。

ゲイルは深いため息をついた。

「…まさか二度目が来るとはな…」

さすがは経験者。もう恐怖が無いのか、その代わりに呆れている。

すでにジャンプ台が近い。前に行くローラースケートの2人組は身軽だからか車を上手くかわして大通りを越えたようだ。

…これでジャンプしたときにどこかのボタンを押せば『下方強力エアバッグ』が…なんてことも無論あるはずがなく。

アンマンがやってきて助けってくれるということもあるはずがなく。

事態は最悪の結末へ向かうと思われた。

…しかし彼らは忘れていたのだ。

「…皆さん、この取っ手にしっかり掴まっていますか？」

キョウゴが持つあの『力』を。

彼の言葉に刑事たちはハツとして取っ手に掴まり、やがてゲイルは苦笑を見せた。

…何をおびえていたんだ。今はあの時とは違う。…キョウゴが居るのだ。

恐れることなど、何も無い。

そして台車は、

…ガッ!!!

ベニヤ板を利用して空へ飛んだ。

同時に綺麗な青い光が台車と彼らを包んで。

シリウス「……!?!」

ラス「なっ…なんだなんだあっ!!!?」

…台車は地面に落ちずに空中を移動し始めた。

彼らの眼下には、驚いて腰を抜かす人々とローラースケートの2人組が見える。

そこでゲイルはハツとして、後輩2人に呼びかけた。

「ラス、シリウス!このまま行けばスリ常習犯より先回りできる!

どこかの細い路地に逃げ込まれる前に捕まえてくれ!」

「了解!」

そうして台車がゆっくりと地上に降りる寸前に後輩2人は飛び降りて、逮捕しに向かった。

…さあここからが最後の難関。

台車は地上に降りたものの止まることはできずに再び滑走している。これを果たしてどう止めようか。

(先ほど台車の後ろに居た集団はどうかなるだろうと考えているため、さほど気にしてはいない。)

「…刑事さん、このまま行けば坂の終わりにある欄干にぶつかって海に落ちます。ここは俺に任せて…」

「…いや、『力』は使わない」

ゲイルはキョウゴの『力』をあまり使わせたくないのだ。

なぜなら…『力』を使った分、彼の体力が奪われることを知っているから。

キョウゴはゲイルのその優しさに気づいている。

だが、あえて気づかないフリをした。

「……別に、平気です」

「こんなときに嘘ついてんじゃねえよ、まったく。　ってことで、しっかり取っそれ手に掴まってるよ」

「…は？」　どういふこと…？」

ゲイルの頭の中にはある考えがあった。

成功するかは分からないが…でも、キョウゴだけは何かあっても守ってやる。

ゲイルは片手で取っ手をしっかり握り、もう片方の腕でしっかりとキョウゴのからだを固定した。

「えっ…刑事さん、一体何を…」

「っ！…！」

その瞬間、台車が傾いて視界が横に回る。

ゲイル「…くっ……！」

ゲイルは、台車の片側に重心をかけることでブレーキをかけようとしたのだ。

台車は3回ほどぐるりと大きく回って、見事体勢を崩すことなく欄干の手前で停止した。

少しの沈黙。

そしてゲイルとキョウゴが安堵の息をはいた瞬間、

グラッ…

キョウゴの体がぐらついて、ゲイルがすぐに支える。

「！！ おい、大丈夫か！？」

キョウゴは弱々しく苦笑してささやいた。

「あなたはいつも…突拍子もないことをする…」

そうして彼は一気に疲れが出たらしく…一度、意識を手放したのだ。  
った。

\*\*\*

スリ常習犯とシリウスを追ってきた男を捕まえて（この2人も犯罪を犯していた。）、キョウゴを追いかけていた男から事情を聞いてなだめて…台車を坂の一番上の八百屋に返したりしているうちに、夕暮れ時になっていた。

（ブタの集団とそれを追っていた男はいつの間にかいなくなっていた。おそらくどこかに帰ったと思われる）

そして今、ラスとシリウスは自分達の大騒ぎのせいで被害者が居な

かったかどうかを聞きまわっている。

「…ん………」

キョウゴが目を覚ますと、彼はぼんやりと自分が海の近くのベンチで寝かせられていたことに気づいた。

体を起こそうとすると未だに視界がぐらつく。

「……………」

すると、そつと頭に大きな手が触れた。

「…大丈夫か？」

…優しくかけられた、声。

「…刑事さん………？」

見上げると優しげなゲイルの苦笑があった。

「さつきは助けてくれてありがとな。 …でも無理はするな。 もう少し休め」

キョウゴはすぐに視線をはずして、頭に置かれたゲイルの手をそっと離す。

「…平気です。あの…俺の方こそ、さつきはありがとございまして」

そう言う彼の声は少し小さかった。

…彼はゲイルの優しい笑顔に弱いのだ。

その暖かい瞳で見つめられると、どうしようもなくなってしまっ

でも彼は…その気持ちをあえてひた隠しにした。

そうして。

ゲイルが何から話そうかと考えている間にスツとキョウゴが立ち上がった。

「…久々に楽しい一日を過ごせました。では、これで」

「…！ 待ってくれ！」

ゲイルにとって、彼にここまで近づけたのは久しぶりだ。

だからもう少し話をしたかった。

ゲイルの言葉に歩き出した足を止めたキョウゴは、顔を向けずに言った。

「…新しく就いた後輩の刑事さん達は面白い方でしたね。また会ってもいいと思えました」

「………！」

「俺ね、あなたと前一緒に行動してた2人の刑事さん達のこと…実は嫌いだったんです。刑事さんあなたもやりづらそうに見えました」

「………」

「…でもあなたは今日、楽しそうだった。だから俺はあの時…あの台車に乗ったんです」

ゲイルはキョウゴの言葉の意図を考える。

つまり、次も会えるってことだろうか。

彼がそんなことを考えているうちにキョウゴは足を進め、入り組んだ路地の前に立って振り返る。

「…最後にひとつ。」

…煙草はほどほどにね、刑事さん

そして微笑を残し、その青年は人ごみの中に入っていった。

「…キョウゴ!」

ゲイルはキョウゴを追って路地に入る。

しかし…彼の姿は跡形も無く消えていた。

そこにちょうど聞き込みに向かっていた後輩が戻ってくる。

ラスはキョロキョロとあたりを見回した。

「あれ？キヨウゴ君は？」

その問いかけに少し黙っていたゲイルはやがて苦笑。

「…逃げられたよ」

\*

その頃、ある宿の一室でつぶやく一人の女。

「来るわ…明日の夜…あの遺産が…」

「遺産の半分を…他の従業員で分ける？」

「ふざけないで」

「私が遺産の半分をもらうの。他の馬鹿な奴らと分け合うのはあなたよ？セオール」

彼女以外誰もいないその部屋に恐ろしい笑い声が、響く、響く。

\*\*\*

宿に戻ったキヨウゴは夕食の時間になるまで休んでおこうと考え、ベッドに横たわる。

…とても疲れた一日だった。

疲れと眠気がつきまとう。

だがそれ以上に、久しぶりに再会した男の服に染みついていた懐かしい煙草の香りの方が、彼にとってなかなか消えないものとなっつきまとうていた。

その煙草の香りが『つきまとう』、と言っても…彼がそれを不快だ

と思ったか逆に心地いいと思ったかどろろかは別の話である。

\* \* \*

「ああああああ……」

一方、別の宿の一室に響くのはゾンビのようなおぞましい声。

「…死んだ人の声(?)を出すんだな、ラスは…」

「…先パイ…死んだら喋ることでできません…」

お分かりの通り、刑事たちである。

ここはゲイルの部屋で、後輩2人がベッド、ゲイルはイスに座っている。

というか、なぜ先輩の部屋のベッドを後輩が占領しているのかわからない。

彼らはそれぞれ自室でシャワーを浴びた後、夕食を食べてから集ま

っているため眠気もそれなりにある。

それにしても似たような光景を以前見た気がするのは気のせいだろうか。

ラスは泣きそうになりながらバツとゲイルを見た。

「死んだ人の声って！　だって先パイ、俺らあのなんがい坂を2往復してるんすよ！！？もあゝさすがに最後あたり、まぶたの裏にヨゼフとか見えてたんですからあっつ！！」

ヨゼフとは、イエス・キリストの父にあたる人物だ。  
ここで、キリストでなくヨゼフをチヨイスするあたりがいかにもラスらしい。

そんなラスをシリウスは白い目で見た。

「…にはお前、最後の最後に宿で夕食が出来てるって気づいたとき、ありえないほどの猛ダッシュで宿に走ってったよな」

その言葉にラスはムツとする。

「うーるーさーいー！シリウス黙っとけー」

ゲイルは疲れきった表情で確信する。

「やっぱり…人間は限界に達すると理性なくすんだな…」

「…先パイ、なんかそれ違います。」

そして区切りの良いところで沈黙。

刑事3人「……はああ……………」（深いため息）

「そついえば…俺たち初めてキョウゴ君に会ったな」

「あーホントだ。　　うわぁちゃんと見とけばよかった、全然顔覚えてねえー…」

「もう少し話したかったよな」

「だな。　　…ところで先パイ、なんで広場に入ってすぐにキョウゴ君が近くにいるって分かったんですか？」

後輩の問いかけにゲイルは考え込み数秒後。

「……やっぱり刑事のカンかな」

後輩2人「「ですよー」「」

…後輩も予想通りの回答だった。

ゲイルは穏やかに笑う。

「いや、本当になんとなくなんだ」

シリウスはふと灰皿に目をやり、そして微笑した。

灰皿の中の煙草の吸殻の量が昨日よりも格段に減っていたから。

「彼」の存在が、先パイの支えになっているのかもしれないとシリウスは考える。

未だに先パイとキョウゴ君の詳しい関係が分からないが、ひとつだ

と言えるのが『面白い』ということ。

彼らは一般的な『犯人が逃げて、刑事が追う』：そんな関係ではないのだ。

今日だって先パイとキョウゴ君は助け合った。

普通ならきつと、こんなことはしない。

…これは前代未聞の逃走劇だ。

ラスはゲイルの表情を見て笑う。

「…先パイは、キョウゴ君に会えて嬉しいんですね」

その言葉にゲイルはうなずいた。

「……………ああ」

いつも見せる暖かな笑顔とはまた少し違う、優しい笑顔を浮かばせて。

第一章 Part 3

Fin .

## 第一章 I Runaway . . . Part 3 (後書き)

ついにゲイルとキョウゴが出会いました…。

そしてまさかの台車アクション！ブタ！！ … 筆者の幼稚な思考力が光りました、すみません。

さて、次回のPart 4ではついにこの街での色々な事件・問題が終結へと動き出します。

更新予定日やその他のどうでもいい情報（雑談含む）などは筆者の「活動報告」のページに記すことがあるので、たまにチェックしてもらえると嬉しいです！

それでは、また次回で会いましょう。

**第一章 I Runaway . . . Part 4 (前書き)**

色々なことが起こったセリスキュオレート。

刑事たちが滞在する最後の日に、この街の事件は終結へ向かう。

一部に流血表現があります。ご注意ください。

第一章 I Runaway . . . Part 4

翌日。

刑事たちは昨日同様、早めに宿を出た。

行き先を告げずに歩き出すゲイルにラスは声をかける。

「先パイ、これからどこに行くんスか？」

ゲイルは横を歩くラスを一瞥し、再び前を見た。

「ああ、言っでなかつたな。 . . . キョウゴを探す。なんとなくこの街の上半分にいる気がするんだ」

シリウスは首をかしげる。

「上半分？ . . . その根拠は...？」

「それは...、」

シリウスの問いにゲイルが答えようとするど、

「『刑事のカン』、でしょ？」

代わりにラスがその後言葉が続けた。  
さすがに、お見通しのようだ。

ゲイルはそのラスの言葉に苦笑する。

「…あゝ」

\*  
\*  
\*

場所は変わって、キョウゴが泊まっている宿の厨房では。

「  
」

鼻歌を歌いながら皿を洗っている大柄な男…シェフのゴールドがいた。  
どうやら機嫌がかなり良いようだ。

そこに支配人であるセオールが手伝いに来る。

「どうしたの？ゴールド。　嬉しそうだね」

「おおセオールか！　いや聞いてくれよ、今泊まってる客で若い兄  
ちゃんがいるだろ？」

「ああ、あの東洋系の人？」

「そう、その子だ。　あの兄ちゃん料理が上手くてさあ…新しいレ  
シピを俺に教えてくれたんだよ！これは明日から…いや、今日から  
でも使えるぜ！！」

…ゴールドが言っているのはつい先ほどのことである。

朝食を終えたキョウゴにゴールドが料理の感想を聞き、そこから会話が  
始まって…最終的にゴールドはキョウゴからレシピを教えてもらっ

ただ。

「あの兄ちゃんにシエフなのかって聞いたたら、レストランでバイトしたことはあっても厨房に立ったことが無いって言っててさ…なんつーかもったいねえよな。最近の若いやつも結構やるじゃねえか」

「そうなんだ、そんなにすごい人なんだね」

「ああ、俺が言うから間違いない。でもその子、今日にはチェックアウトしちまうみたいだ。なんか残念でな…」

少し声音を低くしたゴールドにセオールは微笑む。

「きつとまた来てくれるさ。　それまで僕らはこの宿を残し続けて、いつか『おかえりなさい』って言ってあげられるようにしなきゃ。ね？」

セオールの言葉にゴールドは笑って、隣で一緒に皿を洗ってくれてい

る彼を軽くひじで小突いた。

「くそ、大きくなりやがって。子どもときは泣きまくってたくせに」

「泣きまくってたって……昔は昔、今は今。 僕だつて成長するんだよ」

ゴルドはセオールより幾分年上だが、セオールとは昔からなんだかんだと一緒にいたため友人のような存在でもある。だからその成長をよく理解すると同時に本音を語り合えるのだ。

ふと、ゴルドの中で幼き姿のセオールが浮かんだ。

先代の宿主……彼の父親にしかられて泣きながら自分の後ろへサツと逃げてきたこともあったものだが。

昔に面倒を見てやったとき、ちょっとした事でもすぐに泣いていたあの姿が……今はこんなにすっかりした男になった。

そしてその表情はどこか、先代の宿主に似た面影がある。

「一人前になったな」

感慨深く紡ぎだされたゴルドの言葉を聞いたセオールは、

「……………」

…何も言わずに暖かく微笑んだのだった。

\*  
\*  
\*

「視点…キョウゴ」

俺はそろそろ街を出る頃合いだと考えて、宿の部屋を出て階段を下りる。

すると1階のカウンターにいたセオールさんが俺に微笑みかけた。

「おはようございます、お客様」

なので俺も微笑する。

「…おはようございます。あの、チェックアウトしたいのですが…」

「はい、うちのシェフから聞いてます。少しお待ちください」

そうして彼は料金を算出するために電卓を取り出し、打ち込みながら口を開いた。

「そういえば…ゴールドにレシピを覚えてくれたんですね。本人がとても喜んでましたよ?」

「ああ、まあ…たいしたものではないですけど。喜んでくれてよかったです」

ゴルドさん、喜んでくれたんだ。よかった。

でも…

そんな話をしてる最中、俺は遺産相続問題のことを考えていた。

遺産が渡されるのはおそらく今夜。

朝からなんか嫌な予感がしてならない。

本当はこの宿でもう少し過ごししてなんらかのことをしようかとも思  
つてたけど、刑事さんたちに見つかりそうだし…

そのことも考えて俺は何もせずにもこの騒動の結果を見守ろうかと思  
い、チェックアウトを決めた。

でも心のどこかでは、それではいけない気がする。

… 一体なんなんだ、この感じは。

「では、これが料金です。 … お客様？」

セオールさんの声でハッと我に返った。

いけない、また考え込んでたみたいだ。

俺は少し遅れて料金を払う。

… 考えていてもしょうがないのかもしれない。  
とりあえず宿を出るか。

「それでは、僕は行きます。 …… さよなら」

「はい。 …… いってらっしゃい」

不安を隠した俺の表面上の笑みにセオールさんは裏のない優しい笑顔くれた。

『さよなら』という別れの言葉に対する『いってらっしゃい』という次の再開を導かせる言葉。

『また明日』と言ってるわけではないけれど、帰る場所があるんだって思える。

…俺は自然と心の緊張が解けるのを感じた。

…… そっぴい別れも、悪くない。

\*

でも、俺の暖まった心は宿を出た瞬間に凍りついた。

……ッ！！？

俺の脳裏に、ある映像シミュレーションが浮かんだのだ。

これはおそらく……未来の……

衝撃の強さに全身がこわばり、その様子を察してくれたのか、花壇の花に水をやっていたカトリアさんが俺の方に走り寄る。

「お客様…？　だ、大丈夫ですか…！？」

その言葉に俺は目を見開いたまま彼女を見た。

映像の中に彼女がいた。

彼女は…

「…カトレアさん……」

「？……はい……」

「僕に…ついてきてくれませんか」

「えっ？　…えっど、どににっ？」

俺はその質問に答えようとする。

しかし…

…悪い事っていつのはどうしてこいつも続いてしまうのか。

「…あ！…お前は昨日の…！」

路地に響く声。

俺の右側から聞こえたその声の方を見ると、

…昨日自分を追いかけてきた、あの見知らぬ人。  
しかもまた追いかけてくる。

…どうして、こんな時にあの人が。

ため息をつきたくなるが今はそうしていられない。

「……………走って」

…俺はカトレアさんの手をとって走り始めた。そして近くの細い路地に入り、傾斜のある坂道をのぼっていく。

さっきの、どこに行くのかという彼女の質問にはおそらく答えられなかっただろう。

行く宛なんて、元からないんだから。

いつもそうだ。

…俺はただ、逃げるだけ。

「視点：筆者」

「！！ …先パイ！！」

街の上方を歩く刑事たち。

声をあげたのはシリウスだ。

彼が指差す先には誰かの手を引いて走っているキョウウゴの姿があっ

\*

た。

ゲイル「キョウゴ…!!」

そして、走るキョウゴの後ろには…昨日の男。

ラスは首をかしげる。

「あれー？なんか昨日のヤツに追いかけてねえ??」

「…昨日の俺たちの説得が効かなかったんじゃないか…?」

…まったくその通りである。あの男もどうしてそこまで諦めが悪いのか。

「先パイ、どうします?」

ラスがゲイルに指示を仰ぐ。  
するとゲイルは何か考え込み、数秒後。

「…シリウス」

「はい」

ゲイルはまっすぐにシリウスを見据えた。

「…お前、鬼ごっこことか追いかけるのが得意なんだよな？ …男<sup>ヤツ</sup>を  
追いかけて捕まえてくれ。お前は鬼ごっこ『鬼』だ」

その言葉にシリウスはメガネをカチャツと指で構え、不気味に笑い。

「…お任せを」

…シュバツ！！！！！！

…疾走。

…ゲイルは一応、人の扱いが上手いのかもしれない。

そして今度はラスに向き直る。

「よし、俺たちは別の道から先回りしよう。キョウゴから目を離すなよ」

「了解!!」

…こちらの刑事2人はキョウゴたちが走っている道と平行上にある道を走る。

彼らの道と道の間にはそれほど大きくない水路があるだけでお互いの姿はよく見えるのだが、キョウゴの方はゲイルとラスの存在を認識する余裕がないようだ。

ラスは走りながらニツと笑ってゲイルに声をかけた。  
その視線はキョウゴというより、その後ろの男を追うシリウスに向  
けられている。

「…先パイ、なかなかっスね」

「何がだ？」

「シリウスに、鬼ごっこの『鬼』だと言い聞かせて走らせると特殊  
効果がつきます」

ゲイルはラスの言葉を聞いて視線を同じくシリウスへと向けた。対  
象の男とかなり距離が縮まったようだ。

「特殊効果…？ ……すごそうだ」

「その名も……」

(その間、対象の男が背後にただならぬ気配を感じる)

…へびにらみ!?!?!」

「地味といつかなんといつか」

…ゲイルの感想はさておき、過去にこんな会話があったということ  
を思い出せという話である。早く気づけ。

直後。

「…うわああああっ!?!?!?」

ゲイルたちとは反対側の道でさっきの男の絶叫。

それもそのはず。

「あれは怖いっスよ？シリウスが恐ろしい速度で、しかも真顔で追ってくるんですから。あいつもご愁傷さまだな！」（棒読み）

ゲイル「……………」。（啞然）

ラスの言葉通り、シリウスの恐ろしさは半端ない。

無表情という微動だにしない顔とは逆に尋常じゃない速さで動く体。そのギャップだけでもかなり怖いというのに迫ってくるからもっと怖い。

皆様にも想像していただきたいくらいだ。

「うわぁアイツ相当ビビッてんじゃん。あームリムリ、そんなに走ったって逃げられねえって」

そして、必死に逃げる男の姿を見ながらアハハと笑うラス。

…この男、案外サディストなのかもしれない。

その横でゲイルは少し困った顔をする。

「なんか…相手の方がかわいそうになってきたぞ…？」

「『かわいそう』なんて思っちゃダメっスよー。先パイは優しすぎます」

「いや…別に優しさとかそういうのじゃなくて、普通にかわいそうだと思うんだが…」

…どっちが正論なんだか、イマイチよくわからない。

「あ、ラス。もう少しで向こうの道へ渡れる橋がある。そこから先回りしよう」

「りょーかい！」

ゲイルは前方にある橋を指差し、ラスはとても楽しそうにうなずいたのであった。

\*

「視点…キョウゴ」

「う…うわあああああつ！！？」

俺の後ろを追いかけている人が突如叫んだため、すぐにその方を見る。

そして、

「……………」

…絶句。

尋常じゃないスピードで、しかも真顔の男がこっちへ迫ってきているんだから、無理もない。

（このとき、横のカトリアさんの表情も凍りつくのが分かった。）

あれ…？あの今追いかけてきている人って…

「…後輩の…刑事さん…？」

あの威圧感は、なに？

そしてよそ見をしていると突然。

…グッ!!!

「……っ」

カトリアさんの手を握る方とは反対の腕を誰かに掴まれ、そのままその誰かとぶつかる。

「すみませ……」

「!! 刑事さん……」

…目の前にいるのは、刑事さん。

かなり走ったのが軽く息切れをしていて、少し崩れたオールバックからは、いくらか髪が前に垂れている。

「…やっと、捕まえた…」

「……」

返す言葉がない。逃げるのに必死で彼の気配に気づかなかつた。

俺の横のカトレアさんは刑事さんと会ったことがあったのか、すぐに反応した。

「あ！ ……この前宿の前を通りかかった方ですよね…？」

「ん、宿…？ ……ああ、あの時声をかけてくれた子か」

刑事さんも何か思い出したらしい。

「先パーイ！捕まえましたよー！！」

今度は背後から後輩の刑事さんの声。

すっかり忘れてしまっていたが、俺を追ってきたあの人は後輩の刑

事さん2人によって取り押さえられていた。

ゲイル「ああ、ありがとう。そいつ、一回警察に引き渡すべきだな。ここまでエスカレートすると住民に被害が及びそうだ。一度注意されてくるといい」

ラス「ですねー」

シリウス「それが賢明な判断かと」

俺はしばらくしてからハツとして、掴んでいたカトレアさんの手を離す。

「あ…すみません、こんなところまでつき合わせてしまって…」

するとカトレアさんは、とんでもない！と言いたげな顔で首を横に振った。

「いえ、楽しかったのでもいいですよ！でも、どこかに行くんじゃない？なかつたんですか？」

少し、息がつまる感覚がした。

「いえ…目的は果たしたので充分です。ありがとございまして」  
「そうですね。では、さよなら…あ、いえ…行ってらっしゃい  
！」

カトリアさんはセオールさんと同じ言葉を残して帰っていった。

…その時、俺はちゃんと笑えていただろうか。

「視点：筆者」

キョウゴを追いかけていた男に手錠をかけて動けないようにした後輩2人はゲイル達の元へと向かう。

「今回は俺の『勝ち』だな、キョウゴ」

「そうですね、『負け』ました」

疲れながらも笑いあって話すゲイルとキョウゴに2人は何を感じただろう。

ラスはキョウゴの両肩にドンッと手を置いて言った。

「君がキョウゴくんなんだよね？」

そんなラスにキョウゴは目を丸くしてうなづく。

「え、…はい」

「俺はラストイウス・フォルカだ。『ラス』って呼ばれてる。こ  
つちのメガネのやつは…」

「シリウス・ライターだ。よろしく」

…自己紹介。

まああいさつの基本といえば基本なのだが。

なんか変な感じがするのは筆者だけだろうか。

…筆者の意見はさておき、キョウゴは2人に軽く頭を下げる。

「よろしくお願ひします、後輩の刑事さん。と…」

キョウゴはまじまじとラスを見た。

「えっと…どうしてつま先立ちしてるんですか…？」

ラスはギクツとして顔をひきつらせる。

「なっ…なんのことかな？」

…お前の足元についてのことである。ごまかしても無駄だ。

シリウスはキョウゴに笑ってみせる。

「…身長低いのを気にしてるんだ」 笑ってあげてくれ。

「あ、なるほど……」

「シリウス、言うなあああああっ！…！」 そしてキョウゴくんは納得すんな！

ゲイルはため息をひとつ。

「…とりあえずどこかに移動しないか？」

「あー…俺とラスはあの男を警察へ送り届けなきゃならないので後から合流します」

「そんじゃ、あそこで合流とかどうっすか？」

ラスが指差した先にあるのは森の手前に建てられた小さい塔。

これは、この街に着いて間もない時にラスが解説していた古代の塔だ。

高さは2階建ての建物と同じくらい。形は円柱で、その側面には小さな正四角形が彫られている。ガラスは無いが窓の役割をしているのだろう。

ゲイルはうなずいた。

「よし、あそこに行しよう。…キョウゴ、来てくれるな?」

そう言う彼の目には断ることを許さないような強い意志が宿っている。

これにはさすがにキョウゴもうなずくことしかできなかった。

…刑事の眼力は、あなどれない。

\*\*\*

ゲイルはキョウゴをつれて塔に入る。

塔の中は螺旋階段があり、それ以外は何も無い。  
所々に作られた窓から差し込む日の光が暖かな雰囲気を作っている。

2人は階段に腰掛けた。

「どうだ、昨日の疲れはとれたか？」

昨日の疲れと言えば、逃げた事と逃げた事と、逃げた事…それくらいだろうか。

「まあまあですね…。今日もいくらか疲れましたし」

キョウゴの言葉にゲイルは苦笑する。

「はは…そうだな」

そして少しの沈黙。風がそよそよと流れる音が鮮明に聞こえる。

キョウゴは隣に座るゲイルを見つめ、静かに話しかけた。

「刑事さんは…俺に何か聞きたいこと、あるんでしょう？」

「…！」

キョウゴは、こういう時の察しが良い。

そのあまりに穏やかな雰囲気<sup>フキ</sup>にゲイル自身も彼に抱いていた最大の疑問を忘れかけていた。

…理由<sup>ワケ</sup>を、知りたい。

しかし、この疑問の理由を知れば何かが終わる予感もした。

果たしてその理由を聞いていいものかと、ゲイルは心中で思い留まる。

「刑事さん？」

押し黙るゲイルにキョウゴは呼びかけた。ゲイルはやがてうなずいた。

「ああ。聞きたいことは、ある」

「…いや、迷ってられるものか。聞かなければ。」

「…お前はなんであの日ロンドンを出て行ったんだ？」

「……………」

ゲイルが言う、『あの日』とは、約3年前のこと。  
キョウゴは何も言わずにゲイルの元から消えた。

ゲイルの元から、とは言ったが…それまでの関係も曖昧と言ってもおかしくない。

でも確かにその出来事は、当時別の件で精神的に追い詰められていたゲイルをさらに追い詰めた。

…これは後々わかる物語である。

キョウゴはそう聞かれるのを予期していたのかもしれない。

ゲイルに向けていた視線を塔の入り口から射す日の光へと移し、やがて伏し目がちに言葉を紡ぎ始める。

「理由は2つあります。ひとつは、あなたの知らない真実。きつといつか知る日が来るでしょう」

「俺の…知らない真実、だと？」

「はい。…もうひとつは俺の心の中にあります。察しの良い人は分かるかもしれない。…でもあなたにそれを話すことはきつくないでしょう」

「……」

再び訪れた沈黙。

キョウゴがゲイルの方を見ると彼は何か考えこんでいるようだった。

こんな曖昧な答えであれば、思考をめぐるすのも無理はない。

キョウゴは思う。

…たぶんあなたが真実を聞いたら、俺のことを嫌いになる。

そしてもうひとつの理由を知れば、なんでそんな事でふりまわされていたんだ、と呆れられるかもしれない。

世の中の人間は、おそらくそう思う人が大半だろう。

……あなたはその時、どう思うの？ 刑事さん…

しばらくしてゲイルは口を開く。

「それじゃあ…」

「…？」

「それじゃあ、お前が今俺たちから逃げる理由は？」

キョウゴはほんの少し息が詰まる思いをする。

そんなこと……言えない。

「……答えられないのか」

「……すみません」

「……」

少し、重い沈黙。

キョウゴは逃げ出したい気持ちに駆られる。

それをなんとなく感じたゲイルは軽くため息をついた。

「…俺が質問ばっかりってのは駄目だな。キョウゴ、俺に聞いたことあるか？」

「え？ …俺が、あなたに？」

「ああ。なければいい」

「あ、いえ…あります。なぜあなたは…俺のことを『レスト』と呼ぶんですか？」

その言葉にゲイルは軽く目を見開き、「ああ…」と声を漏らした。

「そついや、言ってなかったな。お前、名前が分からないって言うてたから俺と仲間で勝手に呼び名を作ったんだ」

「あ、そうだったんですか」 単純ですね…

「でも、もうその名前も必要ないな。『キョウゴ』って名前あるし。…その名前、誰かにつけてもらったのか？」

さらっと聞かれたその質問にキョウウゴは微笑してうなずく。

「…そんなところですかね」

正直、この名前をつけたのは自分だ。

でもそのキツカケは、あなただった。

…あなたはきつと覚えてないでしょうけど。

\*  
\*  
\*

… 10年前の夏の日。

「視点・少年」

その日は一日中雨が降っていた。

俺はいつものように民家と民家の間の狭い路地に座り込み、そこから見える道をただずっと眺める。

…最近そんな生活に変化があった。

黒髪の刑事が毎日、俺の様子を見に来るようになったから。

その刑事の名前は、ゲイル。

10歳の俺はいつの間にかその刑事が来るのを待つようになった。いた。

だが、今日は来ない。

雨の日だからかな、と俺はぼんやりと思いながらひざをかかえこみ  
容赦ない雨に打たれ続けた。

体に打ち付けられる雨は俺の体温をどんどん奪っていく。

『力』を使って寒さをしのごうかとも考えた。

でも…厚い雲で太陽が見えないけれど、まだ夕暮れときだ。  
ここで『力』を使ってしまったら、疲労と寒さで夜は生きづらくな  
ってしまう。

今は、耐えなきゃ。

俺はそう思い、寒さで震える両手を強く握り締めてうつむいた。

その時。

「…君、大丈夫か？」

遠くで聞こえた、あの人の声。

たぶん…この路地から出たところの近く。

俺は無意識に立ち上がり、家の影に隠れながら声の方を覗く。

そこには傘をさしながら、転んだ小さな男の子を抱き起こして立たせる彼の姿があった。

「…うん」

「雨の日に走っちゃダメだ、転んだら危ないだろ」

「君の名前は？」

「…キョウゴ」

「キョウゴか。良い名前だな」

彼が優しく笑いながら言った言葉。

…その言葉が俺の中で強く響いた。

『キヨウゴ』

あの人と言った、『良い名前』。

…生まれ変わったら、その名前で呼ばれたいな。

自分の名前がわからない俺は切実にそう願った。

あの子の傍に今居るあの子が、とてつもなくうらやましかった。

「…ひとりで帰れるか？キョウ」

「ひとりで…帰れる。ありがとう」

「ああ。 気をつけて帰れよ」

やがて小さな男の子が帰っていく姿を少し眺めていたあの人は、すぐに俺の方へと走ってきてくれた。

「おい、大丈夫か？ 雨で寒かったろ」

彼が俺を傘の中に入れてくれる。

…そんなことしなくていいのに。あなたが濡れちゃうよ。

そして俺の頬に手を当てた瞬間、彼は目を見開いた。

「お前…こんなに冷たく…」

そう呟くとすぐに彼は上着を俺にかけて手を引き、歩き出す。

その上着の暖かさに安心しながら、俺は不思議そうに雨で濡れていく彼の背中を見つめた。

「…？ …どこ、行くの？」

すると彼は振り向かずに答える。

「俺の家だ。体が冷えてるみたいだからそこで温まっていけよ」

「……………！」

どうしてこの人は、俺を助けてくれるんだろう。

俺はあなたに何もあげられないのに、べしじして。

疑問は尽きない。

けれど、それよりも。

…冷たい雨の中でつないでくれた彼の手の暖かさが驚くほど心に染みて。

俺は呟く。

「…ありがとう」

雨の音に溶け込むほど、小さな声で。

でも。

あなたに聞こえないようにつぶやいたはずなのに、きっとあなたには聞こえていたんだろうな。

……俺の手を握るその力が、少し強くなったから。

\*\*\*

…もう今はわかる。

あなたが言っていた『良い名前だな』というのは、名前を聞いた人

間が気を利かせて言う言葉だと。

…でもあなたのことだから、本当にその名前を良いと思って言ったのかもしれない。

どちらにしても幼い頃に聞いたその言葉は記憶から消えることができなく、『キヨウゴ』と呼ばれたいという意味は心に残っていた。

…だから旅をする上で名前が必要になったとき、俺は『キヨウゴ』と名乗った。

\*

「視点・筆者」

「…そういえば」

「？」

キョウゴがきりだした言葉にゲイルは反応する。

彼は静かに微笑んで言った。

「…あの姉弟、助けられてよかったですね」

「姉弟？」

「ああ、大通りの！」

それは、一昨日おとといに大通りで起こった暴走トラックの件である。

「キョウゴ、知ってたのか？」

「街の人から話を聞いたんです。刑事さんと、その後輩さんたちが活躍したようですね」

キョウゴの言葉にゲイルは照れたように笑った。

「活躍してもんなのはわからんが……人を助けるのも使命のうちだからな」

「…あなた達は命を張ってその姉弟を助けた。なので俺からご褒美です。…形もないし、あなた達に直接喜びを与えられるものではありませんが」

「？ ……どういうことだ？」

「…後でわかります」

キョウゴは、すうつと息を吸ってどこか宙を見上げた。

…きつと、そろそろだ。このタイミングが重要。

「あと、もうひとつ言わなければなりません」

「？」

キョウゴは立ち上がり、青い光とともに出現させたカードをゲイルに手渡して螺旋階段をゆっくりのぼっていく。

そのカードを見ながらゲイルは立ち上がる。

そこには住所が書かれていた。

「…これは？」

「さつき俺と一緒にいた女性がいたでしょう？それは彼女が働いている宿の住所です。今頃、彼女はきつとそこに着く。」

「…そしてそこには…刃物で刺されて倒れている人が2人います」

\*

一方、そんな2人の会話の内容など知らない後輩たちは。

「なあ……シリウス」

「……なんだ」

「さっきの男を警察に送り届けたのはいいーんだけど、……気づいてないとは言わせねえぜ？」

「……」

2人は同時に背後を見て、再び前に向き直る。

「なんで、俺らの後ろに……  
……目えキラキラさせた子ども  
がゾロゾロいんだよ……！」

…そう2人の後ろには子どもの列が並んでいたのだ。

シリウスは苦い表情を浮かべる。

「…なんか…俺にも弟子ができたみたいで…」

「なんの!？」

「……鬼ごっこ、『鬼』」

……。

「…マジかよ、さっきのアレで…?」(頭を抱えてうつむく)

「ああ…」

「…どう落とし前つけてくれんだよ。この列のせいで、俺ら今そこらの人から変な目で見られてんじゃん!！」

「…すまない。俺も正直…こつも子どもが多いと少し苦手で………」

「…あー…よし、俺に任せろ」

そう言ってラスは後ろを振り向き、子ども達と顔を合わせて大声で言った。

「そのチビツ子たち、よおおく聞けよ!! この兄ちゃんな、マジで怖いんだぞ! このままずっとこいつを追いかけたら、…そのうち逆に追いかけてきてみんなのこと骨さえ残さず食っちゃまうぞ!! いいのか!？」  
うぐっ!!」

…そこでラスの口を手で塞いでシリウスがストップをかけ、

「…ちよつといいか」

そう言ってラスを一度前に向かせて小声かつハッキリした口調で言った。

「…それは、ない。」  
( 子どもを食べたりなんてしないという意味で )

…当たり前だろ。アホか。

「バツツカ！…！こーいうのはな、大げさに言っとくべきなんだよ！…第一お前、実際肉しか食わねえじゃんか！！」

「誤解だ！！野菜も魚も食べてるだろ！きちんと栄養バランスをはかっているんだ、こっちは！！！」

「いや、ぜつつてえ嘘！肉の方が多い！！　　ってそれは別にいいんだよ、話脱線してる！…とりあえずお前から何か言え！！！」

ラスがシリウスの胸板をドンツと叩き、その反動で後ろを振り向いたシリウスは、

「…お前らを…ひとり残さず食いつぞ…」

…言った。

もう皆さまは充分わかっているだろうが、こいつらはアホである。

……。

沈黙。

そして数秒後、そろそろと子ども達が、シリウスが立ち止まっていることを確認しながら小走りで逃げていった。

…まあ子どもの列をなくすという元来の目的は達成したが。

シリウス「……」

…なんとなく残る、申し訳なさ。

しかしラスはその申し訳なさがなかったのか、晴れ晴れとした笑顔でグッと親指を立てた。

「ナイス！！ シリウス、今の最高だった！！」

「…本当によかったのか、今ので」

…駄目だと思うが。

そうして、後輩2人は待ち合わせ場所の塔を目指す。

再び、塔の中のゲイルとキョウゴは。

「…キョウゴ…それは本当なのか？ 遺産相続がどうかの問題を  
超えてるぞ！」

「…はい。本当はあなたにもう少し早く知らせたかった。でもそ  
れはかえって状況を悪くさせてしまう。だから言えませんでした」

ゲイルの手の中には先ほどのカードとは別の手紙が握られていた。  
これもキョウゴに渡されたものだ。

…その時、塔の入り口から声が聞こえた。

「ただいま着きましたよー！先パイ！！」

ゲイルの視線はその声の方へ。ラスとシリウスが着いたのだろう。

「…あ、ああ…」

キョウゴも声の方を軽く一瞥して、再びゲイルを見つめる。

「…後輩の刑事さんたち、帰ってきたみたいですね。さっき言ったカトリアさんへの言葉も、伝言をお願いします。…俺があなたにお願いした理由は…わかりますよね？」

「…ああ」

「…これは俺の力では出来ないことですから、頼みますね。…それじゃあ、また」

キョウゴが再び階段に足をかけたのを見てゲイルは引き止める。

「待てキョウゴー！…また、どこかに行くのか？」

その問いに彼は…何も言わずに微笑み、そのまま階段をのぼっていき…ゲイルの視界から、消えた。

「……」

螺旋階段の中腹で立ちすくむゲイルを不思議に思った後輩が階段をのぼってくる。

「どーしたんスか、先パイ？」

「キョウゴくんは、この先ですか？」

2人の言葉にゲイルはうつむいた。

「…また逃げられたよ」

しかしラスは首をかしげた。そしてさらに階段をのぼっていく。

「え、そんなことねーっスよ。だってこの塔、階段の先は行き止まり……あ」

やがてその言葉は途切れた。

…なぜなら彼の視線の先にあるのは、柔らかな光に照らされた行き止まりの壁。

あの青年の姿がどこにもなかったのだ。

「あー…そっか。キョウゴくん魔法使いだった」

「…いつからそんなメルヘン的なものになった？」

「だってそーじゃん」

「近いけど…なんか違うかい？」

「…ってか先パイ、今重要なことに気づいたんすけど」

「なんだ？」

「毎回こんな感じでキョウゴ君に逃げられてたら、この任務終わんなくないっすか!?!?」 捕まえた意味ないじゃん!

その言葉にゲイルはキョトンとした。

「ん、まあそうだが」

「つえええええつ!!?」

「あ、とりあえずそんな事より」

後輩2人 「?」

ゲイルは真面目な表情で後輩に伝えた。

「実は…」

…今、ある場所で起こってる事件について。

\*

カトレアは呟く。

「これ……どつどつ、いと……？」

その視線の先にいたのは。

……血で濡れたナイフを持っている、セオールだった。

\*\*\*

……これは、カトレアがこの宿に戻る前のこと。

食堂にはセオール、ゴールド、そしてその他の従業員たちがいた。

ここに住んで働いている従業員達は、客より早めに昼食をこの食堂でとる。

そのときは食後で、食堂に和やかな雰囲気の流れていた。

そこに今現れたひとりの女…パトリシアはゴールドと楽しそうに話すセオールに近づき、猫なで声でこう言った。

「…ねえセオール、遺産のことなんだけど」

その言葉でセオールの表情に陰りが生まれる。

これはもう解決したはずの問題だ。必死で考え込んだセオールがこの表情を見せるのも無理はないだろう。

「…なんででしょう?」

「その遺産の半分を、私にゆだねてみないかしら?」

「…?!?!?」

その時、すべての会話が消えた。

皆が一齐にパトリシアを見て、驚愕の表情を見せる。

もちろん、セオールも。

数秒してからすぐ傍にいたゴールドが口をはさむ。  
堀が深いその顔が険しくゆがんだ。

「お前……!! 何言ってるのかわかっているのか……!?!」

パトリシアも負けずに冷たく睨み返す。

「黙りなさい!! 私はセオールと話をしているの。ねえセオール、こんなボロボロの宿は捨てて新しい綺麗な宿を作りましょうよ!」

『この宿を、捨てる』

その言葉にセオールの表情は苦しげにゆがみ、そして…いつもより凜とした目で、パトリシアを見つめ返した。

「それはできません。この宿は僕と父と…そしてここにいるみんなで作ってきたものです。そして父との思い出の場所でもあるし、お客様の思い出の場所でもある。…絶対に、手放さない」

…絶対に。

その言葉は静かに紡がれた。しかし、その場にいた者たちの心をどれほど動かしたただろう。

「……っ、セオール…本気で言ってるの？こんな古くて高級感もないこの宿を好む人なんて一握りよ！！新しく建てれば客がたくさん来るでしょ！？そしたら売り上げでこの分をまかなえるじゃない！」

「…パトリシアさん、それは無理です。この街は宿がとても多い。そしてそれぞれが個性ある宿なんです。きつと高級感がそれを上回ることは一時的で、すぐに廃れます」

「なっ…」

「それにね、パトリシアさん。僕と父が作りたかった宿は、誰でも気楽に来れる親しみやすい…まるで家のような宿です。高級感はそのままで必要ない」

パトリシアは唇を噛む。

「セオール…あなた話のわからない人ね!!」

そして、  
その手はテーブルの果物ナイフを握った。

パトリシアの目に浮かぶのは、殺気。

「……セオールツ……!!」

直後、セオールの眼前に立ちふさがった大きな体。

……ドスツ……、そんな音が、聞こえた気がした。

するとその影が崩れていく。

……赤い跡を残して。

「……ゴルド……? ゴルド……!! しっかりしてくれ! 誰か……っ救急車を……!!」

「ぐ……っ」

「ゴールド…、すっかり…！  
パトリシアさん…！！…あなたは、いつからお金に目がくらんで人を刺すような人になったんですか…！？」

…ゴールドが刺されたのだ。未だその腹にはナイフがささっている。

セオールがパトリシアをにらむ。しかし彼女は床に倒れたゴールドを見て呼吸を荒くしながら薄く笑った。

「良かったじゃない…セオール…」

「…！？」

ゆらりと動いたパトリシアがゴールドに刺さったナイフを引き抜く。

「ぐあああっっ…！！…」

ゴルドはその痛みで獣のごとく叫ぶ。その腹からは鮮血が生々しくあふれ出した。

「ゴルド…っ！…」

セオールは必死にその傷口を押さえて血を止めようとすが、…止まらない。

従業員「パトリシア…お前っ！…！」

複数の従業員がパトリシアの動きを止めようと動くが、彼女がナイフを振り回すためにむやみに近づけない。

「ねえセオール…なんて顔してるの…？ この男が死ねばその分の遺産はあなたのものなのよ？ いい話じゃない…」

その声は確かに震えていた。

その震えを引き起こしてるのは興奮ではなく彼女の良心だと信じた  
い。

しかし、彼女の狂気は止まらなかった。

「さあ、そこをどきなさい？セオール。あなたにナイフが刺さる  
わよ？」

おそらく、次の一撃でゴルドは命尽きるだろう。

セオールはそう思い、唇を噛み締めた。

ゴルドが死ぬくらいなら、僕は…

そして。

「…いいわ、セオール…あなたも死になさい！！！！  
！！！！？」  
ツ！

彼女の息が、一瞬止まって。

そのまま彼女が自分の体を見ると、そこにはゴールドが腰に携帯していた刺身包丁が食い込んでいた。

その柄を握っているのは…

「セオ……ル……っ……！」

紛れも無く、セオールだった。

「はあっ…はあ…」

彼もさっきのパトリシア同様、息が上がっていた。  
そしてそのまま、ガクリとひざを落とす。

「セオール…つく…」

数秒遅れてパトリシアも倒れた。

…その顔に、安堵の笑みがこぼれたように見えたのは気のせいだろうか。

\*\*\*

…そして、今に至る。

やらなきや、殺されていた。…とはいえ、セオールは人を刺したのだ。

「嘘…でしょ？ セオール…」

呆然と呟くカトレアにセオールは泣きそうな笑みを浮かばせるだけだった。

おそらくその笑みは、カトレアを安心させようとしたもの。

そしてセオールはまわりの従業員を見て言った。

「…こんな守り方しかできなくて…本当にごめん」

\*\*\*

ゲイルたちが宿に着いたころには、すでに救急車が刺された2人を病院へ搬送させていた。

ゲイル「なんとなく状況は分かったが…」

従業員「あの、セオールは…？あいつは俺達やゴールドを守っただけなんです…！」

ゲイル「それは分かっています。しかし…」

シリウス「…この地域では条例の掟で、正当防衛が認められないようになっているようです。なので…彼は捕まります」

従業員「そんな…!!」

従業員たちの動揺が一層広がるのを見た地元の警察はセオールを早く連行しようとする。

…が、それを視界の端に捉えてたゲイルがそれを制した。

「…待ってくれ。 実はある人から手紙を預かっていてね。 セオールさん、これを」

セオール「…？」

セオールに渡された手紙。

それを見たセオールは目を見開き、近くにいたカトレアがそれを読み上げた。

「『私の遺産は、私が経営している宿の従業員…息子のセオールにすべてを託す。 使いようは彼が決めるだろう』 …これ、まさか…！」

セオール「これは…父の字です…！どうしてこれを…？」

セオールは信じられないようにゲイルを見るが、彼は口を開かなかった。

…答えられないのだ。

キョウゴにこれを渡されたとき、彼はこう言った。

『亡くなった宿主さんに最後まで書いてもらいました。これを宿の人たちに見せてください』

…ありえないような話だが、本当だったようだ。

やがてセオールは口を開く。

「…カトレア、この遺産の半分は皆で分けていいから、後の半分は必ず宿のために使って」

「セオール!？」

そしてセオールは警察とともに宿を出て行く。  
その時ゲイルはカトレアにささやいた。

「…さつき君と一緒にいたやつが、『セオールさんを支えてあげてください』って言ってたよ」

その言葉が、悲しみに揺らいでいたカトレアの心を払拭した。  
彼女はそのまま走り出し、その後ろ姿を見たゲイルは静かに微笑を  
浮かべる。

セオールの背中に向かってカトレアは叫んだ。

「セオール!! 私…待ってるから!! セオールが帰ってくるまでこの宿を皆と一緒に守っておくから!!」

彼女の声が震えていたのは、涙をこらえていたから。

そんなカトレアを振り返ったセオールは、優しく笑った。

「……ああ」

…彼はカトレアの姉を刺した。

しかし、彼女がセオールを想う気持ちは消えなかったのだ。

\*

さつき、なぜキョウゴがカトレアをつれて逃げたのかをちゃんと解説しよう。

キョウゴが宿を出たときに突然見えた映像の中で、彼女は殺されていたのだ。

どうやら、セオールかゴールドをかばって姉がふりあげたナイフを心臓に受けてしまう未来だったらしい。

その未来を避けるためにはカトレアを連れ出すしかなかったのだ。

そして、もし早くゲイルたちがそこにたどり着いていたら、パトリシアが動揺してナイフを振り回し…また別の被害者を生むことになっていたようだ。

だからこそキョウゴは色々なタイミングをはかった。

…からくも皆が生き残れる未来を選択するために。

宿を出た刑事3人。

\*

ふとゲイルが口を開く。

「ちょっと、電話をかけてくる。お前らはここで待っていてくれ」

後輩 「はい」

そしてゲイルは近くの店へと入っていった。

…今さらだが、この刑事たちはケータイを持ってない。

これにはちゃんとした理由がある。

というのも、警察庁特殊捜査班はある意味謎に包まれた組織で、その中で動く情報もまた、かなり重要機密だ。

それが理由で、情報がケータイを通じて傍受されないために…その危険性が高とも高い、出張している刑事にはケータイを持たせないのだ。

というわけでゲイルは今、固定電話を借りに行っている。

この街でケータイが普及してないからか、別に怪しまれる心配もない。

ラスは空を見上げてため息をついた。

「なーんか、さっきの人たちかわいそうだったなあ」

\*

そして、ロンドン。

リリリリン！リリリリン！！

古風な電話の音が鳴り響く。

班長「あー電話だ。      ラックス、出てー」

ラックス「はあ？俺かよ、めんどくせー……。      ……あーい、こちら  
警察庁特殊捜査班本部……………って、ゲイルの兄貴じゃないすかああ  
……………」

…ラックスの口調が、途中で劇的に変わったのは言うまでもない。

「はい、めっちゃ元気ですよ！！今日も兄貴に変わって班長じいってますから！はい！！」

ものすごく嬉しそうに話しているラックスを班長は遠い目で見ていた。

「李園…私は心が痛んでるよ…。なんでラックスはゲイルに対する扱いが良いんだい…？」

そしてズブーッと鼻をすする音。

このおっさん、まだ治ってなかったのか。

李園はカップにコーヒーを注ぎながら班長の問いかけに答えた。

「信頼の値が違つんですよ」

…いつものごとく、キツイ言葉である。

やがて電話で話してるラックスから落胆の言葉が漏れた。

「あ、そんなんすか…。 班長よつか今度、俺に電話してくださいよー？」

…班長、電話ー。」

そして受話器を班長に投げ渡す。（古風な電話であるが、コードレスだ）

「やあゲイル！！君から電話とは珍しいなあ〜！！」

え？

そんな不機嫌なそんな声出さないでくれよお。

ほうほう。

で、それで？

…うん」

ゲイルと話している途中で班長はメモ用紙にさらさらと何か書いて、

彼は李園に投げ渡す。

そしてそれを受け取った李園はメモの内容を読み、無言で班長にうなずいた。

「班長、なんて書いたんだ？」

本棚に向かう李園にラックスが近づく。

「どうやら、セリスキュオレート支部の電話番号を調べたいようで

…」

「セリスキュオレート…あー、あそこか。兄貴、そんなところまで行ってんだ？」 俺も行ってえー。

「セリスキュオレート…セリスキュオレート…あ、ありました。  
……っ」

「？」

ラックスが李園を見ると、彼は上の方を見ながら唇を噛み締めていた。そして、そのままつま先立ちをして手を伸ばすが…届かない。セリスキュオレート支部の本はその手のさらに上にあるのだ。

「あー…お前背え低いもんな」

「……」

「…おらよつと」

ラックスがなんの苦勞もせずひょいとその本を取って李園に渡すと、

「…ありがとうございました」

礼は言われるものの、なんとなく李園がシヨボンとしてるような気がして。

「落ち込むなよ…」

頭をポンポンと叩くと李園は悔しそうにして、ふいとその場を少し

離れてしまった。

…そこらへんは、まだ子どもな部分が残っているらしい。

再び、班長たちの会話。

「うんうん、へえー。わかったよ、とりあえず。ところでゲイル。  
お土産の話だけど… …あれ、切れちゃった」

420

「兄貴、なんて言ってた？」

「んー？お土産の話きりでしたら、『そこらへんの石でも拾って送りつけてやるうか？（恐ろしく低い声で）』って言われて切れちゃった」

その言葉にラックスはゲラゲラと笑った。

「さっすが兄貴！！サイコー！！」

そこに李園の冷静な声が入り込む。

「班長、セリスキュオレートの番号を調べましたが…？ぎまじょうか？」

「ああ、お願い。」

「…了解しました。しばしお待ちを。」

…もしもし、こ

ちら警察庁特殊捜査班ロンドン本部です。セリスキュオレートの

方ですね？ こちらの班長から直々まじまじにお願いが…

はい。…それで、もし言つとおりまじまじに出来なければ…」

李園がチラッとラックスを見れば、ソファーに豪快に座っている彼は、親指を立てた手で首を真横に掻き切るジェスチャーをした。

それを見てか、李園はニヒルな笑みを浮かべる。

「…そうですね……あなたたちの首が、社会的かつリアルで吹き飛ば可能性があるので、くれぐれも、注意して聞いてくださいね」

そして受話器は班長へと渡された。

「もうしもくし、いつもご苦労だねー。そっちにセオールって子いるでしょ？ ……うん、そうそう。今から言うようお願い聞いてくれるかなあ？ ……うん、ひとつだけ」

班長の顔が、少しゆがんで口だけの笑みに変わる。

「まあ、『聞かない』って選択肢なんて、元からないんだけどね」

ラックスも、クツクツと笑いをこらえながらも不敵な笑みを浮かべ

て楽しそうに班長の言葉を聞いていた。

「…これだから面白いんだよなあ、」

警察庁特殊捜査班…それはただ捜査をするだけではない。  
しかるべき答えを見つけ、どんな方法を用いても事を終結させる…  
そんな後始末も受け持つのだ。

彼らは、ただの『なんでも屋』ではない。

それが法に触れようと触れまいと。

そんなものなど関係ない。

彼らが目指すのは、市民が生きるこの世の安定。

しばらくして受話器を置いた班長は椅子の背もたれに体を預けて窓から空を見上げた。

その表情は優しいものになっている。

「…ゲイルとキョウゴ君に会うなんて、ついてるなあ〜セオール君。」

\*

所変わってセリスキューオレート支部。

ガチャン！！（電話を切る音）

「せつ…セオール!!お前の服役期間は『5年』から『1ヶ月』に変わった!!」

セオール「……え？」

ゲイルたちは再び町を歩く。

\*

シリウス「これからどうしますか、先パイ？」

ゲイル「…そうだな、病院に行って刺された2人の様子とこの前の少年の様子を見に行こうか」

ラス「それがいいっスね。あの子にかけてあげた先パイのジャケツトも置いていったままだし」

ゲイル「そうだったな、すっかり忘れてた。…で、その後はこの街を出よう」

シリウス「いいんですか？キョウゴ君は」

ゲイル「キョウゴはきっと…もうこの街には居ないだろう」

ラス「次はどこに行くんスかねー…」

ゲイル「しばらくは海沿い近くの街なんじゃないかな」

シリウスはゲイルを見つめる。

「それは…また、刑事のカンですか？」

二度あることは、二度あるというが。

しかし、ゲイルは苦笑した。

「いや。 …… キョウゴは昔から海を見るのが好きなんだ」

その言葉に後輩2人は意表をつかれたような顔を見せた後、微笑する。

ラス「へえ……」

\*  
\*  
\*

刑事たちは海沿いの坂をのぼっていく。

青空は雲ひとつないほど……とは言わないが、しかしすじ雲が海の方に向かって流れているさまはとても爽快感がある。

（確か、すじ雲は「巻雲<sup>けんうん</sup>」といって、高層に発生する雲である。）

海から流れてくる潮風も心地いいものだった。

坂の上の病院にたどり着き、シリウスは入り口にいた中年の医者に声をかける。

「先ほどここに運ばれた2人は、大丈夫でしたか？」

「はい、すでに手術も終わっていて、今は病室で療養しています。それよりも……とんでもないことが起こりました」

医者という言葉に刑事たちは目を見合わせる。

「とにかく、その病室に入ってください」

医者に促されたのは、事故にあつた女性の病室。

ゲイルは不思議に思いながら軽くノックして、中に入る。

するとそこには。

「あつ、刑事さん！見て、見て！！！！」

今までとは見違えるほどの笑顔を見せるあの少年がいた。

そして、その後ろに。

刑事3人 「！！！！」

ベッドから起き上がって微笑む、母親がいた。

ラス「え…嘘だろ？ だって昨日は傷とかひどかったし、意識もなかったじゃん！ しかもまだ安心できないって…！！」

シリウス「言ってたよな…確かに…。しかも…」

シリウスは彼女の体を見る。

「…昨日はあった目立つ傷が、ひとつもない。…消えてる」

少年は嬉しそうに話す。

「やっぱり、神様はいるんだよ！！朝、見たんだ。綺麗な青い光が母さんを包んで、あつという間に傷が消えてって…母さんが起きた。もうどこも痛くないみたいで、あと数時間で退院できるんだ！！」

今の言葉に刑事たちは反応する。

少年は言ったのだ。

ラス「綺麗な青い光」…？ それってまさか…！！」

シリウス「…キヨウゴ君が…？」

ゲイルはその時、気づく。

「…これが、『ご褒美』か」

…塔の中でキヨウゴは言った。

「…あなたは命を張ってその姉弟を助けた。なので俺からご褒美です。…形もないし、あなた達に直接喜びを与えられるものではありませんが」

確信して思わずゲイルは微笑してしまふ。

女性は刑事たちに頭を下げ、礼を言った。

「息子によくしてもらったみたいで……本当にありがとうございます。  
この子ったら私が起きてからずっと刑事さんのことばかり話して  
たんですよ。……私が今生きているのもあなた方のお陰です」

432

その言葉に刑事たちは嬉しさを感じる。

一度は助からないんじゃないかと思っていた人が元気であるのだから。

ゲイルは彼女に優しそうな表情を向けた。

「…無事でなによりです。これから息子さんを大事にしてあげてください」

「…はい、もちろん」

最後の彼女の笑みは、『被害者』ではなく『母親』の顔だった。

\*\*\*

病院を出た3人は坂をおりている。

「なーんか、気分がぐっと軽くなったな」

「…だな。自分達が助けた人たちの笑顔はとても支えになるし、勇気づけられる」

「そーそー。あ、先パイ。さっきの『ご褒美』ってなんスかね？」

「今シリウスが言ってた『人の笑顔』のことだろう。キョウゴが俺たちに人を助けたご褒美として、さっきのあの母親を助けてくれたんだ」

そして、それだけじゃない。

「あと…あいつは俺を、過去の事件を繰り返さないようにしてくれた。きっと、さっきの子は今回の事故に関して誰も恨まないだろうし、傷つけたりしないだろう」

シリウスはその言葉に一度目を伏せて微笑した。

「それはきつと…キョウゴ君が、先パイが頑張ってることをちゃんとわかってるからですよ」

\*\*\*

一度宿に戻り、荷物を持ってチェックアウトをした3人は再び街を歩く。

「先パイ、さつきキョウゴ君は海沿い近くの街に行くんじゃないかって言っていましたか…これから俺達はどこに向かうんですか？」

シリウスの問いにゲイルは「そうだな…」と呟いてマップを取り出した。

そして地図上の一箇所を指差す。

「まず、ここが今いるセリスキュオレート」

ラス「うんうん」

そしてそのまま指を海沿いに北上するように動かしていく。

「たぶん、こっちな。次の町はイェンダン…いや…少し町にしては小さいから、ここをさらに北上して…リセラか…？このどちらかだろ」

シリウス「リセラは少し海から離れて内地側にありますね。周辺は森でしょうか」

「おそろくな。海がないから滞在するかはなんとも言えんが…海沿いの線路を辿ればここを経由するから、可能性はなくはない」

ラス「とりあえず次はイェンダンってことっスね。可能性をつぶしてくなら」

「そついうことだ」

シリウス「では、何で移動します？」

「ああ、そのことだが。キョウゴはたぶん汽車で移動してるだろつ」

ラス「そついや…この前もキョウゴ君は列車だったけど、なんであの力を使って行かないんですー？」

「お前らには言ってなかったな、あいつは『力』を使うと体力を消耗してしまうんだ。だからむやみに使えない」

シリウス「代償、ってことですね」

「そうだ。あ、それで話を戻すが…あいにく俺達に乗る汽車はしばらくない。それでさつき宿にあったパンフレットで見た、『みんな楽しんでもう！ワニに乗ってどこまでもツアー』に」

後輩「絶対ムリです」(即答)

ゲイル「……………船にしよう」

『移動手段…ワニ』はまずありえない。

それ以前に、それはツアーだ。ワニに乗ってどこまでも行って…最後に行き着くのはイェンダンでなく、『ここ』である。アホか。

ふと、シリウスは近くの細い路地を見て「あ…」と反応した。

ゲイルとラスもその方を見れば、そこには走ってくる幼い影が2つ。

姉「やあっとみつけたー!!」

弟「みつけたー。」

この前大通りで助けたあの姉弟である。

少女の手にはバスケットが握られていて、ゆっさゆっさと彼女が走るたびにゆれていた。

そのまま刑事たちにつっ込んできた2人はにいつと笑ってそのバスケットを手渡す。

「おじさん…あのね、あのね？ これたべてほしいのー!」

バスケットの中には色合いの良い果物がぎっしり入っていた。

「おとーさんがつくったんだよー！」

「だよー」

「すっごくあまいのー!!」

「すっごくおいしーよー」

ラスはバスケットの中を覗き込んで嬉しそうに目を輝かせる。

「うわぁめっちゃうまそー!!」

シリウスも穏やかにうなずいた。

「ビタミンCがたくさん摂れるな…」

…若干、喜ぶ所が違う気がするが。

ゲイルは幼い2人に微笑みかける。

「ありがとう、いただくよ」

「視点：ゲイル」

色々あったが、この町もなかなか良かった。

あと少しで俺たちはここを出て行くが…きつとやり残したことはない。

\*

\*

「視点・キョウゴ」

俺はセリスキュオレートの街並みを汽車から眺めていた。

今日もいろんなことに『力』を使ってしまったから、疲れがたまっている。

でも…悪くないと思えた。

自分は恩返しをしたのだ。

暖かい心を持っている、あの人に。

その時、風に乗って花の香りがした。

車両のどこかの窓が開いてるのかな。

花の香りに包まれた瞬間、ある予感がする。

「そろそろ…あいつと合流する頃かな」

\*

「視点：筆者」

大草原に立つ、真っ白なワンピースを着た少女がいた。

その髪は長く、淡いミルキーブラウンだ。

容姿は幼く、9歳ほどだろうか。

少女は笑顔で空を見上げた。

「次の街で待っててね、キョウゴ」

…白い花びらが、空へ舞っていく。

\*

船に乗る刑事3人。

その時、ラスが突然大声をあげた。

「あっ！！！！ … 腕治ってる！！」

包帯をとった彼の腕に、傷はなかった。

… キョウゴが助けたのは、あの母親だけではなかったようだ。

\*  
\*  
\*

刑事たちが去ってから数ヶ月後のセリスキュオレート。

街の中のある宿は今、やけにあわただしくなっている。

「ほら、みんな頑張つて！！ もう少しでゴールドが帰ってくる。それまでにパーティの準備を終わらせないと！」

従業員に声をかけていくセオール。

前に比べてその表情は明るく、声にハリがある。

その様子を見た従業員は笑って彼に声をかけた。

「なんか警察行つて服役してたにしては、前よりずいぶん元気になつてないか？セオール」

セオールは苦笑する。

「うん、あの1ヶ月は休養みたいなものだったから。少し遅い夏休み…みたいなの」

「うわ、余裕発言」

「いや…最初は怖かった警察の人が、なんか電話があった後に急に優しくなったんだよね…（妙に。）それで、待遇も本当にいいのかってぐらい良くて…」

「一体なにがあったんだよ、電話で」

「さあ…？ あ、でもパトリシアさんを刺してしまったことは本当に反省してるんだ。あんな恐ろしいこと、二度としたくない。今でも手が震えるもの。パトリシアさんが無事でよかった…」

446

…あの一件についてはまったく街に広まることがなかった。

この街に宿が多くて、この宿に泊まる人が少なかったことが理由のひとつ。

そしてもうひとつは、事件の前起こった暴走トラックの一件が起因して元々この宿に泊まっていた人は「物騒だ」と、早々に街から

出て行ったからである。

つまり事件が起こったとき、宿内に客は居なかったのだ。

それはこの宿にとってマイナスなことが引き起こした偶然である。  
これこそ、不幸中の幸い。

客足が減ることはなかったのだから。

従業員はセオールの肩をポンと叩いた。

「まあな。 おや、お客さんだ。 仕事仕事！」

セオールは従業員に笑みを返して、ロビーに下りてきた客に優しく声をかける。

「おはようございます。 今日昼ごろに、入院していたこのシェフが帰ってくるのでパーティーをやるんです。一緒に楽しんでいきませんか？」

客「パーティー？いいね！ 後でいくよー!!」

「はい、お待ちしてます。 ……いつてらっしゃい!!」

従業員「そういや、カトレアはどこにいったんだ？」

「あー、さっきから見てないね。 たぶん病院に行ってるんじゃないかな？」

\*

静かな病室内。

簡素な窓からはベール海が見えて、潮風と波の音が心地いい。

病室のベッドに上半身だけを起こして窓の外を見つめる女性。  
そして、その傍らでリンゴを切る少女。

「今日はおいしいリンゴをもらったから、一緒に食べようね？ お姉ちゃん」

切り分けられたリンゴはウサギの形をしている。

ベッドの上の女…パトリシアはカトレアに顔を向けないまま静かに…ええ」と返事をした。

その様子に、かつての過激な態度は微塵もない。

ふと彼女は呟いた。

「今日…ゴルドが退院するそうね」

「うん…。治るのが早かったみたい」

「ゴルドと…セオールに『ごめんなさい』って伝えておいて」

その言葉に、一瞬の沈黙。

カトレアは目を見開いていた。

「…！！ お姉ちゃん…」

「…私が間違っていたわ。 思えば大切なことを忘れていた。 此の海をちゃんと見たのは何年ぶりかしら。 …こんなに綺麗なのね」

彼女の顔にわずかな嘲笑が見える。 おそらく自分に向けたもの。

カトリアは、今なら言えると言い聞かせて提案する。

「ねえ、お姉ちゃん。…退院したら、あの宿に戻るって?」

しかしパトリシアは困ったように微笑して首を横に振った。

「…たぶんそれはできないわ。本当にひどいことをしてきたんだもの、皆に嫌な思いをさせると思う」

「今のお姉ちゃんなら大丈夫よ、みんな優しく迎えてくれる。これからゆっくり時間をかけて、みんなと分かり合えばいいのよ。きつとその時わかるわ、…前の宿主さんとセオールが作った宿の素晴らしさが」

「…そうかしら。…そうだと良いわね」

「帰ったら…一番最初にみんなに謝ろう? …大丈夫、私がついてるから。ひとりじゃないよ」

その言葉にパトリシアの瞳が揺れた。

「…そうね。　ありがとう、カトレア」

ようやく笑顔を見せた彼女はリンゴをひとつ食べる。

そして優しい表情で呟いた。

「……おいしい」

その表情を見てカトレアはつられて笑い、同時に思った。

お姉ちゃんはやっぱり、綺麗な人だ、と。

ふと思いつくのは、昔のこと。

両親を失って2人きりになってしまったとき、幼いカトレアにパトリシアは言った。

『…大丈夫よ、カトレア。私がカトレアを守っていくから安心して。カトレアはひとりじゃないわ』

その時の…決意がこめられていた声と、しっかり自分を抱きしめてくれていたその手の震えを、彼女はまだ鮮明に覚えている。

お姉ちゃん、今度は私がお姉ちゃんを助けるよ。

そして少女はどこまでも続く青空を見上げ、心に決めた。

第一章 Runaway

Fin.

## 第一章 I Runaway . . . Part 4 (後書き)

読んでくださってありがとうございます！お疲れ様です。

この「Chase!」という作品がどんな物語かわかっていただけでしょうか？

彼らの旅はまだまだ始まったばかりです。

次回もこの旅に付き合ってください！w

第二章は番外編をはさんで始まる予定です。

これは筆者のわがままなのですが、パトリシアさんはそこまで悪い人じゃないんだよアピールをしたいので(笑)、裏設定を筆者の活動報告のページに後々書かせていただきます！あと、セオールなど第一章限定キャラの簡単な裏設定も。

よければ読んでくださいね！

Chase! 番外編 警察庁(略)本部(前書き)

今回の話は、いつもと違う…? ?

バカらしいお話なのでさらっと読んでください!

今回の語り手は…この人!

Chase! 番外編 警察庁(略)本部

こんにちは。僕の名前は李園<sup>リエン</sup>といいます。  
みなさんご存知の通り、僕がいるここは警察庁特殊捜査班ロンドン本部です。

この長い名前、少し言いつらいですね。いつも電話の応対で僕たちも苦労しています。

12歳...ということもあってか子ども扱いをされやすい僕ですが、僕の一日の生活を見てもらえばあながち子どもではないと分かってくれるはずですよ。

では、その詳細を。

\*

僕の就寝時間は午後9時あたりです。(場合によって左右しますが)

そして朝は午前3時…まだ日が昇らない時間に起きます。

それから身支度を終えたあと、武器の台数の確認、本部の警備体制の確認…などなど、他に17個ほど確認します。

これ、結構大事な作業なんですよ？

そして、次……。

これこそ一番骨が折れるような作業なのですが、班長とラックスさんを起こしにいきます。

あ、僕とラックスさんはパートナーだと言つのを忘れてましたね。知ってる方もいるかもしれませんが…。

…で、この起こしに行く作業、それは本当に本当に大変な作業で…

班長は朝が苦手らしく、僕が起こしに行くといつも死んだように寝てます。「いつそのこと、このまま放置しておいていいですか？」なんて思つこともしばしば。

ラックスさんも朝が苦手なのですが、彼の場合それだけではないんです。

…危険なんですよ。

この前なんて起こしにきた僕に向かって寝ぼけながらミカンを投げてきました。（もちろん、よけましたが。）

さすがにそのときは「寝てるあなたの顔にミカンぶち込みましょうか？」って怒りがこみ上げました。（笑）

こんな体験ばかりしていると、面倒な人間と接するよりかは利口な機械と接していたいと思いますか……

…ま、昔に比べれば悪くないかとも思います。

……………。

…話を戻しましょう。

それで、みなさんが起きた後は班長の指示通り働いて、また一日が終わります。

\*

…ね？そこらへんの大人より僕の方が大人なところあるでしょう？

僕がそれを強調するのは、子ども扱いが嫌だからです。

「子ども扱い」ってよりも、「子どもだから」という理由で悪事を働いた子どもに対して甘やかす大人が嫌いなのですが…

…まあ、どちらにしろ子ども扱いが嫌なのだと覚えてもらえれば、それで結構です。

班長たちは…子どもからお年寄りまで、よほどのことが無い限り対等に接してくれるから嫌いじゃありません。  
朝以外は。わがままさえ言わなければ。

\*

そういえば話は変わって、この前全国各地を移動しているゲイルさんからお土産が送られてきました。

\*

班長は一番最初に僕にお土産を渡してくれました。  
なのでそれは今自室にあります。

班長には…電話で言っていた通り」（そこら辺の）石のつめ合わせ  
が届いたそうです。

班長の部屋に来るのが遅かったラックスさんは状況がわからなかつ  
たようで…

\*

「視点・筆者」

「ラックスく、これラックスの分ねー」

班長は寝起きでうとうととしているラックスにあるものをさしだす。

それは……ワニの頭の（アニメ調）髪留め。

ゲイルとラスとシリウスの誰が選んだのかわからないが、このセン

スのなさは天下一品である。

ラックスはそれを見て、

「ああ？なんだそりゃ。 いらねー。」

一瞥して背を向けた。

その時、班長はボソツとつぶやく。

「え〜？せつかくゲイルが送ってくれたのに〜？」

ピコーーーンッ！！（ラックスの中から聞こえた正体不明の音）

「あ…兄貴が、俺に……？」

その時部屋のドアが開いて2人の男が入ってくる。

彼らの顔や体形はほぼ同じで双子であることがわかる。背はさほど高くない。少し細身だろうか。年齢はおそらく16か17歳あたり。彼らで違うのは青い髪と赤い髪、ホクロの位置くらいだ。

この2人も班のメンバーである。

青い髪のほうがシス、赤い髪のほうがトランスだ。

(化学で出てくる名前だが、あまり化学とは関係ない)

そんな2人を押し飛ばしてラックスはワニの髪留め(何気にでかい)を大事そうに持ち上げて目を輝かせる。

「この美しい緑の塗装、つぶらな黒の瞳、たくましいキバ…!!  
さすがはゲイルの兄貴…!!!!」

いやいや、ゲイルが選んだかはわからないのだが。

ってかさっきまでの興味のなさはどこにいった？

そんなラックスの様子を見てシスとトランスは「うわ…」と顔を引  
きつらせる。

シス「なに、この人…髪留め持ってニヤけてるんだけど」

ラックス「ああ？うるせーし。黙れや。ほしいつつつてもあげねー  
からな」

トランス「いらねーし。ニヤけてんのキモいし。つつかシスに『  
黙れ』とか腹立つんだけどー」

ラックス「んだと！？テメーらの方が、いっつもベタバタくつつい  
ててキモいし！」

トランス「だって俺らお互いのことだーい好きだもん。なあシス  
？」

そう言いながらトランスは腕をシスの腕に絡ませる。

シス「うん」

その様子にラックスはげっそりとした顔をした。

ラックス「……………。…………マジで寒気してきた」

そこに班長と李園が会話に入る。

「ラックス、あまりケンカしないでよ」

「この2人の特技は、シスさんが『精神破壊』、トランスさんが『身体破壊』ですから…ケンカしたら面倒です。僕らが」（さりげなく『僕らが』を強調。）

ラックス「んなこと知ってたよ！でもこいつらホント腹立つ！！」

するとシスはため息をひとつ。

「トランス、もういいからどっか別の部屋いこっよ」

「だなー。ラックスマジ死ねーバカーーじゃあなー。」

そしてそのまま2人は部屋を出て行った。

果たしてなんのためにここに来たのかがまったく不明である。

ラックスはムカムカしながら低くうめいた。

「なんだってんだ、あいつら……」くたばっちまえ G o t o h e l l ……!!  
( 俗語です。扱いには注意しましょう。 )

しばらくしてからラックスは再びワニの髪留めを眺め、今日はつけていた自分の髪留めと付け替えた。

そのままパアツと表情を明るくして李園を見る。

「なあ李園！ どうだ、どうだ！?!?」

「……はい、ワニの頭部がラックスさんに突き刺さってるように見

えます」

……。

ラックス「……。 (ズーンとしてる)」

班長「李園……ラックスがガツカリしてるよ……」

李園「事実を述べたまでですが…… すみません」

ラックスはうつむいたまま手をひらひらと振った。

「いや、いい……。兄貴がくれたものが似合わない俺の責任だ……」

班長「そうだよ……ラックス。責任を負うことで人は強くなれるんだ……」

「うつせえ!!!ハゲ頭ああっつ!!!!!!」

「え、なんでえええ!?!」

李園「班長が言ってもまったく説得力ありませんからね、それ」

班長「ひどい!?!」

ラックス「…もういい。部屋に飾る。ところで李園は何もなかったんだ?」

その言葉に李園はギクツとする。

李園「……………」。

ラックス「?」

「…気にしないでください」

「あ??？」

ラックスのわけがわからないとでも言いたげな表情を背に、李園は自室へと向かっていった。

\*

「視点：李園」

大人びている僕の自室。しかしそのなかで目を引くものがひとつだけ置いてある。

それが僕へのお土産。

僕はそれを困惑した表情で持ち上げて見つめる。

それは……

かわいいネコの、ぬいぐるみ。

「……………ネコ……………」

やっぱり僕は子ども扱いなのか。

でもこれは信頼できるあの人からの贈り物。粗末にはできない。  
大事にしなければ。

僕が真顔で、そのぬいぐるみの顔を両手でひっぱるとぐにーんと横  
にのびる。

…やわらかい。面白い…かも。

「名前は…ロドリゲスかな」

良い名前だと思う。君ならたくさん僕の愚痴を聞いてくれそうだ。

…まあとりあえず今日からこれを持って寝ようかな。

C h a s e !

番外編

F i n .

**Chase!** 番外編 警察庁(略)本部(後書き)

ロドリゲス…はたして良い名前なのかわからない…。

そんなこんなでこの話は終わりです！

シスとトランスというまたまたおかしなメンバーが出てきました。  
彼らはまた登場するので、覚えておいてくださいね！

今回はイェンダンです。過去の話が(どうでもいいのを含めて)  
語られます。

それでは、次回でまたお会いしましょう。

苦い思い出を、語る。〜ラス編〜（前書き）

セリスキュオレートを出た刑事3人。

船の中で、ラスは語る。研修生時代の、苦い思い出を…。

今更ですがカギかっこ「」のすぐ後ろに続いている言葉は、『セリフだけでなく流されてしまうようなどうでもいい言葉』ということですよ！！

とりあえずどうでもいい話なので、さらっと読んでもらえると嬉しいですよw

それでは、どうぞ。

苦い思い出を、語る。〜ラス編〜

船室の中で話をする刑事3人。

その手には前の街、セリスキュオレートで幼い姉弟からもらった果物を持っている。

ラスはりんごを食べながら「うーん…」と考え込むような声を出した。

もちろん、果物の味に対してではない。問題は別のこと。

「なーんか、今思ったんですけど…俺らって『花』がありませんよね」

ゲイルはその言葉に首をかしげて不思議そうにラスを見る。

「…？ 花がほしかったのなら、さっきの街で買ってあげばよかったですな」

まあ…純粹に言葉を受け取ればそうなるのだが。

シリウスは首を横に振った。

「違いますよ、先パイ。 … 『女』がいないってことです」

ラスはシリウスの補足説明にうんうんとうなずく。

「そうそう。なんつーか、この班自体に花がないってゆーか…」

しかしゲイルはこれにも首をかしげた。

「あの班でも女性はあるじゃないか。サポートについてもらいたいのなら、頼んで呼ぼうか？」

確かに、女性はあるのだ。ゲイルの言葉は間違っていない。

でもラスはその言葉に血相を変えた。

そして叫ぶ。

「けっ…結構ですっ!!! つっーかアレ、女じゃないですよ!!!」

478

ラスの言葉に目を丸くするゲイル。

「そうか…?」

そうして横のシリウスを見て、目線で同意を得ようとする。…彼はゲイルから視線を背けた。

……。

ゲイル「……お前もか」（微妙に冷たい視線）

シリウス「……すみません」

どうやらこの男もラスの意見同様、班のメンバーの女性を『女性』  
だとは認識していないようだ。

すると黙り込むシリウスを察したのか、ラスは口を開く。

「先パイ、…俺たちは心に深い傷を負っているんです…」

ゲイル「？」

ラス「あれは、研修生の時でした……」

そう語り始めるラスはどこか遠い目をしていた。

… ippitai kono ototachi ni donna kowaka aru no ka.

たいした内容でもないし、どうでもいい内容である。

これは、この物語を読んでいたあなたに対する筆者からの忠告だ。

…よければ飛ばさずに読んでください…

\*  
\*  
\*

数年前、夏の夜のこと。

今の時間帯は夕食が終わった後の自由時間である。

場所はロンドンにある警察学校の寮だ。

『実録！！本当にあつた怖い話！！ スペシャル』

研修生が住んでいる寮の大広間にある特大テレビに映るのは、ベタな響きの番組。

ラスとシリウスは大広間のイスに座りながらテレビの正面を陣取っていた。

「おゝ今年もまたやるんだ、この特集！！」

「毎年恒例だからな。ほかのヤツらも結構見に来てる」

ラスはシリウスの言葉にコーラを飲みながらあたりを見回す。その言葉の通り、大広間には他の研修生がぞろぞろと集まってきた。

研修生の大半が肩にタオルをかけているのを見てラスはニヤツと笑う。

「ハツハツハ…俺たち勝ち組だよな！！ 早めに風呂あがってよかった！特等席じゃん、テレビの真ん前！！」

…今さらだが、こいつが嬉しがる程度は低い。ガキだ。

シリウスはラスにひとつうなずき、近くのテーブルの上にあったテレビ欄を眺める。  
テレビの方ではパッと画面が変わって軽快なメロディーとともにCMが流れ出した。

「今が10時で…終わるのが深夜1時だから…3時間か」

3時間とは、「この番組が」ということである。

「1時!? けっこう長いじゃん! ま、他のヤツらは眠くなって途中で部屋戻るかもしれないけど、俺らは大丈夫だろ? 夜はめっばう強いはずだし」

「もちろん、最後まで見れる。でも……これは俺の考えすぎかもしれないが」

「? ……なに」

「…深夜にかけて放送するってことは、番組の最後のあたりが超ド級に怖い可能性がある」

……。

「まつ…まあ全然そーいうの平気だし、だいじょぶじゃね??」  
この部屋明るいし、ひとりじゃないし!」

…その声が裏返ったのは言うまでもない。

「……まあいいけど。あ、そろそろだな」

テレビが騒がしいCMから一気に暗い画面に変わり、研修生でいっ

ぱいになった大広間に広がるのは、沈黙。

「こういう番組を真剣に見るあたり、研修生たちには可愛い(?)  
—  
面があるようだ。」

\*

「ぎゃああああああっ!!!!出たああああああっ!!!!」

シリウスはテレビの中で幽霊が出た瞬間と、同時に響いたラスの豪  
快な叫びにビクツツとしながら片耳をふさいだ。

「ラス、うるさい」 耳痛いんだけど。

…現在、深夜12時30分。

2人のまわりにはすでに誰も居なくて、さらに大広間の照明が暗くなっていた。

「わっ…悪い悪い…っあああああまた出たあああああ！！」

「痛い痛い。ラスさん、君ちょっと俺の腕つかみ過ぎ。爪立てて

る

「だつでえええ…」

「…お前今『だつて』に全部濁点だくてんついてたんだけど」

「つーか！ つーかさあ！！？ …なんか周りに人いないし、しかも薄暗くね！！？」

「…なぜ、もっと早く気づかない。」

「みんなお前の予想通り部屋に戻ったし、広間が薄暗いのは、節電してるから」

「え……!!!? マジかよ……、だってこの雰囲気『デート』じゃん！  
しかも相手がシリウスってどうよ、俺の青春……!!」

「悪かったな、俺が相手で。」　　「ってか、これのどこがデート？

この状況での問題は、デートがどういこうの問題ではなく、番組の怖さに拍車がかかったことではないのだろうか。

いささか、疑問である。

「先に帰ったあいつらもあいつらだ!!女はしょうがないにしろ、男なら怖<sup>お</sup>じ気<sup>け</sup>つかずに最後まで見ろっての!!」

「……俺の腕を必死に掴んで今も離さないアンタが言うことですか。  
痛いよ。」

「……。……うるせーな　　見ることに意義があるんだよ!!」

「あ、今窓のところに（幽霊が）いた。」（テレビの中の話）

「えっ見逃した！ どこっ？窓のどこっ？  
…なんか居たああ  
ああああっ！…！！」

「だから、居るって言ったじゃん」 何聞いてたの、こいつ。

\*

…ここからはラスの言葉だけでテレビ番組の内容をご想像ください。

\*

「うわっ…うわわわっちょっとヤベえって、なんで転んでんの主人公…!! ほら、早く起きろって!! ああもうすぐ傍まで来てるっての!! あっ、おふだ使え!! あいつを殺せえええ!!」

「幽霊なのにこれ以上死んでどうする」(どこまでも冷静なツッコ  
三)

「えっカバン開かない!!?なんで!!? つぎやあああ!!!!  
長い髪の毛めっちゃチャックにからまつてる!!?ってかこの先に絶対いるだろ、霊が!!俺は知ってるんだからな、絶対この先に霊が…あれ、いない?…って後ろおおおっ!!…ゴホッゴホッ」

「叫び過ぎてむせてるし。」ってか、うるさい。

…みなさんにも、経験があるのではないだろうか。

自分が怖がりでも、まわりで自分以上の怖がりがあると、なぜかわりと冷静になれることが。

シリウスは怖がりではないものの、今はその状況である。

\*

20分後…。

「あー…やっと（霊が）消えた…。これでやっと終わったんだ」

「あの家を捨てて新しい家に住むことになったんだな。あの家は呪われてるし…」

テレビの中で安堵の笑みを浮かべる親子。

娘「綺麗な家だね、お母さん！」

母「そうね。もうあんな思いはしたくないわ」

家の中を楽しそうに駆け回る娘。

ふと足を止める。

娘「？ お母さん、ここって新築よね？」

母「ええ、そうよ」

娘「……この部屋、変だよ。赤い…血みたいな手形がたくさん

…」

母「…!!!? そんな…!!」

そして後ろの母親を見た娘は硬直した。

「お…お母さん…」

なぜなら、彼女の後ろには…

ラス「ぎゃあああああああ出たああああつ!…!…!」

そして、深夜1時。

…ズー……ン……。 (2人ともうつむいてる。)

シリウス「確かに…最後のは寒気がした…」

ラス「シ…シリウス…番組の最後の文、見た…？」

「…なんだ？」

\*

「『……今、あなたの後ろにもいるかもしれない……』だって!!  
怖ええっ!!」

「それは…そういう番組によくある決めゼリフだ。」

「でっ…でもよお……」

そうは言っても、気になるものである。

2人は息をのんでバツと後ろを向く。

……が、何もいないので安堵のため息をついた。

シリウス「……そろそろ部屋に戻ろう」

ラス「……だな。」

\*

大広間から出ると男子寮と女子寮がある方向へ続く廊下がのびている。

（この警察学校の寮は公共のスペース以外が、建物の中で男子寮と女子寮に分かれているのだ。）

……そして、その長い廊下の前で立ちすくむ2人。

なぜなら。

シリウス「なんで……」

ラス「電気ついてないんだあつ!!?!?」

……真つ暗だったのである。

かろつじてうつすらと廊下の床や壁が見えるのは、左上にある横に細長い窓から月明かりがほんの少し入っているからだ。

「ラス、これ見る」

シリウスが廊下の入り口に貼ってある張り紙を見つけて指をさす。

「ん……？」

ラスは目を凝らしてその文字を読んだ。

そこに書かれていたのは。

「なになに、……『夜の12時以降は消灯すること』……なんだこれっ！！？」

「……節電だ」

再び出てきたその2文字。

この寮はかなり積極的に節電されてる様子だ。

「え……こんな暗い中歩いてけつてのかよ……怖いよ………ぞけ  
んなっ……!」

そう。何を隠そうこの廊下、極端に長いのである。

廊下はL字型で、長い廊下を直進していくと突き当りに女子寮の廊下の入り口につながり、女子寮に行かずにまがってさらに長い距離

を直進するとようやく男子寮なのだ。

今2人がいるのはこの廊下の入り口で、向こうに見えるはずの女子寮への入り口が、暗くて見えない。

シリウス「…とりあえず歩くしかないな」

ラス「いやだっ！ もういーじゃん、電気つけてごうー!?!」

「そしたら誰が消すんだよ。廊下のここにしか電気のスイッチないだろ」

「そのうち誰か気づいて消すよ!?!きつと!?! ……たぶん」

「…人任せかよ…」

「だったら…！ お前この真っ暗な中歩いてけんのか！？」

ラスに背をドンツと押されて廊下に出たシリウスは無言で暗闇の中廊下を歩いていき…やがて無言のまま帰ってきて、ラスに告げた。

「……………電気…つけようか」

…お前もか。

「ほら、やっぱり怖かったろ！？ よし決まり。電気つけてくぜ」

やがてカチツとスイッチの音になった。

ただ単に電気をつけて廊下を歩くだけなのに、いちいち時間がかかるのはこいつらの仕様である。

それは、廊下を歩き出して数分経った時のこと。

10m先には横へのびる廊下がある。  
それが男子寮に続く廊下だ。

もちろん、目の前は女子寮である。

\*

その時。

2人「

ッ!!!」

突然、…フツと廊下の明かりが消えた。

「え…消されたっ!!!?」

「…冗談だろ…男子寮まであと半分はあるのに…」

「もーやだ!!! シリウス、これは緊急事態だ。 …腕組んで  
いい?」

……。

「…さすがにイヤ。せめてもう少しマシなものにする」

「えー…んじゃ、お経唱えながら二人三脚すつか!」あむな  
みだぶつって!!

「バカか、お前ひとりやってる。」しかも、南無阿弥陀仏だ。

空元気が混じった軽口をたたいた後に2人はとりあえず歩き出す。

\*

しかし、恐怖の体験はこれで終わるはずがなかった。

少し歩いてラスが足を止め、シリウスも同じように足を止めた。

2人は感じたのだ。ある違和感を。

「なっ……なあシリウス……」

「……お前も気づいたか」

「なんか……足音……余計に聞こえない？ あ、あれみたい。『ひぐらし』のなんとか、みたいなの？」

……あのマンガを知ってるのか、というツッコミはどうか心の奥に

しまいこんでほしい。

シリウス「でもって、背後に何かの気配がする……」

……。 ( 2人して息を飲む。 )

ラス「…覚悟決めた？」

シリウス「…ああ、決めた」

タイミングを計って2人は一斉に後ろを振り返る。

……そして背後に、いたのだ。

……髪の短い……女が……。 (間近に)

「ぎゃあああああああああ出たあああああっ!!!!!!」

当然のように叫んだラスの口がすぐにシリウスの手でふさがれて、すぐに耳元でささやかれた。

「ラス、ラス。 …人間だ、れっきとした」(小声で)

「…え、うそお？」(小声で)

ラスは暗闇の中で目を凝らして女をよく見た。

確かに、人である。

でもなぜだろう、怒っているように見えるようにな…

女「ラストイウス・フォルカああっ！！！！」

ラス「はい、なんでしょうカリル様あつ!!  
……って、え??」

ラスは目をパチクリさせて、条件反射のように発した今の自分の言葉  
を頭で再リピートさせた。

カリル、さま?????

ラス「えっと…カリルさん…ですかね？」

女「それ以外に誰がいるのよ、研修生」

彼らの目の前にいる彼女は、カ ril と呼ぶ名前の女だった。くるくるとカ ril したセミロングの金髪を持つ綺麗な美人で、寮の管理を任されてる人物である。

しかしこのときは綺麗、というよりも恐ろしい、という表現の方が合っていた。

ラス「え、えっと…いったいどうしました…？」

カ ril 「どうしたって…あなたわからないの…!? 張り紙に『夜の12時以降は消灯すること』って書いてあったでしょう…!」

「あ、あれのこと? …だって!! 真夜中の廊下って怖いじゃないスか…!」

「あなたが怖い番組を見たのが悪いんですよ…!? 自業自得だわ」

「誰だって見たいじゃないスカ、あの番組!!」

「口答えするんじゃないわよ、研修生!!」

どうしようもない言い合いの後、変な間があつて。

次に聞こえたのは、

ゴッソッ!!

「……」

…鈍い音と、ラスの悲痛な声。

シリウス「……ラスッ！！」

ラスの体が彼女の底知れないパンチによって吹っ飛び、シリウスは叫んだ。

同時に、彼は判断する。

ラスが吹っ飛ばされた先にあるのは女子寮。

女子寮にたった一步でも男子が足を踏み入れようものなら、罰金と反省文が待っている。(自分にも。)

シリウス(頼む…! 間に合ってくれ…!!!!)

そう本気で懇願しながら手を伸ばし、宙を行くラスの手を掴んだと同時に自分の方へと引っ張った。

「……ッ」

ラスがシリウスとともに床に倒れこんで、すかさず2人は足元を確認する。

自分たちの足は……女子寮の5cm手前であった。

「シリウス、お、俺たち罰金免れた……！？」  
まぬが

「……みたいだな。よかった……」

シリウスの言葉の後に2人は安堵のため息をつく。

そしてラスはすぐに立ち上がってカリルに反論した。

「ちよっ…殺す気っスか!!? シリウスいなかったら今頃俺、罰金&反省文でしたよ!!」

「もちろん、殺す気よ」(あっさり)

「ひいっ!」

「これくらいで動じないでよ。そんなヤワな研修生をここから送り出す気なんてさらさらないわ。…それより、シリウス・レイター」

シリウス「…なんです?」

「優秀なあなたがラスティウスをかばう理由は何? 私はたまたま、あなたが理解できないわ」

カリラの問いにシリウスは少し押し黙った後に答える。

「…俺たちはパートナーですから。罰金とかも払いたくないです  
しね」

「……そう」

彼女はシリウスの言葉に曖昧さを含む言い方でうなずいた。

その理由に納得しているような、理解が追いついてないような。

そこにラスが会話に入ってくる。

「あのー…カ ril さん？俺も一応良い線いってると思うんですけど…」

「あなたは運が良いだけじゃない」

「うぐっ……」（何気に凶星。）

カ ril 「…まあいいわ。とりあえず、今度から無駄な電力は使わないで。灯りがほしいなら私に言いなさい。ろっそくの10本セツトをあげるわ」

そして彼女はスタスタと女子寮の方へ歩いていく。

ラスはムスツとした顔でつぶやいた。

「…なんだよ、ちょっとぐらいいーじゃんか、あの節電女……」

その瞬間、彼女の足音が止まり。

「ラスティウス・フォルカ!!!」

ラス「はいいいっ!!! なんでしょうが、カリル様!!!」

「なにか、言ったかしら…?」(怖いオーラ)

「いつ…いえいえ、なんにも!! いやあ素晴らしい人だなあって  
!?!?!」(もちろんウン)

「あら、そう？ それより…あなたたちの部屋の水道代、高いわよ。歯磨きの時はしっかり水を止めなさい!!」

「そんなのすぐに忘れますよ……」

「ラースーティーウースー……!!」

「申し訳ないっス、二度と言いません!!」 (平謝り)

「よろしい」

そこまで言い切って、ようやくカ rilルは女子寮の自分の部屋に入っ  
ていった。

その姿をしつかり確認した2人は、何度目かのため息をつく。

「怖え〜…」

「節電だけでなく、節水もか…」

「もうやだ。 あんなに怖いもの（カリルさん）見たらこの廊下なんて、もう怖くねえわ。 さっさと帰ろ」

「ああ、だな。 ところでラス…殴られたところ、大丈夫か？」

シリウスが心配して声をかけると、ラスは痛そうに腹をおさえた。

「……………痛い」

「…だろうな。それに効く俺の特製の薬、つかうか？」

「遠慮したいところだけど……今回は使うわ、作ってくんね？」

「……、…わかった」（アレを使うとは、相当ひどいんだな……）

\*\*\*

…と、いうわけで。

ラス「はああああ……」（深いため息。）

気分が沈んでるラスを見てゲイルは苦笑した。

「よく、頑張ったな……」

「ホント俺頑張りましたよ……。まさか節電ごときであんなパンチ食らうなんて、思ってもなかったんです……」

……それが、彼のトラウマのようだ。

まあ確かに、女性に殴られたのだから男としての威厳的にはつらいものがあるのだろう。

それにしても…はたしてゲイルはちゃんと覚えているだろうか。

ラスとは反対側に座って、同じくうなだれてる、もう一人の後輩がいたことを。



苦い思い出を、語る。〜ラス編〜（後書き）

はい、ラスの痛い思い出でした…。

そしてゲイルの隣でうつむく、もう一人の後輩…。

次回は彼の苦い思い出です。

第二章まで、まだ間に番外編らしきものが入ってきますが一応よろしく願います…！！

苦い思い出を、語る。〜シリウス編〜（前書き）

またまたどうでもいい昔話です。

どうやらこの班には怖い女性しかいない様子・・・。

そんなこんなでシリウス編、どうぞ。

苦い思い出を、語る。〜シリウス編〜

…さあ、次はもう一人の後輩の苦い思い出話だ。

ゲイル「まあ、カリルの話はざっと聞いたが…ラスは苦い思い出をしたと言ってもシリウスはそうでもないんじゃないか？」

そう軽く笑ってゲイルが隣のシリウスを見たとき…信じられないほど暗いオーラを放ってうつむいてるのを見て、ぎよっとした。

「おい…シリウス？」

シリウス「先パイ…俺にも苦い過去があるんです」

「…？」

「あれは、同じく研修生の時でした…」

顔をあげて語りだすシリウスは先ほどのラスと同様に遠い目をして  
いた。

…読者の皆様の中には、なんとなくこれもたいした内容じゃないん  
だろ？と思う方がいるかもしれない。

まったく、その通りだ。

彼ら…刑事たちが話す会話はどつでもいい話が大半である。

\* \* \*

ある任務の時のこと。

上半分が倒壊し、2階ほどの高さになった廃ビルの中。

ここが今回の現場だ。

どうやら爆発があったらしく、ラスとシリウスが所属する研修生チームはその被害者を瓦礫がれきの中から救助していた。

そして搜索開始から4時間半経過してほとんどの人間が救出された今、2人はビルに残って未だ助けられていない被害者がいないか最終確認をしている。

「ん…そろそろ居ないかな」

「でも、まだ残っていたら大変だ。最後に一回手分けして1階部分を探してみよう」

「だな」

そんな会話をかわして、お互い反対の通路を歩き出して、1分後。

…ギギッ…ギギッ…

不可解な音がした。

言うならば、きしむ音。

ラスはその音を耳にして足を止め、天井部分を見上げる。

「……………？　なあ、シリウス」

そして、首をかしげながら少し遠くにいるシリウスの方を見ようとした、その時。

ガラガラガラガラッ！！！！

…視界が砂煙で覆われ、耳は轟音に貫かれて、ラスは一瞬鼓動が止まるような気がした。

だって、その先には。

「そんな……、……シリウス……？」

1階の天井部分だった2階の床がシリウスのいた場所に崩れ落ちたようだ。

「ウソだろ……シリウス……！！！」

ラスは全力で走り、瓦礫の山に向かってその名を呼ぶ。

周りにその姿がないのだから、この中にいるに違いない。

…しばらくして声が聞こえた。

「……、……ラス……？」

コンクリートの山の中から、くぐもった静かな声。

「シリウス！？ 生きてるんだな！？ ちょっと待ってる、瓦礫どかすから……！」

そう言って瓦礫をひっ掴むラスの手から血が出ていた。

さっき救助の時にコンクリートから突き出た鉄骨で負傷したのだ。

だがこれは相方の命にもかかわる。

そんなことなど考えてられるか。

その時。

「…………どけ、ガキ研修生」

低めなトーンの声が聞こえる。

ラス「あ？」

次の瞬間ラスは誰かにトンツと横へ軽く押された。

???「手に怪我してるんだろうが。だから手出すな」

その人物は背が高く、長い深紅の髪を持っていた。しかし、逆光でいまいち顔がよく見えない。

彼はどんどん瓦礫をどけていく。

とても一人でやってるとは思えないスピードだ。

ラスは少し近づいて……絶句した。

……『彼』ではなかったのだ。

「……なんだお前。人の顔見てないでパートナーの心配をしたらどうだ？」

『彼』は……女だった。

男らしい女というか、なんというか……。

そして最後のコンクリートを持ち上げて投げ捨てた女とラスの視線の先には足を負傷したシリウスの姿があった。

もちろん助けられた本人のシリウスもラスと同様に女を見て驚愕する。

「え……？」

????「……そういえば名乗るのを忘れていたな。私の名はアスラだ。覚えておけ」

後輩2人「……………」

いや、さすがに「女かよ」とは言えない。

男女差別の面でもそうだけど、それ以前に言ったらこの方にぶちのめされるのでは…という考えがシリウスの頭に浮かんだからだ。

実際、彼女は女性でありながら男性と張り合えるほどの力を持っている。

今の瓦礫をよける作業を見てればよくわかることだ。

おそらくまだ研修生であるリスとシリウスが相手になっても、負ける。

アスラ「そこのお前、足を負傷してるな？ 歩いたら悪化する。動くなよ」

アスラはシリウスの足を見てつぶやき、そして…

2人「

！！！！！！！！！」

…シリウスの体を、軽々とかつぎ上げた。

アスラ「外まで連れて行ってやる」

淡々とした低めな声に、ぎよっとした顔でシリウスは肩口の女を見る。

今、なんて言った……？

シリウスはめずらしく慌てて声を出した。

「はいっ？　ちよっ……いえ、結構です！！本当にもう大丈夫なん  
で！！！！」

しかし、必死の抗議もまともに受け取ってもらえず。

「…ガキが口をはさむな」

…その一言で、会話がストップ。

……冗談じゃない。

シリウスは血の気が引いていくのを感じた。

助けてもらったことは確かに感謝するべきだ。

だが！

女に助けられ、しかもかつがれてくるなんて「情けない」としか言いようがない。

この男にも、社会的体裁というものがある。

そのとき。

ラス「ちょっとストップ!! 待てよ!!!!」

アスラの前にラスが立ちふさがった。

もちろん彼女は怪訝な顔をする。

「…なんだ、ガキ」

「そいつ、俺が運んでくよ」

その言葉にシリウスが目を見開いた。

アスラ「だからお前は怪我をして…」

ラス「そーゆー問題じゃねえんだよ!!」

…その言葉の後ろに「男のプライドがかかっている」「という一番大事なフリーズを心の中でつけ加えておこう。

今の言葉を受けたアスラは前方の金髪の少年をじっと見つめて、数秒後に何かを理解したかのように目を一度伏せた。

しかし、次は表情を戻してキツと少年をにらみつけ、イラついた口調で一言。

「……………言葉使い」

言葉はそこで終わったが、目線が告げている。

…「今すぐ直せ」と。

その視線の裏に隠されたメッセージを受けてラスはハツとして、

「………そういう問題ではありません」

…言い直した。

アスラは軽く息をついて、かついでいたシリウスをおろしてラスに預ける。

どうやら話のわかる人間のようなだ。

そして彼女は出口に向かって歩きながら、2人の方を見ずに口をひらいた。

「…紺色の髪ヤッの男」

シリウス「…？ …はい」

「お前のパートナーの目上に対する言葉使いを徹底的に正せ。このままでは社会に通用しないぞ」

「…はい。相方が、申し訳ありませんでした」

「よろしい。…だが」

「？」

アスラは一度振り返る。

逆光でよくわからないが、その表情は少し笑っているようにも見え  
た。

アスラ「そいつの…自分の相方を思う気持ちは、悪くない」

彼女はその一言だけ告げてまた先に歩いていってしまつ。

シリウスとラスは顔を見合わせる。

今の言葉はどついつ意味だろうか、と。

答えは彼女の言葉通り、明確だった。

つまり、2人のパートナーとしての絆が認められたのだ。

そうとわかった瞬間に、なぜかむず痒い心持ちになった2人は互いに顔を背けて、シリウスは笑いながら彼女に返事を返した。

「……はい」

\* \* \*

ゲイル「…？ 聞いた感じそこまで悪くないじゃないか」

ゲイルの言葉に首を横に振るシリウス。

「いえ…その後です」

ラス「あの時、シリウスがアスラさんによって助けられたのも、かつがれたのも見てたやつが一人居て……」

ラスもそこで口をつぐむ。

……。

つまり、それは…

ゲイル「…広まったのか」

シリウスはその言葉に苦い顔をしてうなづく。

ラス「それからしばらくの間、その話は『今もっとも熱い話題ラン

キング』で男子寮・女子寮でともに1位を獲得するほどだったんすよ……。シリウスはみんなからクールな印象を受けてたから、たいしたことじゃなくても余計に」

シリウス「本当に……人って怖いすよね……」

……どうやら軽い人間不信に陥るほどのことだったらしい。心を強く持ったらどうだ。

でもまあ……いついづことは若い頃だとよくある話なわけで。

「お前も、よく頑張ったな……」

ゲイルは苦笑しながら両脇でうなだれてる後輩の頭をぼんぽんと叩いたのだった。

\*\*\*

しばらくして船室の窓から次に降りる陸地が見え始めたころ、ゲイルは煙草を取り出しながら思い出したかのように言う。

「そういえば…昔ヴィトとアスラと…あいつと同じチームだったこ

とがある」

シリウス「『あいつ』って…班長のことですか？」

「ああ。まああいつのことはいいとして、彼女はアスラその頃から強い女性の象徴だったよ。彼女は俺の同期なんだ」

ラス「先パイと？信じらんねえ…」

シリウスはラスを見た。

「そつえばアスラさんに関してはいろんな伝説があるよな」

「ああ。あの人は度を越えたフェミニストだからな。女性の差別撤廃のために村でひと暴れしたとか」

ゲイル「それだけじゃないぞ。彼女が率いるチームに配属されたら…どんなに意志が弱い男でも最高4ヶ月までには、頼りがいがある女性に対してのエスコートや作法をわきまえたヤツになって帰ってくる」

さらっと告げたゲイルの言葉に一瞬言葉を忘れる2人。

ラス「…その4ヶ月間にいったい何やってんのか……」

\*

場所が変わってロンドン。

班長が鳴り響く電話を取ると、受話器の向こうで低いハスキートーンの声がした。

「やあ〜！！久しぶりだね、アスラ〜！」

「…なあ、今回お前が私のチームによこした…あの礼儀作法さえわきまえないガキどもはなんだ？」

「あ〜、その子たちを君のところまで厳しく鍛え上げてくれない〜？  
訓練が終わったら今度ケイオスのところに入れて楽しくやらせるからさあ」

こんな口調であるが50代のメタボなおっさんであることを忘れてはいけない。

やがて受話器の向こうからため息が聞こえる。

「…まるで私のチームが『地獄』みたいな物言いじゃないか。まあ、間違っではないが。私は今ロンドンから離れて任務の途中だ。そいつらを鍛えるのはそれから構わないな？」

「ああ、それでいいよ。よろしくね。」

「…了解。　そっぴゃあ…あの時のガキはどうしてる？」

「んー？シリウス君とラスティウス君のことかい？　今はゲイルと一緒に任務についてるよ。」

「…！そうか、ゲイルの任務に同行するやつでお前が引き当てたのは、あいつらだったんだな。お前、クジで偶然引き当てたと聞いたが…本当に偶然か？」

笑いを含んだその言葉に、班長は窓の外を眺めながら笑みを浮かべる。

「オあ…どつだろつね？」

「…まあいい。あいつらなら、きつとつまくやっていけるだろう」

\*

電話口の向こう側…、某所の一室にアスラはいた。

カーテンを閉め切ってるせいで暗い部屋の中、ランプを机上に置いて脚を組みながら受話器を持っている。

その表情は電話の声の通り、微笑していた。

…さて、これから何かが起こりそうな雰囲気である。

それは大騒ぎか、はたまたどうでもいい出来事か。

そのことについて知る者は、未だ居ない。

F  
i  
n  
.

苦い思い出を、語る。〜シリウス編〜（後書き）

さてさて、後輩たちの昔話は一旦終了！

次回はいつたいどうなるのか・・・？

筆者の活動報告も更新するつもりなので、よければ見てやってくださいww

雨の日に、あなたと。(前書き)

…俺の記憶の中に、あなたはいつも居た。

爾の口で、あなたと。

「…？ …どこ、行くの？」

「俺の家だ。体が冷えてるみたいだからそこで温まっていけよ」

…あなたは、なんでそんなに優しいの？

俺はあなたに、何もできないのに。

\*  
\*  
\*

初めて入った彼の家は、新鮮だった。

特にすごい何かがあるわけではない。

でもこの人がここで生活してるんだと思うとなぜかどんなものにも興味が湧いてしまつて。

たとえばベッドのシーツや布団が少し乱れてるのは、きっと朝こころを出るとき急いでたんだろつな…とか。

でも朝急いでた割には食器とかちゃんと洗ってから家出たんだな…とか。

するといきなり。

…ボスッ

「うわっ」

視界がいきなり青いもので覆われた。

これは…タオル？

そのまま頭をがしがしとタオルで拭かれてやっと解放されたとき、彼の顔が近くにあって驚く。

そこで。

「あ」

彼は動きを止めた。

だから俺は少し戸惑う。

「…。 ……え…?」

「どうせお前今から風呂入るもんな。髪乾かしても意味ないな」

? 風呂? 入る? え???

「さすがに風呂の入り方とか、髪洗ったりすることくらいはわかるよな?」

「え、うん…」

「それなら風呂入ってこい。お前体を綺麗にしているとはいえ、風呂に入った方が気持ちいいに決まってる。浴室はここだ」

彼は濡れた服を脱いで替えの服を取り出しながらその方向を指差した。

そのとき…一瞬その体を見張った。

傷が…たくさんあったから。

傷だけでなく、青あざもある。

たぶんそれはこの人がたくさん戦ってきたからだと思う。

きっとあなたは「刑事だからしょうがないんだ」って笑うんでしょ  
う？

あなたはただの刑事じゃなくて、特に危険な戦場でも戦わなくちゃ  
いけない人だから。

でも…すごく痛そう。

そして俺は戸惑いながらもつなずいて脱衣所に入る。

\*

俺がザブンと浴槽に入ると、その分の湯が浴槽からあふれた。

…こんな感覚、久しぶり。

俺はその感覚に改めて気持ち良さを感じた。

そしてそのお湯の温かさを堪能していると、だんだん眠くなってくる。

俺は、くぁっと欠伸あぐひをして、今度は口までお湯につかった。

ふと、ぼんやり考えるのは彼のこと。

なんで助けてくれるんだろっ？

俺に何かしてほしいのかな？

それとも俺の何かがほしい？

…でも俺には何も無いよ。

それくらいあの人もわかってるはずなんだけど。

見返りを期待できないのに、助けてくれる理由は何？

…俺には、あなたが理解できない。

わからないよ。

でも…

「……嬉しかったな……」

俺を、見つけてくれたこと。

\*  
\*  
\*

「…お前、ずいぶん長く風呂入ってたんだな。

大丈夫か？」

顔を真っ赤にしてホカホカになった俺が風呂から上がった居間に行くのと、彼が心配してくれる。

「ひん…」

それに対して俺は曖昧にうなずいた。

ちょっと頭がくらくらするけど。

心配させるからあえて言葉では言わないでおこう。

すると彼は「そうか」と安心したように笑って、キッチンから2つの皿を運んでくる。

そこにはおいしそうなハンバーグやサラダ、パスタが乗っていた。

「……！ ……え……？」

そして彼は俺を背の低いテーブルの方に促して、その皿のひとつを俺に渡してくれる。

「一応料理は得意なんだ。口に合うかはわからないが、食べてみよう。俺は風呂入ってくるから」

「……………！！！」

……俺にも作ってくれたの？

料理を作ってくれるなんて思いもしなくて、どうしていいのかわからなくて。

俺はただ料理と彼の顔を交互に見ることで精一杯だった。

そして俺がお礼の一言を言えてないまま、彼は浴室の方へ向かってしまう。

「あ……」

俺はテーブル上を見る。

自分の向かいにはもうひとつのお皿。

それは彼の方だろう。

「……あのっ」

気づけば意識より先に言葉が出ていた。

「ん？」

彼は脱衣所の方から顔を向けてくる。

ああ、もうこうなってしまったら言うしかない。

「あのっ…俺、まだ食べない。あなたが戻ってくるまで…待ってる」

……なんか、はずかしい。

でも…一緒に食べたかった。

間違っただことは言っていないけど、言ったことに少し後悔。

ただでさえ顔がほてって真っ赤なのに、もっと赤くなりそうだ。

刑事さんはどんな顔をしてるのかと彼の方を見れば、彼は「見事にやられた」とでも言いたげな笑顔で一言。

「それなら、早く風呂入ってこないとな」

\*

刑事さんはその言葉の通り、すぐ戻ってきた。

そしてようやく食事を始め、俺はハンバーグを食べる。

「……！」

噛むと肉汁があふれて、かかっているソースとの相性も抜群。

どこかのレストランにでも来たかのようなおいしさに本気で驚いた。

男らしくて、少し不器用なところがあるこの人が、この料理を…。

人は見かけによらない。

…ってのはさすがに冗談だけど、でも本当に驚いたんだ。

「どうだ？ 味は」

彼が感想を聞いてきて、俺は無意識のまま笑顔で答えた。

「…おいしい…！」

その時一瞬彼は目を見開いて、  
やがて見せた微笑みを俺は忘れない。

\*  
\*  
\*

雨の音はまだ止ま<sup>や</sup>まない。

彼は床に座ってベッドに寄りかかり、俺はその隣で座っていた。

「…刑事さんって、仕事とか忙しいの？」

「ん？ あ、いや。俺はまだ研修生だから本格的な仕事はしてない。ただひたすら戦闘系の訓練と実践の繰り返し。だから実質のところ、まだ『刑事』ではないな」

「そつなんだ」

「ああ」

「…」

「…」

たわいもない話はすぐに終わってしまふ。

その静寂を埋めるようにひとときわ強く降る雨の音が2人を包んだ。

「それじゃあ…」

「？」

「なんで…あなたは怪我をしまで人を助けようと思つたの？ どうしてこんな俺を助けるの？ あなたは俺が『力』を持っているのを知ってる。こんなに良くしてもらわなくても俺は生きていけるのに…」

…違う。

こんなこと言いたいんじゃない。

俺はあなたに「ありがとう」「って言いたいのに。

こんなに優しくしてくれることが嬉しかったのに。

どうしよう、この人に嫌われたら。

いや、それよりも…俺の言葉で彼が傷ついてしまったら。

俺…もうだめかも…。

そのとき、彼は口を開いた。

「その『俺が人を助ける理由』ってのは、俺が刑事になろうと思った理由でもいいんだな？」

「え…？ ……うん」

「俺が刑事になろうと思った理由は…そうだな、居ても立っても居られないからかな」

「？」

「昔から、困った人がいれば放っておけなかったんだ。…そりゃあ一時期、年ごろ的に悪ガキぶってた頃はあるが」

彼は昔のことを思い出してるのか苦笑を浮かべる。

「でも、調子に乗った同級生が全然関係ない人に八つ当たりで殴ろうとした時とかは本気で同級生そいつを殴ったし。まあ…俺は中途半端なワルだったってことだな」

中途半端なワル？

それでもいいと思う。

それってカッコイイことだと思っただけ。

「で、将来の進路で悩んでる時に俺はある事件に遭遇してな。その時犯人が近くにいて俺はそいつを取り押さえたんだ。 犯行現場を見てたからな。でも…」

「…?」

「俺はただの学生。 そいつを『逮捕』することができなかった。 取り押さえたそいつを警察に引き渡してそのことに気付いた時はもう手遅れ。 その場には監視カメラも何もなかったから犯行の唯一の手がかりは俺の証言だけだな。 そして運悪くそいつは有力なアリバイを持ってた。 …つまり警察はまだガキだった俺の証言を撤回したんだ。 ……最悪な刑事だったよ」

「……」

「この時俺はすごく悔しくてな…。 『俺が警察だったらあいつを現

行犯逮捕できたかもしれないのに』って苛立って。それがきつかけで警察学校に入った」

……この人は、すごい。

まさしく刑事に向いてる人間だ。

俺にはそんなことできない。

その話を聞くと、彼が遠いところにいる錯覚を覚える。

こんなに、近くにいるのに…。

俺は体育座りをしたまま顔をひざにつずめた。

すると頭にポンツと少し重みがかかり、温かい体温を感じる。

大きな彼の手が俺の頭に置かれたみたいだ。

俺は少し顔を上げる。

「あと、俺がお前を助けた理由だが…」

「…？」

「…なんでだろうな、お前は放っておけないって思った」

そのまま俺は頭をくしゃくしゃと撫でられた。

彼は力が普通の人よりも強いから撫でられるたびに俺の頭が上下して、同時に体育座りのひざに額がぶつかる。

…痛いんだけど。

でもまあ俺はそのことはあえて口に出さず、さねるがままになっていた。

\*

少し時間が経ったころ、俺と彼は床に寝転がっていた。

それまでなんの話をしていたかは覚えてない。

それほど取り留めもない話を続けていた気がする。

気が付けば彼は俺の隣ですでに眠っていた。

…っていつか俺も気づかないうちに寝てたんだけど。

あなたは…眠るまでずっと俺を見ててくれたのかな…？

俺は静かな寝息を立てる彼の寝顔を見てから窓の外を眺め、雨の音を聴く。

もう雨は豪雨ではなくなっていた。

しとんと降っているのが家の中からもわかる。

…それが意味するのは、この幸せな時間の終わり。

俺は近くのベッドの上から布団を引きずり降りしてそのまま彼の上にかけてやる。

…ん？なんか頭まですっぱり埋まった？

まあでもそっちの方があつたかいからいいか。

……、でも息するの苦しいよな……

ひとしきり考察を重ねてようやく布団をベストポジション(?)(?)に  
して、俺は軽く息をつく。

彼はよっぽど疲れてたんだと思う。

布団を何度ずらしても起きなかった。

…しめんな、刑事さん。

俺、あの路地に戻るよ。

「俺は……」

……こんなにも俺に優しくしてくれるあなたを、まだ信じられない。

…っていつのは理由のほんの一部。

本当の理由はね？

あなたに迷惑をかけてしまったら、あなたに嫌われるかもしれない  
って思ったからだよ。

「…ありがとう」

こんな俺に優しくしてくれて。

そしてごめんなさい。

あなたにちゃんと「ありがとう」って言えなくて。

\*

「視点：筆者」

少年がいない暗い部屋の中、まだ若かりしあの男は目を覚ました。

雨の音は聞こえない。

そして自分の上に布団が掛けられている代わりに、隣で眠っていたはずの少年の姿がなかった。

男は夢うつつのまま片腕を伸ばし、少年がいたはずの床に触れる。

床はすっかり冷たくなっていた。

おそらく少年は、しばらく前にここを出て行ったのだろつ。

そして男はその手を両目の上に置いて再び目を閉じる。

「……………行ったのか……………」

\*\*\*

「視点・少年」

そして翌日、いつもと変わらずあの人が俺の様子を見に来てくれた。

俺があの時家から出て行ったことに関して彼は何も言わなくて、それは冷淡なんかじゃなくて確かに何か意図があるのがわかる。

なんとなくそこにまた彼の優しさを感じて少し胸が痛んだのは確かだ。

そして彼はそのことに何も言わない代わりに、彼の家の合鍵をくれた。

『何かあったらそれ使って俺の家に入ってる。俺がなんとかしてやる』

その言葉と優しい微笑に前と変わらず俺はお礼の言葉がちゃんと言えなくて、うつむきながらうなずくだけだった。

それでも……やっぱり俺は嬉しくて、彼が路地を離れてからもずっと大切にその鍵を握っていたんだけど。

…でもその1ヶ月後、それは突然起こったんだ。

\*  
\*  
\*

…ひどい嵐だった。

豪雨は激しい雷雨にかわり、風も台風並みの強風。

川の水も増水して、自分がいる路地までもが水に浸った。

この前の激しい雨の日なんかとは比べものにならない。

外を歩く人なんてどこにも居ないし、声が聞こえてもそれは叫び声。

頭の中には恐怖しなくて。

それでも俺はただただうずくまって体を強張らせながらその嵐に耐えていた。

…彼の家には逃げ込もうとは思わなかった。

こじやって耐えることが普通だと思っていたから。

彼に面倒をかけたくなかったし。

正直、もう俺は幸せだったからこのまま死んでもいいとさえ思った。

いや、ちょっとは怖いけどさ、やっぱり。

でも俺にはあの人くれた鍵があったから。

あの人からたくさん優しさをもらったから、十分だって。

俺は風や雨で視界が邪魔されながらも、両手の中にある鍵を見つめて微笑んだ。

そしてそれを胸に当てれば、心があつたかくなる感じがした。

たぶん…いや、確実に俺は今日この世から消える。

この雷雨や強風に耐えることに必死で体力を使いすぎちゃったから、  
もうあの『力』は使えない。

あの人とは、きっともう会えなくなる。

…さみしい、かも。

やっぱりこういう時って嬉しいことを考えるべきかな。

「刑事さんは…俺が居なくなったら、悲しんでくれるかな…？」

ちょっと想像してみる。

「……………」

…胸が、痛くなった。

でもやっぱり嬉しいかも。

そうになったら、刑事さんは俺の居ないこの路地を毎朝見ていってくれるのかな。

……もし、そこに姿が見えなくても俺が居たら。

ああ、きつとあなたに触れられないんだろっな。

俺がいくら何度もあなたの手を握ろうとしても掴めないし、きつとあなたの体温さえ感じられないんだ。

「……………」

やっぱり…消えるの、嫌だ。

「刑事さん…俺、死にたくない…!!」

両手で力強く鍵を握る。

その時。

「…おい、そこにいるのか…!!」

聞こえるのは、彼の声。

「……………!!!!」

風や雨の音に邪魔されて聞こえない耳で必死に彼の声を探し、

よく見えない視界で必死に彼の姿を探す。

だめだ、雨のせいで何も見えない。

その時、強い力で腕が引つ張られて俺はわけもわからずに手が引かれる方へ必死に走った。

その手の感触や力でわかる。

姿はよく見えないけど、これは彼だ。

…もう会えないし触れられないとさえ思ってたからか、心が震える  
感じがした。

\*

バタンッッ!!!

激しくドアが閉まり、風や雨からその身を隠す。

ここは彼の家だ。

しかし安堵する間もなく、激しく両肩を掴まれた。

「なんでっ……お前は……！」

聞いたことない彼の怒鳴り声に体が震える。

その表情は険しく、俺を見つめていて。

「……！」

何も、言えなかった。

すると今度は強く抱きしめられる。

そして紡がれる彼の声はかすかに震えていた。

「なんで俺を頼らない？ そんなに俺が頼りないのか？ 鍵だって渡しておいただろう！ 俺を信じられないとしても利用するくらいはできたはずだ！！」

…違う。

違うんだよ。

あなたは本当に頼れる人だよ。あなたが悪いんじゃない。

でも俺は…

「あなたに…迷惑かけたくなかったから………」

あなたに嫌われなくなかったから。

「…バカ野郎！…！ 迷惑ならいくらでもかける、それよりも心配  
させんな…！…！」

「 ……！…！」

耳元に直接言葉が入ってくる。

頭や心に響くほどの、声が。

……俺はこのとき、心から本気でこの人を信じてみたいって、そう思った。

俺を抱きしめるその腕の力や彼の温かい体温、そして必死な声が、俺を今まで包み込んでいた不安や恐れを振り払う。

べ  
じ  
じ  
ゆ  
じ  
ゆ  
泣  
き  
そ  
う  
だ。  
だ。

この人を、抱きしめ返したい。

でも…中途半端にあがった両手は彼の服を掴むだけで精一杯だった。

「  
な  
あ  
」

「？」

彼の言葉に俺は抱きしめられたままその方を向く。

「お前…もうあの路地には戻るな」

「え…？」

「俺の家に居る。お前がああ雨の日に…俺に迷惑かけたくないからってあの路地に戻ったんなら、そんな考えはもう捨てる。お前がああ路地にいるといつも…特に雨の日は、任務中でもお前のご飯が気にかかる…」

「……！」

…なんでこの人はこんなに嬉しいことを言ってくれるんだろう。

聞いているこっちの方がはずかしくなる。

「…おい、聞いているのか？ 俺は言っとくが本気だぞ」

彼が俺の顔を覗き込んでくる。

ちゃんと聞いてるよ。

…こんなに傍にいて俺があなたの声を聞き逃すなんてこと、あるはずがない。

俺はそっと彼の胸に顔をうずめて答えた。

「…じん」

こんな俺の顔、見せられない。

たぶん、これ以上ないってくらい幸せな顔をしていたから。

\*  
\*  
\*

雨の日は、きらいだった。

冷たいし、空は暗いし、生きるのがつらかったから。

「また、雨……」

\*

俺は家の中から曇天の空と地面の水たまりに現れる雨の波紋を見て  
つぶやいた。

その時、ガチャツと鍵穴に鍵が差し込まれた音がして俺は玄関へと  
駆け寄る。

「…ただいま。ひどい雨だな…」

そこには優しい笑顔の彼の姿。

俺は彼の顔を見て安心して、微笑み返す。

「…おかえりなさい、刑事さん」

\*

…でもね、今は雨の日も好きなんだ。

あなたが雨の中手を引いて俺を助けてくれた、あの時から。

F i n .

雨の日に、あなたと。(後書き)

読んでくださってありがとうございます！

シリーズを続けて読んでくださってる方は気づいたと思いますが、第一章のある場面からの続きのストーリーでした。

これは後輩の2人にはおそらく語られない物語でしょう。

さて、これにて思い出話編は一旦終了。次回からは新章に突入します。

どうやら刑事たちの暇な時間は尽きず、再び過去のいろんな物語が語られるような気が…？

そしてはたして、彼らが追いかけているキョウゴと会える時は来るのか…。

さらに謎の少女の存在も明らかになります。

次の街で彼らが巻き込まれる事件も謎のまま進む、このバカらしい逃走劇(?)を次回もよろしく願います!!

活動報告も後で更新しておきますね。

## 第二章 I Birthday . . . Part 1 (前書き)

ようやくやってきました、新章です!!

若干テンションが下がる内容になっていますが、これはまだほんの序盤です。Partが進めばおそらくいつものバカらしさが出てくるでしょうww

今回の内容的に「えっ、これノーマルじゃない?」と思うかもしれませんが、これは完璧BLですので、あしからず。

それでは、本編へどうぞ。

第二章 I Birthday . . . Part 1

「…ん、さっそくイェンダンに着いたみたいだな」

3人はあまり長くない船の旅を終えて、新しい陸地に降りる。

周りを見渡すが…最初のイメージを一言で表すならば、

シリウス「……殺風景……ですね」

…だった。

いや、もしかしたら前の街のセリスキュオレートがあまりに活気が  
ありすぎたためにそう思うのかもしれない。

しかし…ボロボロの家屋に、荒れ果てた空き地、ぼーぼーと伸びき  
った雑草を見てしまったら無理もない。

船着き場からはイェンダンの町の中心部へ向かう道がないようだっ  
た。

かつてはあったのかもしれないが、その存在さえ曖昧な道は生い茂  
る雑草に埋もれてしまっている。

とにかくここから移動するにはこの雑草の群れを超えていかなければならないらしい。

シリウスはなんとなくそれを察して苦い表情を浮かべた。

「先パイ…ここを通るんですね…？」

べつやらこいつは気が乗らないようだ。

ゲイル「…そうなるだろうな」

もちろんゲイルはシリウスの言葉に肯定する返答をして、シリウス

の表情はますます暗くなった。

おそらくいついつ荒れた道を通ることには慣れてないのだろう。

そんなやりとりをしている間、前の街でもラッキーアイテム（台車）を見つけたあの男は。

「おー、これ使えるじゃん」

何か発見したらしく草むらを探している。

そうして持ってきたのは古い木の板と古いロープ。

ゲイルとシリウスは頭に「？」マークが浮かぶ。

これを、何に使った？とも言いたげな顔である。

するとラスは2人の目の前でロープを木の板に巻き始めて、特殊な縛り方をする。

「これで、完成！！」

ゲイル「…？　ラス、これはいったい何に使った？」

ラス「雑草の中に道を作るために使っんすよ」

シリウス「…道を作る？」

ラス「まあ見てろって」

そういつて自信満々な顔をしてラスは板を足元に置き、そこから伸びるロープをしっかりと握った。

「おおっじゃ、いくぜー！」

そして板に片足を乗せて、前進していく。

すると足と一緒に動く板によって、目の前の丈の長い雑草が次々と倒れて、踏まれていく。これで道を作っていくのだ。

…この男の頭の回転の良さは認める。

だが、これはなんとも…

ゲイル「地味な…作業だよな」

地味なのである。

前の街でも「地味だ」と感じる事があった気がするが…まああえてそれは触れないでおこう。

というか、地味というよりは若干『地道』とあらわした方が正しいのかもしれない。

ラスは楽しそうにザクザクと道を開拓しながら懐かしそうに言った。

「昔これでよくやったなあ、ミステリーサークル作り!!」

シリウス「み…ミステリー…、 ……なんだって？」

…別に知らなくても良い話である。

\*\*\*

…その頃、ある場所にいる青年は汽車を降りる。

息を吸えば冷たく、ここは『冬』なのだ気付いた。

セリスキュオレートは『夏』だったので気温の違いに驚く。

でもまあこの寒さならコートを出せば耐えられるだろう。

そう考えて彼は誰も人が周りに居ないことを確認し、…宙に発生させた青い光の中からコートを取り出して、着た。

その時、ふわっと花の香る風が漂って青年は目の前の何も無い空間を眺めてつぶやく。

「久しぶりだな、ミオ」

次の瞬間、どこからともなく白い花が舞って、その空間に白いワンピースを着た少女が現れた。

容姿は幼く、9歳か10歳ほどで、髪は長いミルクブラウン。

少女は現れて早々に空気の冷たさに驚いて、発生させた白い光の中から真っ白な可愛いコートを出して着る。

「久しぶり、キョウゴ。 ……ただいま!!」

少女ははにかんでキョウゴの手を握り、2人はどこかへと歩を進める。

\*  
\*  
\*

「なーんか、ホントに味気ないところっスよねー」

口調からわかるとおり、言葉を発したのはラスである。

雑草の群れをかき分け、先に進んだのはいいものの、結局どこまで行っても町は廃れている様子しか見せないのだ。

ゲイル「ん、なにか看板があるぞ」

ゲイルは前方にある朽ち果てた看板を目線で示す。

ラス「えーっと、なにになに？」  
「ここから左に進むと観光スポット

あります』だって！ 先パイ、行ってみます！？」

『観光スポット』という単語を見たラスは目を輝かせてゲイルを見た。

さすがは旅行が趣味の男である。

ゲイルはセリスキュオレートで買った汽車の運行表を見てうなずいた。

「そうだな、次の汽車まで多少時間があるし見てみよう」

\*

…決して、その観光スポットに期待していたなどということはない。

だが、これはさすがに…

「うっわぁ……」

『暗い』にもほどがあった。

たしかに曇り空ではあるが、そういった意味での『暗い』ではなく、趣向が暗いのだ。

シリウスは観光スポットを示す看板を読む。

シリウス「『死者につながる海』…ですか」

見渡す先はただ海があるだけ。

海なんてどこでもあるのだから、かなり無理がある観光スポットのように思われる。

ゲイル「…死者につながるのって、川じゃなかったか…？あの、三途の川とか」海もあったのか？

シリウス「いや先パイ、考えるところはそこじゃないです」

ラス「いやいや、つつーか海なんだから溺れれば死ぬに決まってるじゃん！！万国共通だろーが！！」

後輩2人の意見はもつともである。

だがそんな意見を聞いているのか聞いてないのか、ゲイルはしばらく海を見つめた後に近くに咲いていた花を抜いて海に流した。

後輩2人「先パイ？」

不思議そうな顔をする後輩にゲイルはわずかに照れくさそうに微笑んだ。

「ああいや…死者につながるなら花を届けたいなって思ったからさ」

シリウス「…。あの…差支えなければいいんですが、誰か身近な人が亡くなられたんですか？」

その言葉を聞いてゲイルは少し伏し目がちに答える。

「ああ。……俺の妻と、子どもだ」

後輩「」  
「！」  
「」

「…今日は…結構時間を持て余しそうだからな、少しこのことも話しておくか」

そしてゲイルは語りだす。

…家族を失った、あの夜のことを。

第二章  
Part 1

Fin  
.

## 第二章 I Birthday . . . Part 1 (後書き)

∴ ということで次回はゲイルの過去が少しわかります。

ちよつとスッキリしない終わり方になってしまつてごめんなさい!!  
というか、短すぎましたね、今回のPart。

次回はもう少し長くできるように頑張りたいと思います。(笑)

さて次回の更新は6月上旬〜中旬くらいまでには、と予定しています。  
(2011年5月現在)

活動報告の更新もおそらく次回になると思われます∴。

とりあえず「今回はどこでキョウウゴと出会えるんだろう」とでも思  
つて気長に待つていただければ筆者としてはとても嬉しいです!!

どうか次回もよろしく願います!

## 第二章 I Birthday . . . Part 2 (前書き)

今回はゲイルの過去の話がメインになっています。

第一章で語られた過去の話などに関連付けて読んでももらえると嬉しいです！

それでは、本編へどうぞ。

## 第二章 I Birthday . . . Part 2

「視点：ゲイル」

それはかれこれ3年前にさかのぼる。

その時、俺にはすでに妻と3歳になる娘がいた。

キョウゴはというと、10年前の出会った頃から約2年ほど一緒に住んだが、それ以降は警察庁の本部の一室に身柄を引き取られていた。だから俺の家には居ない。

(これについてもいつか話す時が来るだろう。)

あの時は…そうだな、まさかあんなことが起こるとは思ってもしなかったんだ。

\*  
\*  
\*

3年前、夏の夜。

「…よう」

ロンドンの街の一角にある、ぬいぐるみ店から俺は2つの紙袋を持って出てきた。

ひとつはクマのぬいぐるみが入っている。

これは娘のハルカがほしかった最近人気のあるぬいぐるみだった。

別に誕生日だという訳ではないのだが、仕事柄、あまり遊んであげられないことを気にして買ってきた。

せめて、少しだけでも喜んでほしいと思って。

そして、もうひとつ…

「……どんな顔をするんだかな……」

もうひとつの紙袋の中に入っている黒猫のぬいぐるみを見て、俺は少し困った顔をする。

これはレストのために買ってきたものだった。

…あ、なんで黒猫のぬいぐるみかというしよ。

あいつがなんとなく黒猫に似てるから、という単純な理由なわけで。

本当は他のプレゼントにしよつと思っではいたんだ。

あいつももう17歳だ。ぬいぐるみをもらって喜ぶ年齢はとうに超えている。

だが…俺はプレゼントを選ぶ脳がないと言っか、なんというか…

…頭に浮かばないんだ。

あいつが何をほしいのか、少しもわからない。

ましてや…もともと物選びのセンスがないから、その年頃の少年に何をプレゼントするべきなのかがまったくわからない。

ヴィトに相談すれば『イチゴの詰め合わせ』って答えるし、ケイオス上官に相談すれば『高級車』、アスラに聞けば『アサルトライフル』……どれもこれもあてにならない。

『あいつは何がほしいんだろう』

そんな問いが頭を埋めて1週間、結局迷いに迷って行き着いた答えがこれ（ぬいぐるみ）になってしまった。

正直に言ってしまうと、このぬいぐるみ店に来た本来の目的はハルカへのプレゼントではなくこっちなのだ。

なぜなら今日は、

…あいつの誕生日だから。

俺とあいつの誕生日は1日違いで、俺は昨日あいつから誕生日プレゼントをもらった。

その時のことを思い出して数秒後。

「……だめだ、あれは。俺…最低だろ…」

いや、何が最低かっていうのは人に言えないんだ。

本当にあれはヤバい。

妻子持ちなのに、あれは…。

とりあえず俺はその思い出した光景を薙なぎ払うように一度首を横に振って、歩き出した。

今日は仕事が朝から立て続けに入ってあいつの顔を見に行けなかったから、一度家に帰ってハルカにプレゼントを渡してから署に報告書を出すときに会いに行こうと思っている。

会いに行く頃には、あいつは寝てしまっているだろうか。

…でも、それでもいい。

寝顔が見れるだけでも安心できる。

「…ん、今夜は月が綺麗だな」

ふと空に目に移り、視線は満月をとらえる。

昔から天体観測が好きだったりしたからか、たまに空を見上げることは多い。

…まあよく人からは『顔に似合わない』と言われるが…、…うつろい、ほつとけ。

この月をハルカに見せてあげたい。

…ああ、あいつとも見たいかもしれんな。

道を歩き始めて約10分後、ようやく自宅が見えてくる。

\*

しかし…

…電気がついていなかった。

俺は腕時計を見る。

…まだ寝る時間にしては早いと思うんだが。

ハルカは寝ててもおかしくないが、妻のマキなら起きているはずだ。

そういえば…昼に公園へハルカと行くって言ってたから、疲れて寝てしまったのか？

そう考えた俺は物音で2人を起こしてはいけないと思い、静かに鍵を開けて中に入った。

「誰だ、お前!!!」

\*

リビングに、フードをかぶった見知らぬ男がいた。

そして……

「 …… ツ！……！ …… ハルカ……マキ……？」

その足元に不自然な体勢で倒れた、……妻と娘の姿があった。

部屋が暗くてよく見えないが、それでもわかる。

… 2人は、殺されていると。

「  
…  
」

突然の怒りと悔しさと悲しみが混ざって混乱し、すべての思考が一瞬止まる。

そして茫然<sup>ぼうぜん</sup>としたまま、倒れている2人に近づくと男が声を発した。

「…せいせい苦しめ、俺と同じように」

「なん…だとっ…!!」

男が手に持ってるのはナイフ。

そこに付着した赤黒い血を、月は静かに照らしていた。

そして、フードから覗くヤツの口元の笑みを見たとき…

「…殺す…ッ!…!」

一気に湧きあがった底の見えない殺意が俺を呑み込んだ。

男は開け放った窓から外へ逃げ出し、俺もその後を追う。

次々と溢れ出る黒い感情。

…殺す…殺す、殺す…！！

許すものか、骨をすべて折ってヤツがどんなに苦しもうとも許さな  
い……！！

『俺と同じように苦しめ』だと？ふざけんな……！！

俺は無意識に腰元に携帯していたダガーを取り出して構える。

ダガーは致命傷を与える確率が減るとはいえ、日ごろの訓練からダ

ガーを使って致命傷を与えることはそれなりに慣れていた。やりたくはなかったが、実践でも使ったことがある。

家族が殺されたというのに、訓練の日々を脳裏で思い出すと心のどこかが妙に冷静になる一種の職業病が皮肉に思えて、俺は自然と自分に嘲笑を向けていた。

そうだ…、どんな時も冷静でいなければ。

たとえ表面上だけであつても我を忘れるよりはいい。

まずは男の特徴を見る。

背は…さほど高くない。170cmくらいか？

体型は、コートでよくわからんな。

他にも何か特徴を…

そうだ、声…！

あの声を俺はどこかで聞いたことがある。

いつだ？ いつ、どこで俺はあの声を聞いた！？

行きつけの店の店員？警察内部の人間？家族に関係がある人間？それとも今までの事件に絡んだ人間か？

…！ わかった、あいつか…！

5年ほど前に俺が関わった事件の犯人の身内だ。確か犯人の兄だったか？

そうか、それならつじつまが合う。

あの事件の時、グイトとともに犯人が入った建物内で手分けをして行動してたときに俺は犯人を見つけた。

その男は人質にナイフを向けてかなり動揺していたのをよく覚えて  
いる。

そして俺は…銃を発砲してその犯人の命を奪ってしまった。

本当は殺さずに捕えようとしたのだが、犯人が動揺して俺が発砲した瞬間に動いたせいで標準が狂い、撃ちどころを悪くして絶命した。

…決して己の非を認めないわけではない。

しかし、あの時撃たなければ人質はおそらく殺されていただろう。

もし…今俺が追っている男がそのことを深く根に持っていたら。

いや、持たないはずはないだろうが、そのことで俺に対する恨みが半端ないものになったのであれば。

マキやハルカを殺したのがその腹いせということになるんじゃないか？

「……………くそっ！！」

しかし、あれが原因だからといって俺がヤツを許せるはずがない。

家族を奪われたんだ。冷静になったからと言って殺意が消えるわけでもない。

ダガーを握る手に俺は一層力を込めた。

ポタツ…と頬に冷たい感触。

視界の端にとらえた空に月などすでになく、厚い雲から無数の雨が降り始める。

男を追っている間、脳裏に雨の中でうずくまるあの少年の姿が映った。まだ出会って間もない頃の幼い姿だ。

その少年はゆっくりと俺の方を振り向く。

その表情は泣いているようだった。その瞳から流れているのは雨の雫しずくではない。涙だ。

……どうしてお前が泣いている？

しかも、これは俺の記憶の中にはない。

こんな光景を見たのは初めてだ。

どうして見たこともない映像が『実際にあったこと』の様に頭の中で流れる？

どうして、お前が……

しかしその姿もすぐに俺の黒い感情に呑みこまれ、消えていく。

その時、前に行く男の足が少しふらついて、俺は一気に間合いを詰めてダガーを振り下ろした。

だが、相手もなかなかのやり手のようで、俺の斬撃を急所にあたる寸前でかわしてさらに逃げる。

心臓を突き刺すつもりが腕を切りつけるだけに終わり、俺は舌打ちをして再び男を追った。

雨はさらにひどくなり視界が悪くなる。

それと同時に男との距離はどんどん離れていく。

「くっ……」

いくら追いかけても、このままではさすがに追いつけない気がした。

諦めではない。ただ、冷静に考えたらそう思えてならなかった。

俺はダガーを腰元の鞘さやに戻して今度は銃を構える。

任務を終えたばかりだったため、まだシリンダー（弾倉のことだ）には弾が残っている。

そして俺は迷わず引き金を引いて、ヤツの脚を狙った。

パンッパンッ！！

住宅街に響く発砲音。

すると片脚に当たったようで、一度脚が跳ね上がった後に男はぎこちない走り方に変わる。

俺はその時『いける』と思った。

あの男を殺せる、と。

しかし。

「…なっ…!!」

俺と男の間を車の列が横断する。

そこは車道だったのだ。

そして俺が車の列を超えて車道の向こう側に出たとき。

「  
」

…言葉を失った。

ヤツはすでに居なくなっていたから。

しかしヤツは脚に怪我を負っている。そうどこか遠くにいけないはずはない。

そう思っていくらか周辺を探すが、それでも見つけれなかった。

…待てよ、よく考える。

思い出してみたら、ヤツを見失ったのは車道だ。

もしかしたら…俺がヤツの姿を確認できてない間に車につかまって  
逃走したんじゃないのか…？

…そつだ、それなら脚が悪くても確実に速いスピードで逃走できる  
…！

…冷静な判断の欠如が引き起こした、最悪な失態だった。

おそろく、このとき俺の頭の中を占めたのは「絶望」という言葉だ  
らう。

俺は一気に体から力が抜けて近くの建物にもたれかかり、震える手でケータイを取り出す。

そしてすぐに通話ボタンを押した。

何回目かのコール音の後に男の声が聞こえる。

「やあゲイル、君から電話とは嬉しいな。……ゲイル？どうしたんだい」

「……………」

「……何か、あったんだね」

「……妻と娘が……殺された……」

「……！！！」

「……犯人はわかってる。俺はヤツを追ったが……逃げられた。俺が判断を見誤ったんだ、俺が……俺が……っ！！！」

自分への怒りや悔しさが次々に溢れ出る。止まらない。

すると電話の向こうの班長あいつは静かに言った。

「…君の家に救急車や警察の人間をいくらか向かわせるよ。君は、このまま本部へ来なさい。……話さなければならぬことがある。とてもとてもつらいことだ」

『とてもとてもつらい』と『？』

…ハッ…笑わせんな。

これ以上つらいことがあるって？俺を殺す気か。

俺は何も返答せずに通話を切り、力なくケータイを地面へ投げ落とした。

もたれかかっていた体からさらに力が抜けて、地面に座りこむ。

力なく見上げた視線の先には、広場の朽ち果てた十字架があった。

……この世に神なんていない。

どこかの小説で見たような言葉が今の俺には皮肉にも似合っている。

「ハルカ…マキ…」

もう戻っては来ない人の名を呼ぶ。

その言葉はどんなに儚いだろう。

その名前を呼ぶことに俺は幸せを感じたはずなのに、どうして今はこんなにも俺を切りつける？

俺は、なんて酷い男だ。

自分が憎い。殺したいほど憎い。

…ああ、くそっ…!!

「……うわああああああああああっ……!!」

声が枯れるほど叫んで、何度も壁を殴りつけて。

いつの間にか手からは血が流れていた。

それでも、俺が俺自身に定めた罪も苦しみも流れ去ることは決してない。

どんなに雨が降り注ぐとも、どんなに血を流したとしても、何も変わらない。

\*\*\*

ゲイル「…と、まあ…そんなことがあつてな。その時のことを思い出すと自分に腹が立つんだ。…未だに犯人を捕まえてないから余計にそうなるんだろうな」

シリウス「3年前にそんなことが…。すみません、思い出させてしまつて」

ゲイル「ああいや、いいんだ。どうせいつかは話そうと思つてたから。俺の方こそ、まだこの任務に就いたばかりのお前らにこんな話して悪かつたな」

ラス「いえ……」

俺が苦笑して見せると後輩2人は顔を曇らせてうつむいてしまった。

やっぱりこんな話を聞いたら荷が重くなるのは当然か。

それでも、これだけは伝えておきたい。

「とりあえずお前らに言っておきたいのは、冷静な判断はとても大切だということだ。そしてもうひとつ… お前らは死なないでくれ。もうこれ以上信頼できる人を失いたくない」

俺がその言葉を言ったとき、確かに後輩たちの目がわずかに見開いた。

まるで何かの疑問が確信へ変わったような表情。

そして2人は俺をまっすぐに見つめ、

「はい」

誠意を込めた声音でしっかりと答えてくれた。

…きつと大丈夫だ。

そう思えて仕方がない。任務上、四六時中生きるか死ぬかの油断は

できないはずなんだが。

それほどに2人の言葉には、彼らなりの『力』が宿っていた。

俺は、安心したからなのか長く息をはいた。

これでまたひとつ先に進める気がする。

「よし、それじゃあこの話はもう終わりだ。時間もちよつとどいいくらいだから次の汽車に乗るか！」

「え???」

……。

…なんだ、『え??』って。

ラス「えっ…ちょ、先パイ！キョウゴくんはどうするんですか！！」

シリウス「なんのために俺たちはここに来てるんです!？」

ゲイル「え、いや……この町にはキョウゴがいる感じがしないって  
さっき言わなかったか……？」

……。

後輩「……言ってますん……！」  
先に言ってくださいよ……！」

あれ、そうだったか？

すっかり言った気がしてたんだが……。年のせいか？まだ30だぞ、俺！

「ま、まあ……とりあえずここにキョウゴは居ないだろう。刑事の力がそう言ってる」

シリウス「……ということは、『イェンダン』に居なければ、キョウゴくんがいるのは次の街の『リセラ』かもしれないってことですね」

「そついうことになるな」

ラス「リセラか……。俺はあんまりそのことわかりませんが、どんな街かワクワクします！！」

ラスの無邪気な表情に俺は笑みを返す。

「楽しいところかは期待できないけどな。 ……さあ、行くぞ」

そして俺たち3人は次の街であるリセラに向かうために駅へと歩き始めた。

\*

…後輩には、まだ言わないことにした。

3年前のあの後…本部に向かった俺に、無情にも突きつけられた事実を。

\* \* \*

班長は机に向かい、机上で両手を組んでうつむいていた。

「マキさんとハルカちゃんの話は、本当に気の毒だ」

「……………」

「だが…、それでも言わなければならないことがある。私にとってはこれも深刻なことだ。さっき、しっかりと確認できたことなんだが……………」

「……………なんだ？」

「 ヴィトが、年をとらない体になっていた」

「 …、 …なに言ってるんだ、わけがわからない」

「これは本当のことなんだよ、ゲイル。そしてこれがどういふ影響を及ぼすと思う？」

「…俺に考えさせないでくれるか？ ……俺は…今なにも考えたくない」

「…そうだろうね。ならば代わりに答えよう。おそらく色々影響は出てくるだろうが、私が一番危惧しているのは、『周りの目』だ」

「……………」

「これからずっとヴィトが年をとらないでいたら、いつかは『若作り』という言い訳も使えなくなるだろう。そうしたら周りの目が…いや、この特殊捜査班の中でならまだ大丈夫だろうが、市民のヴィトを見る目が変わりそうだと、そう思わないか？」

……………それからの班長あいつの話は、正直覚えてない。

とにかく妻と娘が殺された直後だったこともあってショックが大きすぎたんだろう。

ヴィトが年をとらなくなった？

そんなことが現実にあるものか。ありえない。

その時、嫌な予感がした。

確か、マキとハルカを殺した犯人は生物学の研究や医学に精通のあ  
る人物だった気がする。

まさか…あいつがヴィトに何か仕組んだんじゃない…！？

つまり俺は…自分の妻と娘だけじゃなくて唯一のパートナーまでも  
不幸にしたということなのか…？

…ああ、どろしてどろつも悪いことばかり続くんた。

もう何も考えたくない。

もう、何も……

…そうだ、レストあいつに会いたい。

顔を見て、声を聞いて安心したい。

「……悪いが、今俺は現状を受け入れることが耐えられない。  
あいつに会ってくる」  
…

すぐに俺は部屋を出ようとして踵かかとを返すと、

「…待つんだ、ゲイル」

そう言われて引き止められる。

俺は振り向きながら声の主をにらみつけた。

「…お前はわかってんだろ、俺の状況を！…まだ何か言うのか！…」

自然と声音が荒くなる。

すると班長はつつむき加減で、

「…わかっているよ、すっかりと。とてもつらいだろう。苦しくて苦しくてどうしようもないんだろう。でももうひとつ言わなければならぬことがあるんだ」

そして声を絞り出すように言ったのだ。

俺をぶちのめすことになる決定的な事実を。

「 ……レスト君が、いなくなった」

「 ……」

「そして…彼の部屋のベッドの上に、これがあったよ」

そして俺に渡されたものは…

……… 10年前に俺が渡した家の合鍵と、 『今までありがとう』とい

ました』と書かれた置手紙だった。

第二章 Part 2

Fin .

## 第二章 I Birthday . . . Part 2 (後書き)

はい、こういうことが過去にあったというわけです。

さてさて、次回からは気を取り直して刑事たちは『リセラ』に向かう汽車へ乗り込みます。

結局『イエندگان』にキョウウゴはいませんでしたからね。

次回の更新は、筆者の活動報告を更新しておきますのでそこに記しておこうかと思えます。

それでは、次回も彼らの旅にご同行をお願いします!!

## 第二章 I Birthday . . . Part 3 (前書き)

謎の少女、ミオとともに過ごすキョウゴ。そして汽車の中で退屈な時間を過ごす刑事たち。

この両者の物語は、いったいいつ絡まるのか…。

そしてついに、キョウゴが過去に体験した大きな出来事やゲイルと初めて出会った時のことが明らかになります。

それでは本編へどうぞ。

## 第二章 I Birthday . . . Part 3

英国風な作りの宿の一室に青年と少女はいた。

青年…キヨウゴはイスに座っていて、少女…ミオはベッドに座って足をぶらぶらとさせている。

この部屋は2人で泊まるにはとても広い。

入り口から広がる部屋は6つのシングルベッドが配置されていて、食卓テーブルのようなものと6つのイスがある。

そしてその部屋からはキッチンやバスルームにつながる通路が伸びていた。

『キッチン』と聞いて首をかしげる方もいるかもしれない。

そう、今回キョウゴが止まる宿は食事を自分で作って過ごすシステムなのだ。

そのキッチンにも小さなテーブルがあり、2人分のイスがある。

なんでこの部屋に泊ったのかというと、チェックインの際に開いている部屋がここしかなく、2人は通常料金のままこの広い部屋に泊まることになったのだ。

なんともお得な気分である。

あ、読者の皆様はキッチンのことよりも、『この少女が何者なのか』ということの方が疑問に思っているかもしれない。

これについては後ほどのPartで少しわかることになる。しばしお待ちを。

キョウゴはミオに話しかける。

「…今回はどこに行ってたんだ？」

その問いかけにミオは笑顔で答えた。

「今回は人があまりいない山村だよ！！ 一人暮らしのおばあさんのところにお世話になってたんだ！。 そうそう、おばあさんはすつごく裁縫が上手で、私教えてもらったの！！ 今度キョウゴにも何か縫ってあげる！！」

少女らしい可愛げのある気遣いだ。

キョウゴはやわらかく笑って一度目をふせる。

「そつだな、お願いするよ」

\*

しばらくして2人は街を歩くことに決めた。

なにしろ今回は自分で料理を作るのだ。食材を買わなければならない。

2人は宿の廊下を歩く。

今回の宿は2階建てであるが奥行きが広く、キョウゴたちは1階の部屋に泊まっている。

ミオが廊下の壁にかけられている絵画を見ながら歩いていると従業員に優しく声をかけられた。

「くんには。これからお兄ちゃんとお出かけなの？」

「うん！ー！お出かけ！でもお姉さん、それはちょっと違うの！ー」

「え？」

ミオの言葉に首をかしげる従業員。

そこにキョウゴが会話に入る。

そして彼は彼女に言ったのだ。

「…この子は、僕の娘です」

『娘』、だと。

.....。

途端に流れる長い沈黙。

従業員の女性はひどく驚いたことだろう。

キョウゴの見た目的に10代後半か20代前半に見える容姿である。  
無理もない。

あまりの驚愕で硬直している女性にキョウゴは困ったような優しい  
微笑を浮かべて、

「それでは、いってきますね」

ミオを連れて宿を後にした。

そしてその場に残された従業員は、キョウウゴたちが出て行った後の扉を見つめてうつとりとつぶやいた。

「…あの人……かつこいい……」

…そこかよ、という話である。

\*

ここでチラッと列車に乗車中である刑事たちの様子を見てみよう。

ラス「……げっ！！先パイ、次の街まで2時間もかかるんすか！！！？  
暇になりますよぉ〜」

ラスはゲイルが持っていた列車の時刻表を見て苦い顔をした。

そんなガキのようなことを言っても列車が早く走るわけがないだろ  
うに。

シリウスはそんな相方の様子にため息をひとつ。

「暇な時間くらい、どつとでも過ごせるだろ」

…まあ、大人の意見である。

ラス「先パイ、これはまあ…いっぱい話すしかないっスね!!」  
(シリウスをスルー)

ラスはいきなりゲイルに話を振り、不意を突かれたゲイルは一瞬遅れて目を見開いた。

「…ん、なにがだ？」

話がかみ合っていない。その瞬間ラスの表情が硬直したのは言うまでもないだろう。

この刑事たち…今回もつまくやっついていけるのだろうか。

\*

街の一角にある店で買い物をちょうど終えた、年の離れた兄妹のような2人。

ミオは軽い足取りで何かのメロディーを口ずさんでいる。

どうやら上機嫌のようだ。

キョウゴは少し前に行くミオに声をかける。

「…どうした、ミオ？」

「なにがー？」

「…何か、楽しそうに見える」

「そう？ ふふっ、楽しいよ。だってどこを歩いてもみんなキョウゴのこと』かっこいい』って言うんだもん」

「…？ なんでミオが楽しいって思うんだ…？」

キョウゴは理解が追いつかないのか、不思議そうに軽く首をかしげた。

そんな彼に前方の少女はクルッと振り向いて笑って答える。

「だって自分のお父さんが『かっこいい』って言われたら、みんな大体の人は嬉しいって思うでしょっ？」

「…そうか…」

キョウゴはそれでも理解できなかった。

…というより、その体験が記憶から欠如していたから。

むしろ彼は、『自分には親がない』とさえ思っている。

\*  
\*  
\*

「視点…キョウゴ」

あの日、気づけば自分は一人きりになっていた。

自分の親の記憶は、ない。

記憶の隅に残っていたのは親のぬくもりではなく…あの国が滅びる寸前の人々の叫びと、この世のものではないと誰もが思うほどの異常に美しく広大な空。

…そうだ、あの国が滅びる時、そこにいた人々は何が起こったのかわからず、けれども『滅ぶ』ことを察していた。

でもなぜか滅ぶことを察し、恐怖を感じて彼らは叫んでいたわけではなかった気がする。

不思議だった。本当に不思議すぎるとしか言いようがない。

当時幼かった俺が見たその光景はあまりに綺麗すぎて、同時に絶望的だった。

\*  
\*  
\*

……断片的な記憶をさらけださないと。……

『消滅開始』直後、最初に見た光景は青空が死んでいく様子だった。

その時は確か、午前中か正午くらいだった気がする。

周りの信号機がプツツと光をなくしたのが変化の予兆。

そして突然、太陽が消えたのだ。

その地上のすべての影が消失する。

しかし青空は依然として変わらず平然と地上を照らしていた。

すると、空の美しい蒼がみるみるうちに色をなくし、白色無色になっていく。

人々はじっと空を眺めて言葉をなくした。

糸をピンと張ったような沈黙がながれる。

次の瞬間、ブアッと空の中心から紅い色が広がり、その国を綺麗な夕焼けが包んだ。

人々はただ感嘆の声を発するのみ。

誰かがふと、

「この国の最期にふさわしい美しい空だ」

と言った気がする。

しわがれた老人の声だった。

すると、

「なんでこの国が滅ばなきゃいけないんだ？」

と、傍らの誰かが老人に聞いた。（これは自分の親ではないと確信がある。少年の声だったからだ）

老人はその問いに答える。

「このこと同じ名を持つ、けれどこの世界に無いその国がひどいことを引き起こしたんだろう。だから『空』は怒っている」

「それならここじゃなくて、そのもうひとつの方を滅ぼせばいいじゃないか」

「……ハハハ、面白いことを言うなあ。いいかい、世の中は矛盾だらけだ。これもまた然り、我々の定めなんだよ」

「なにそれ、意味わかんねー」

そんな会話を横で聞きながら俺はほんやりと真っ赤な空を行く雁かりの集団を見つめる。

その姿を目で追っていると雁は一羽ずつ姿がフッと消えていき…いつの間にかすべていなくなっていた。

…これが『消滅』か、と心のうちで冷静に思う。

きっと自分たちもこうやって消えていくんだらう。

怖いな。

でもどうしてだらう。涙が出ない。

涙さえ、『消滅』したのかな。

次に空は一気に黒く染まる。

すると「わぁっ」と大多数の叫び声が聞こえた。

人々の多くは闇を怖がる。

でも自分はそう思わなかった。

闇は静かに自分を包んでくれるとその頃は考えていたから。

おそろく…

「なんか楽しくなってきたな。      わくわくする」

自分に話しかける同い年くらいの少年も、理由は違ってもしれないけど同じだったと思う。

すると俺の返答より先に再び声を発した。

「あ、空見てみるよ!!--」

その声につられて少年に向けていた視線を真っ暗な空に向ける。

『なに、暗いだけじゃん』

そう言おうとした俺は、すぐに口をつぐんだ。

…瞳が闇を許して受け入れたとき、そこから見えるものがある。

「あ……！」

見上げた先には、満天の星空があった。

月は見えない。ただ星があるだけ。

ただこの星空はいつものものとは決定的に違う。

ふだんは見えないような遠いところにある星もすっかり見えるのだ。

天の川が鮮明に見えて、たまに流星が空をかすめていった。

闇に目が慣れた人々も空の無数の星に気付き始める。

その中には手を空に向かって伸ばし、星を掴めるのではと試す者も多々いた。シルエットで微かにその様子がわかる。

「お母さん！ 目が… 目が見えるよ！！ 星が見える！！」

後に視力が無かったらしい少女の声が聞こえたりもした。

傍らの少年はつぶやく。

「いつもの数十倍に光ってんな、星」

…ああ、だからこんなに見えるのか。

その不可解な現象とその言葉にただうなずく自分。

吸い込まれそうなほど綺麗な星空。

俺はこの星空を忘れることはないだろう。

きつと、何年経っても。

そう思うと同時に消滅の予感を感じ取り、ゆっくりと息を吸った。

……その刻が、最期。

\*  
\*  
\*

「視点：少年」

自分が次に目覚めたときは誰も居なかった。

知らない街、知らない空気。

そして、ここはどこか違う国なんだと直感的に感じた。

そこは民家と民家の間の路地らしく、俺はひとまず近くにあった大きな木箱の裏に隠れて路地を歩く人を観察し始める。

「みんな…俺たちと、違う」

俺たちってというのは俺の国の人たちということ。でもこの路地を歩く人たちは大体みんな背が高いし、なんか違う。別の人種みたいだ。

それから俺は人目をさけて路地から出て、あたりを散策し始める。

人目をさけて、と言ってもそもそも人通りが少ない場所だったんだけど。

そして日が落ちて夕暮れ時になった頃。

「…戻ろう」

そう呟いて踵かかとを返して、すぐ足を止めた。

俺は気づいた。

自分が道に迷っていることを。

近くには川が流れてるけど…俺が最初いたところに川なんてなかった気がする。

でも…まあいいや。どうせ戻っても何も無いんだから。

そう思って近くの民家と民家の間のせまい路地に身を寄せた。

そして自分の状況を考える。

『消滅<sup>それ</sup>』以前の記憶がほとんどなかった。

年齢はわかるのに、肝心な記憶がない。

自分は誰だろう？

家族は、どんな人？

どこに、なんていう名前の国に住んでた？

わからないことが多すぎて自分でも把握できない。

でも、わかったことがある。

あの時俺の傍にいた少年は、俺とよく似た顔を持っていた。

まだ存在いきてしてるのかな。

…ああ、もうわからないや。

何もかも失ったと思った。

まだ自分は幼いけれど、確実にそう思える。

でも、そんな俺でも手に入れたものがあつた。

それは自分の意識で発生することができ魔法のような青い光と、

…『消滅』したとすっかり思っていた、頬を伝う涙。

\*\*\*

「…キョウゴ、どじつなの？」

その声で、我に返る。

『親がない』という考えから、あの『消滅』のことまで考えてしまっていたようだ。

「いや、なんでもないよ」

とりあえずミオは楽しんでる。

…それだけでいいじゃないか。

そう自分に言い聞かせ、ミオに微笑んで見せた。

\*

「視点…筆者」

「あ、そーいえば…」

ガタゴト揺れる列車の中、口を開いたのはラスである。

「…？」

その疑問を言わずに言葉が途切れたため、ゲイルとシリウスはラスの方を向いた。

ラス「いや、あの…キョウゴ君には、なんであんな『力』があるん  
すかね？」

…実に根本的な疑問である。

それを聞いてシリウスも静かにうなずいた。

おそらくこいつも同じ疑問を持っていたのだろう。

そんな2人の様子を見て、ゲイルは「あー…」と声を漏らし、

「それはたぶん、キョウゴが『日本消滅』の生き残りだからだろう」

そう答えた。

『日本消滅』

突然現れたその言葉に2人は目を見開く。

ラス「え…！？」 『日本消滅』って…たった一日で日本から建物や人が消え去った…あの原因不明の…？」

シリウス「生き残りがいたなんて…聞いたことはありませんよ」

ゲイル「…そうだろうな。だが警察庁<sup>おれたち</sup>特殊捜査班はそれよりももう少し詳しい情報を持っている。俺たちが知ってるのは日本が滅びたとき、生き残ったごくわずかの人々はこの世界の各地へ吹き飛ばされて、それぞれが個々に正体不明の高エネルギーを得てしまった…というところまでだ」

シリウス「『正体不明の高エネルギー』…？」

ラス「それって、まさか…！」

ゲイルは後輩の読みが正しいことを頷きで肯定した。

「そう、キョウゴが持つあの『力』のことだろう。そういえば『日本消滅』の日には、朝から日本上空に原因不明の高エネルギーの集まりが確認されてたらしい」

シリウス「何から何まで『原因不明』・『正体不明』なんですね」

ゲイル「…ああ。そしてそのごくわずかな生き残りだが…それは

この前ラスが列車の中で話してた、現在鎖国状態であるはずの日本に隠れ住む狐のお面をかぶった集団のことだろう。彼らは自分がどこで生きてたか覚えていて、それで集まったんだらうな」

ラス「そつ…そんな情報まであったんですか！！俺この班に入っても聞かされませんでしたよ！」

ゲイル「まあ…10年くらい前の話だからな。あの班はああ見えて他にもたくさん機密情報を持つてるからすっかり埋もれてんだ」

「えええええ！？」

シリウス「じゃあ、キョウゴ君は『日本消滅』を体験してるんですよね？その日に何が起こったか本人から聞けたんですか？」

シリウスの質問にゲイルは「…いや」と首を軽く振って伏し目がちに言った。

「俺が昔にあいつと初めて会ったとき、『記憶がない』って言うってたからな。『日本消滅』の記憶が、とは言ってないから少しは覚えていたかもしれないが。だが…あいつはそれのせいで家族を亡くしたんだろう。むやみに聞くわけにはいかない」

ラス「そうっすね…」

シリウス「…あ、ってことは先パイがキョウゴ君に初めて会ったのは『日本消滅』直後の10年前ってことですか？」

754

ゲイル「ああ、そういうことだ」

すると突然パアッと目を輝かせたラスがゲイルを見てワクワクした口調で聞く。

「キョウゴ君と初めて会った時ってどんなだったんですか？ 会っ

たその後のこととか！ どーせ次の街までまだまだ着かないんだし、  
教えてくださいよ！」

ゲイルはチラッと腕時計で時間を確認し、うなずく。

「そうだな。 ……初めて会ったのはロンドンの夏の日で、よく晴れた朝だった。俺は警察の寮に入ってた一時期もあったんだが、当時は自分の借家から警察署へ通勤しててな。ちよっと時間に余裕があつたから周りを眺めながら警察署へ向かっていると、ふと日の光があたらない路地に目が行った」

\*\*\*

「視点：ゲイル」

その路地に座り込んでる少年がいた。

少年はじっと真上の建物と建物の間から見える空を眺めている。

「……………」

俺はそいつの、空を見つめる悲しげな表情が印象的に思えて仕方がなかった。

何やってるんだ？どうしてあんな路地に座り込んでいる？片方の家は空き家だぞ。

親とケンカでもして外に追い出されたのか…？

…あー…俺にもそんな記憶がある、たしかあれは反抗期で…いや、まあいい。

少年のことが気になってたが、そう解釈すればたいして気にならなくなつた。

あ、ヤバい遅刻しそうだ。

パツと目に映つた腕時計に急かされて俺はそこを通り過ぎた。

\*\*\*

「…で、俺はそいつのことをすっかり忘れて警察署に向かつたんだ。だが、それからだ。俺が家に帰る途中…夜もあいつは同じ場所に

いたんだよ  
「

\*  
\*  
\*

…さすがに、おかしい。

路地に朝と変わらずいる少年を近くで見つめて俺は思う。

そいつは壁に寄りかかって眠っていた。

なんで親はこの子にここまでするんだ？

まさか…虐待か？

「なあ………君」

優しく少年の肩をたたいて起こそうとする。

少年「………っ………」

眉が動いた。…が、起きない。

「おい、起きろ」

少し強く肩を揺さぶる。

少年「……………ん……………」

まだ起きない。

「……………」

俺は少し冷めた目つきで少年を見下ろす。

人に試したことはないが…しょうがない。

俺は試しに少年の鼻をつまんでみる。

少年「……………んっ……………」

「起きたか？」

少年「……………」

起きない…!!

さすがに少しイラッとしたぞ、いい度胸じゃねえか!!

次に両頬を引っ張ってみる。

少年「…………っ…………ん…………」

さすがに痛いのか「やめろ」と言わんばかりに、頬を引っ張る俺の手をゆっくり掴んではなした。

しかし起きない。

じじじっ…！…！

助けようがないぞ…？どうしてこいつも起きない…！

「……………はぁ……………」

俺はその場に座り込んでため息をついた。

なんといつか…ここまでやって起きないこいつや、よくわからん子どもを躍起せつきになって起こそうとしている俺自身にも呆れる…。

改めて少年を見つめてみる。

……よく見たらこいつ東洋人なのか。　　ここら辺じゃ全然見かけないな。

何をしてしまったく起きないことはイラッとするが、まあ寝顔は可愛い。

「…普通に起こしてやるか」

そう考えて俺は肩をたたきながら大きな声で起こすことにした。

「おい、おい起きろ。こんなところで寝てたら風邪ひくぞ」

すると。

少年「……………っ? ……」

ようやく目を覚ました少年は俺の方をゆっくりと見つめ返してきた。

その瞳はどこか人を惹きつける魅力がある。

綺麗だと、そう思った。

美少年？ いや確かにそうかもしれないが、それよりもっと深い意味で綺麗だと感じた。

…とりあえず、話を聞くか。

「君…朝もここに居たよな？ 言いつらいかもしれないが、親に虐待を受けてるとかじゃないか？ 俺で良ければ、力になる」

その言葉に少年は一瞬目を見開いたが、すぐに首を横に振った。

「別に……なにも……」

「本当か？」

「うん」

「そうか……。早く帰らないと危ないぞ？ 家はどこなんだ？」

「……」

……答えない。

いきなり家を聞いたから警戒してるのかもしいれないな。

俺は困った顔をしてため息をつき、

「…わかった。少し待ってるよ」

そう言い残して走り出した。向かう先は自宅だ。

\*

「…ほら、これ使え」

俺が自宅から持ってきたのは毛布だ。

少年は目を丸くする。

「何やってんのかわからんが、風邪ひいたら大変だろう。これはお前にあげるから好きに使え」

そうしてその毛布を不器用な手つきで少年にかけて、くしゃくしゃ

と頭をなでた。

「あと、悪いことはするなよ。俺が捕まえることになるから」

そんな冗談を言って微笑み、俺はその場を立ち去った。

\*

「視点：筆者」

ゲイルが去ったそのすぐ後。

少年はじっと自分に向けられた毛布を見て、一度ゲイルが立っていた空間を眺め、また毛布を見て。

「……」

何も言わずにその毛布に顔をうずめた。

ほんの少しだけ、彼が吸っていたものなのか煙草のにおいがした。

\*  
\*  
\*

ゲイル「それで、次の朝もいたんだよ」

\*  
\*  
\*

少年はまだ眠っているようで、毛布にくるまって横になり、小さくうずくまっていた。

ゲイルは声をかけたかったのだがその日は遅刻しそうだったため、出来そうにない。

すると突然ケータイが鳴り響く。

「はい、こちらゲイル……」

『バーカッ！……なにゆったりと喋ってんだよ……！ち……こ……く……！  
！ お前ヤバいぞ……！』

……グイットの声である。

「あー…すまん、今行く」

『お前今まで何回遅刻寸前だと思って…』

プチッ（ケータイを切った音）

ゲイル（…面倒だからあえて聞かないでおこう）

そう思いゲイルは走り出す。

筆者はゲイルの気持ちが変わらなくもないので、この行為に口出しはしない。

走り出したゲイルの後方で目を覚ます少年。

鳴り響いたケータイの音で実は起きていたのだ。

「…………『ゲイル』……………」

そして少年は初めて男の名前を知った。

\*

\*  
\*  
\*

ゲイル「ってことで、そんなことが毎日続くものだから気になって、休暇をもらった日に一日中あいつの様子を見てたんだ」

シリウス「…下手すりゃ犯罪ですよ、それ」

シリウスの言葉はもっともである。

\*  
\*  
\*

「視点：ゲイル」

…やっぱり、おかしい。

この一日の間ずっと見ていたが、一度も食事やトイレに行くこともない。

でも見た感じ衰弱はしていない。 ……なんでだ？

……まったくわからん。

辺りはすっかり夜になっている。

少年は一日中空を見ることくらいしかしていなかった。

ときどきやっていたことと言えば……道に響く足音に反応してチラッと道を覗き込み、少し残念そうにまた元の体勢に戻るくらいだろうか。

そんなことをぼんやりと考えていたその時。

ふと一瞬少年の体が青く光った。

「……！！」

なんなんだ、今の……！

すると急に少年は一気に疲れたかのようにぐったりと体を横たえる。

「……  
おい……！」

何が起こった？  
いったい、今のは……！！？

俺はすぐに少年のところに向かってたたき起し「そっとする。

「おい、おい！ 目覚ませー！ー」

するど。

少年「……っ……ん」

……。

これは……いつだったかの夜に見た反応と似てないか……？

「お前……、……寝てんのか」

少年「……………」

返答がない代わりに少年からは静かな寝息が聞こえた。

それがわかったと同時に体から一気に力が抜ける。

その時、ふとある考えが頭をよぎった。

こいつが何も食べなくても生きていけるのは、さっき俺が見たあの青い光と何か関係があるんじゃないかということだ。

…明日も休みもらったし、この子とちゃんと話してみるか。

そう思い、少年に毛布をかけて俺は自宅に帰った。

\*\*\*

ラス「…で、それでそれで!？」

ゲイル「俺は翌日そいつに声をかけて、気分転換に海の方に連れて行った」

\*\*\*

輝く青い海を見た少年は、子どもらしい好奇心にあふれたまなざし  
ですつと海に見入っていた。

今までの悲し気な表情とは大違いだ。

その表情からすると、まるで海を初めて見たような感じだ。

「…海、初めて見たのか？」

少年「……わかんない」

「ぶじつ」

「今までの記憶……あんまりないから」

「……！」

そうか、だから家を聞いた時に答えられなかったのか。

「それじゃあ……住む場所とか必要だろ？ 用意しようか？」

俺の言葉に少年は少し考えてから首を横に振る。

「……いない」

「お前…冬はどうするつもりだ。 雪が降るんだぞ？」

「…わかんない。 その時はその時だと思っ」

「……。 じゃあ質問を変える。 どの出身かもわからないのか？」

「わからない。　　だけど……もうこの世界には無いと思う」

「……！」

「この世界に無い……？」

「日本か！？」

「たしかに、それなら色々説明がつく。」

「どうやら『日本消滅』から生き残った数少ない人々は普通ではない『力』を持っていると聞く。」

「その『力』こそ、この少年が持っているあの青い光ではないか？」

「お前はたぶん……日本出身だな」

『日本』という言葉の響きに少年の瞳が揺れた。

「……『日本』……？　そうかもしれない……」

「あと、お前に聞きたいことがある。……昨日お前が発生させたあの青い光はなんだ？」

「……見てたの？」

少年が俺を見上げる。

「……ごめんな。いつもあそこにいるもんだから気になって、昨日一日中お前を遠くから見てたんだ」

その言葉を聞いた少年はどこか安心したかのようにほっと息をつき、少し嬉しそうな顔をした。

「……そう。別にいいけど」

また海の方に向き直った少年の口が微かに動いて、今の言葉につけたした。

聞こえづらかったが『…あなたなら』と、そう言った気がする。

沈黙が広がり、波の音が響いた。

少し間をおいて少年は話し始める。

「あの『力』は…とても便利で、使ってる。色んなことができて、服も体も綺麗になるし、何も食べなくても生きていける。…その分、疲れるんだけど」

あの『力』の代償は、疲労なのか…。だから昨日は疲れたように眠り始めてたんだな。

でも…

「でも…楽しくないだろ？」

「…？ なにが」

「食事もとらないし風呂にも入らない。…それってつまらなくな  
いか？」

「……」

少年は口を閉ざしてうつむく。

だが、少ししてからつぶやいた。

「たしかに……そうかもしれない。でも……あなたが俺の様子を見に来るようになってからは、そうでもないよ」

「……！」

不覚にも、嬉しかった。

ってか、そんなことを言われたらもっと何かしてあげたくなるだろ

うが。

俺は「よし」と言って、少年についてくるように手で招きながらその場を後にした。

\*

「視点・筆者」

2人はある店に入った。

「そこに座っとけ」

ゲイルは店の隅にある空いてるテーブルを指差して少年に座るように示す。

言われたとおりに座った少年の鼻孔をおいしそうなパスタのにおいがくすぐった。

しばらくしてゲイルが向かいに座り、パスタが2つ運ばれてくる。

「このパスタ旨いだよな」

「……」

「食べてみるよ。嘘じゃないから」

少年はまじまじとゲイルを見上げた後、コクンとつなずいて食べ始めた。

「……！ ……おいしい」

つい本音が出た少年の様子にゲイルは優しく微笑み、

「だろ？ 俺がいる時はいつでも食わせてやるからな。だから……」

やがて悲し気な笑みに変えて少年を見つめる。

「だから、俺といる時はあまりその『力』を使わないでくれ。 約  
束だ」

「…なんで……？」

「お前は人間だ。 人間が人間らしく生きないでどうする」

その言葉は、少年の心に鮮やかな色を発しながら響いた。

そして少年は疑問を口に出す。

「さっきから、気になってた。 ……あなたはどうして、俺を怖がらないの？」

普通の人間が持っていない『力』を持つ者。

もしかしたら自分は『人間』ではなくなったんじゃないかと、ずっと考えていた。

そしてそれを知った人間は自分を怖がって近づかないんじゃないかと。

だから、あなたまで俺の前から居なくなるんじゃないかって、  
と…。

少年は怯えるようにゲイルを見つめると、当の彼は目を見開いてキ  
ョトンとしていた。

「『』どづして『』って……怖がる理由がないじゃないか」

当然のように発せられたその言葉に少年の瞳が揺れる。

そのまま、少年はほころんで柔らかく笑って、思う。

『この人はただ者じゃないな』、…と。

\*\*\*

ゲイル「…とまあ、その日はそんな感じだ」

ラス「なんつーか…なあ、シリウス」

シリウス「ああ。…キョウゴ君も可愛い所があるんですね」

「…まあな」

後輩の言葉にゲイルは微笑む。

ラス「俺らがこの前会ったときってそんなに一緒に居れなかったし、  
そういう面見れなかったよな？」

シリウス「そうだな。 謎の多い子って感じしかなかった」

まあそれが当り前だろう。

実際この後輩2人はセリスキュオレートで台車にのって逃走劇を繰  
り広げていた最中と、キョウゴを追っていた男を捕まえたときにし  
か話していないのだ。

次の街では、話せるといいが。

\*

シリウス「そういえばさつきから思っていたんですが」

ゲイル「なんだ？」

「その…なんか寒くないですか？」

ゲイル「確かに…そうだな」

セリスキュオレートが暑かったからなのだろうか。

いや、それだけではないだろう。

ラスは曇り始めていた列車の窓を手で拭いて外を眺め、「うわっ」と声を発した。

「シリウス、先パイ！！ 雪降ってますよ、しかも大雪！！」

ゲイル「本当か！ 次の街は季節が真逆なんだな」

シリウス「それでは、コートを羽織っていった方がいいですね。  
あ、駅に着いたようですよ」

そうしてようやくやく刑事3人は駅に降り立つ。

…今回の街は、『リセラ』だ。

\*  
\*  
\*

買い物から帰ってきたキョウゴは今、なぜか宿の中にあるバーのカウンターにいた。

そこで彼は、前の街でも見慣れたバーテンダーの格好でカクテルを作る。

まさか、この前のバイトの経験がすぐ使えるとは。

いつそのこと、こいつはバーテンダーを職業にしてもいいのではないのかとさえ思う。

そしてそんな大人な雰囲気漂うその場所に似合わない人物が一人。

「キョウゴ、ご注文！！ ラストオーダーはジンリッキーだよ！！」

…ミオである。

「…わかった、今つくる。ミオ、このミステリア・ロワイヤルを  
あのお客さんに持って行って」

「うん！」

注文票を持ってきたミオが今キョウゴが作ったばかりのカクテルを  
客へと運んで行った。

数分後……。

従業員「本当に助かりました、ありがとうございます！…これは今  
日の分の給料です。あの…申し訳ないのですが、明日も来ていた  
だけないでしょうか？」

キョウゴ「え…?」

「今連絡が来たのですが、大雪でここの汽車の運行の目途が立たなくなってしまうて。それでこれからたくさんのお客様がこの宿に来るようなんです。ここはこの通り、従業員の数が足りなくて…」

「そうですね…。 わかりました、それでは明日も来ます」

キョウゴがそう言って優しく微笑むと、従業員は嬉しそうに何度も頭を下げて仕事に戻っていった。

……その時、まさかのことが起きた。

ガチャ。(宿の入り口のドアが開く音)

「あのおー、ここに泊まりたいんすけど空いてますー?」

その言葉とともに入ってきたのは、ゲイル達…刑事3人だった。

両者 「」「」「」「」……あ「」「」「」

……。

ラス「え…あれっ？ キョウゴ君じゃん！ 前の街ではどーもっ」

キョウゴ「……………（絶句）……………はい、どうも）」とりあえず挨拶（

シリウス「こんなこともあるんだな……………」

… 人生は、何があるかわからない。

ゲイル「本当に珍しいよな……………」

ミオは突然のことに一瞬思考がついていかなかったが、すぐにハッとしてキョウゴを見た。

「あつ…!! ねえねえキョウゴ!! あの人たちっていつつもキョウゴが話してる人たち!!?」

どうやらミオも刑事たちのことはキョウゴから聞かされていたらしい。

キョウゴのワイシャツを引っ張って目を輝かせるミオにキョウゴは苦い顔をしてうなずいた。

キョウゴ(逃げたい気もするよっな、しないよっな……)

そんなキョウゴが目線をそらすと、目線の先にはさっきの従業員がせっせと働いていて、息が詰まった。

頭の中で錯綜するキョウゴの思考は、こっぴである。

刑事さんがいる　逃げようかと思う　でも今従業員さんに  
「明日も来ます」って言うっちゃった　つまりそれは今日ここに  
泊まって、明日も来てほしいってこと　刑事さんたちもここに  
泊まりたい

「逃<sup>しま</sup>げ場、なし。」

「キョウゴ」……………はあ……………」

今回の街ではいったいどうなることやら。

それを一番心配に思っているのは、キョウゴかもしれない…。

第二章  
Part 3

Fin .

## 第二章 I Birthday . . . Part 3 (後書き)

今回はまさかの出来事が起こりました。

ミオはキョウゴの娘だと言うし、刑事たちとキョウゴはりセラという街に来て1日目です。

キョウゴのため息で終了した今回のPart...はたして次回はどうなるのやら。

今回の更新は筆者の活動報告のところに載せておきます。

それでは、次回でまたお会いしましょう！

## 第二章 I Birthday . . . Part 4 (前書き)

今回の街はリセラです。

前回のPartで見事に鉢合わせてしまったキョウゴと刑事たち。

そしてなんとも言えない反応をするキョウゴにゲイルはある「頼み」をする…。

今回のPartもあまり進展はありませんが、よろしく願いします!!

( 次回の更新予定は活動報告のところに書いておきます )

それでは、本編へどうぞ。

## 第二章 I Birthday . . . Part 4

…どうして、こんなことが。

おそらくキョウゴはそんなことを言いたいのだろう。

まさか自分たちと同じ宿に刑事3人も泊まるなんて。

ミオ「ねえねえー私に紹介してよー！！ 誰かわからないじゃん！  
」！

ミオは楽しそうにキョウゴの服を引っ張っている。

そんな少女にキョウゴは一度困ったように目を伏せた。

キョウゴ「…真ん中にいるのが『刑事さん』、その両脇に居る人が『後輩の刑事さん』」

……めちゃくちゃアバウトな説明である。

しかもラスとシリウスは『後輩の刑事さん』でひとくくり。

彼にも一応、少しは投げやりなところがあるようだ。

そんなキョウゴの説明を聞いてミオは顔に「？」マークを浮かばせながらもうなずいた。

半分わかったような、それでいて半分わかってないような。

すると刑事たちは簡単に自己紹介をする。

「俺はゲイルだ」

「俺はラスティウス・フォルカ。呼ぶときはラスでいいぜ」

「…シリウス・レイター」

順々に名前を述べてくなく、シリウスだけは微妙に浮かぬ表情。

それもそのはず…セリスキュオレートでたくさんの子どもに後をつ  
けられた記憶がフラッシュバックしているからだ。(第一章 Pa  
rt 4 参照)

刑事たちの紹介を聞いたミオは笑顔になり、ぺこつと頭を下げた。

「私ミオってゆーの!!! よろしくね、刑事さんたち!!!」

そんな少女にゲイルも優しげな笑顔で答えて、

「ああ、よろしくな。 えっと、キョウゴ…この子は  
?」

そのままキョウゴに問いかける。

するとキョウゴは少し戸惑った様子を見せてから、あっさりど。

「……………娘です、俺の」

と、そう返した。

……………。

ラス「えっ……むす……」

シリウス「……め……？ …………って」

ラス・シリウス「はあああああああ……！！！！！！……？  
？？」（宿全体に響くほどの大声）

ゲイルはキョウゴの言葉にうなずいて。

「娘か……なるほど」

………平然と納得。

なかなか強い精神をお持ちのようですねにより。

それとは対照的にシリウスは虚ろな目になりながらボソボソとつぶやく。

「娘……俺たちより年下のキョウゴ君が……俺たちよりも相当なやり手……キョウゴ君が……娘……」

そしてそんなシリウスの肩を必死に叩いたり、目の前で手をひらひら振って目を覚まさせようとするラス。

「シリウス、シリウス……！……しっかりしろ……！……大丈夫だ、お前恋愛オンチだけどきつと輝くときは来る……！……」

……お前はいつたい何を言ってんだか。

慰めているのかすらまったくもって謎である。

そんなさまざまな様子 of 刑事を見てキョウゴは再び困ったような顔をしてため息。

キョウゴ「……俺は部屋に戻ります。ミオ、まだここにいてもいいけど早めに戻ってきて」

ミオ「わかった！ あ、バイトだもんねー」

そんな2人の会話にゲイルは少し首をかしげた。

ゲイル「バイト？」

ミオはゲイルを振り返ってニツコリ笑う。

「うん！ 今回のバイトはねー？」

「ミオ。 ……言わないで」

「ちえ〜 ……」

少し口走ったミオをすぐにキョウゴが抑えて、ミオは口をとがらせた。

今さらだが、さっきまでキョウゴとミオが手伝っていたバーの仕事

は、午前中から始まっていた。（普通なら到底ありえない）

だから現在は真昼である。その謎のバイトはどうやら午後から始まるようだ。

キョウゴはミオから苦い表情で顔をそむけ、自室がある方へ歩いていこうとする。

その時。

ふと「あ」と声を漏らしたゲイルが彼を引き止めた。

「待っていてくれ、キョウゴ」

その声を聞いて足を止め、振り返るキョウウ。

「……なんですか？」

「頼みがあるんだ」

「……？ ……内容によりますけど」

「 ……せめて……4日間、ここに泊まってくれないか？」

ゲイルが言った『頼み』の内容。

その言葉に後輩2人とミオは不思議そうな顔をしたが、キョウゴの瞳が一瞬揺れた。

そしてすぐその表情を隠すように背を向ける。

816

「……わかりました。 ……ミオ、フロントに4泊することとお  
いてくれる?」

「はい」

「……ありがとう。 それじゃあ、俺はこれで」

そのまま顔を見せずにその場を後にするキョウゴを眺めながら、少し心配な様子でゲイルは隣のミオに聞いた。

「…キョウゴは今の頼み、嫌だったかな」

するとミオはフフツと笑って、

「キョウゴは、あー見えて子どもっぽいところがあるからねー。素直じゃないだけだよ」

…そうサラッと答える。その口調は大人さなからであった。

恐るべし、9歳児。

しかしゲイルは「素直……？」と首をかしげる。

どうやらこの男、ミオが言った『素直じゃないだけ』の意味がわかっていないようだ。

そんな様子を見ていた後輩2人。

ラス「今どきのガキは大人より大人なのか……？」

シリウス「……ラス、俺は今あの子がキョウゴ君の『娘』ってことだけで混乱してるんだから、余計に混乱すること言わないでくれ……」

……悲痛な響きの言葉である。

ミオ「あっ　ねえねえ刑事さん、私と握手して！」

ゲイル「握手？　……こうか？」

ゲイルがスツと手を差し出すと少女は嬉しそうに目を輝かせて、小さい手ではあるが力強く握り返した。

なんで、握手？

そんな疑問がゲイルの表情に浮かんでいる。

「…これでいいのか？」

「うん！！…ふあああ…！なんかただ者じゃない感じがする…！！」  
（自分の両手を見つめて）

「いや、ただの刑事なんだが」（苦笑）

「キョウゴからたくさん刑事さんのこと聞いてたの！ やっぱり話の通り、刑事さんはかっこいいーです！！お嫁さんになりたいなあ…」

………待て、この話の流れは…

シリウス「前もどこかで、聞いたような……」

ラス「やっぱ先パイすげえな！！　こーいつの『マダムキラ』っ  
っの？」

シリウス「…『マダム』じゃないぞ？」

「……少女？　『少女キラ』？」

「なんか危ない響きだから、やめろ」

……正当な判断である。

すると、宿のエントランスにあつた掛け時計を見たミオは「あ！！」  
と小さく叫んだ。

「いけない、もうこんな時間！！そろそろいくね！　そしてこれは  
ぜひとも刑事さんに！！」

ゲイル「？」

少女は右手を高く掲げた。

そして、次の瞬間。

少女の手が白い光に包まれて、  
刑事たちの頭上から白

い花が数本舞い降りてくる。

刑事3人「ッ」

「!!!」

花に視線を奪われてから少女の方を見たとき、すでに彼女はいなかった。

ラス「うっそお〜…?」

シリウス「あの子も…キョウゴ君と同じ『カ』を…?」

後輩が茫然とつぶやくと、ゲイルは考えにふける様子で首を横に振った。

「いや……おかしい」

ラス「え？」

ゲイル「あの子の髪の色は、ミルクィブラウンだった」

ラス「????? え、いや…はい、それが？」

ラスは意味が分かってないようだ。

するとシリウスがひらめいたらしく、顔を上げた。

シリウス「…そうか！ 本来その『力』は日本人の一部だけしか持っていないはずですよー！」

ゲイル「その通りだ。 ……後でキョウゴに聞いてみよう」

ラス「あ、キョウゴ君と言えば。 先パイ、なんでキョウゴ君に4日間泊まるように頼んだんですか？」

シリウスも同じ疑問だったからか、一度うなずいた。

だが、ゲイルは微笑を見せて「いや……ちよつとな」と、言葉を濁らせるだけ。

後輩2人は顔を見合わせて首をかしげるが、まああまり深入りはしないでおこうと考えて話題を変える。

シリウス「それにしても、スズランの花をくれるとは…。先パイ、今回の街では良いことが起こるかもしれないよ？」

シリウスはミオがくれた花である、スズランを眺めながらクスツと笑った。

しかし、ゲイルとラスはシリウスの言葉の意味がよくわからない。

ゲイル「？…どういつことだ？」

シリウス「花言葉ですよ。 スズランの花言葉は『幸福の訪れ』。  
まあ他にも『純愛』とか、色々な意味がありますけどね」

ラス「『幸福の訪れ』ねえ……。 案外もう叶ってるんじゃないんすか？ もうキョウゴ君と会えたんだし！」

確かに…新しい街に来た初日に、しかも同じ宿でキョウゴと出会うなんてのは今までほとんどなかった。

ラスの言葉も一理ある。

ゲイルは後輩の言葉を聞いてから、またスズランを見て微笑した。

もしかしたら……まだ良いことが起こるかもしれない。

キョウゴにまた会ってゆっくり話せばいいな。

そう考えるゲイルの心にはそんなささやかな希望が静かに満ち始めていた。

\* \* \*

「視点：ゲイル」

ラス「うーん……見た感じ居なかったなあ、キョウゴ君たち……」

ラスのガツカリした声が部屋に響く。

俺たちは部屋数の関係で同室に泊まることになった。

今は外で食事をして、明日の朝の分の食材を買って帰ってきたところだ。外はすでに暗い。

バイトだと言ったキョウゴとミオの姿を外で探したが、見た感じそれらしき姿は見当たらなかった。

俺はベッドのすぐ向かいにある小さなキッチンを眺めながら昔のこととを思い出す。

すると自然と笑みが表情を覆った。

「？　どーしました？」

隣のベッドに寝転がっていたラスが俺の顔を覗き込む。

「あぁいや…ちょっと昔のキョウゴを思い出して」

汽車の中でキョウゴと初めて会ったときを思い出したからだろうか。

視界に映るいろんなものから、あいつと過ごした日々を思い出す。

「昔のキョウゴ君が…どっしたんです？」

シリウスも穏やかな表情をして聞いてきた。

今日はなんだか俺ばかり喋っている気がするが……まあいいか。

「昔、あいつが俺の家に来ていた頃があっただ。それで俺はあの夜、遅くに帰ってきてあいつが寝てる間にケーキを作ってた……」

\*\*\*

「……ただいま」

今日は早く帰るってレストに伝えてたが、急な予定が入ってすっかり遅くなってしまった。

家に着くと…俺の帰りを待ってくれていたのか、あいつは電気をつけたまま床に転がって眠っている。

その髪を優しく撫でてため息をついた。

「…ごめんな、今日も遅くなって」

最近、こんな日々が続いている。

「…ん……」

話しかけても、やっぱり起きない。

だけどほんの少しだけ笑みを浮かべた気がした。

…その表情が、少し俺の心にグサツと来る。

俺はこいつに何度嘘をついてしまったんだと、後ろめたくなった。

しかもそれでこいつが怒るならまだしも、いつも寂し気に微笑んで「しょうがないよ」って言うってくれるものだから。

なんか、ものすごく申し訳ない…

俺はこいつをベッドに寝かせながら、何度目かのため息をつく。

……何かで、喜ばせてあげたい。

その時、ふと思いついた。

「そつだ、こいつのためにケーキでも作るか」

あいつは、口では言わないが甘いものが好きらしいからな。

\*

数時間後。

外はすでに明るくなり始めている。

「……よし、完成だな」

俺はたった今完成したケーキを目の前にして満足気のため息をつく。

ちょっとしたサプライズだとも思ってくれれば、それでいい。

「喜んでくれるといいが……」

俺はそれをベッドの隣にあるテーブルの上において、こいつに食べるようにメモを残しておいた。

これできっと、食べてくれるだろ……

そんなことを考えているうちに俺にも睡魔が回ってきて、気づかないうちに床の上で眠りについていた。

\*

「えっ………?」

次に俺が目を覚めたのは、少年の声が聞こえたときだった。

寝ぼけた視界で見ると、あいつがテーブルの上のメッセージを目を見開きながら眺めている。  
どうやら俺の視線には気づいてないらしい。

「刑事さんが…俺に…」

そしてケーキを口に入れた瞬間、すぐに笑顔になった。

「おいしい……！」

…ああこそ、可愛いな。

俺が作った料理を食べるときはいつも笑ってくれるけど、今回はそれ以上の気がする。

その表情が可愛くて俺もすっかり笑みを見せていた。

でも、向こうはきつと俺が見てるのを知ったら気が気じゃなくなるだろうから、さりげなく自分の表情を隠す。

あいつの笑顔を見れて、ほっとした。

…そんなことを思っているうちに、また俺は眠りに落ちていた。

\* \* \*

ゲイル「…とまあ、そんなことがあったもんだから、なんか思い出してしまっただな」

.....。

.....ん？

どういわけか俺の言葉の後に少しの沈黙。

ラス「ちょ……っと待って！！待ってください、先パイ！！なん  
か今日一日で俺ん中のキョウゴ君のイメージ壊れまくってます！！」  
可愛くなってる！

シリウス「っていうか先パイ、ケーキ作れるんですか？」

「ああ。作れと言われたらある程度のものは作れるよ」

料理においては、自信がある。

そんな俺にラスが目をキラキラさせて言った。

「先パイ、それ外見に合わないけどすごいつス!!!」

……外見に……合わない……。

「……心中複雑なコメント、ありがとう」

そう答える俺の表情が苦みを帯びているのは、言うまでもない。

\*

「視点：筆者」

刑事たちのこの一日はまったくたいしたことせず、終わりに近づいていた。

ゲイルは街のガイドブックを眺めていて、ラスはベッドの上でごろごろとせわしなく転がっていて、シリウスは銃の手入れをしている。

しかし数秒した後、はたとシリウスの動きが止まって。

「…おい、ラス」

「……なに」

「いい加減落ち着け！！ 目の端でちょこまかと動かれるこっちの身にもなってみろ！！！」

… 少しずつ溜まっていたイライラを吐き出した。

だが、ラスもガバツと上半身を起こしてガキさながらの反論をする。

「だって暇なんだもん！！　しゃあねーだろ！！！！」

ゲイル「…おい、もう夜遅いんだから大声出すなよ」

後輩「…すみません」

そういつて後輩2人を静かにさせたゲイルだが、まあラスの言い分がわからないわけではない。

ゲイル「…この部屋にはテレビもないから暇つぶしできないしな…」

刑事3人は何か暇つぶしになることを考える。

しかしたどり着く答えは、やはり…

ゲイル「何か……話そうか」

ラス「そうっすね……」

……はたしてこいつらに『早く寝る』という選択肢はないのだろうか。

ゲイル「…と言ってもなあ…今日はなんか俺ばかり喋ってるし、お前らは何かないのか？ …シリウス、どうだ？」

シリウスは話を振られて少し考え込んだ後、「あ」と声を発して。

「今シスとトランスの顔が浮かびました」

…なぜ？

ラス「ナイス！！ んじゃ、アレ話そうぜ。俺たちがあいつらと

デー・エフ  
『TF』で組んだときのこと！」

『TF』というのは『T O F o u r』の略で、この特殊捜査班の

みに存在する隊形の名称だ。

この班は通常2人1組で行動することが決められているが、任務の場合によっては隊形が変化して4人1組で行動することがある。

ゲイル「お前らとあの2人が組んだのか？ 面白いことになりそうだな」

ゲイルはその光景を思い浮かべているのか楽しそうに微笑した。

846

シリウス「あの時の任務で、俺とシスが負傷したんですが…」

ラス「その時の教官がめっちゃ腹立つヤツで…！」

\*\*\*

負傷したシリウスとシスの姿を見た教官の最初の一言は。

『使えんガキどもだな』

…だった。

\*

救護用テントの中に4人はいて、シリウスを除いた3人がテントの入り口から恨めしい視線を遠くにいる教官に向けていた。

ラス「許せねえ……あいつマジで許さねえ……!!」

シス「俺たちほど使えるヤツ他にいなえし。 目ふし穴なの?アレ」  
( 教官をアレ呼ばわり )

トランス「アタマ腐ってんじゃね?アイツ!!」

ラス・シス・トランス「……はんっ!!!!」「」( 教官の方にぶんぞり返って )

そんな3人を呆れた様子で見つめるシリウス。

「お前ら、悪態つくなよ……」

……唯一まともな人間である。

ラス「やだねっ！！　　ってかあいつが悪いんだし、俺らのせいじゃねーもん！！」

シス「アイツ…ホント消えてくれないかな」

トランス「ってか俺たちに『使えない』とか言っならお前ひとりです任務やってこいって話だよな」

ラス・シス・トランス「……はんっ！！！！」「」（再び教官の方にふんぞり返って）

シリウスはため息をつきながら負傷した体を引きずってテントの入り口を閉めた。

「もういいだろ、嫌な人のことは放っておこう」

ラス「お前が言うなら別にいいけどよお…… あ、ってか俺たち何気に意気投合してね？」

トランス「だな！！ ラックスとは大違いだ！！」

シリウス「ラックスとは気が合わないのか？」

シス「合わない合わない。だって俺らラックスのこと大嫌いだもん」

トランス「なー。アイツバカだもん。大っ嫌いだよ」

そして双子はグチグチとラックスの悪口を言い始めた。

そんな2人を眺めたラスとシリウスは何日か前に聞いた情報を思い出す。

ラスはシリウスの腕をつついた。

「なあ、そーいやラックスってこの前……」

シリウスもラスが言いたいことを理解してうなづく。

「ああ。 前の任務の時に脚を負傷して、今は病院に居るらしいよな」

ピタッ

.....。

とたんに背後で聞こえていた悪口が途切れ、沈黙が包んだ。

ラス・シリウス（…え、なにこの沈黙）

ラスとシリウスは同時に双子の方を見ると、彼らは2人して口をあ  
んぐりと開けて目を見開き…愕然<sup>がくぜん</sup>としていた。

……動揺、とも言える。

筆者が今のこの双子のセリフを考えるなら、おそらくこうだ。

『…え、マジすか？』

ラスとシリウスはそんな反応をする双子に、どこか怪しむ視線を向けた。

……。

その視線を受けた彼らはハツとして明後日の方向を見やり、

トランス「まっ、まあ…その…俺らラックスのことちょっと大好きだし？」

シス「…み、見舞いに行かないこともないけどな」

…そして互いに頷きあう。

トランス「ラックスはレモン好きだしっ…」

シス「途中で買って持っていてやってもいいよなっ…」

……。

ラス・シリウス（実はめっちゃ心配してる……？）

さらに再び双子はハツとして、ラスとシリウスを見つめた。

トランス「…なっ、なにこっち見てんだよ!! 言っとくけど、別に心配とかしてねーから!!」

シス「アイツが脚負傷してるのを見て嘲笑ってくるだけだから!!」

トランス「だからとりあえず」

トランス・シス「…どこの病院か教えて!!」

……バレバレである。

\*  
\*  
\*

ラス「…って言いよってきたんスよ」

シリウス「素直じゃないですよね…」

ゲイル「なんだ、てつきり俺はあの2人はラックスと気が合わないもんだと…」

…さすがはこの男、変なところで鈍感だ。

\*

一方その頃。

「刑事さんたち、なんか楽しそうだねー」

部屋の壁に耳を押し当てていたミオが言った。

この行為から分かる通り、実は今回刑事たちが泊まる部屋の隣ではキョウゴたちが泊まっていたのだ。

これもまた、何かのめぐり合わせだろうか。

すると、キョウゴはベッドに座りながら軽く目を伏せる。

「…ミオ、やめた方がいい。プライバシーの侵害だ」

まあ、一見正論に思えるのだが。

「キョウゴだって他の人の会話、『力』使って盗み聞きしたりするじゃーんー!!」

「……っ」

なかなか痛いところを突いてくる少女である。

確かに前の街でキョウゴは平然と遺産相続に関する話を盗み聞きしていた。…かなり聞こえが悪いが。

少し返答に詰まるキョウゴの顔をミオが興味津々しんしんな表情で覗き込んでくる。

「それに…刑事さんたちの会話、気にならないのー？」

またしてもキョウゴは返答に詰まり、

「……………、……………気にならないよ」

「あー、いま変な間まがあったー」（鋭い一言）

「……………」（何も言えないキョウゴ）

…再びミオに言い負かされた。

そんなキョウゴをミオは面白い遊び道具でも見つけたかのようなキラキラした瞳で見つめる。

「ホントは気になるんでしょー？ 刑事さんが何話してるか、とか  
！」（ 楽しそう）

そんなミオに一度冷めた視線を送ったキョウゴは、ふいっと目をそ  
らし、

「…………別に。 明日は朝からバイトだし夕方はバーで手伝わなきゃ  
ならないから、早く寝よう」

…どこか素っ気ない口調で言いながらベッドの布団をまくり上げた。

その様子を見たミオは期待していた反応が見れないことにブーイングする。

「えーっ！？ つまんなーい！」

「……寝る」

そんなブーイングなど、聞くものか。

そう言いたげな表情でミオを見たキョウゴは我先にとベッドに潜った。

そしてミオは渋々と隣のベッドに脚を入れるが、それでもまだ納得いかないように駄々をこねて。

「……ミオ、もう電気消すよ。 5…4…3…」

キョウゴがほぼ強制的に電気を消すカウントダウンを始め。

「え、待って待って、暗いのはイヤ!! 寝るから、寝るから!!」

その言葉にいそいそとミオが完全にベッドに潜った。

なかなかキョウゴも子どもの扱いをわかっている。

『カウントダウン』は、有効な手段だ。

そして枕元のライトスタンドのひもを握りながらキョウゴは、暗いのが怖いと言ってすっぽりと顔を布団で覆っているミオを見て優しく微笑み。

「…………おやすみ、ミオ」

…………そつと電気を消したのだった。

ラス「なんか、気抜けちゃったな」

\*

シリウス「ああ。前の街で忙しかった分、今日は何もなかったからな。当然なんじゃないか？」

再び戻って刑事たちの部屋では、風呂上りの後輩2人がそれぞれのベッドに寝転がっていた。

ゲイルは今シャワーを浴びているはずだ。

そして数分後、脱衣所の扉が開いて。

ラス「…あ?？」

シリウスとラスは脱衣所から出てきた人物を見て硬直した。

長身で、上半身裸で、程よく筋肉がついてて、前髪が長めで……誰だこいつ。

865

……。

シリウス「…えっと、失礼ですがお名前は？」（本人確認）

「……え？ ゲイル・ガルシアだが……」 忘れたのか…？

ラス「俺たちの名前、フルで言えます？」（本人確認）

「お前がラストイウス・フォルカで、その隣がシリウス・レイター」

シリウス「俺たちの趣味・特技言えます？」

「シリウスが鬼ごっこの鬼役、ラスが旅行だろ？」

ラス・シリウス「……………」

後輩、疑惑の視線。

そんな目線を受けた男は戸惑いながら、前髪を両手でかきあげる。

「あー…えっと、これでわかるか…?」

ラス「…あ、いつもの…」

シリウス「オールバック…先パイだ!」

…いやいやいや。

ゲイル「普通に疑わないで気づいてくれ……」

毎度のことだが、この後輩たちはアホである。

ラス「先パイ…：…すげえ！！ 鍛えあげられた体に、そこに残ってる  
いくつもの古傷…：…！ これこそ厳しい戦場をくぐってきた証…：…！！  
…：…おみそれいたしやすつ…：…！！」

ゲイル「…：…は？」

まあ、当然の反応だろう。

シリウス「先パイ、嫌なら無視していいんですからね」

その言葉に苦笑を見せるゲイル。

ゲイル「いや…：…別にそこまでは…：…。ラス、重要なのはどれだけ傷  
を残したかじゃない。いくつもの戦闘からどれだけ色んなことを学  
べるか、だ」

そして替えのワイシャツに着替え始めた。

ラス「あ、はい!! 覚えておきます!!」

シリウス「先パイ、今度からその髪型でもいいんじゃないですか？  
若く見えるし、似合ってますよ?」

…というよりも、若干色気がある…と言った方が正しい気もする。

ゲイル「うつ…別に俺は若く見られたいとかは思わないんだが…。  
この髪型だと、どうもやる気が入らなくてな。どうせ雨の日だと  
こうなるし…」

ラス「えーそうなんスカー？ かつこいーのに…」

ゲイル「そしてなにより、お前らに『俺』だって認識してもらえな  
いから、困る」

後輩「あー、確かに」

……逆に、なぜ気づかないのかが謎である。

\*\*\*

翌朝、ラスとシリウスが目覚めると朝食がすでにできていた。  
トーストにサラダにスープなど、いかにも「朝食」な感じだ。

ダイニングテーブルの席に座っていたゲイルはもう身支度が済んでいて、

「おはよう」

寝ぼけている様子の後輩に微笑みかけた。

……… 実に、できる男である。

第二章 Part 4

Fin .

## 第二章 I Birthday . . . Part 4 (後書き)

…と、いうことでリセラ1日目が終了しました…。

どうやらこの刑事たち、やることがないと「話すこと」「しか浮かばないようです…ww

そして次回のPartで彼らはリセラの街中を探索し始めます。

第一章の疾走感とは対照的にまったりと過ごすことになりそうなの章ですが、引き続き読んでもらえると思います！

では、次回でお会いしましょう！！

## 第二章 I Birthday . . . Part 5 (前書き)

今回はリセラ2日目の午前中です。

刑事たちと別れた後にミオだけが、脳裏を突如流れた映像によってある過去を知ってしまう。

読者の方々には後々はつきりとわかることなので、何があったかはご想像にお任せします。

少し短いですが、本編へどうぞ。

## 第二章 I Birthday . . . Part 5

リセラ2日目の朝。

「よし、じゃあ今日はリセラの街を歩き回ってなにか事件がないか探してみよう」

朝食を食べ終わってしっかりと食器を片づけたゲイルはそう意気込んだ。

今回はキョウゴと約束をしているから、キョウゴを追うという本来の意識はあまりない。

この様子を見てわかるだろうが、彼はキョウゴが約束を守るとい

ことを心から信じているようだ。

その気持ちが後輩たちにも伝わったのか、2人は快くうなづく。

\*

外は寒いだらうと考えると3人は黒いコートを羽織っていた。特殊捜査班のなかで統一された革製で上質なものである。

そうして刑事たちは部屋を出てロビーの方へ向かう。

と、そこにはキョウウゴとミオの姿があった。  
ミオはいち早くゲイル達に気付き、笑顔で手を大きく振る。

「あー!! 刑事さんたちだ!! おはよー!!」

ラス「よっ、ミオ!! 朝から元気だな!」

ミオ「もっちろん!! 元気が取り柄だもん!!」

シリウス「…良いことだと思っぞ」

ミオ「でしょー?」

さっそく後輩たちがミオと話し始める。

ラスはともかく、昨日は少しだけ表情を濁らせていたシリウスもミオと打ち解けたようだ。

そのことに安堵の微笑を見せていたゲイルを見て、キョウゴは少し浮かぬ表情をする。

その表情に未だ気づけていなかったゲイルが後輩たちの会話を一通り見てからキョウゴに向き直った。

「おはよう、キョウゴ」

優しくかけられる言葉と微笑。

それとは逆に少し浮かない顔をして軽くうつむいたままキョウゴも挨拶を返した。

「…おはようございます」

セリスキュオレートで久々にちゃんと再開した時と同じく、どこか

ぎこちない感じである。

ゲイルはその様子を見て少し首をかしげるが、すぐに何か勘付いたらしく困ったような苦笑を向けた。

そしてそつとキョウウゴの顔を少しだけ上に向かせる。その手にキョウゴは少しだけビクツと体を強張らせた。

「…あまりそんな顔しないでくれよ。大丈夫、今回の街ではお前たちを追うことはしない。ここに泊まるって約束してくれたからな」

しかしその言葉を聞いた途端、

「…え？」

キョウゴはキョトンと表情を変えた。まるでゲイルが何を言っているのかがわかってないようだ。

もちろんキョウゴは約束をおぼえている。でも、そうじゃなくて。

だがゲイルは言葉を続ける。

「そりゃあそうだろうな。どこに行っても追われるってなったら、嫌にもなるよな」

…そう、ゲイルはキョウゴの表情の意図を読み間違えているのだ。

キョウゴは、ゲイル達とここで会ってしまったことに不満を抱いているわけではないのに。

そしてキョウゴの顔に添えられていた手が離れていく。

ゲイル「よし、…ラス、シリウス、行くぞ」

後輩「了解…！」

ミオ「いつてらっしゃーい…！」

キョウゴ「…あ……」

キョウゴは少しゲイルに何か言おうと近づくが、すぐに足を止めてしまう。

言葉が、出てこなかったから。

そしてゲイルは後輩たちと楽しそうに話します。

ラス「そうだ！ 先パイ、今日俺も一緒に昼ごはん作りたいです！  
！一応料理好きなんで！！」

ゲイル「そうなのか？ それじゃあ、後でな」

「よっしゃあー!!! シリウス、お前は?」

「俺は料理作らないよ」 ってか、作れない。

「んじゃ、味見と味付け担当な!!!」

「…無理に役作らなくていいんだけど」

「今日はお前らの好きなもの作ってやるぞ? 何がいいか考えとけ  
」  
「よ」

「やったあー!!!」

そんな楽しげな様子の刑事たちを眺めるキョウゴ。

その表情は少し悲し気で、強いて言うなら、うらやましそうです。

ミオ「キョウゴ……。 ……ねえ、私たちもバイトあるし、用意しよ？  
今回のバイト私すごく好きなんだよねー！」

キョウゴの表情を心配げに見つめていたミオが、わざと明るく話題を振った。

「ああ……。そうだな、一度部屋に戻ろう」

そしてキョウゴはミオとともに刑事たちとは反対側へ歩き出す。

キョウゴたちが数歩歩いた時だろうか。背後の方でパタンとドアが閉まる音が聞こえ、3人が宿を出て行ったことを告げた。

\*

刑事たちが宿を出て少し歩くと、赤と緑の色が多く散らばる通りに出る。

赤と緑の色の組み合わせと言えば、クリスマスカラーである。

くれぐれも、あのきつねとたぬきがあるカップラーメンの色だと判別しないでいただきたい。想像して一気に雰囲気壊れた、筆者の二の舞にならないように。

この色でわかる通りリセラの街はクリスマスモード一色で、前の街

ほどの活気はないものの、通りはどこにもぎやかだった。

この平和な街で、事件が起きなければいいが。

その思いは口に出さずとも同じである刑事<sub>3</sub>人は、ほんの少し気を引き締めて街を歩き出すのであった。

\*

「…まだバイトまで時間あるし、少しゆっくりしてこっつか」

そういったのはお分かりの通り、キョウウゴである。

彼はベッドに座りながら枕元に設置されている壁時計を眺めていた。

そのベッドの近くで今か今かとバイトを楽しみにしているミオがいる。よっぽど楽しいバイトのようだ。

「ねえキョウゴ、まだー？」

「…まだ。」

「時間流れるの遅いー!!」

「時間は早く流れません」

「なんで、どうしてー!?!?」

「どつしても。…ミオ、これからほとんど座れないんだから今のうちにちゃんと休んでおいた方がいいよ」

「むう〜…」

ちよつと残念そうにうつむいたミオがキョウゴのベッドの近くから自分のベッドの方へ歩こうとした、その時。

「ミオ」 …… 「ッ!」

ミオの脳裏に突如、ある映像ヒッポンが浮かんだ。

キョウウゴの背後でミオは硬直する。

\*  
\*  
\*

「視点…ミオ」

なんだろう…これ…。  
星がすごく綺麗だな…星ってこんなに光  
ることあるのかな？

みんな…上を向いてる…一緒に星を見てるんだ…。

すぐに私の頭の中で流れる映像の場面が変わる。

なんか雨降ってるみたい。

ここはどこかな…私にはわからないや。

家と家の間のせまい所に男の子がいる。

何してるんだろ、あの子……。

\*

そしてその子が私の方をゆっくりと見つめてくる。

あれ、この顔…まさか…

……キョウゴ？

\*

……そっか、私いまキョウゴの過去を見てるんだ。

また場面が変わった。

この日は天気がいいなあ。

あれ、キョウゴがいる路地の前に誰かいるみたい。

あれは…刑事さんだ…！！

\*

\*

また場面が変わる。

ここは…刑事さんの家の中かな。キョウゴと刑事さんが楽しそうに何か話してる…。

「味はどうだ？」

「…！！ おいしい！」

「そうか、それはよかった。お前が気に入ると思ったんだよ、この味付け」

キョウゴがあんなに幸せそうに笑ってるの…初めて見たかも。きっと刑事さんのこと大好きなんだろうな…。

刑事さんもすごく嬉しそうだし、きっとキョウゴのこと大好きなんだと思う。

\*

また場面が変わって、刑事さんとキョウゴが街を歩いている。

やっぱり2人とも楽しそう。なんか年の離れた兄弟みたいだなあ……。なんかキョウゴって小さい時は可愛い感じだね。

893

また場面が変わって、そしてまたまた場面が変わって。

それでも2人はずっと楽しそうに笑い合っていた。どんな時も。

たぶんキョウゴの記憶の中のほとんどは刑事さんぐらいしかいない

んだと思う。

刑事さんがなかなか仕事から帰ってこれない日とかはさすがに寂しそうだったけど、それ以外はほとんど笑っていた。きっと大切な思い出なんだろうね。

私も2人のこの幸せな時がずっと続くんだろうなって、その時まで  
は………思っていたんだけど。

\*

幸せそうな場面がいくつも続いていくんだと思ったら、急に雰囲気

が変わった。

キョウゴが…泣いてる。

なんで…？

その顔を隠していたキョウゴに気付いたのか、刑事さんがキョウゴの顔をのぞきこむと、キョウゴが無理をして笑顔を見せようとする。

でもすぐにその笑顔は壊れちゃった。涙が止まらないんだと思う。

なんだろ……すごく胸が痛い。苦しい。

これは…このときのキョウゴの感情？ だとしたら…すっごく苦し  
い…。なにがあったの…？

刑事さんも苦しげな表情をしてキョウゴを抱きしめる。

だけどそれがまた一層胸を苦しくさせた。

幸せだった日々が壊れるのを感じる。

今の私は、その時キョウゴが何を思っ  
てどう感じていたかわか  
ら。

キョウゴはこの時、わかってたんだ。

『もう、あの幸せな毎日には戻れない』って。

\*

次に見えた場面は、今まで見てきた場所とは明らかに違った。

コンクリートで四方八方が囲まれている空間。本当に必要最低限の家具しかないみたい。

なんか怖いな…刑事さんの家は暖かい感じだったけど、ここはとて  
も…冷たい感じ。

キョウゴは奥の壁際に置かれたセミダブルベッドの上において、つい  
さつき起きたばかりなのか、上半身だけ起こして自分のすぐそばに  
ある窓から空を眺めてる。

窓は少し大き目で、覗いてみるとこの部屋はどこかの大きな建物の  
上の方にあるってことがわかる。

窓から下にはこの建物の中庭があるみたいで、大きな樹が見えた。

私は今度キョウゴの顔を覗き込んでみる。（私の姿は見えてないみ

たい)

キョウゴゴ…少し顔つきが大人になったね。背も伸びたみたい。さっきの場面から何年か過ぎたのかな。

もうこのときは…ほとんど笑ってないんだね。

胸の痛みも消えてない。むしろ…どんどん傷がえぐられてく感じがする…

\*\*\*

「視点・筆者」

そしてこの後、ミオは知ることになるのだ。

キョウゴとゲイルの間に何が起こって、キョウゴが何を見て、どう思っていたか。

あの幸せそうだった日々が消えた8年前から彼が失踪した3年前までにキョウゴはどんな思いで苦しんでいたか。

そしてその痛みが今もなお彼を苦しめ続けていることに。

\*  
\*  
\*

「視点…ミオ」

「……………」

あまりの衝撃で少しの間、呼吸を忘れていた。

そして無意識に胸をおさえていた手が震えていたことに気付く。

これは……。……すごく切ない。苦しい。痛い。

涙がわずかに瞳を覆っていた。私は映像を見ただけでこんな感じになってるけど、それじゃあ実際に体験したキョウゴは？

きつとこんな程度じゃ収まらないほど苦しかったんじゃないかな。

本当に、死んでしまいたいほど。

『刑事さんは、俺のこと邪魔だったのかな……』

『……こんな日がいつかは来るって、わかってたはずなのに……』

『帰りたい……帰りたいよ……』

『刑事さん……俺……たくさんたくさん勉強します。頑張るから……』

『本当に…つらい。　　つらくてつらくて、俺にはとてま…耐えられ  
ない』

『行かないでっ…………俺を置いていかないで…』

『刑事さん…………幸せそうで…よかった…。　　なのに…どうして俺は  
…………』

『刑事さん、誕生日おめでとつじぎをいします。　　これは…俺からのプ  
レゼントです』

『…「ごめんなさい。俺のわがママを…許して……」』

『もう……これで最後にするから……』

『俺はもう…限界』

『…あなたの誕生日を、最後に一緒に過ごさせてよかった』

『さよなら、刑事さん』

頭の中でまだ響く、キョウゴの声。

実際口に出したのもあれば心の中で叫ぶだけに終わった言葉もある。

その全部が全部、思い出して胸が苦しくなるばかりだった。

「視点・筆者」

ミオはそつとキヨウゴが座っているベッドの上に乗って、後ろからぎゅつとキヨウゴを抱きしめた。

「？ ……ミオ…？」

キヨウゴはいきなりのミオの行動に目を丸くしたが、ミオは何も答えなかった。

その代わりに聞こえたのは、震えた声。

「キョウゴ……今回の街では絶対楽しく過ごそうね、良い思い出たくさん作るからね……絶対だよ……？」

「……？ あ、ああ……」

キョウゴは今までと少し違うその雰囲気戸惑った様子を見せるが、やはりミオは答えない。

それはそうだろう。

あまりの切なさで流れそうになった涙を隠すためなのだから。

……あなたの過去を、知ってしまったんだから。

第二章 Part 5

Fin .

## 第二章 I Birthday . . . Part 5 (後書き)

今回の活動報告は次回のPartの投稿とともにさせていただき  
ます。感謝の言葉やお知らせなどをするつもりで考えているので、そ  
の時はぜひお読みください！

それでは、次回もよろしくお願ひします！！

第二章 I Birthday . . . Part 6 (前書き)

刑事たちのどうでもいい戦いやアクションは健在です。

どうしてこの刑事たちはふざけてばかりいるのか……。

そんなこんなで、リセラ2日目の午後です。

どうやらこの街で新たな出会いがあるもよう。

かなり長くなってしまいましたが、本編へどうぞ！

## 第二章 I Birthday . . . Part 6

…最初に提言しておこう。

『バーゲンに群がる奥様方はただの男より幾分強い』…と。

刑事3人「はあっ…はあっ…っあゝー…」

ある店から多くの紙袋を抱えて出てきた刑事たちは、周りの目さえ気にする余裕もなく地面に膝をついて紙袋を放り投げた。

まあなんとなくわかるだろうが、彼らは疲れ果てているようだ。

その疲労の量が普段犯人を追いかけてる時よりも多いように見えるのは気のせいだろうか。

シリウスはどういうわけかメガネを外していたらしく、

「…………今さらなんですが…俺、バーゲン行くの初めてで…まさか、こっぴつなるとは…………」

ゆっくりとメガネをかけながら低い声音で言った。

その隣のラスは仰向けに寝転がって、

「…甘く…見てたっス…………」

その両手を組んで胸の上に置いている。こいつこのまま死ぬ気だろ  
うか。

さらにその隣のゲイルは片膝をついてうつむいたまま、

「…なかなかの、激戦だったと思う……」

途切れ途切れになってしまっている呼吸を戻そうとしている。

そして少しの沈黙のあと、

3人「」「はあ……………」

… 毎度恒例になってきている、ため息。

さて、刑事たちがなんでこの状況になっているかを時間を戻して説明しよう。

でもその前に、これと呼んでいるあなたに先に言っておく。

最近定番化してきているが…これは読み飛ばしても構わないほど、  
どうでもいい内容である。

\*\*\*

「あ、先パイ見てくださいよ、あれ!!」

リセラの街を歩いている時にラスがそう言ったのが事の発端…とい  
っても間違いではないだろう。

その目線の先にはタイムバーゲンの文字が書かれた店のポスターが  
あった。

シリウス「タイムバーゲンですね。食品が売られるようです」

シリウスがポスターを眺めてぼつりと言つと、ゲイルは腕時計を確認する。

ゲイル「だが：まだ午前中だしな……。今食品を買ってしまったら、宿に戻るまでに鮮度が悪くならないか？」肉とか。

シリウス「昼ごろに帰れば大丈夫なんじゃないですかね」

ラス「それに先パイ、このタイムバーゲン…通常の値段よりも50%〜70%OFFつぽいっすよ」

「!!!!!!!!!!」

ゲイル（50%〜70%OFF……だと!?!）

同時にこの男の脳内に雷が落ちるような衝撃が走ったのは言うまでもない。

そして、彼の中に眠るスイッチがONになった。

急に目つきを変えたゲイルに後輩たちがビクツと背筋を震わせる。

「シリウス、バーゲンが始まるまでの時間は？」

「あ、えっと…あと4分です」

「…上等。お前ら、ついてこい！」

後輩2人「りよっ…りよーかい…」

\*

ゲイルに連れてこられた場所は店の入り口にある店内図の前だった。

辺りを見回すと、今回のバーゲンに人が多く集まることを予想していた店側の対応で、バーゲンまで店内に客が入り込まないために自動ドアが閉められているのがわかる。

「いいか……この店の売り物の配置をよく頭に叩きこんでおけ」

ゲイルはじつと穴が開くほど店内図を眺めていて、それから指で店内図をなぞりながら説明を始めた。

「まずシリウス：お前は玉ねぎのコーナーにいけ。これは詰め合わせだから、テクニックが必要だ。まずは袋を破れない程度によく伸ばすことが必須条件。あとは余分なスペースができないように詰め込めろ」（なんか袋を伸ばすあたりがせこい）

シリウス「袋をよく伸ばす…。…了解」

「ラス、お前はシリウスと同時進行で店の一番奥にある肉のコーナーにいけ。ここにあるのは『各種おひとり様2点限り』だ。肉の種類はあまり考えなくていいからとりあえずひとつの種類の肉を両手にひつつかんでいけ。お前は芸達者っぽいから、全部の指の間に肉のトレイをはさんでいけば…。まあ4種類はとれるよな」(ラスを振り返る笑顔がなんか怖い)

ラス「ひっ…!! ゆ、指の間にひとつのトレイ…。…りよ、了解」

「あ、取った肉をカゴに入れるのは人ごみを抜けた後だ。これはシリウスもだぞ。カゴに入れるまでは安心するなよ。入れても安心するな。バーゲンは戦場だ。いつ奪われるか分からん。…で、俺はその間にじゃがいもを取りに行く」

そこでシリウスはひらめく。

玉ねぎに肉にじゃがいも……まさか。

シリウス「先パイ、今日の昼ごはんはカレーですか!!」

「……………え？ いや、特に決めてないが。今日はお前らが食べたものを作つてやるから、なんにでも使える食材は必要だろ」

シリウス「あ……………そうですか」(なぜかシヨボンとする)

ラス「つーか、肝心のカレー粉が出てきてないんだから肉じゃがの可能性もあるじゃねーか」

シリウス「ん…？ 肉じゃがに玉ねぎつて入つてたか？」

「…え、大抵入つてんだろ」違つのか？

「…そうか。肉とじゃがいもしか入ってないと思ってた…」

「お前……………料理オンチ？」

「うるさい」

ゲイル「カレーが食べたいなら作ってやるか？」

シリウス「あ、いえ。別にそこまで食べたいわけでは…。ただ、材料でわかるのってカレーくらいしかなくて」

ゲイル・ラス「え……………」

シリウスの言葉にゲイルとラスは愕然とした。

材料でわかる料理がカレーのみって、お前…

ラス「えつと…ちなみに聞くけどカレーの材料は？」

シリウス「？ ジャガイモに人参にんじんに味噌みそに玉ねぎに肉…とかか？」

……。

ジャガイモ。 人参。 …… 味噌？

ラス「…っなんでカレーなのにカレー粉無なえんだよ！！ 味噌じゃねえよ、そこはカレー粉かカレーのルーだろーが！！！」

シリウス「あ……本当だ」

ラス「おまつ……バカ!!? バカなの!?!? なんか俺泣きそう!!!」

あまりのシリウスの常識のなさになぜかラスが涙目になっている。  
親か、お前は。

……が、過去に相棒から『聞く耳もない』と言われたあの男は。

ゲイル「おい、バーゲンまで時間ないぞ」

……やはり聞く耳はなかった。

ラス「先パイ、話変えんのやめてー!!!!」

シリウス「肉じゃがには玉ねぎが入ってたのか…ややこしいな」  
（ぼそつとつぶやく）

…このメガネの男、任務に対する実績はなかなかのものだが他のところはイマイチのようだ。

こういうできるヤツに限って致命的な欠点がある。そのような人間は案外探せば割と多くいるものだ。

ゲイル「…で、作戦の続きだが。シリウスは玉ねぎをとつたらダメ元でいいから肉のコーナーに行け。無かつたらそれでもいい。そしてその間俺とラスは他の野菜を取りに行く。シリウスも後から合流しろ」

「了解！」

…と、まあ綿密に計画を立てているわけだが…改めて考えてほしい。

これは一般人の、だいたい主婦が集まるバーゲンだ。

そのバーゲンに挑むために店内図の前でここまで必死になっているこの刑事たちは……かなり滑稽である。

というか、彼らは革製のロングコートや革靴、革手袋まではめていて黒づくめ。滑稽な上にかなり怪しい人物になっている。

彼らは気づいてないだろう。

周りにいる主婦たちがその姿を見て笑いをこらえられてないことを。

\*\*\*

…読者の方々には申し訳ないが、もう少しこの茶番に付き合っただきたい。

ここからはシリウスのルートをAルート、ラスのルートをBルート、ゲイルのルートをCルートとする。

まずは、非常識の代表格になりつつあるこの男を見ていこう。

\*

Aルート

「視点・シリウス」

「なっ……!!?」

俺はたぶん、多少このバーゲンを甘く見てたんだと思う。

それを思い知らされたのは開店直後に自動ドアが開いて人々が中へとなだれ込んでいった時だろうか。

なんだ、この主婦たちの威力は…!ただの人間じゃないだろう!!!

「ぎゃああああああっっ!!!!」

耳元でラスの叫びが聞こえた。

「ラスっ!!!!?」

俺がその方を見ると相方は叫びながらどんどん主婦の波に流されて、一気に消えていく。

お………恐ろしい………!!

そこで思い出すのは先パイのあの言葉。

『バーゲンは戦場だ』

……、………ですよね………!!

やっとその言葉の真意がわかった気がする。俺も本気で行かなければ。

そう思って俺はメガネを外す。

そして、目つきを変えた。

Cルート

「視点：ゲイル」

「ぎゃあああああああつっ！！！！」

「ラスっ！！！！？」

\*

開店直後、後輩たちのそんな声が聞こえた。

「おいおい、大丈夫か？ あいつら……」

俺がその方を少し見ると、ラスは主婦たちによって急速に押し流されていき、シリウスはしっかり目的地へ向かっているが動揺を隠せずにいるようだ。

ちよつと、不安が残るが…

……ま、いいか。 ) 軽くひどい。 b y 筆者 (

何事も実践が必要だ。これはこれからも使える良い経験になるだろう。

それに、『可愛い子には旅をさせよ』的な言葉もあるくらいだし。

とにかく、このバーゲンをクリアすればいいんだ。

「肉……取ればいいんだが……」

\*

Bルート

「視点・ラス」

「ぎゃああああああああああつっ……」

ちよっ…マジ…!? ウソウソウソウソ…!!

こんなに奥様が強いとか聞いてねえんだけど!?

「痛っ！ いたたたたっ！！ 誰!? 俺の足踏んだ人!!」

そんなこんなで30秒ぐらいで一番奥の肉のコーナーに着いた。

これって不幸中の幸い？ いや、そんなこと言ってらんねーけど！

指の間にひとつの肉のパックだよな？

まずは…豚肉…! あとはいいや、適当にとっていっしょ…!!

Aルート

\*

「視点…シリウス」

やっと玉ねぎのコーナーに着いた。

袋を1枚取ったはいいが…これにいくつつ入るかな…。

「まずは袋を伸ばす…か」

そう思って力を入れた矢先、すぐに袋に穴が開いた。

「…あっ」

すると俺の袋を誰かがのぞきこむ。

「ああああ、お兄ちゃん力入れ過ぎだよ！！　もつと力を抑えなさい！！」

…隣に立っていた主婦の一人だ。推定…50代？

「あ、すみません。初めてなもので…」

「あら、初めてなの？　どれどれ、貸してみなさい」

「？　はあ…」

するとそのおばさんは俺の代わりにあつという間に袋を伸ばして渡してくれた。

「長い間主婦やってるとね、こつこつ技ばかりがついちゃうんだよ」

そう言いながら親指を立てて笑うおばさんが、なんか今輝いて見える……！！

「……！！　ありがとうございますー！」

どつちやらただの戦場じゃないみたいだ。

ほんの少し安心する。

\*

B  
ル  
ー  
ト

「視点・ラス」

「じゅおおおいつてえええ……っ……っ……！！」

俺は苦悶の表情で両手を上にあげたまま人ごみを抜けていく。

その両手にはそれぞれ、4つのトレイ。俺ががんばった……！！！！

つつか、痛い！！指痛い！！

先パイ、やっぱり4つも取るなんてキツイよ！やばいって！！

さっきからどうしてか痛いことばかりなんだけど……！！

最初から足踏まれたり、肉のトレイ取るときに誰かに引つ搔かかれるし！さらには太った人に体当たりされたし……！！

なんか俺って損な役回りじゃね？

「はああああ………」

人ごみを抜け、少し肉のコーナーから離れてほっとする。 ああ、  
疲れた…。

その時。

「おい、ラス！！ 次は野菜だ、行くぞ！」

ジャガイモのコーナーを回ってきたらしい先パイが俺に声をかけて  
目の前を走っていく。

「りょーかい…！」

先パイ、俺…口では言わないけど、…早く帰りたいな…!

\*

Bルートのレストラン、Cルートのレストランと合流

「視点…筆者」

「先パイ、ちょっと…待ってー!!」

ラスは前を走るゲイルに向かって叫ぶ。

なんともこの男、今回は可哀そうな目にあっただけである。

しかし、その連鎖はまだ終わらないらしい。

ドレンジャー……

「わっ」

ラスはバーゲンにやってきていた主婦の団体にぶつかった。

「あ、すみませ……って、ちよっ……はあ！！？」

どういっわけかラスはおばさんたちに囲まれて、しま終いには抱きつかれる。

「あら、良い男じゃない！！ ほら、奥さん見て見て！！」

「あら〜ホントー！！ 若いっていいわねえ、可愛いわ〜！！」

.....。

いやいやいやいや！

ラス「いや、可愛いわ〜！」…じゃなくて！！今俺それどころじゃないんですけどー！」

「あらあら照れてるの？ やあだ、持って帰りたいわあ〜！！」

「お兄ちゃん、モテるでしょ！ ね、モテるでしょ！！ あれかしら、この子っていわゆるジャーニーズ系？」

「こんだけかつこいい子なら娘の彼氏に来てても大歓迎だわ！」

「あら、それなら私のところに来てても良いのよ!？」

ラス「ちよ…話進めないで!！」

ラス（つーか俺、野菜が待ってるんだって!! 抱きつかれても困るって!）

その時、主婦たちの間からスツと手が伸びてきた。

「ちよっとすみません。俺の部下を返してもらってもいいですか?」

…ゲイルである。

ラス「せつ…先パイ…!!」

ラスの周りにいた主婦たちはゲイルの低くて少し柔らかい声と微笑に目を奪われた。

「あら…!」

「こっちにも良い男…!!」

その間にラスはスツと主婦の間をすり抜けて、ゲイルに伝わるように微かにうなずいて見せる。

ゲイルもうなずいてそれに応えた。

ゲイル「…ありがとうございます。」  
それでは、「これで」

そしてそのまま2人は野菜売り場へ走っていく。      なんとか切り抜けたようだ。

ゲイル「…危なかったな、いろんな意味で」

ラス「ホント焦りましたよ…。      先パイ、マジ感謝っス!!」

まあ、なんだかんだ言っこの2人、モテる要素はあるようだ。…  
未だに年頃の女性のヒットは見えないが。

\*

Aルート

「視点…シリウス」

「肉のコーナーに来てみたが……」

俺の目線の先にある肉のコーナーに肉はひとつもなかった。というか、人がまったく居ないあたりでそれは想像できていたが…まさかこんな早くなくなるなんて。

まあ、しょうがないか。

で、次に俺がやらなきゃいけないのは…

「野菜…だったな」

\*

Aルート of シリウス、ラスと合流

「視点：筆者」

ラス「あれっ？ 先パイ！？どこっすか！！？」

シリウスがラスのところに着いたとき、ラスはきよろきよるとあたりを見回していた。  
ゲイルの姿は見当たらない。

「おいラス、先パイは？」

「ああ、シリウス今来たのか。 いや、野菜売り場に人が密集してて『これじゃあ野菜取るのは無理っすね』って言って先パイの方見たら、もう居なくて」

「……。 ……じゃあさっきまでここに居たんだな？」

その言葉にラスはうなずく。

シリウス「それにしても…バーゲンってこんなにすごいんだな」

ラス「これはマジで戦場だよ、ホント」

それはシリウスもさつき痛感したため、同じくうなずき返す。

「…早く、ここから出たいな」

「…同感。　つーか、ここに来てから俺踏んだり蹴ったりだもん」

…若者の素直な意見である。

その時。

クーン…！

ラスは自分の後頭部にめがけて飛んでくる何か尖<sup>とが</sup>った物体を察し、目つきを変えた。

そして、

パシッ！！

振り向きざまにその物体を手づかみする。なんといつても、今は班から支給されている非常に丈夫な革手袋をつけているため、飛んできたものがたとえナイフであろうとも手づかみが可能なのだ。

だが。

ラス「……！！……え？」

自分の手の中にあるその尖ったものを見てラスは目を丸くする。

それは…

シリウス「……、……人参にんじん？」

ラス「…だよな？ ……つーことは、まさか…!!」

「おい、ラス・シリウス!! ……どんどん投げるから受け取れよー!!」

後輩「…先パイ!!!!」

…やはり、あの男である。

後輩2人の目線の先には主婦が群がる野菜売り場のコーナーの中へ  
単身で突っ込んでいき、見事前線の位置を獲得したゲイルの姿があ  
った。

シリウスはその言葉にひとつうなづく。

「了解です、どうぞ!」

「っつーか先パイ、投げるんならその前に一言言ってから投げてく  
ださいよ!」…わっ」(何気に正論)

次に投げられてきたのは人参のほかに大根。さらにピーマン、ブロ  
ッコリー、その他もろもろ。

ゲイルが野菜を投げて後輩がキャッチするその光景はサーカスのピ

エロのようである。

その二方の真ん中で数人の子どもが口をあんぐり開けて宙を飛び交う野菜を目で追っていたのは言うまでもない。

ゲイル「おいお前ら、今から気合入れるよ!!」

後輩「はいいつ!!?」「」

ゲイルの方を見て2人はぎよっとする。

なぜなら、活いき活いきとした笑顔のゲイルが次に構えたのは大きい白菜とかぼちゃだから。

(ちなみに「かぼちゃ」の漢字表記は「南瓜」で、筆者はパッとすぐ読めなかったのでひらがな表記にしてある。)

ラス「わーっ!!」ヘビー級はマジ勘弁っス!!腕とか腰に負担きますって!!」

シリウス「…あ、もう飛んできた」

ラス「やっぱり話聞いてねえーっ！ー！！」

\*

ゲイル「よし、野菜はこれくらいでいいな。  
ーに行こう。確かチーズが安かったはずだ」

最後に乳製品コーナー

ラス「ま、まだあるんすか…！！？」

シリウス「……………」

そういつて走り出すゲイルの言葉に、後輩は遅れながらも反応して走り出す。

シリウスは疲労のせいだろうか、走り出すが応答がない。こっぴうのが生きた屍しかばね…いや、走る屍？

そんな2人の様子を一瞥したゲイルはぼんやりと一言。

ゲイル「お前たちも俺も、一応よく食う方だから必然的に買う量も多くなる。だから今みたいに買ひ物が大変になるんだよな…」  
（穏やかな苦笑）

……というか、バーゲンだからではないか？

「まあとりあえず乳製品は俺が言ったものを取ってくればいい。  
頼むぞ」

ラス「うーいース…」（げっそり）

シリウス「……」（……屍しかばね）

\*

そしてたどり着いた乳製品コーナーでさっきと変わらずにゲイルはどんと欲しい食品を自分のものにし、後輩も先ほどと変わらずそれに協力した。

変わったことと言えば…後輩の体力のパロメーターが下がったことだろう。

ゲイル「よし、これで今度こそ終わりだ」

ラス「よかった……。これでやっと安心でき」

そこでラスの言葉を遮るようにアナウンスが響く。

店内の放送アナウンス「本日は当店をご利用いただきありがとうございます。店内の皆様にご迷惑をおかけいたします。誠に申し訳ございません。店内の皆様にご迷惑をおかけいたします。なんと、この放送が終わってから7番レジにて、3分以内に先着20名のお客様限定で全体のお値段からさらに10%OFFになります！  
これは…」

シリウス「…ないみたいだぞ」（ラスの言葉に続けた）

ラス「……………」(絶句)

ゲイル「お前ら、全力ダッシュだ!!!行くぞ!!!」

\*

そうしてギリギリその20名に入ることができた刑事たちであるが、

レジ担当の店員「お、お客様大丈夫ですか!？」

ゲイル「……………平気です。どうぞレジ打ちを続けてください……………」  
(低い声音)

…先ほどのアナウンスの効果で1つのレジに人が殺到したのだ。当然刑事3人はもみくちゃにされたし、しかもその中でカゴに入れた食品を抜き取るうとするマナーが悪い輩（ちから）の手から食品を死守していたのだ。

店員がそう心配（ドン引きとも言える）せざるを得ないほど、疲労のオーラを濃くまとっていたのは言うまでもない。

\* \* \*

……とまあ、そんな長く厳しい過程があったわけで。

刑事3人「……はあ……………」

このザマなわけである。

ラス「先パイ…俺いまものすごくコート着てきたこと後悔していますよ…。暑くて、たぶん今なら上半身何も着なくても平気だと思います…」

ゲイル「…さっきの主婦の集団に囲まれても知らんぞ」

ラス「うっ………」

……。

少しの沈黙。そういえば、シリウスの声が聞こえない。

ゲイル「…？ シリウス？」

「………」

何も反応がないのでラスが上半身を起こしてシリウスを覗き込む。

「…あ、だめです先パイ。 うっすら目開けたまま死んでます」

「……魂を戻す時って何言えはいんだろうな。 あ、花を供えて、  
確か…… Some day the silver c  
ord will break , And I no more . .  
」 ( 讚美歌の一節を引用 )

「いやいや、花供えて讚美歌の一節読んじゃダメっしょ。 天に召されちゃう」逆効果っスよ。

そのとき。

シリウス「……カレー……」 (目をカッと開いて)

ラス「あ、生き返った」

ゲイル「…おかえり、シリウス」

シリウス「?? …俺、どこか行ってました？」

…お前が聞くなという話である。 …ってかその前に、なんでカレ…  
と言ったのか説明しろ。

\* \* \*

しばらくその場で休んで刑事たちの体力が回復してきたとき。

シリウス「それじゃあ、そろそろ帰りましょうか？」

そういつてシリウスがゲイルを見ると、彼は通りの先の一軒の店を見つめたまま静かに言った。

「あ、いや…少し寄っていきたい所があるから俺はそこ寄ってから帰るよ」

「どこ寄ってくんすか？」

ラスの問いにゲイルはその方を指差す。

「あそこ…金属加工店だ。たぶん武器の部品や追加装備とかも売ってるだろう」

その言葉にいち早く反応したのはこの男。

シリウス「行きます」( 即答 )

ラス「うわっ」なにこいつ…

さすがはロンドン中の武器屋を把握していた男である。（裏ルート含めて）

ゲイル「ラスはどうする？」

ラス「んー、宿に一人で残ってるのもアレだし、ついてきます」

そして3人は立ち上がった。

\*

その金属加工店がある場所は、街のはずれだった。

クリスマスで賑わう街中の通りの雰囲気とは真逆で、人の姿がほとんどなく色合いも乏しい場所だ。

この寂しい通りに住んでる人間がいるのだろうかと疑ってもおかしくないような、本当に静かな路地である。

そして刑事たちは目的の店へと入っていった。

\*

中に入ってすぐ、ゲイルはカウンターを探しながら店の奥へと歩いて行った。

一方、後輩2人はその場であたりを見渡す。

割と背の高い棚がずらっと並び、そこに色々な武器の部品がたくさん置かれている。  
さっきのゲイルの予想は正しかったようだ。

さっそくシリウスは棚に置かれたものを物色し始める。

その棚には銃に取り付けられることができる部品が並べてあった。

ラスは特にそこまで興味がないのか（それともシリウスが異常に興味があるためにそう見えるのか）、ふらふらとした拳銃にシリウスが見ているものを覗き込む。

シリウス「ラス、見てみるよこのコンペンセイター。なかなか丁寧な作りなのにこの値段だぞ……！すごくないか！？」

コンペンセイターとは、銃身先端に取り付ける反動抑制器のことである。

銃を撃つときにどうしても火薬の爆発によって銃口が跳ね上がってしまうのだが、これをつけることでその度合いを軽減することができるのだ。確か似たような効果のものに「マズルブレーキ」というものもあった気がする。筆者の記憶が曖昧なのでなんとも言えないが。

ラス「丁寧なのは俺にはよくわからねーけど、まあ安いよな」

そんなラスの簡単なコメントを聞いてるのか聞いてないのか、シリウスは次々と物を見ていく。

「このサイレンサーもなかなか良いな、ああでもここに有るサウンドサプレッサーを使えば……」(コメントが長いので省略)

今度は発砲時の音を消す作用のものについて語り始めた。もう止まらないぞ、こいつ。

それはラスもなんとなく思ったため、相方の姿を見ながらため息をひとつ。

だが、質がいいというのはラスにもわかることだ。  
別の棚に置かれたグリップにつけられるカバーのような銀細工も職人のセンスの良さがわかる粋なデザインになっている。

ラス「確かに、質がいいよなあ」 かつけえ……

????「あつたりまえだよ」

ふいに聞こえた別の声に2人が振り返ると、そこには16か17歳あたりの少年の姿があった。

髪は紫で前髪も少し長め。職人意識なのか暗い色合いのバンダナを頭に置いていて（前の街にいたあのブタ好きなバーテンダーとは違って洒落た感じだ）、作業で所々汚れた作業服を崩して着ている。

その恰好かっこうと手に持っているスパナから、この店の人間なのだろうとわかった。

少年「俺の親方がそれ作ったんだ。質がいいのは当たり前だし、そこらじゃ見かけないすげー良い性能のもんばっかりがこの店にはある」

その自信にあふれた言葉にシリウスはうなずく。

「確かに、質も価格もなかなかいいな。ロンドンの武器屋でもそう  
そう見かけないものだ。…これとそれとあそこにあるものを買  
たい」

ラス「おまつ…そんなに買うの?!?!?」

「ラス、この店のものを侮ひなめらない方がいい。絶対に買って損はしな  
いぞ、俺の言葉を信じる」本当なら全種類欲しいくらいだ。

さすがは、武器マニア。武器というよりは銃だろうか。

ラス「うっ…確かにそう思うけど…。じゃあシリウスシリウスと同じやつ  
と、その上の棚の右から2番目のやつも買う」

シリウス「ああ、レーザーか。俺もほしい」

少年「なんだ、あんたら2人とも見る目あんだね。…まいどあり  
」

少年は2人の品を見る目に喜んだらしく、嬉しそうにうんうんとうなずいてその場で会計をしてくれた。嬉しそうとはいえ口調は少しぶっきらぼうだが。

そうして購入した部品を眺めてシリウスが満足げに目を細める横で、ラスは少年に聞く。

「お前、名前は？」

「あ、俺？ シンだよ」

「お前もこつという部品とか作んの？」

「ああ、そりゃあな。とりあえず今は親方の技術を受け継ぐことに力入れてるけど… … あっ！！」

言葉を言い終わらないうちにシンは何か思いついたらしく、目を見開いた。

「あのさ、さっき完成させたメカがあるんだけど、見てくれない？」

自信作なんだ」

その言葉にラスとシリウスは目を見合わせる。

そしていつものアイコンタクト（もはやテレパシー）を始めた。

ラス『どーする？』

シリウス『俺は別にいいんだが…先パイは？』

ラスは棚の隙間から店の奥をのぞくと、カウンターでゲイルが店の店主らしき人物と話しているのが見える。　おそらくまだ話は続きそうだ。

ラス『いーんじゃねえかな。　まだ奥で話してるし』

そして2人はうなづく。

ラス『いいぜ、見てやるから持ってきてみるよ』

すると少年は無邪気な笑みを見せて、

「おっしゃ！！　ちょっと待っててくれな！！」

店の奥の作業場らしきところへと走って行った。

シリウス「あの子…外見とか口調的に悪そうな感じだけど、結構良いやツなのかな」

ラス「人は見かけによらないしな、たぶんあれはかつこつきたい年頃なんだよ。　元気でいーんじゃね？」

\*

……………。

ラス「…おい、なんだこれ…」

しばらくして少年が持ってきたのは、……いかにも失敗作のような機械だった。

丸い円盤上の鉄板に幾重に巻いたコイルみたいなものが後ろについていて、おまけのように両側に取っ手がついている。しかも切るのを忘れたのか、余分な針金が所々から飛び出していた。

まあてつとり早く言うと、『意味不明』である。

そんな機械に言葉をなくした刑事を見て、少年は少し目線を泳がせた。

「まつ……まあ、外見は気にすんなー！　向かいの店に行けばこれかなんなのかわかるから！　なっ？」

『なっ？』と言われても、すごいものを期待していたことを考えると『そんなもん知るか』と言いたくもなるのだが。

シリウス「……じゃあそこに行こうか」

……さっきの少年の嬉しそうな顔を思い出すとそう言っわけにもいかず、2人は少年についていくことにした。

\*

そうして少年が2人を連れて行ったのは宝石店であった。

「なんで宝石店なんだよ」

シン「まあ見てろって。  
おっちゃん、こんちわーっ  
す」

シンは宝石店の店主に軽く手を挙げて挨拶をし、もうおなじみになっているのか、平然と店の奥に入っていく。

宝石店の店主「シン、また来たのか。お友達も一緒か？ あんまり遊ぶのは止せよー」

シン「遊びじゃねーって！ 俺が本気なのはおっちゃんが一番わかっただろー！」

店主「わかったわかった、でもちゃんと片づけてから帰れ……あ、いらっしやいませ」

店主はシンと話している途中で店に客が来たことに気付き、『はやく行け』と店のさらに奥の方へと手で促した。

そんな店主にシンは笑顔を向けて、ラスとシリウスに小声で「こっち。ついてきて」と手招きしながら歩き出す。

少年の後をついていって間にラスは隣のシリウスを小突いた。

「…俺たちってあいつの『お友達』に見えんの？」「いや、別にいいんだけど。」

…さっきの店主の言葉についてである。

しかしシリウスは『さあ？』とでも言うように、軽く首をかしげた。

暗い廊下をどんと進んでいくと、薄明りのついた広い空間に出る。

ここはどつちからの宝石店の作業部屋のようにだ。

宝石の原石が鍵つきの棚においてあったり、その原石をカットするための大きな機械もある。

ラス「へえ……こういう作業部屋って入るの初めてかも」

シリウス「ここで指輪とかを作って、売ってるのか？」

シン「うん、そーゆーこと。で、見せたいのはこれだ」

そうしてシンは足元に置いてあった布袋を持ち上げて、大きな作業台の上にその中身をばらまいた。

シリウス「！　これは…」

そこにばらまかれたのは、指輪の金属部分だった。

そのまま売られるようなシンプルなリングもあれば所々に模様が刻まれたものや、宝石を埋め込む部分がついているものもある。

シン「そう。指輪の金属部分のみだ。　宝石がついててもいいんだけど、さすがにそれはおっちゃんにぶん殴られるから」

ラス「つつか、何すんだ？」

シン「まあ待てって。　ここで作られてるアクセはちょっと特殊なんだ。　正確に言つと、俺んこの金属加工店で作られてるものが」

シリウス「…というと?」

シン「この街に近いところにある採石所からしかとれない特殊な金属を使って製造してる。で、この宝石店はうちの店と提携してるから、今ここにある金属は全部俺んここで作ったものだ」

ラス「うんうん。…で?」

シン「そこで、俺が作ったこのメカを使うんだ。あ、あんたらがさつき買ったやつは部屋の一番奥に置いた方がいいぜ」

シリウス「?」

ラスとシリウスはわけがわからないままさつき買った部品をその部屋の奥に置いた。10mくらいの距離である。  
ずいぶんと離れた場所に置いたが、どういふことなのか。

シン「よし、いいな。 見てろよ…スイッチオン!!」

カチッ (スイッチを押した音)

シンは両側の取っ手を握って丸い鉄の円盤を金属の方に向けた。

すると。

ラス「あ……」

指輪がフワッと浮いたかと思えば、カチッと円盤にくっついた。

カチカチカチカチカチッ！！！！

次々に指輪はものすごい勢いで円盤にくっついていく。

だが。

.....。

ラス「.....。.....え、終わり？」

シン「??? .. ああ、終わり」なんで？

.....「これ以上何かが起こるといふこともなく、終わった。

ラス「えっこれだけかよ！！ あんだけ説明してたからもっとすこ  
いかと思ってた！！」ただの磁石じゃん！

シン「う、うるせーよ！！ これでも結構頑張ったんだよ、俺！！」

期待していただけに大きな失望。このメカでまさか二度もそんな  
とは思ってもいなかった。(少年には失礼だが)

しかしシリウスは何か考え込むしぐさを見せ、しばらくしてひらめ  
いたように顔を上げた。

「いや、ラス…思ってるよりかはすごいぞ、この機械」

「はあ？」

「だって俺らは腰に銃を携帯してるだろ？他にも色んな金属の  
ものを持つてるけど、この機械にはくっつかなかった。でも…ラス、  
足元を見てみる。後ろだ」

「？ ……あ！」

シリウスに言われるまま後方の足元を見たラスは声をあげる。

……そこには、さっき部屋の隅においたはずの購入した部品が転がっていた。

「え、これって……さっき俺たちが置いたやつだよな？」

「ああ。つまり、かなり強力かつ特別な磁力で、この特殊な金属のもののみを引きつけることができるんだ」

シン「そう……そうなんだよ！ このすごさをわかってくれるのはおっちゃんとあんただけだ！！」

まあ確かにすごいと言えばそうなのかもしれないが。

ラス「……でもさ、この機械……使うことあんの？」

……。

…それを言っではおしまいである。

シリウス「…というか、君はいつもこれをやってるのか？」

シン「ああ、やりすぎて今はもうおっちゃんと呼んで仲良くまでなった」  
(なぜか自慢げ)

ラス「そんなにやって大丈夫なわけ？ 指輪壊れたり傷ついたりしねえの？」

シン「いや、この特殊な金属のすごいところはそこだ。 全然傷つかないし、丈夫なんだよ」

シリウス「へえ……」

話がひと段落したところで、ラスはシリウスの肩を叩いた。

「じゃ、そろそろ戻らねーか？ 先パイに行き先言ってないから、探してたら大変だ」

シリウスもそれにうなづく。

「そうだったな。 戻ろうか」

その言葉を聞いてシンは指輪を片づけていた手をふと止めて、

シン「あ、あんたらペアリングいる？ おっちゃんに言ったら結構安くしてくれるかも！」

ベシッ！！

ラス「ばっつか！！ そんなんじゃねーよ！！！」アホか！

その言葉にすかさずラスがシンの頭を叩いた。

シンは半分本気で半分冗談だったのか、ラスと楽しそうにじゃれあ

っている。

シリウス「???? ……ペア……リング……??」

話についていけないのはこの男だけである。おそらくその言葉が誰と誰のリングを指していたのかわかってないのだろう。

\*

なんだかんだと楽しく宝石店を出た3人は、ちょうど金属加工店から出てきたゲイルと合流した。

ゲイル「お前ら、そこにいたのか」

ラス「はい、こいつが作ったメカを見てたんすよ」

「そうか。 ……名前は？」

シン「俺はシンだ。 ……その加工店で見習いやってる」

そのとき。

宝石店の店主「…おい、待て！！！」

後方の宝石店から店主の怒鳴り声が聞こえ、そこから1人の男が有り余るアクセサリを袋に入れながら走っていく。

シン「！！ ……泥棒かよ！！！」

ゲイル「お前ら、行くぞ！！！」

「了解！！！！」

刑事たちは男が走っていく方向へ走り出した。

\*

「視点：ゲイル」

「……ん？」

そんな中、俺は走りながらさっき言った自分の言葉の後に聞こえた声を思い出す。

『お前ら、行くぞ!』

『『了解!』!』

…… 1人、多くないか?

そう思って後ろを振り向いたとき。

ラス「なっ……!! なんてお前までついてきてんだよ!」

シン「うるせー! こんなことが自分の近くで起こって、黙ってられっか!」

シリウス「危険かもしれないぞ」

シン「今追いかけないで後悔するよっかマシ!! 俺もついてく!!」

ラス「先パイ、この子が…」

「ああ、あの子か。」と俺は自然と笑みをこぼしていた。

そう、似てるのだ。昔の自分と、あの少年が。

ゲイル「ラス・シリウス! どうなるかはわからんが、その子も連れてけ!! いざとなったら俺がその子を守る!!」

シン「…!!」

ラス・シリウス「了解!!」

俺は犯人を追いかけられない歯がゆさをわかっている。

だからこそ、この少年の願いを叶えてやる。昔の自分のようにならないように。

少しでも、後悔させたくないから。

自分の後方で笑いあう後輩たちの声が聞こえた。

ラス「つーか、よくとっさに反応できたよな、さっきの『了解』」

シン「自分でもよくわからないけど、なんかできた」

シリウス「なかなか馴染なじんでたぞ」

ゲイル「お前ら、ここからは気を引き締めていくぞ！」

「はい！！！！」

本当に、後輩とよくなじむ少年だ。

そんなことを考えていたとき、前方で別の男が車を運転し、逃げていた男を乗せて走り出した。

…犯人は複数か…！

ラス「…っチート使ってんじゃねえよ！！」

俺は舌打ちをして辺りを見回し、

「…チツ …車には車だ、こっちに来い！！」

右側に見つけたレンタカー置き場に入っていく。

簡素な建物の中に管理人の老人を見つけ、俺は彼に聞いた。

「悪いが、今の男たちを追いたい。今すぐ車を貸してもらえないか？」

するとおっとりとした口調で、

「おおく？ 別に構わんよ。好きなもん乗ってけい」

車のキーがたくさんついたキーホルダーを投げ渡してくれる。

とてもありがたい。

「助かるよ。ここにドイツ車はあるかい？」

「それならあっちじゃ。あれは性能が良いぞお」

「それじゃあそれを借りるよ。他の車のキーと金はここに置いていく」

そして今度は後輩たちに声をかけた。

「お前ら、あそこの奥にある黒い車だ。乗り込むぞ！」

\*

「視点：筆者」

ラス「あれ？ つーか先パイ、運転できるんすか？ この前聞いた話だと、運転してたのって全部ヴィトさんですよね？」

シンと車の後部座席に乗りながらラスがゲイルに聞く。

シリウスも助手席に乗りながらうなずいた。

「確かにそうだな。大丈夫なんですか？」

ゲイルはシートベルトをしながら、

「まあ…ある意味、というか実質ペーパードライバーだ」

…言い切った。

……………。

後輩たち「」「はあああああっ！！！！！？」「」「」

ラスは座席の間から上半身を乗り出して、

「ちよっ…俺まだ死にたくないっスー！」（事故が起こる前提で、）

そのほかの2人はため息。

シン「まーじでー…？」「ありえねー…」

シリウス「…まさかここで生涯が終わるとは…」（事故が起こる前提で、）

ゲイル「あぁいや、運転できないわけじゃないんだ。ただ、ケイオス上官に封印されてただけ」

ラス「いやいや、なんかそれ色々問題あるから…！」

その時、コンコンと窓を叩く音が聞こえた。

さっきの老人だ。

ゲイルは窓を開けてどうしたのかと聞く。

老人「お前さんたちが追ってるやつらは、サーキットコースに入ってたぞ」

ゲイル「サーキットコース？」

老人「おお。一般道とつながってるところはあるが、そこ以外なら速度制限がない。せいぜい楽しんでこい」

ゲイル（…！！）つまりドイツの速度無制限区域と同じか！

「なるほど…。良い情報をありがとう」

ゲイルが笑みを返すと、老人はすっかり古くなった帽子を軽く上にあげて挨拶を返した。

そのままゲイルはアクセルを思いっ切り踏み込む。

後輩たち「うわあああっ！！！！」

もちろん彼らは慣性の法則に引き込まれ、突然体全体が座席に勢いよく押し付けられた。

そして。

ゲイル「あ、そういえば」

…急ブレーキをかける。

キキイーーーーッ!...! :...ゴッ!...! ( 鈍い音 )

ゲイル「危ないからちゃんとシートベルトしておけよ?」

そう言いながらゲイルが後輩たちを見ようとして顔を横に向けると。

「……………ん???」

なぜか彼の隣にはシリウスではなく、前のめりになったラスがいた。

「……………あね???」

するとラスがうつむいていた顔をぐるっとゲイルの方に向けて、

「それ先に言ったださいよぉっ！……！」

…怒鳴った。(シートベルトをまだしてなかった)

しかも被害はこいつだけではない。

ゲイル「シン、大丈夫か？」

シンは頭をおさえて窓にもたれかかっている。

シン「今ので脳内シイクした…マジ半端ねえ…」(こいつもシートベルトをしてなかった)

ゲイル「…ま、大丈夫か」

……おい。

ゲイル「あ、シリウスは？」

その言葉を聞いたラスが反対側を見ると、フロントガラスに額をつけていたシリウスがゆらりとこちらを向く。

「大丈夫…ですよ…」（消え入りそうな声）

そんなシリウスの顔を血がたら〜と細く線を残して流れていた。  
（こいつもシート（以下略））

ラス「ぎゃあああああ！！血！！ シリウス、血！！ 先パイのばか！！何やってんスカあ！！」

ゲイル「なんだ、ラス。この前の街にいた姉弟の、弟の方のマネか？」（ラスの姿でシリウスが見えてない）

ラス「怒ってるんすよ!!!」「っーか、どこも似てないし!

シン「とりあえず止血しなきゃダメだろ。…ほら、これでも使えよ」

シンはどこからか布を取り出してラスに渡す。

ラス「おう、サンキュ。シリウス、こっち向いてる。…って…」

そんなラスの動きが止まった。

なぜなら、その布に書かれていた文字は

『絶対合格』

…の4文字だったから。

ラス（お受験っ！！？）

シリウス「?? …どうしたんだ、ラス」

シリウスが首をかしげる。

そうだ、布がどんなものであるとそんなことは考えていられない。

ラス「気にしない…俺は気にしない…俺は……」

そう言いながらラスはシリウスの額に布を巻きつける。

でもやっぱり。

ラス「ふっ…くくっ…」（ やっぱり笑った）

そこでゲイルが声を張り上げた。

「おい、お前ら遅すぎるぞ!」

後輩たち「元はと言えばあんたのせいだ!」

……「もつともである。」

\*

その頃、二足歩行のパンダとネコ耳を生やした少女は、店で対象と  
なっているお菓子を買った人々に風船を配っていた。

真冬にやるサービスとはとても思えないが、なぜか行っているらし

い。

パンダ「…どっぞぞ」

ネコ耳少女「どーぞっ」

そして、どういうわけかそのパンダを見つめる数人の女子の影があった。

女子A「ねえねえ、あのパンダの人の声、かつこよくない？」イケメンボイスだよね！

女子B「やっぱり？ 私もそう思ったた！顔もかつこよければ最高よね！..！」

女子C「じゃあさ、あの横にいる女の子にあの人の素顔見たことあるか聞いてみない？」

女子A・B「賛成！..！」

…とまあ、そついつ系の女子である。

次にその女子たちはネコ耳の少女に近づいて尋ねる。

少女C「ねえネコ耳の女の子、あのパンダやってる人の素顔見たことある？ かつこいい？」

すると少女はニツコリと笑って、

ネコ耳少女「うん！！ ものっすくかつこいいよ！みんな同じこと言ってるもん！！」

…ありのままの事実を伝えた。 悪気はない。おそろく、たぶん。

そしてその言葉に女子たちは盛り上がる。

女子A「キヤー、やばい、それはやばいよー!!」

女子B「どうしよ、もう一回お菓子買って風船もらいに行こうかな  
…!!」

その言葉が聞こえたパンダは、ギクツとしながらなんとなくその集団に背を向けた。

女子C「あ、私もー！　ありがとね、ネコ耳ちゃん!!」

ネコ耳少女「いえいえー!!」

楽しそうにその場を去っていく女子たちにネコ耳少女は無邪気に手を振る。

…そうして、パンダの短い孤独(?)な戦いが始まったのであった。

女子A「パンダさん、風船ください!！」

女子B「私も!！」

女子C「私もください!！」

パンダ「……、……はい、どうぞ」

しかしもちろん、風船を渡したところで女子たちは帰らない。

女子A「あ、あのっ…素顔見せてくれませんか?」

パンダ「いえ…僕は…素顔もなにも…  
です(パンダの顔が)」

…これが素顔

…なんとも苦しい言い訳である。

しかしこの言い訳も、

女子B「…なんか可愛い…！」

パンダ「…え？」（微妙に後ずさる）

…逆効果。

女子C「お兄さんはどこに住んでるんですか？」

パンダ「いや…僕は『お兄さん』じゃなくて『パンダさん』…あ、いえ…『パンダ』なので、どこかの森に棲すんでます…」（ ）いつも  
のクセで『パンダ』にまで『さん』付け（

そんな様子のパンダに女子たちは可愛さを覚えたのか、わざと答えづらい質問を投げかけ始めた。

女子A「じゃあじゃあパンダさん、私の家に住みませんか?」

パンダ「え、…いや、あの…森が住み心地良いので結構です…」

女子B「じゃあ、飼い主は!? 飼い主はさすがにいませんよね?  
私になります!」

女子C「ちょっと、やばいってその展開!」

女子A「それなら私だって…」

…いやいやいやいや。

パンダ「あ、いえ、その…」

パンダは近くのネコ耳少女を見るが、さすがに『飼い主』にはできない。…ってよりも、したくない。その前に、『飼い主』なんて

いない…

女子全員 「」「」（飼い主が）いませんよねっ！っ」「」（詰め寄る）

パンダ「…い、います」

…もちろん、嘘だが。

女子A「えええっ！！？」

女子B「どんな人ですか！？」

女子C「女の人ですか！？」

パンダ（…俺にこれ以上どうしろと……）

パンダ「えつと……男の人です……」

そのなんとなく言った一言が女子たちを一層盛り上げる。

女子A「キヤー！ それはそれでアリ！！全然いける！！」

…なにがだ。

女子B「えーっそれはダメでしょ！？ 私は認めたくない！」

女子C「え、その人は年上ですか、年下ですか？」

どンドン加速する女子たちの熱気に押されがちなパンダはしょうがなく答えた。

「……っ年上です」

そのとき。

店長「ちょっとちょっと君たち！！ 営業妨害だよ、どいてどいて  
！！」

…パンダたちを雇っている店の店長が、その女子たちを追い払った。

なんという救いの手だ。

パンダは店長の背後でほっと息をつく。

パンダ「…店長さん、ありがとうございます。…ご迷惑をおかけ  
して申し訳ありません…」

店長はしみりとしたパンダの様子に困ったように軽く頭をかいた。

店長「いや…俺は別にいいんだけど、君、優しすぎるんだよ。  
ああいう客は相手にしなくていいんだから」

パンダ「はい、気を付けます……」

店長「まあ君たちのおかげで実質店の売り上げが上がったから、むしろ助かってるんだけどねえ………日雇いだなんてもったいないよ」

ネコ耳少女「ありがとうございます……！」

店長「じゃ、あとラスト5分頑張ってね」

パンダ「はい」　ネコ耳少女「はいっ」

そうして去ろうとした店長が思い出したように足を止める。

「あああと、その着ぐるみとかカチューシャはもらってくれる？」  
この店でもう使わないから。

パンダ「えっ？ ……あ、はい、いただきます………」

…さすがに「いらぬ」とは言えないパンダであった。

そして店長が立ち去るのを見た後、パンダはズンズンとネコ耳少女の前まで行ってしゃがみこみ、ぐいっと顔をあげてじろっと見据える。

パンダ「…お願いだから、もうお客さんに余計なこと言わないで」  
(低い声音)

すると少女は1秒だけ真顔でいられたもののすぐに吹き出し、

ネコ耳少女「フッフ… その顔（パンダの）で言わないでよお  
っ…可愛くて笑っちゃっ…っ!!」

…笑いが止まらなくなった。

そんな少女の様子にパンダは。

「……」

パンダ（……人の不幸を楽しむな……）

着ぐるみの顔のせいでその恨むような視線が伝わらないまま、しばらく黙っていた。

すると、突然。

パンダ？「  
！！ 刑事さんが、近くに来てる気が……」

パンダは立ち上がって辺りを見回す。

そしてなんとなく予感がしたその方角にある道路を見たとき。

ビュューーーーーン！……！！（車が高速で走り去って行く音）

パンダ？とネコ耳少女「……………」。

…パンダが感じたその『気』は、すぐ去った。

パンダ？「……………は？」

ネコ耳少女「まさか……………今の車？」速くてよく見えなかったけど…

\*

一方その頃。

あの男の運転をなぜケイオス上官が封印したのか、その理由を身をもって知ったやつらがいた。

ラス「速いつ…速い速い速い！！先パイ、やばいつて！！200キロ軽く超えてる！！超えてるから！！」さっきも言ったけど、死にたくないから！！

ゲイル「…ん、まだ出せるぞ、この車」

ラス「そーいう意味じゃなくて！！」

シン「ありえねえ、マジありえねえ… あんたホントに刑事かよ！  
もうプロドライバーだろーが！！」

ゲイル「まあ、昔は少しだけ職業として考えていたけどなあ……」  
（しみじみ）

シリウス「先パイ……普段からこんな速度で運転するんですか……？」  
（血が止まったので額の布をとりながら）

ゲイル「ああ……俺は出身がドイツでな、あそこは昔と変わってほとんどの道路が速度無制限区域になってたから、その名残なごりで」

……はたから見れば、ただのスピード狂である。

そして車がカーブに差し掛かったそのとき。

シリウス「！！ 先パイ、犯人の車の窓が開きました、発砲するかもしれない……！」

ゲイル「……ああ。 お前ら、ちゃんと掴まってる……！」

すると前方の車から何かが飛んでくる。

あれは…

シン「…あれトマトじゃね？」

その言葉どおり、トマトがいくつか飛んできた。

ゲイルはそれを見てハンドルを切り、見事な運転テクニックでドリフトを決める。

ラス「あっテメー（犯人）絶対さっきのタイムバーゲン行つたろ！！！」（犯人の方を指差して）

…アホか。

ゲイル「食べ物を粗末に扱つやつは後々痛い目見るんだ。…覚悟しとけよ…。」

……さっきのバーゲンで野菜を投げ飛ばしていたお前が言えること  
だろうか。

その言葉の後にカチカチツと音がする。

不思議に思い、ゲイルがバックミラーで後部座席を見るとラスが銃  
に弾をこめていた。

ラス「先パイ、トマトのためにも撃つていつスか!!?」

ゲイル「撃つてもいいが、犯人を殺さないようにしてくれ」

ラス「了解。

おらぁっ!!」

窓を開けて立て続けに撃ちまくるラスをミラー越しに見たゲイルは、

ゲイル「……!!?!?!?!?」

慌ててその姿を二度見した。

そしてさあっと血の気が引く。

ゲイル「ラスー！！！！ 目、目開けて撃て！！犯人に当たったら  
どうする、危ないだろ！！ 目開けて撃て！！」

そう、この金髪の男は目を閉じたまま銃を撃ちまくっていたのだ。

ラス「えっ？ 先パイなんか言いました!？」

ゲイル「言った！！何度も言いました『目開けて撃て』！！」  
(なぜか一部敬語)

シン「……」 ( 呆れ果ててむしろ笑い始める )

シリウス「…あれ、先パイ、どうやら撃つ必要がもうないみたいで  
す」

ゲイル「？」

よく見ると、前を走っていた車が止まっている。

さらにその先は道路の脇にあった坂で雪崩なだれが起こったらしく、通れなくなっていた。これが車が止まった原因だろうか。

ゲイル達も車を止めて、犯人たちの車に駆け寄るが。

ゲイル「…いない。逃がしたか…っ」

犯人たちは、すでに逃げていなくなっていた。

そんな中首をかしげるシン。

シン「この車のタイヤ、パンクしてる。これってさっきあんたが撃ったから？」

その目線の先にいるラスも同じく首をかしげた。

ラス「あれ、当たってたのかな」

???「…そんなわけあるか」

いきなり聞こえた別の声に全員がその方を向く。

そこには…

後輩「……アスラさん!!!!?」

ゲイル「アスラ……!!」

シン「?? 誰これ」

シンにはわからない、長い深紅の髪をもつ女性。

彼女はかつてのゲイルの同期であり、後輩2人とも面識のある人物だ。

「ラステイウスのあのふざけた撃ち方でタイヤ2つをパンクさせられるわけないだろう。ありえない見解は止せ。お前の弾はあつちの木に当たって雪崩を引き起こしたただけだ」

ラス「えー、そんなあー…」

シリウス「どうして、手助けしてくれたんですか？」

「お前らには借りがあるからだ。…まあ、まだ奴らを捕まえてないから、借りは返しきれないが」

シリウス「借りだなんて、別にいいんですが…。あ、あいつらの容疑ですが…」

「…見た感じ、宝石でも盗っていったんだろ。後部座席に宝石がいくらか飛び出していたが袋が置いてあったからな」

ラス「さっすがスナイパーっスね。遠くにいてもよく見てる」

「なめてかかるな。だてにスナイパー続けて特殊捜査班（こく）に配属されたわけじゃない」

ラス「…サーセン」

「…『すみません』だ。言葉を正せ」

ラス「…すみません」

どうやら、ゲイルが聞いていた後輩2人とアスラの出会ったときよりも幾分親密になっているようだ。

おそらく、彼女が言っている『借り』が関係しているのだろう。

ゲイル「アスラ、久しぶりだな。元気だったか？」

アスラ「以前と特に変わりはない。お前も元気そうだな、ゲイル。お前がロンドンを離れてからは一度も会ってないだろう」

「ああ。ところでアスラはなんでこの街にいるんだ？」

「任務の途中で立ち寄っていたところだ。今は大雪のせいで足止めを食らっている」

「汽車のほかにこの街を出る術は？」

「…あつたらこんな街に長居はしない。ないわけではないが…こいつが雪崩を起こしたあの森を進まなければならぬからな。どうせ道もない森の中だ、進むだけ体力の無駄になる」

「なるほどな…。ってことは、さっきの犯人たちもきつとしばらくはこの街から出られないな？」

「そついつことだ。 ゆっくり追い詰めればいい」

ゲイル「…まだトマトの恨みは晴らしてないから、ちょうどいい…」

シリウス「…先パイ、だんだんあいつらを捕まえる理由が宝石強盗から野菜を粗末にしたこと変わってってますよ…」

アスラ「…おい、シリウス。 ゲイルにいちいち構っていたら疲れがたまるぞ……」

シン「つか…普通こんな刑事いねーだろ…」 目つぶって銃撃ったり。

…とてもまともな意見である。

アスラは少年に呆れられてるゲイルたちのため息をひとつ。

「それじゃあ、私はそろそろ宿に戻る」

ゲイル「そうだな、俺たちもそろそろ戻ろう」

そうしてお互いが背を向けて歩きだした。

そのときにふとアスラは足を止め、

「……………ラストイウス」

ラス「?? ……はい？」

ラスも足を止めて振り返ると、アスラは何かを知っているように意

味ありげな笑みを軽く振り返って彼に見せる。

「…………ふざけるのは、そろそろやめたらどうだ？」

「……………なんのことっすかね」

そうして互いに背を向けて、再び歩き出した。

…この会話は、なんだ？

そう疑問に思うのは、ひそかに会話を耳にしていたシリウスだけである。

\*

アスラと別れて再び車に乗り込む刑事たち。

ラス「あ、つてか先パイ…重要なことに気付いたんですけど。」

ゲイル「…お前もわかったか、ラス」

シリウス「…な、なんですか…？」

ラス・ゲイル「俺たちが買った食材、どこ？」

シリウス「……………」(言葉が出ない)

シン「何言ってるんだ、あんたら。さっきうちの店に置いてったろーが」

ゲイル「よかった…道端に置きっぱなしだったらどうしようかと…」

ラス「えっ…っーか先パイ、先パイ!!」

「なんだ？」

「今の時刻…5時37分…」

「あ…昼飯…逃したな」刑事にはたまにあることだ。

ラス「ううっ…くそー!!!俺の楽しみにしていた昼ごはんがあっ…!!  
…あいつらマジ殺す…!!」

シリウス「殺すな、捕まえろ」

シン「あんた…ガキみたいだな」

ラス「ガキのテメーに言われたくねえよ、どうせ童顔だよ、こんなにやるー！！ 食べ物への恨み、ぜってーあいつらに思い知らせてやる…！」

シン「…俺、童顔って言っていないんだけど…」

シリウス「ラス…落ち着け…」

ゲイル「そんなに怒るなよ。あとで旨い晩飯うまい作ってやるから…」

ラス「え、マジっスか！！？ うわー先パイ大好き！！ 帰りましようー！！」

他の3人「………」

誰だったかの相棒に少しそっくりな言い回しである。

\*

「視点：キョウゴ」

俺たちは昼間のバイトを終えてバーの手伝いをしていた。

今回の宿のバーだが、昨日の一日でなんとなくわかってたものの、やっぱり規則や営業時間が普通ではないと思う。

まず、営業時間が昼間から始まっているということ。  
今日の俺たちのシフトは夕方になっていたが、このバーは日中から開店していた。

そんな昼間から飲んだくれるやつなんてどこにいる…とは思うのだが、世の中には色んな人がいるだろうからあえて口には出さないでおこう。

そしてなにより一番このバーで驚くのは、酒を扱うというのに未成年が働けることだ。

それも、9歳ほどの少女が。

まあ、連れてきてしまった俺にも悪いところはあるのだが……

ミオ「はい、お待ちどーさまっ！…！」

……。  
…楽しそうだから、いいか。

あともう少しでシフトが終わる。それまで頑張らなければ。

\* \* \*

「視点：筆者」

ゲイルたちはレンタカーをもとの場所に返して、シンを金属加工店へ送った。

シン「ゲイルさん、今日は連れてってくれてサンキューな。何もできなかつたけど、楽しかった」

ゲイル「いや、たいしたことじゃないさ。俺たちも楽しかったよ」

「まだこの街にはいるんだよね？」

「ああ。…きつとまたこの店を見に来るよ」

「おう。 待ってる」

そう話すシンの表情は、本当に楽しかったらしく笑みがこぼれていた。

そう言ってもらえると、こっちも嬉しくなる。

ゲイルはどこか感慨にふけるように静かに微笑みかえした。

\*\*\*

再びキョウゴたちはというと。

キョウゴ「お疲れ様でした」

ミオ「お疲れさまでしたっ」

なんとかバーの手伝いを終えたらしく、そこを出てフロントの前を  
通り過ぎようとした。

そのとき。

ガチャ。

ラス「やーつと着いたあぁーっ!!!!」  
「ん？」

両者「」「」「」……あ「」「」「」

……一度は見たことのある光景である。

ラス「あれー？キョウゴ君とミオじゃん！！ 今朝はどーもっ」

キョウゴ「……。 ……はい、どうも」(とりあえず挨拶)

ミオ「刑事さんたちとはよく会うねー！」

シリウス「いや、まだ3回目だろ」

…十分な回数だと思うが。

キョウゴ「あの……俺、部屋に戻りますね」

そう言ってキョウゴが歩き出そうとした、そのとき。

従業員「あの、すみませんお客様！..」

両者に頭を下げる従業員の姿があった。これは何事か。

従業員「お客様方は、顔見知りだとお見受けしました。そこでお願いがあります」

ゲイル「…なんですか？」

従業員「お客様方を……同室にさせていただけないでしょうか……！」

……。

……同室？

「「「つて、はああああああつ！！！！！！？」」」

もう誰が叫んでるのが定かではない。

とにかく宿全体に響きわたる音量である。

「ミオ」「うそー……？」

どうやらこの街では普通ならあり得ない偶然が起こるようだ。

それは少女がゲイルに渡したスズランの花の導きか、ただの偶然か。

しかしこれだけは確実にわかる。

…その導きは決して、人を不幸にはしないと。

第二章 Part 6

Fin .

## 第二章 I Birthday . . . Part 6 (後書き)

…というわけで、本編でした。

すっかり更新が遅くなってしまっして申し訳ありません。

次回の更新予定は毎度おなじみですが筆者の活動報告のページに書かせていただきます！

どんどんありえない展開になるゲイルとキョウゴの両者は、次回からどうなるのか。

では、次回もよろしくお願いします！！

第二章 I Birthday . . . Part 7 (前書き)

ついに同室になったキョウゴと刑事たち。

今回はリセラ2日目の夜です。

和やかな雰囲気でごす刑事たちとは反対に、ロンドンでは緊迫した空気があるらしく…？

そんなこんなで色々長いですが、よろしく願いします！

それでは、本編へどうぞ。

## 第二章 I Birthday . . . Part 7

従業員の話を聞いて、一同は納得せざるを得なかった。

知ってる通り今のリセラは、大雪のせいで唯一の街を出る手段である汽車が運行できないでいる。

そのため、この街で足止めを食らった旅行者はリセラ中の宿を訪れてそれぞれ身を寄せているのだが、ついに他の宿が満室で埋まってしまったようだ。

キョウゴとミオがこの宿に着いた時も部屋数の関係で特別に広い部屋に案内されたわけで、すでに部屋がなかったのがわかる。

その時に宿の責任者はこの宿にさらに人が来ることを予測して、別々の部屋に泊まっていた顔見知りの客を同室にして空き部屋を作り、そしてちょうどそこにゲイルたちが泊まったわけなのだが。

…またしても、新たな客がやってくるらしい。

そこで、今度はキョウゴたちと刑事たちを同室にしてもらうことに決めたのである。

キョウゴの部屋は広い部屋でベッドも6つあり、広さや寝る環境に

おいては支障がないのだ。

あとは、この両者の同意が必要なわけで。

キョウゴはというと、少し何かを考えている。

「キョウゴ」えっと……同室にするのは、いつまでにすればいいんですか……？」

従業員はその問いにハツとして、

「あつ、それがわからないといけませんよね！　ただいま上の者に確認してきます……！」

急いでフロントの方へ向かっていった。

……。

残された5人の間には変な沈黙が流れる。

そのときゲイルはふと思い出してラスを見た。

ゲイル「そういえば…おいラス、さっきの銃の撃ち方はなんだ！  
撃つときは目をつぶるな！基本中の基本だろ！ 銃は凶器だ、人の命を奪うかもしれないんだぞ」

ラス「あー…先パイ、前の街で言った通りっスよ。俺が撃つと、運が良いときは普通ありえないような所に弾が飛んで、ありもしないような素敵なことが起こるんです」今回は雪崩っスね。

…ゲイルの言葉の応答になっていない気がするのだが。

シリウス「先パイ、それにラスは何故か目を開けて撃つより、目をつぶって撃つ方が安全なんですよ。前も訓練中に教官から目を開けると言われてラスが撃つた時、教官に当たって叱しかられてました」

ゲイル「当たっ…（絶句）」

ラス「ちがうちがう。教官の防弾チョッキ」

シリウス「あ、防弾チョッキにです、先パイ」

ゲイル「どちらにしろ人に当たってるだろうが……」

キョウゴ（この人たちは…本当に警察…？）

そんな常識からぶっ飛んだ話をしていると、先ほどの従業員が戻ってくる。

キョウゴ「あ、いつまでにでしたか？」

従業員「その…今すぐです」

ゲイル「は？」

従業員「本当に申し訳ないのですが、今すぐにもお願いいたしま  
すー!!」

その言葉にキョウゴは一瞬言葉を忘れるが、ゲイルは納得したようにうなずいた。

「そうか、俺たちはもうすでに一泊してしまったからベッドメイキングの時間が必要なんだろう？ それならとりあえず俺たちは部屋を出た方が良いな。ラス・シリウス、いけるか？」

後輩「はい！」

ゲイルの言葉に2人はうなずいてすぐに歩き出す。

その背後で従業員は深く深く頭を下げた。

さらにその横でミオはキョウゴの服の袖そでを引っ張る。

「ねえキョウゴ、いいでしょ？ 刑事さんたちと同室、絶対楽しいと思う」

キョウゴは静かにコクンとうなずいて目をそらし、つぶやいた。

「別に...いいけど」

その言葉を聞いてミオはパアツと笑顔になり、刑事たちの背中に向かって声を張り上げる。

「刑事さあーんっ！！ キョウゴが同室オーケーだってー！！！」

そしてそんなミオの口を慌ててふさぐキョウゴ。

「ミオ、あまり大声で言わないで」他のお客さんに迷惑だ。

「えへへ…つい嬉しくて」

ミオは自分の口をふさいでいたキョウゴの手を離してその腕に抱きつき、あふれるような笑みを彼に見せた。

これできっと、彼の心がほんの少しだけ救われると確信したから。

\*

それから1分経たないうちにキョウゴたちは自室の前までたどり着いたのだが、部屋に入る前に隣の部屋のドアがガチャツと開く。

そこから出てきたのはシリウスだった。

シリウス「…ん、隣となりだったのか、キョウゴ君」

キョウゴ「あ、はい。 えっと、まさか……」

シリウス「ああ、俺たちはもう部屋を出る」

キョウゴ（……………速い）

すると今度はゲイルとラスが部屋から出てくる。

「キョウゴ、すまないな。 部屋まで一緒になって…」

…その言葉のニュアンスを読むと、ゲイルは朝の勘違いをまだ引きずっているようだ。 未だに、キョウゴは自分たちにあまり出くわしたくないのだと考えている。

キョウゴにもなんとなくそれは伝わっていた。 だからこそほんの少

し表情が曇ってしまつ。 ……これがまたゲイルの勘違いを加速させてしまつのだが。

「…いえ、前の街では助けてもらいましたから。 ……そのお返しです」

「…ああ、ありがとう」

「ですが…少し、待ってください」

「？」

キョウゴは少し急いで部屋のドアの前に立つ。 刑事たちはその様子に不思議そうな顔をした。

「まだ…部屋の中に入らないください。 ……あと、見ないでお願いです」

シリウス「何かヤバいものでもあるのか？」

「いえ…そういうわけではないんですが…」

そのキョウゴの言葉を聞いてラスは平然と、

「なーんだよ、ならいいじゃん！ レッシー！ー！」

「あっ……………」

立ちふさがるキョウゴなど気にもせず、ドアを押し開け、同時に彼の足に引っかかり、2人もろとも部屋の中に倒れこむ。

ゲイル「ラス、無理に入ろうとするなよ。 …キョウゴ、大丈夫か？」

キョウゴ「はい… …あ」

ゲイルが倒れこんだキョウゴに手を差し伸べようとした時、目の前のベッドの上にあるものを見て動きが止まった。

… …そこにあるのは、パンダとネコの着ぐるみ。

… …。

シリウス「…パンダだ」

ラス「…ネコだ」

ミオ「あー、そういえばすっかり片づけるの忘れてたー」

ゲイル「まさか今回のバイトって……これだったのか？」

茫然としたゲイルの言葉に、キョウゴは上半身を起こして目線をそらし、苦い顔をしながらうなずいた。

やはりキョウゴ自身、パンダの着ぐるみを着るバイトをやったことを知られたくはなかったらしい。

ラスはすぐさま立ち上がってネコの着ぐるみの顔部分を持ち上げ、

ラス「へえー、キョウゴ君ってこういうバイトすんのか……」

スポッ！

…床に座ったままのキョウゴにかぶせた。

そうして生成(？)されたネコ人間(顔だけがネコ)は、

「……………」

……………無言。

ミオ・ラス「あははははっ！！！！」(大爆笑)

シリウス「…幼稚だ」(ラスが)

ネコ人間「……………」

ゲイル「ラス、やめてくれ…」かわいそうだ。

ラス「えー？ ……はい」

スポッ！

ゲイルの言葉を受けてラスがキョウゴに被せた着ぐるみの頭部分を  
持ち上げると、彼は。

キョウゴ」……………」

…真顔。

ミオ・ラス「あはははははっ真顔————！！！！」

そうして再びラスとミオが大爆笑。もはやこいつら、頭のネジが外れてきてるのではないだろうか。

するとミオは思い出したかのように、

「あ、そのネコの着ぐるみは私サイズ合わなくて使わなかったの！私が使ったのはこれー！！」

自分がバイトで使った黒いネコ耳のカチューシャを持ってきて。

ポスッ

…キョウゴの頭につけた。

世の中の一部の人間が反応してもおかしくないネコ耳人間の誕生（？）である。

ネコ耳人間「……………」

ラス「あはははははっ！！　なんかそれ、」

ミオ「かわいいー！！」

シリウス「……………くく…っ」（ついに笑った）

さっきは冷静に対応してくれたシリウスの一種の裏切り（笑ったことが）にキョウゴがハツとしてその方を向いた。その表情を見た感じ、多少のショックを受けているもよう。

ゲイル「キョウゴで遊ばないでくれ…」

ラス「だつてえー…」

ミオ「楽しいんだもんー」

ゲイル「お前らな…」（呆れ）

キョウゴ「……」

シリウス「……ふ、くく……」(笑いのツボから抜け出せない)

キョウゴは困ったように自分の頭に生えた(?)ネコ耳を軽く引っ張ったりしながら(外そうとしてるが、なぜか外せない)、

「…これ、外していいですか…?」

…ラスとミオを見上げた。

すると2人は目を見合わせて不満げな顔をする。

ラス「えー…」

ミオ「…だめー」

キョウゴ「だめって…」

ラス「え、だって先パイ、このキョウゴ君可愛いですもんねっ?」

ラスがゲイルの同意を得ようと話を振ると、彼は考え込みながらキ

ヨウゴの前で腰を落として視線を合わせ、黙り込んだ。

「…け、刑事さん…?」

刑事の眼力か、もしくは別の何かに押されてキョウゴが少しどぎまぎした表情を見せる。

ゲイル「うーん、そうだな…」

そして。

「…俺は耳が大きいネコが好きだから、確かに可愛いと思うぞ」  
真剣)

…真面目にその質問に答えた。これはこの男特有の天然なのか素直さなのかはわからない。

その言葉にキョウゴが目を見開いて顔を真っ赤にしたのは言うまでもないだろう。

キョウゴ「…っ…っ…やめてください刑事さん、そういふこと言つての…」

ラス「ほらー!」

ミオ「キョウゴ、刑事さんがそう言ってるんだから外しちゃダメだよー!」

ゲイル「…だが」

ラス・ミオ「?」「」

ゲイル「…こいつが取りたがってるなら、そうしてやる他ないだろう」

そう言っつてゲイルはキョウゴの頭につけられたカチューシャを外してやった。

ゲイル「…ほら」

そうして見せる優しい微笑にキョウゴは

「……ありがとうございます」

きこちなくではあるが、うつむきながらお礼を言った。

そのころ、ロンドンでは。

「なあー…：班長、…：さすがに食い過ぎだろ」

イスに座ってぐったりとしたラックスが目の前にある机上のハンバーガーの山を見て言った。

「んー？ 何言ってるのー、ラックス。 まだ10個しか食べてないよ？」

そして、その向かいに座るハゲ頭…いや、この班の班長は平然と答えて、次のハンバーガーに手をのばす。

するとラックスは一度頭を抱えた後にガバツと立ち上がり、班長を指差して怒鳴った。

「もー見てらんねえ！！ なにが『まだ10個』だよ、『もう10個』の間違いだろーが！！ 俺はビッグサイズばっかのアメリカ出身だけど、そこまでは食わねえぜ！？」

\*

そんな日常茶飯事の会話をしていたとき。

バンッ！！

李園「班長っ……信じられないことが……」

勢いよくドアを開けてきた李園がめずらしく焦っているのを見て、班長とラックスは表情を変える。

班長「……どうしたんだい、李園」

李園「日本周辺の海底を調査していたところ、深海3000mの所に不気味な空洞が見つかったようで……」

ラックス「……不気味な空洞？」

李園「はい。……海の中で見つかったその空洞から、水の無い空間が広がっていました」

班長「……………」

ラックス「なんだよ、それ…」 気味悪い…

李園「調査隊の報告によると、その空間では微量ながら重力が存在し、どういっわけか地上と同じ成分の空気が満ちているようです」

班長「……………。 ……で、何か見つかったかい？」

李園「はい。 その空洞の入り口付近から下へ階段がのびていて、そこを降りていくと…神話や空想上でしか存在しないとされていた、『海底都市 シェルノヴァ』と表記された街らしきものが広がり、その中心部の海底に… 星の使徒 が眠っていたようです」

ラックス「『海底都市 シェルノヴァ』と 星の使徒 ……  
…マジかよ」

『海底都市 シェルノヴァ』とは、別名 海の眠る場所 とも呼ばれる。

『都市』と言われているが、所々崩壊しているため、大きさは『街』とみなされる程度である。 これはこの世界に語り継がれている神

話の中で登場したものだ。

そしてもうひとつ、星の使徒とは刑事たちの会話で数回登場した『日本消滅』と関係がある。

日本を消滅させて、その生き残りに『力』を与えたのは星と呼ばれた存在であり、星の使徒は星の中でも人間の形をしていて彼らと同様の知識を持っている者だ。

元来星は文字を扱えないため、この星の使徒が通訳として人間と星の間に立った。…と、これも神話で語り継がれている。

日本を消滅させたのが星だという論拠は、日本の上空に高エネルギーが集まってる様子などが、神話の内容と酷似していたからである。

李園「それで…どうすればいいでしょうか。…班長、ご指示を」

李園とラックスの視線が班長に向けられた。

すると班長はゆっくりとコートを羽織りながら微笑む。

「んじゃ、ちょっとお話してこようか。その使徒と」

…少しずつ、物語は終わりに向かい始める。

これは、ほんのわずかな終末の予感である。あまりに小さすぎて  
気づく人はまだいないが。

\*

刑事たちはキョウゴたちの部屋に荷物を移し終えて、それぞれのベ  
ッドを決めたところだ。

入り口から入って左側の、一番手前のベッドはミオ、その奥がキョ  
ウゴで、さらにその奥がゲイル。

そして右側の一番手前のベッドは誰も使わないので荷物を置き、そ  
の奥のベッドはラス、さらにその奥がシリウスである。

(ダイニングテーブルは左側と右側のベッドの列の間にある)

そしてベッドに座っていたゲイルが立ち上がり、袖をまくりながら歩き出す。

ゲイル「よし、荷物も運んだし、やっと落ち着いたな。夕食を今作るから待っていてくれ」

その言葉を聞いてラスも立ち上がった。

ラス「あっ先パイ、手伝いますよ！」

するとゲイルは手で軽く制する。

「いや、気持ちだけで充分だ。今日は疲れただろ？明日も結構動くかもしれないから、ゆっくり休んでくれ」

そう微笑を残してキッチンへ向かう後ろ姿を見て、後輩たちは申し訳なく思う。

疲れているのは後輩だけでなくゲイルも同様：いや、もしかしたら一番疲れているのかもしれないのに、まだ任務に慣れてないだろうと気遣ってくれるのだから。

後輩たちは部下の者が上司に気を遣わなければならぬものだと考えていたから、未だにゲイルの気遣いの多さには驚いている。

でも、やっぱり手伝うべきだ。

そう思ったラスは立ち上がるつとずる。

「先パイ、やっぱり…」

そのとき。

「……俺が手伝うので休んでいてください、後輩の刑事さん」

またもや、優しく制する手。　次はキョウゴである。

そして彼はキッチンの方へ向かいながら、ミオに声をかけた。

「ミオ、後輩の刑事さんたちにお茶を入れてあげて」

「任せて!?!」

続いてミオは嬉しそうにうなずいて部屋に置かれていたカップとポットに手を伸ばし、慣れた手つきでお茶をいれてくれる。

「はい、どーぞっ」

ラス・シリウス「ありがとう」

…すっかり冷えてしまった体に染み入る温かいお茶だ。

ふと、シリウスはミオを見つめる。

シリウス「ミオはキョウゴ君と仲が良いんだな」

ミオ「うん！！ だって私の自慢のお父さんだもん！」

当然だとも言うつようにうなづくミオにラスは遠い目をした。

ラス「…にしても若いよなあ…キョウゴ君。 まだ二十歳はたちそこそこ  
だろ？」それでおとーさんって。

シリウス「未だに俺は……理解が追い付かない……」

「あ、そうだ。 ねえシリウスとラス、気になることがあるんだけど……」

ラス「ん、なに？」

「キョウゴと刑事さんって昔に何かあったのかな？」

少女が口にした質問は後輩2人にも明確にはわからないものだった。

ラス「うーん…どう思う？シリウス」

シリウス「俺たちが知っているのは、先パイとキョウゴ君が初めて会ったのは『日本消滅』直後の10年前で、少しずつ仲良くなっ  
ていったとか…」

ラス「あ、あと昨日のケーキの話もあるぜ。確か、キョウゴ君が先パイの家に来ていた頃があったって言った。あと…セリスキ  
ユオレートの時は、『何年か前まではロンドンに…確かに俺の近く  
にいたんだ』って先パイは言ってたな」

ミオ「ふーん、そうなんだ…」

ぽつりと言ってミオは何かを考え込む。

…そう、この少女の方が後輩2人よりもゲイルとキョウゴの過去を  
知っているのだ。 というのも、今日の朝に突然見えた映像で映っ  
ていたから。

その映像はまだちゃんと覚えている。ミオは今ラスとシリウスから聞いた情報を映像と結びつけながら思い返していた。

そうしてまた、パズルのように頭の中にあるキョウゴの過去を少しずつ完成させていく。

しかし、すぐにその表情は曇ってしまった。

ミオ（……ある程度のことはなんとなくわかったけど……足りない。

キョウゴが逃げている理由が、見えない……）

もしかしたら、知ってはいけないことなのかもしれない。

もう私は充分キョウゴの思いがわかったはずだから、ここらへんで詮索はやめた方がいいのかも。

それでも……私は思うんだ。

ミオ「キョウゴ……刑事さんとたくさん話せればいいな……」

シリウス「え？」

ミオ「私も、ラスもシリウスも、あの2人のことはわからないことが多いかもしれないけど……とりあえず何か重要な問題があることは確かだと思うの。そして、それを解決できるのはやっぱり2人し

かないと思うから」

ラス「つまり、あの2人で話して問題解決すれば良い方向に話が進むんじゃないかってこと？」

ミオ「うん、たぶん……だけど」

シリウス「まあ、まともな意見だな。ミオはラスよりも数倍大人だと思うぞ」

シリウスの言葉にミオは笑顔を見せて喜ぶ半面、「おい、それどーいうことだよ！」とラスはベッドの枕をシリウスに投げつけた。

ラス「まあとりあえず俺もミオと同じく、先パイとキョウゴ君にはたくさん話してもらいたいな。問題がどうとかつーよりも、なんか先パイはキョウゴ君と会えて嬉しそうだし」

シリウス「それじゃあ今後の展開に注目、だな」

その言葉の後に、3人は目を見合わせながらうなずきあつ。

どうやら、謎の一致団結が起こったようだ。

「……俺が作ります」

静かな声がして、冷蔵庫から食材を取り出ししていたゲイルが振り向く。

そこには、腕まくりをして手を洗い始めるキョウゴがいた。

「キョウゴ……、みんなと話していていいんだぞ？」

「いえ……俺はいいです」

ゲイルは手早く買ってきた野菜を水で洗い、

「お前だって、今日は疲れたんじゃないのか？ ゆっくり休んでおけよ」

話しかけながら包丁を片手に持ち、近くにあったトマトを取ろうとして……それを先にキョウゴが取った。

ゲイル「？」……取られた？

ゲイルがその行動にポカンとしているとキョウウゴは伏し目がちに、

「あなたは……」

…ゲイルが持っている包丁をそつと手に取り、一度静かな視線を向ける。

「いつも他の人に気を遣いすぎて無理をすることがある」

おそらく、長い間ゲイルを見ていたからこそ言える言葉だろう。

その静かな視線の裏側でキョウウゴが彼を心配していることを微かに告げている。

ゲイルは苦笑した。

「…いや、そんなことはないよ」

キョウウゴに心配をかけさせないようにと思っただけの言葉。

しかし、その意図さえわかってしまっているキョウウゴは首を横に振った。

「…いいから、休んでいてください」

そしてキョウゴはゲイルを後ろにあったイスに座らせる。

キョウゴ「温野菜と鳥肉でコンソメスープを作るんでしょう？」

ゲイル「え？ …ああ、そうだが…なんでわかった？」

ゲイルが作るうとしていた料理をキョウゴが言い当てたことに驚くと、彼は視線をそらして野菜を切り始めながらぼつりと答えた。

「…あなたが昔、俺の体が冷えていることに気付いてくれた時、いつも作ってくれましたから」

「……！」

キョウゴは黙々と慣れた手つきで野菜を切っていく。

すると、背後で笑う気配を感じた。

キョウゴ「……？」

振り返ってその方を見るとゲイルが軽く顔に手をあてて照れくさそうに微笑んでいる。

思わず、キョウゴは怪訝な顔をした。

「…なんですか？」

「ああ、いや…キョウゴがそこまで覚えていてくれたとは思ってもなく… なんとというか、すごい嬉しい。 お前は昔からちゃんと俺を見ててくれてたんだな」

その言葉にキョウゴは目を見開き、顔を背けてつぶやく。

「……別に」

…どこか素っ気ない感じだ。

キョウゴのその様子にまたしてもゲイルは苦笑する。

「…悪かったな。 じゃあ料理はお前に任せて、俺は邪魔なようだから向ここの部屋に戻るよ」

すると、淡々と響いていた野菜を切る音が止まった。

「…いえ、そこにいてください」

「え？」

ゲイルは不思議そうにキョウゴの後ろ姿を見つめる。

そうして聞こえてきたのは、小さな声。

「……味見くらいは、手伝ってもらいますから」

\*\*\*

所かわって、ロンドン。

特殊捜査班の一部の人間は、緊迫した雰囲気漂わせている。

班長は、選抜した少数のメンバーを連れてシエルノヴァに向かうことを決めたのだ。

ラックスは班で統一されている黒のロングコートをバサツと羽織る。その眼はいつもと変わらず好戦的な感じであるが、一応気は引き締めているようだ。久々に履く黒の革製ロングブーツの紐を固く結ぶ。

そして磨き上げたばかりの愛刀『ZERO-SIX Cutlase』を背負って自室を出た。

…正直、星の使徒が存在していたことに驚きはしたが、恐れてはいない。

なぜなら、彼はこの班がこの世で一番最強だと信じているから。

万が一間違いがあつて自分が死ぬことになるうとも後悔しない自信もあるし、なにより実力がある彼の仲間を心から信頼している。

「…楽しみだぜ」

そう呟いて誰もいない班長の部屋に入り、細長い長方形の形をした自室の部屋の鍵を班長の机の横にある専用の台に置いた。すると台に置いた鍵の、金色で書いてある「Lux」の文字がぼつと翡翠色ひすいしきに輝く。

これは班の中で決められたルールのひとつである。

出張や危険な任務を任された者たちは、任務に出向く前に自室の鍵を班長が持つ専用の台に置いていくのだ。

この行為が意味するのは、

『もう二度と帰ってこれないかもしれないから、いざという時は頼む』

という死を覚悟した上での決意だ。

さすがにこの自分の名前が翡翠色に光るときは、ちょっと真剣な顔つきになる。

…この台に名前がある者は、命の保証がないといっても過言ではないから。

ラックスはその台の上の方にある名前をぼんやりと見つめる。

「Geil Garcia」

「Lastius Folca」

「Sirius Latter」

もちろんのことだが、ゲイルやラスやシリウスもこの規則にのっとって、このように鍵を置いていった。

「頼むから、ちゃんと帰ってこいよ」

…つつても、あのメンツなら「死ね」って言ったところで意地でも死なねーだろうから、とりあえず楽しくやってりゃそれでいいや。

そんなことを思ってラックスは独りでに笑みを浮かべ、班長の部屋を後にした。

\*

選抜メンバーの集合場所は、この本部の最上階にある『空中回廊』

だ。

空中回廊とは本来の意味だと航空機の空路の名称なのだが、この建物にある『空中回廊』は最上階の中心にある『空中庭園』を囲むようにして作られた歩廊を意味する。

なぜ『空中』という言葉がつくのかと言うと、特殊な設計により、本当に宙に浮いているかのような作りになっているからだ。特にこの空中回廊は柱と柱の間に落下を防止するものがついてないので、誤って足を滑らせばかなりの高さから落ちて即死である。

その集合場所へラックスが向かっていると同じく黒のロングコートを着た李園と合流する。

李園「ラックスさん……ちょっと聞きたいんですけど」

ラックス「なした？」

「……ロドリゲスを連れていってもいいでしょうか」

……。

「あ？なに？ ロドロ…？」

「ロドリゲスです。 ああ、ラックスさんにはまだ見せてないんですね。 むいぐるみです、ネコの」

「ぬいぐるみ？ いや、別に持ってたっていいだろーけど、お前がそういう実用的じゃないもの持ってたって珍しくね？」つーか、すげえ名前…

「いえ、少し手を加えさせてもらってて、このロドリゲスの中にはGPS機能やパラシュート、小型無線機などが入ってます」

「……やっぱり実用的なものしか持っていかねーよな、お前…」それでも12歳かよ。

「バンズさんに手伝ってもらえてよかったです」

「バンズじいさんなら、そりゃあやるわな」そういうの大好きだもん。

（バンズは、第一章Part 2参照の本部直属のメカニックである）

そうして2人は最上階へ向かうエレベーターに乗り込んだ。

今さらだが空中回廊からつながる空中庭園は、実はただの庭園ではなくジェット機やヘリコプターが収納されていて、ジェット機は空中回廊の上を滑走路替わりにして飛ぶようになっている。

これからメンバーは空路で『幻想都市 日本』の近くの都市まで向かい、そこから潜水艦に乗って深海へと向かうことになるのだ。

ラックス「お前さあ」

李園「はい」

「怖い？」

「ジェット機に乗ることがですか？」

「いやいや、星の使徒 と会うこと」

「…いえ、最初は驚きましたが今は特に何も」

「だよな！　なんか他の奴らが結構ピリピリした空気出してるもんだから、緊張してない俺が変なのかと思っただぜ」

「他の人が…ですか？　あの人たちに限ってそんなことがあるでしょうが…」

ラックスの言葉に首をかしげる李園。

その言葉と同時にエレベーターは最上階に着き、2人は歩き出す。

目線の先にはすでに到着していた他のメンバーがいた。

ラックスの言葉の通り、ピリピリした空気をそれぞれが醸し出している。

その光景を一瞥してラックスは李園に「な？」と同意を求めれば。

「いえ…彼らの話をよく聞いてみてください」

と、冷静な言葉が返ってきた。

ラックスはよくわからないまま、言葉の通りに耳を澄ましてみる。  
……と。

「やべえ…やべえよ、あともう少しで始まるぜ、サッカーのバーレーン戦！！ あああ早く見てえ、緊張する…」（今夜の試合はバーレーン戦でなくウズベキスタン戦なのだ）

とか。

「あつらゝイヤだわ、お化粧取れてきちやっただじゃない！ もぉゝ  
これから潜水艦乗った時とかどうすればいいのかしら、アタシ……」  
(注：オカマです)

とか。

「ああ……マジでイラつくぜ、俺の相棒……いつになったらジュー  
ス代返すんだよ……！」(ジュース代：150円)

とか。

李園「……というわけですから、たぶん皆さんラックスさんと同じ感  
じだと思えますよ、任務に関しては」

ラックス「……………(絶句)」

まあ簡単に言ってしまうと、こいつらはみんな任務のこと以外でピ  
リピリしてるのである。 お前ら大丈夫か。

「なあなあ今回って有名なお菓子会社の社長さんに会つんだろ？  
どこのメーカー！？」お菓子もらえんの！？」

ラックス「おいそこに任務の内容全然わかってねーヤツいるぞ！！  
？」（その方を指差す）

李園「……、まあすごい人に会うことに変わりはありませんから、  
別にいいんじゃないですかね」

…適当である。

\*

しばらくしてメンバー全員が集まり、話し声が消えた。

聞こえるのは風の音のみ。

メンバーはそれぞれ革製の手袋をはめ直したりしながら前方の空中  
庭園を見据える。

その場の全員が黒を基調とした服装に身を包んでいることもあり、他の者を圧倒する威圧感が風格として表れていた。

…これぞ、警察庁特殊捜査班である。

すると空中庭園が真ん中から4つに分かれて外側に広がり、中央の大きなくぼみからジェット機が現れた。

メンバーたちはそれを確認してそれぞれ歩きだす。

「…李園、行くぜ」

ラックスも相棒に声をかけ、

「…はい」

李園のうなずきと共に歩き始めた。

\*\*\*

再びリセラのキョウゴとゲイルはというと。

「…ん、なかなかうまいじゃないか！」

キョウゴが作った料理の味に感心するゲイルがいた。

その隣でキョウゴは火にかけている別の料理の様子を見ながら微笑む。

「…よかったです」

今火にかけている料理が完成すれば、夕食の用意が整うようだ。

逃げる者と追う者であるはずの2人は今、不思議と和やかな雰囲気

になりつつあった。

ふと、ゲイルは思い出す。

「…そういえば、言うのを忘れてたことがある」

「なんですか？」

そして首を軽くかしげるキョウゴを見て、楽しそうに笑った。

「今回は、俺の『圧勝』だった」

…2人の間だけに通じる『勝ち』『負け』の話である。  
今回の街でキョウゴは逃げることもできないままゲイルに捕まったからだ。

そんなゲイルに対し、キョウゴはわざとらしく小さなため息をつく。

「…『負け』ましたよ、刑事さん」

「これからも俺の圧勝が続いたっていいんだぞ？」

キョウゴはずっと料理の方を見ているが、ゲイルが面白がってその言葉を投げかけたのが口調からわかった。思わず自分まで笑みがこぼれる。

「…なに言ってるんですか。こんなスリルの欠片もない逃走劇が続くのはごめんです」

「いいじゃないか、『カメの徒競走』みたいで」

「……………カメ？」

久々に開花したゲイルの表現力の無さに、キョウゴはキョトンとした。

\*

ラス「あー…なんつーか俺らにも『花』がついたなー」

ミオ「なにがー？」

シリウス「ミオがいることで、やっと俺たちも華やかになったってことだ」

ミオ「そーなの？　なんかよくわからないけど嬉しい！　そーれっ」  
その言葉を受けてなのか少女は空中に白い光を発生させて、真っ白な花びらをふんわりと降らせる。

ラスはベッドに寝転がりながらそれを眺め、

「きれーだなあ……」

シリウスは手に持っていた紅茶のカップに入った花びらを見て微笑み、

「優雅だ……」

……ほんわかとした。

その時、出来上がった料理を持ったゲイルとキョウゴがやってくる。

後からやってきた2人はなんで花びらが舞ってるのかわからず部屋を見回し、気付いたキョウゴはミオを見た。

「ミオ……綺麗だけど……ここは宿の部屋だから、ダメだ」

「えええー……」

「…片付けなさい」

キョウゴに優しく言い聞かされたミオは、

「せっかく出したのにいー……」

と、ぶつぶつ呟きながら箸はしとちり取りで花びらを集める。

ラスはそれを手伝いながらテーブルの上に乗せられた料理を見てパ  
アッと目を輝かせた。

「うわー、料理すげーうまそう!!」

「今回は全部キョウゴが作ってくれたんだ」

「先パイも料理が上手ですが、キョウゴ君も料理うまいんですね」

「そーだよ!! キョウゴはなんでも作れるんだから!」

ゲイルは改めてキョウゴが作った料理を眺める。

ここにある料理はすべて一足先に味見したが、どれも本当においしかった。

個人的な意見ではあるが、好みの味だ。

料理のセンスがあるのだろうかと一度考えるが、いや、それだけではないと思ひ直す。

キョウゴは昔から、表に出さないが努力家だった。

ゲイルは、昔自分が料理をしていた時にキョウゴが離れたところから覗いてたことがあったのを思い出す。

そして…料理の練習を隠れてやっていたのも知っていた。

たぶん、キョウゴは彼が見ていない間もずいぶん頑張ったのだろう。

そうして手に入れた料理の腕だ。

…もつとも、この場でそれを知るのはゲイルだけだが。

彼はキョウゴの努力を感じて、静かに微笑むのだった。

\*\*\*

「視点：ゲイル」

後輩たちがキョウゴの料理の味に感動して、さらに食器を洗ってく  
れたその後、俺たちは順番にシャワーに入ることにした。

やはりこの場合レディーファーストだろうと考え、今はミオがシャ  
ワーに入っている。

そして俺は静かにこの機会を待ちわびていた。

…キョウゴにミオのことについて聞くなら、今しかない。  
だいたいのは、見当をつけているのだが。

俺はベッドに座り、隣のベッドに同じく座っているキョウゴに静か  
に聞く。

「キョウゴ、…ミオをどこで拾ったんだ？」

しかしその言葉に一番早く反応したのはキョウゴではなく後輩たち  
だった。

ラス・シリウス「え……？」

…どうやら、気づいてなかったようだな。

キョウゴはというと、ベッドの間の壁に取り付けられた窓から雪が降る外の様子に視線を向けていて。

「気づいていたんですね」と静かに返した。

そして俺はさらに最大の疑問を投げかける。

「ああ。それと…あの子は日本出身じゃないのに、どうしてあの『力』が使えるんだ？」

ミオの容姿は一見してわかる通り日本人ではなく、ヨーロッパ周辺にいるような感じだった。

出会った時から髪の色を見てそのことには気づいていたが、どうして『力』が扱えるんだ？

後輩たちも気になるのか、ベッドから立ち上がってダイニングテーブルについていたイスを引き寄せて近くに座った。

キョウゴは俺たちの様子を見て、一呼吸おいた後に話し始める。

「…あれは、1年ほどの前のことです」

\*\*\*

「視点：キョウゴ」

曇天が黒く空を覆いつくし、雷が轟いてどしゃ降りになって。

いつだったかのロンドンを思い出させるようなそんな灰色の景色の中、俺は真っ白な少女と出会った。

\*

ロンドンを出てから2年経ったころ、俺はある山の麓ふもとに来ていた。

最近小さな農村を渡り歩くようになっていたこともあり、大きな街に行く移動手段に使う金が少なくなったから、今は徒歩で次の街を目指している。

（『カ』を使えばすぐに行けるものだとわかってはいるけど、なぜかプライドが許さない）

まあ、歩くこと自体は好きだからそれは別に良かったんだけど。

…どうやら、次の街に向かうにはこの山を越えなくてはならないら

しい。

でも。

麓の老婆「お兄ちゃん、大丈夫かい？　これから天気が悪くなるよ  
うだよ」

「そうみたいです。　ですが…そろそろ俺は行かないといけませ  
ん」

「そうかい…。　それじゃあ山の中腹に小さな村があるから、そこを  
頼りなさい。　気を付けて行くんだよ」

「…はい。　この数日間、色々ありがとうございました」

…天気がこれから悪くなるようだ。

正直言うと、もう少しここに居たかった。

今のおばあさんは俺を少しの間かくまってくれていて、俺も不自由  
しなかったけれど、食糧などの面を考えるとそろそろここを出るべ  
きだと考えた結果だ。

俺は空を見上げる。

おばあさんの言葉通り、山には暗い色をした雲が漂い始めていた。

天気が悪くなる前にその中腹の村に着けばいいんだけど。

そんなことを思いながらほとんど草木が生えてない山道を歩き出した。

\*

歩き出して数十分経ったころだろうか。

「……………雨だ」

とつとつ雨が降り始めてしまった。

足を進めれば進むほど雨脚は強くなる。

村はまだなのだろうかと目線を上へ向けるが、それらしきものは見えずに無機質な岩々が視界を覆っていた。

きっと…今日は過酷な1日になるだろう。

俺はそんなことを思い、唇をかみしめた。

\*

激しい雨に打たれて、ようやくたどり着いたその村で、

「……………」

……………俺は言葉をなくした。

そこにあつたはずの村は土砂崩れの被害を受けて、建物ひとつとして残っていないからだ。

そしてその真っ暗な世界の中で、

…ひとりたたずむ真っ白なワンピースを着た少女がいた。

俺が少女に近づくと、その子はゆっくりと顔を上げる。

「…何をしてるの」

そう尋ねれば。

「…何もしてないよ」

と静かに返される。

「親は？」

「………」

… 答えない。

おそらく…この土砂崩れに巻き込まれたんじゃないかと俺は察した。

少女に親のことを聞く前になんとなく予想はしていたけれど。

たぶん、今から『力』を使って土砂を取り除いても、生き残りはいない。

遺体だけでも出してあげたいところだけどきつとまた土砂が崩れて埋もれてしまう。

親を亡くしたのに、少女は泣いてはいないようだった。

悲しくないのだろうか。いや、悲し過ぎて泣けないのか。

「君はこれからどうしたいの」

「…え？」

「思いつくことを言ってみて」

俺の言葉を聞いて少女は何かを考え込むようにうつむき、やがて顔をあげて言った。

「…魔法が使えるようになりたい」

「…魔法？」

「うん」

「どっしり」

「そうすれば…この人たちを天国に連れていけるでしょ」

少女の視線は土砂の方に向けられていた。その声は驚くほど凜と  
している。

『魔法が使えたら』と、少女は言った。

…俺が叶えてあげよう。

「それじゃあ…そこでちゃんと見送ってあげて」

「？」

俺は両腕を横に伸ばして手を土砂の方に向ける。

そして、『力』を使った。

青い光が土砂を包む。

すると、その中から十数人の生前の姿が現れた。

俺の横で少女が息を飲むのがわかる。

そして少女はその者達に微笑んだ。

…泣きそうな表情だった気がする。

「……………」  
「ありがとう」

たった一言、ただそれだけの言葉。

その一言に少女のあふれる思いが込められているようだった。

『おいていかないで』って言ったり、両親を泣きながら呼ぶとか、  
そういうことは一切しなかった。

そうして、少女の言葉を聞いた者たちが静かに微笑んだ瞬間、空から光が射して。

「……………」  
「……………」

その者たちは綺麗に輝きながらゆっくりと消えていった。

俺は両腕を下げて、空を見上げる。

暗い曇天の空が少し開けて、青空から優しい光が降り注いでる。それが天国への道を示しているようだった。

次に傍らの少女を見つめる。

すると、その少女が涙を流していることに気付いた。

やっぱり…悲しかったのかな。

「…大丈夫？」

そう静かに聞けば、少女は涙をぬぐって笑う。

「…うん。お兄ちゃんは本当に魔法使いだっただ、すごいね。本当にいるんだ…そっか…。…ありがとね、叶えてくれて」

その言葉に俺は「たいしたことじゃないよ」と静かに返した。

「…ねえ」

「なに？」

「その魔法、私にも使える？」

「使えるとしたら…君はその『力』を何に使うの」

「それはその時に考えるだろうけど、できるなら人を助けることに使いたい。お兄ちゃんが私にしてくれたように」

その時に俺は直感で感じた。

この子は、普通の子じゃない。

子どものような視点も持つてるけれど、いつもこの世界をどこか別の視点から眺めてる。きっとこの先、道を踏み外すことはない。

…そんな気がしてならなかった。

だから俺は。

「……いいよ。目をつぶって」

少女の頭に手をかざし、ほんの少しだけ『力』を与えることにした。

\*

少女に『力』を与えたあと、細かい説明をした。

『力』を使うとその分の体力が削られることから始まり、色んなことをだ。

悲しみを受け入れるのが早かったこの子は、気持ちを切り替えて真剣にその話を聞いている。

そうして一通り終わったあと、俺は少女に聞いた。

「これから君はどうしたい？」

さつきと同じ質問だ。  
するど。

「…家族がほしい」と、少女はぽつりと言った。

それは…この子には難しいと思う。

これは、里親とかを探すことになるのかとぼんやり考えた。  
ただ、自分から里親を探す子どもって言うのを俺は聞いたことがない。

『力』を使って里親を作るとか、そんな非道なことを少女がするとも思えない。

どうしようか……。

そんな俺を見た少女は言葉をつづけた。

「でもね、きっとそれは私には難しいんだろうなって思う。　だか

ら」

「……？」

「お兄ちゃんが、私のお父さんになって」

……………は？

「えっ？」

「お父さんになってほしいの。 そうしたら私、どこでもついてい  
くから」

……。

「俺が」

「？」

「君の」

「……」

「……お父さん？」

「んっ」

いやいやいやいや、え、どこからそんな発想が？

俺は普段割と冷静でいられると自負してるけど……今ははっきりわか  
る。

……動揺が、隠せません。

「……だめ？」

少女は不安げな瞳で俺を見上げる。

俺は今、どんな顔をしてるんだろう。想像もつかない。それほどに、混乱。

19歳で父親デビュー？ それはありえないことじゃないけど……冗談でも笑えない。

「おねがい、お父さんにならなくてもいいから、私も連れてって」

俺は深く息をついて少女を静かに見つめた。

そして歩きだしながらつぶやく。

「ついてきたいならそれでも良いけど……楽しいかはわからないよ」

その言葉を聞いた少女はパアツと笑顔になった。

「うんー!」

そして俺の後ろをパタパタとついてきて、すかさず少女は聞く。

「で、お父さんになってくれる?」

…やっぱりそこか。

俺は困ったようにため息をひとつ。

「……お好きにどうぞ」

「やったあ!」

もう投げやり半分で文章が成り立ってなかった気がするけど、もう気にしない。

この子が喜んでるし、それだけでいいかなって思ったから。

「あ、でも『お父さん』って呼ぶのはさすがに荷が重いから、やめて」

\*\*\*

キョウゴ「そうして、ミオは俺についていくことになりました。それからミオは俺が与えた『力』を育てて、その量は当初の数倍までになっています」

ゲイル「なるほどな…」

ラス「ミオって結構しっかりしてるんだ…」なんかすげえ…

シリウス「…ミオが本当の意味で、キョウゴ君の娘じゃなくてよかった…」(そこに安心する男)

刑事さん達がいろいろと感心してうなずいてるのを見ながら、俺は再び思い返す。

\*\*\*

「あ、ちょっと待って」

「？」

その村だった場所を出るときに少女は足を止めた。俺は不思議そうに振り返る。

「あの『力』、使ってみていい？」

「それは、自由だけど…」

すると少女はその村の方に手を向け……俺と同じ青い光ではなく、白い光を発生させた。

そして…土砂ばかりになってしまったその場所に草木や白い花をたくさん咲かせる。

「うわぁ…『力』を使っつてこんな感じなんだ…！」

そう言いながら、少女はふらついて、俺が慌ててその体を支えた。

「…使い過ぎだ。もうちょっと加減を考えないと、体調崩れるよ」

「あ、ごめん…」

そうして再び村だった場所を見つめると、一陣の風が白い花びらを乗せて俺たちをつつんだ。

心を前向きにさせてくれる、優しい風だった。

「…行こうか」

「…うん」

俺は『力』を使い過ぎた少女の手を引き、歩き出す。

なぜだろう、今の自分の姿が…あの人と重なっている気がした。

「…自分の名前は、わかる？」

「ミオだよ」

「ミオ…か。その名前は大事にした方がいい」

「？…うん。でも、なんで？」

「大切な人がつけてくれたものだから。他の人は大抵、自分の名前があることの幸せに気付いてない」

…そう、俺に名前はないから。

せっかく家族がつけてくれたはずの名前を、どこかに落としてしまったから。

名前があることの幸せを、名前を呼ばれることの喜びを、俺は持っていないからこそ知っている。

ミオ「そっか……、そうだよな。大切にする。それじゃあ、お兄ちゃんの名前は？」

……俺の、名前？

さっそく答えに詰まる。

その時、俺の中で懐かしい声が響いた。

『キョウゴか。良い名前だな』

……あの人の、声。

「……キョウゴ」

「えっ？」

「……俺の名前は、キョウゴだよ」

\*\*\*

「視点：筆者」

しばらくしてシャワーを浴びてさっぱりしたミオが戻ってきた。  
今度はキョウゴがシャワーに入ることになり、話すメンバーが変わる。

ラス「なあミオってさ、この前の街にはいなかったよな？」

ミオ「前の街？ あーえっと、とりあえずキョウゴとは一緒にいなかったよ」

ゲイル「その間はどこにいたんだ？」

「人があまりいない山村にいたの。そこに一人で住むおばあさん  
にかくまってもらってたんだー！」

シリウス「知り合いなのか？」

「ううん、全然知らない人」

さらっと言ったミオの言葉に一同は言葉をなくした。

だってこの9歳の子どもが、知らない人間の家でかくまってもらったと言っただから。

「危険だ」と思ったあなたは正当な考えを持っていてなにより。逆に「今度やってみようか」と考えた方は……一度冷静に考えなすことをお勧めしよう。

ラス「え、どうやってかくまってもらったんだよ」

「え、普通に『かくまってください！』って言ったんだよ？」

シリウス「度胸あるよな……」

ゲイル「ミオ…それは危ないぞ。 どうしてそんなことをするんだ？」

娘がいたゲイルからしてみれば、心配に思っただけである。

しかしミオにはちゃんとした理由があるらしく、うつむいて静かに答えた。

「私とキヨウゴは……あまり長く一緒にいられないから」

「え？」

「私の『力』はキヨウゴからもらったものでね、私はもらった時から『力』を使うことでそれを育てていたんだけど……あるとき気づいたの。……私の『力』が増えれば増えるほど、キヨウゴの中へ戻ろうとする『力』の働きが強くなるってことが」

「キヨウゴの中へ戻る……？」

ラス「それってつまり、『力』が元の場所へ戻ろうとしてるってことか？」

ラスの言葉にミオはうなずく。

「だからね、たぶんこの街にキヨウゴがいる間に私はまたどこか遠くに行くと思う。この『力』がキヨウゴに戻ってしまう前に」

その時、シリウスは気付いた。

「物理的に離れば大丈夫なのか。……ってことは……ミオがこれからも『力』を育て続けたら……？」

ミオは悲し気に笑って、その言葉に続ける。

「……うん。いつかはキョウゴに会えなくなる日が来る」

「……」

ラス「それでも、『力』を育て続けるのか？」

「うん。だってせっかくキョウゴが私にくれたんだもの。もっとたくさん使えるようになって、たくさんの人を助けてあげたい」

その言葉は、子どもらしい純粹さだけでなく、決して気まぐれでない決意がこめられていた。

刑事たちはそのことに強く驚いたし、キョウゴが『力』を預けた理由がなんとなくわかる気がしたのも事実だ。

ゲイルはそんなミオの頭をくしゃくしゃと撫でて、

「それじゃあ、ミオが帰るまで楽しく過ごそうな」

「…！…うん…！」

ミオはとてつもなく嬉しそうにうなずいた。

\*

次にシャワーに入ったのはシリウスだ。

ラス「そついや、やっと俺…ちゃんとキョウゴ君と話せたよな！」

キョウゴ「あ…、そうですね」

ラスの言葉に目を丸くしたキョウゴの様子からして、その事実に関心を持ってなかったようだ。

「気づいてなかったのかよ、もー！！ この前は（セリスキュオ  
レート）すぐ逃げやがってー！」

ラスがわざと大声でそう言ってベシッとキョウゴの肩を叩くと、面

白そうにキョウゴは笑って「すみません」と軽く謝った。

ゲイルやミオもその光景に笑みを浮かべている。

「あ、あの時俺の腕治してくれたのキョウゴ君だろ？ サンキューな」

「はい、どういたしまして」

なんだかんだと、キョウゴは後輩たちとうまくやれるようだ。

いや、話が弾みやすいラスと話しているからだろうか。

シリウスは割とおとなしいから、キョウゴと話することはできても弾みがないように想像できる。

ふと、キョウゴは何かを思い出したかのようにゲイルを見た。

「あ、刑事さん…ブラックコーヒーをいれましょうか？」

その言葉にラスは「はあ？」と言いたげな顔をする。  
が、ゲイルは微笑んでうなずいた。

「ああ、頼む」

「後輩の刑事さんはどうですか？」

「いや、俺は甘くないと飲まないから。　　ってかこんな時間にコーヒ―飲んだら目え覚めるだろ！」

「あ、いえ…刑事さんはなぜか逆で、よく眠れるらしいです」

…何故？

「あ、じゃあ私はホットミルクが飲みたいー！！」

「今いれてくるから、少し待ってて」

そうしてキョウゴはキッチンに向かっていった。  
ラスはまじまじとゲイルを見つめる。

「先パイって…カフェイン効かないんスか？」

「え？　さあ…どうなんだろうな」

「いや絶対苦労したでしょ、学生時代！　テスト期間で眠くなったら一夜漬けできないし！！」

「お前…一夜漬けだったのか」

「え？ ……それ普通じゃないんスか？」

「……………いや、いい」

…何がだ。

「それにしてもキョウゴ君って気が利きますよねー」

「ああ、昔からだ。 たまに無愛想なところはあるが、本当は結構優しい」

「??？ キョウゴ君って無愛想な態度したことがあります?」俺は見  
てませんけど。

するとミオは首を横に振る。

「違うよ、刑事さん。 キョウゴが無愛想な態度とるのは刑事さん  
にだけだもん」

その言葉を聞いたゲイルはうつむいた。

「…やっぱり…嫌われてるのか…」

9歳児の言葉に落ち込む、30歳。

「いやいや、なに落ち込んでるんスカ」違いますって、たぶん。

そこにタイミングよくキョウゴがホットミルクとコーヒーを持って戻ってきたので、一同の視線が一斉に向けられる。

その様子に瞬間的に足を止めたキョウゴは、

「……………え？」

意味もわからずキョロキョロとあたりを見回した。

\*

次にシャワーに入ったのはラスである。

その時にゲイルはふとアスラと後輩の会話を思い出す。

彼女は後輩に言っていた。

『お前らには借りがあるからだ』と。

いったい、何の借りがあるのだろうか。

ゲイル「なあシリウス」

ゲイルの呼んだ声にシリウスは首をかしげる。

「はい」

「さっきアスラはお前とラスに『借りがある』と言ってたが…何をしたんだ？」

「ああ…それですか。以前に俺とラスでアスラさんの家に行った時のことですね」

「お前ら、アスラの家に行ったのか！」

「…はい」

そうしてシリウスは語りだす。

「何年前にラスがやらかして男子寮の俺たちの部屋を半壊させたことがあって、その時にアスラさんにお世話になったんです」

「……その前に、ラスはいつたい何をやらかしたんだ……」

「まあ……間違つて押しちゃったって感じですよ。（何をだ。by筆者）それで……」

\*\*\*

アスラの家は、ロンドンから幾分離れた山奥にあつた。（本部の方にも部屋を持つているのだが。）

その家にたどり着くまでの山中で。

ラス「アスラさあーん、まだっスかー!？」

情けない男の声が響いて、

アスラ「……黙れ、ガキ。世話になるなら礼儀くらいわきまえろ」

対照的に落ち着いた声がビシッとラスを押しさえつける。

シリウス「つてかラス、さっきからそれしか言っていないだろ」

ラス「だって俺たちもう何時間も山の中歩いてるんだぜ!？」

そんなことをぼやきながらガサガサと草をかき分けて進む3人。

ふいに、カサカサカサツと3人とは別の草をかき分ける音がする。

3人「ッ」  
「!!」

それに一番強く反応したのはアスラで、

「  
… Be だまっていいよ quiet」

すぐに人差し指を口の前に立ててニヒルに笑いながら、男のような低い声でそれだけ言った。

後輩もそれに従う。

……

彼女は目を閉じて耳を澄ませ、その小さな音に神経をとがらせる。

そしてカッと目を見開いた瞬間、背負っていた細長いカバーから即座に猟銃を取り出し、迷いなく引き金を引いた。

パンパンパンツ！！！！

後輩（「猟銃ー！！？」）

後に、

パサツ…ポトポトツ

……なんか嫌な音が聞こえる。

アスラはその方の茂みに入っていく、やがて撃たれたウサギと鳥の羽を持ってきた。

アスラ「よし、食糧確保だ。お前ら、持て」

ラス「ぎゃあああウサギがああ！！！！」

「世の中は弱肉強食だ。ライオンだって食に困れば人間を食う。お前たちだって普段牛や豚を食べているだろう？ それと同じで、しょうがない犠牲だ」

ラス「ううっアスラさん原始的過ぎっスよ!!」

シリウス「やっぱり、山奥だから食糧調達はこうなるんでしょうか……」

「本部から届く食材もあるが、人間が生き物を食うことの根源を実感しないとありがたみを忘れるだろう？」

ラス「確かにそうかもしれないけど……」（可哀そうな目で撃たれたウサギを見る）

シリウス「……」（可哀そうな目で鳥を見る）

その様子の後輩たちを見たアスラはわずかに微笑んだ。

「その動物たちを可哀そうに思えるなら、充分だ。食う時はそいつらに感謝しろ。そして忘れるな」

後輩「……はい……」

\*\*\*

シリウス「なんだかんだ言っただけ、あの撃つときのアスラさんの殺気はすごかったです。ラスは『あれはアスラじゃなくて、まさに阿あ修羅しゅうらだな！』って言ってました」

阿修羅とはインドの鬼神で、常に闘争を好むようだ。ラスはおそらく語呂からその単語を出したと思われる。

シリウス「とにかくそれで、俺たちは『食べるとはどういうことなのか』を知ったんです……」

ゲイル「…良い話かもしれんが…全然本題でないじゃないか…」

…「もつともである。」

\*\*\*

ようやく後輩たちがアスラの家に着くと、アスラの夫であるカルムが出迎えてくれた。

厳格なアスラとは正反対の穏やかな人物である。

「いらつしゃい、ラスティウス君とシリウス君」

ラス「あ…お世話になります!」

シリウス「お世話になります。何か手伝うことはありますか?」

「ああいや、今日はもう何もすることがないから、君たちはそこでも座つてなよ」

アスラの家は木造のログハウスで、後輩2人はカルムが指差したテラスのイスに座った。

ふと、2人はある一点に目が行く。

「あの…すみません、あそこにあるのは…アスラさんが?」

シリウスが指差したのは空からになった大量の酒樽。  
あれはかなりの量だろう。

するとカルムは「違う違う」と笑って首を横に振る。

「あれは俺のだよ。結構酒が好きなんだ。アスラが飲んだのは、あっち」

そして代わりに指を差されたのは。

…大量の段ボールの山があり、そのひとつひとつには…空<sup>から</sup>になった  
烏龍茶のペットボトルが入っていた。

後輩（「ウーロン茶ー！！？」）

ラス「す、すげー…鳥と龍のお茶だ…すげー…！」

カルム「え？」

ラスの言葉に首をかしげるカルムにシリウスが耳元で解説する。

シリウス「…あいつ勘違いしてて、烏龍茶には鳥と龍のエキスが入  
ってると思ってるんです」

カルム「なるほど…。」

ラスティウス君、アスラが飲

んでる烏龍茶は特別で、龍のエキスが格段に多いんだよー」（も  
ちろん嘘）

シリウス「え」

ラス「マジっスか！！？ さっすがアスラさんだなあー！！」

その言葉を信じて驚愕するラスを見た後、それを楽しそうに眺めるカルムを見たシリウスは言葉をなくした。

シリウス（この人は… ippitai…）

\*

ある日、後輩2人はカルムとともに暖炉の木を伐りに山に入っていた。

シリウス「暖炉の火に薪まきを使うなんて、古風ですね…」

カルム「ああ。 アスラはそういうところにこだわるからね」

ラス「へえ…さすが。 でもあんなに厳しかったらカルムさん疲れ  
ないんですかー？」

シリウス「…失礼だと思うぞ、アスラさんに」（小声）

そんな後輩の様子にハハ、とカルムは面白そうに笑う。

「疲れることはないさ。 君たちは、アスラが怖いのかい？」

ラス「はい!!! そりゃあもー鬼ですから!!!」（即答）

カルムはその言葉に静かに微笑んだ。

「やっぱりアスラは仕事でも変わらないんだな」とつぶやく。

そう、カルムは警察の人間ではないのだ。

ラス「ねえねえカルムさん、アスラさんとなんで結婚したんスか？

教えてくださいよー」

興味津々な様子で問い詰めるラスをシリウスがベシッと叩くのを見てカルムは再び笑う。

「シリウス君、別にいいんだよ、気を遣わなくて」

「はあ…そうですか…？」

ラス「それで、それで？」

「俺とアスラが出会ったのはずっと前だよ。アスラが任務の途中で負傷して俺が手当てしてやったのが最初かな。その時はほとんど話す暇もなく彼女は出て行ってしまっただけ」

「アスラさんは任務を優先しますからね」

「ああ。それで数年後、俺にはすでに親が決めた婚約者がいて。」

その婚約者の人は俺のことをすごく好きでいてくれてね…俺としては嬉しかったけど、少し気が休めないって感じていて。そんな時にアスラがああ時の礼を言いに俺の所に訪ねて来たんだ」

「うわあ…なにその展開…で、そして!？」

「彼女と少し話してみて、感じたんだ。居心地がいいって。あいつは女性らしさってのが全然ないけれど、人間としてはしっかりしてると思わないかな？」

「はい…それは確かに」

「その居心地がいいって思った理由はイマイチ俺にもわからないけど、彼女の志を聞いてたら尊敬してしまっただけ。本当は逆が好ましいんだらうけど、ついていきたいって思ったんだ。この人を…支えてやりたいって」

「へええ…なんかかつこいいっすね!!」

「ハハ、そんなたいしたものじゃないさ。で、俺はその婚約者の人と親にアスラを選ぶことを言ったんだ。親は最初反対したけど、説得するうちにわかってくれた。ただ…婚約者の人がしばらく泣き崩れていて…それ以降会ってないから、それだけが心残りかな」

「今は…どう思いますか？」

シリウスの言葉にカルムが目を見開く。

「今は…アスラさんを選んでよかったって思いますか？」

「……そうだね……」

予想に反してカルムは一度口を嚙くんだ。

「よかったと思うことはたくさんある。実際今俺は彼女と居られて幸せだしね。でも……ひとつだけ、どうしてもそうは思えないことがあって」

「え……?」

カルムは悲し気な瞳のまま少し目を伏せて言葉の続きを紡ぐ。

「……アスラはね、子どもを産まないんだ」

「「……!」」

「班で決められたことらしい。彼女も納得していた。『守るものが増えたら、任務にいつかは支障が出る』って。……それが彼女の本心なのはわからないけど」

後輩2人はカルムにかける言葉が見当たらなかった。

「でもやっぱりさ、俺が夢見てた家族の形にはずっと子どもの存在があつたから、それがどうしても…ね。俺の親もそのことが気がかりだつたらしいし、婚約者の人としたときに『もし子どもができたらなんて名前にしよう』って話してたものだから、余計にそのことが引つかかつて…。だめだよな、俺は一度そのことをちゃんと受け入れたはずなのに…まだ引きずってる」

『子どもがほしい』

その願望は本来認められてもいい願いだ。

しかし、その願いは彼が尊敬した彼女の志によって絶<sup>た</sup>たれてしまった。

彼はその事実を知った時にどんな表情をしただろう。

…そして、彼女はその表情を見て何を思っただろうか。

カルム「……ごめん、なんか暗い話になっちゃったね。気にしないでいいよ」

そう言って歩き出すその横顔に、後輩たちは揺らぐ思いがあるのを見た。

\*

また別の日。

後輩2人はアスラが何か作業をしているのを見て、その後ろ姿に声をかけた。

ラス「アースラさんっ!!」

そうして覗き込もうとしたラスの顔に、スツと包丁の刃が間近で輝く。

ラス「ひいっ!!」あぶねえ!

アスラ「いきなり覗き込もうとするな。…死ぬぞ」

ラス「いや、いやいやいや!! 覗き込むから死ぬんじゃない、

アスラさんが包丁持ってるのが原因でしょ!!」(もう何を言ってるのか自分でもわからない)

シリウス「ああ、包丁を砥いでいたんですね」

アスラ「まあな。これはあいつが使う包丁だ。たいして妻らしいことをしてやれてないから、これくらいはやっておかないとさすがに悪いだろう」

ラス「んー、じゃあアスラさんはいつも何担当なんスか？」

「食糧調達」

ラス「あー…」それだけ？

「熊から家を守る」

シリウス「頼もしいですね…」

「とにかく私ができるようなことがあれば、なんでもやるように努力はしているが……」

途中で言葉を切ったアスラは手を止めてため息をついた。

「それでもあいつには、感謝しきれない。私はあいつと居られて幸

せだからな。そう思うと同時に…申し訳なく思う。私を選ばなければ、あいつは幸せな生活ができていたろうに…いや、私が止めるべきだったんだろうな。なのに、あの時私は…自分の幸せを選んでしまった」

自嘲の笑みが悔し気にアスラの顔に浮かぶ。

それは自分を選んでくれた夫を幸せにできない彼女自身に向けられた軽蔑のように思えた。

悲しい、と後輩は感じる。

この夫婦はお互いに幸せだと思っているけれど、どこか自分を責めているところがあって。

そして未だにかつての自分の決意に納得しきれていない。

またしても後輩たちはかける言葉を失った。

するとアスラは立ち上がる。

「まあ、いつまでも考えたところで先には進まないな。私は私のやるべきことをするだけだ」

そうして去り際に彼女は微かに呟いた。

「…子どものことも、考えてみよう」と。

シリウスとラスは目を見合わせて静かにうなづく。

もしかしたら、いや、きっと…この夫婦が本当の幸せを手にするのは近いのではないかと。

しかし…その希望は揺らぐことになる。

\*

ラスとシリウスがアスラの家滞在して1週間経った頃のことだった。

後輩とアスラがリビングに居たとき、カルムが思いつめた顔をして家に帰ってくる。

何か嫌な予感がする、とラスは目線で訴え、シリウスも静かにうなずいた。

「……どうした」

アスラの静かな声がやけに明確に聞こえる。

それを受けてカルムはうつむきながら言葉を紡いだ。

「……西の街で戦いが起こった。この家まで巻き込まれることはないんだが……その街に住む女や子どもは戦陣の中を突っ切る列車に乗って、首都に送られるそうだ……」

シリウスとラスはその時察する。

『その街に住む女や子ども』……その中にカルムのかつての婚約者が含まれているのでは、と。

カルムの今の言葉には正体の知れぬ思いが隠れているように思えてならない。

そう思ってしまうのは後輩2人がこの前、カルムの揺らぐ想いを感じてしまったからだろうか。

アスラはしばらく黙り込んだあとに静かに告げた。

「…行きたければ行けばいい。お前には…後悔してもらいたくない」

「アスラ……」

カルムはアスラの方へ歩み寄り、その体を抱きしめる。

そして小さく何かをつぶやいた。

それはよく聞こえるものではなかったけれど。

後輩たちには、

「……ありがとう」と、そう聞こえた。

そしてしばらくアスラを抱きしめた後、彼は家を出て行く。

その時のカルムは何か決意を秘めた横顔をしていた。

それは、なんの決意だろう。後輩2人の胸にはそんな不安がよぎっていた。

\*

アスラから話を聞いた2人は絶句する。

…彼女は、カルムがかつての婚約者に会うだろうということを知っていたのだ。

しかも、彼の中には婚約者への想いが微かに残っていたことも知っ  
ていて。

ダイニングテーブルのイスに座って烏龍茶を飲みながらそう淡々と  
話すアスラに対し、向かいに座っていたラスは声を荒げる。

「ちょっと…わかってるならなんで行かせちゃうんですか!! あま  
りこんなこと言いたくないけど、駆け落ちとか戦場でケガしたりと  
か…最悪の場合はもう二度と戻ってこないかもしれないですよ!  
!? なのに…」

「…ラス、やめろ」

言葉が止まらないラスをシリウスが抑えた。

そんな2人に彼女は言い放つ。

「……これしきのことでは怯えてどうする」

ラス「なっ……」

アスラ「あいつの幸せを願うなら当然の結論だ。…すでに覚悟もしていた。だがそれ以前に、たとえどんな結末があったとしても…夫が帰ってくるまで茶を飲みながら気長に待ち、帰ってきたときはいつものように出迎える。それが妻の役目だろう？」

烏龍茶が入ったカップを少ししかかけて切なげに笑う彼女の表情は、綺麗だった。

\*

その日の夜、ついに夫が帰ってくることはなかった。

いや…正確に言えば、違う。

……戦場で被弾して、亡くなったのだ。

アスラの元に彼が帰ってきたときは、すでに息絶えていた。

しかしアスラは、

「…おかえり、カルム」

…涙を見せずに最後まで妻の役目を全うした。

ラスとシリウスは何も声がかげられない。

アスラは遺体が入ってる棺ひつぎに近寄ってそっとその頬ほに触れたまま、静かに聞いた。

「こいつは…『ここに帰ってくる途中』で撃たれたんだな？」

シリウス「…はい、街の人からはそう説明されました」

「そつか…。…ならば、いい」

少しだけ後輩の方に顔を向けた彼女は悲し気に微笑む。

「…お前らは…こいつを墓にいれてやってくれ。本部の方に頼め

ば1週間くらいで墓ができるだろう。場所は…そうだな、この家の裏口から広がる森を進んだ先にある、海が見渡せる崖の上にしよう。…あそこの眺めが私たちは好きだったからな」

\*

…約1週間後、海沿いの高い崖に大きく立派な墓が建てられた。

その前に立っている2人の男は花を供えて黙禱<sup>もくたう</sup>する。

…潮風が優しく揺らいでいた。その雰囲気<sup>ふんいき</sup>が亡くなった彼とどこか似ている。

シリウス「…ここに世話になって、今日が最後の日だが…まさかこんなことになるとはな…」

ラスはその言葉にひとつうなずいてうつむいた。

「アスラさん…大丈夫かな。あれから顔見てねーよ…」

そう、カルムが亡くなった日からアスラは自室から出てこなくなっただのだ。

真夜中に2人はアスラの自室のドアが開く音を別の部屋で耳にして  
いたが、それはおそらく…亡くなった夫の顔をリビングへ眺めに  
いていたのではないかと思う。

火葬される日まで、毎晩毎晩、それは続いた。

シリウスはその時のことを思い出して苦い表情をする。

「…つらいだろうな。けれどたぶん…カルムさんが『ここに帰っ  
てくる途中で亡くなった』っていうのは…せめてもの救いだったん  
じゃないか？」

「…そうだな。カルムさんは向こうの女の人じゃなくてアスラさ  
んを選んだってコトだから。でも…でもさあ…」

「…あの人も、ここに帰ってきたかっただは…」

そのとき。

ザッザッザッザッ…

2人の背後で草を踏みしめる音が聞こえた。

「……………!!」

振り返るとそこには、

「……………ご苦労だったな。 墓を建ててくれたこと、感謝しよう」

警察庁特殊捜査班の黒のロングコートと戦闘用の服を着たアスラが深紅の長髪をなびかせて立っていた。

その背にはアサルトライフルを背負っていて、両手には革手袋。大きな白い花束と酒のビンを持っている。

墓の前に立ったアスラは夫の名が記された自分より大きな墓石を眺めて微笑んだ。

「 私はしばらくここを離れる。 お前はここで私たちの家を護<sup>まも</sup>っていてくれ。役目を終えたら、私もお前の許<sup>もと</sup>へ行こう」

そして左手の革手袋を脱ぎ、花束と酒のビンをを墓に供える。

その手には、2人が初めて見る薬指に収まった指輪が輝いていた。

墓の前で黙禱を捧げたアスラは再び革手袋をはいて向き直り、

「私に新しい任務が来た。もうロンドンの寮も直っただろう？  
私はもう行くから、お前らもとっとと帰れ」

いつもの口調でそう残し、ロングコートひるがえを翻して森の奥へと消えていく。

後輩の2人は彼女の後ろ姿をただ呆然と見つめ、次第に笑みが浮かんだ。

ラス「いつもの……アスラさんだ……」

シリウス「…よかった…」

そうして、あああの人はやっぱり強い人だ、と改めて思い直す。

\*\*\*

ゲイル「そんなことが…あったんだな」

語り終えたシリウスはうなづく。

「はい。おそらく『借り』というのは、カルムさんをお墓に入れたことだろうと思います」

ミオ「……私はよく知らないけど、その女の人は今も元気なの？」

ゲイル「ああ、大丈夫だ。　　ってか、今この街にいるぞ。今日会ったんだ」

「そっか、よかった」

アスラは強いからこそつらいことにも耐えられるとついつい考えてしまうが、おそらくつらい過去があったからこそ強くなったのだろう。

「それにしても、まさかお前たちが一緒だったとはな……」

ゲイルはそれこそ、アスラの夫が亡くなっているということとは耳に入れてたが、まさか自分の後輩がその場にいたとは思わなかった。

それでよかったんだろうとゲイルは思う。

たぶん…アスラが一人で受けるにはその事実は重すぎただろうから。

シリウス「それで…今になって思うんです。最後にカルムさんが出て行くときに見せたあの決意の表情は、婚約者の方にきっぱりと別れを告げることであったんじゃないかって。カルムさんは、自分の気持ちにしっかりけじめをつけた人だと思つので」

その言葉にゲイルはうなずいた。

「…そうだな」

\*

そうして最後はゲイルがシャワーに入った。

ラス「なあキョウゴ君、俺たちすげー気になることあるんだけど」

ラスは自分のベッドに寝転がりながら聞く。シリウスも続けてうなずいた。

キョウゴ「なんですか？」

ラス「なんで俺たちから逃げるの、って聞くべきなのかなー…いや、実際今ここにいるわけだから逃げてないって言えばそうなんだけど… な、シリウス!」

シリウス「お前今言ってることわからなくなっただろ」

ラス「んなの、どーでもいいんだよ!! なんかいい感じに、聞け!」(すでに適当)

シリウス「キョウゴ君は、俺たちから逃げているのか? それともただ街を移動してるだけ?」

その問いにキョウゴは難しそうな顔をする。

キョウゴ「そうですね…具体的には言えませんが…半分あっていて、半分間違ってます」

ラス「わっかんねー!! なにそれ!! ヒントは!」?

シリウス「じゃあ、君が俺たちから逃げると仮定して聞く。…君が逃げる理由のヒントはある?」

シリウスの冷静な問いかけに、今度は息が詰まるような反応を見せた。

そして彼は自嘲めいた笑みを浮かばせる。

「……俺はひどい人間ですよ。理由がくだらないものなんですから」

ラス「…？」

シリウス「…それは、いつかわかる日が来る？」

キョウゴ「……来るかもしれませんがね。俺は…来てほしくないですが」

シリウス「…と、いうことだそうだ。ラス、何かわかったことは？」

ラス「…ん。…キョウゴ君は、謎だらけってことがわかった!！」

わかってないんだろうが。

ミオ「ねえキョウゴ、それはキョウゴだけの問題なの？キョウゴ以外の人も関わってる？」

彼自身の問題か、否か。

キョウゴはその問いに答えず、口を閉ざすだけだった。

しばらくして出た言葉も、

「……言えない」

ただ、それだけ。

ラスはガバツと起き上ってキョウゴをしつかりと見据えた。

「とにかく逃げる理由がどうだとかは置いて、これだけはきちり答える。先パイのこと、嫌ってる?」

その言葉にキョウゴはうつむいていた顔を上げて目を丸くする。

「え? ……いえ、そんなことはないですが……」

「それだけ聞ければとりあえずいいや。先パイはずっと、キョウゴ君に嫌われてるんじゃないかって思ってるからさ。そうじゃないなら、そう伝えた方がいいと思うぜ?」

「……、……はい……」

ラスの言葉にそれとなく返事するキョウゴだが、どことなく困った表情をしている様にも見えた。

\*

シャワーを浴びたゲイルが戻ってくると、ミオが絶句したあとに呆然としながら質問した。

「だっ……誰!!?」

……昨日も見たような光景である。

「……ゲイルだ、刑事の」(二度目)

ラス「やっぱり別人に見えるよな」  
シリウス「……だな」

前に下ろされた長めな前髪を水滴が伝う様子は、なかなか色気があ  
る(らしい)。

そんな刑事をミオはうつとりとした目で見つめた。

「ふああ……！ これぞ大人の男の人だあ……」

キョウゴ「……」

（名前聞かなくてもわかるだろう……） 冷静な心の声。

シリウス「さすがは先パイだ……」

ラス「あー、えっと、……ってことは今まで俺らはミオにどんな区分されてたんだ？」一応俺らも大人なんだけど。

ミオが答えない代わりに筆者がこっそり答えよう。

………大人じゃなくて、ガキっばいと思います。

\*

「よし、俺はもう寝るよ」

ゲイルがそう言うが、まだそんなに遅い時間ではないように思える。

ラス「えーっ!? もう寝るんスか!? せつかくキョウゴ君たちと一緒になの!」

キョウゴ「…俺もそろそろ寝ます」

ミオ「キョウゴも!?!」

ラスとミオの反応を見ながらシリウスは軽く息を吐いた。

「…2人とも疲れてるんだろう。そうとなれば、しょうがない」

ラス・ミオ「…そんなあーっ」

…もはや修学旅行のノリである。

ゲイル「お前らはまだ寝ないのか? 起きててもいいが、夜更かしはするなよ」

シリウス「…わかりました。ラス、ミオ、うるさかったら申し訳

ないからキッチンの方へ行こう」

ラス・ミオ「……はい……」

そうして後輩たちはキッチンの方へ向かっていった。

シリウスは心配りができる人間だ。とても気が利く。

キョウゴは首をかしげた。

キョウゴ（あの2人が同じ年齢に見えるのは気のせいか……？）

あの2人とはもちろん、金髪のヤツと少女である。

\*

ラス「わかんねー……。 わかんねーよシリウス！！」

ミオ「どうしてキョウゴは逃げてるの！？ そもそも逃げてるの！  
？ わかんねーいっ！」

シリウス「2人とも俺に言うなよ。俺だってわからないんだから」

シリウスはため息をつきながらメガネのレンズをふいていた。

ラス「だけだよ、キョウゴ君はキョウゴ君自身の問題で逃げてるわけじゃないさそうだよな」

ミオ「あ、さっきの私がした質問のこと？」

シリウス「確かに、そう思う。まあ、まだ日数はあるからわかることはあるかもしれないぞ。ミオがどこかに行ってる間に何か掴んだら、次会った時に教えてやる」

ミオ「うん！」

これ以上の詮索はしない方がいいと思っていたミオだが、やはり気になる気持ちは止められなかったようだ。

\*

さっきまでにぎやかだった部屋が真っ暗になり、やがてベッドの近くに置いてあるライトスタンドのほのかな光がついた。

ゲイル「今日は疲れたな」

ゲイルがベッドに横になり、隣のベッドのキョウゴもうなずく。

キョウゴ「結構いろんなことがありましたからね」

そして、わずかな沈黙。

ふと、ゲイルが口を開く。

「なんか、変な感じだ」

「…俺とあなたが同じ部屋にいることが、ですか？」

「それもある。でもそれよりも…お前が昔俺の家に居たとき、同じベッドで寝てたんだなって思うと…」しかもシングル。

ガバツ！！（唐突にキョウゴが起きあがる音）

「そっ…それは、あなたの家にベッドがひとつしかなかったからでしょう!？」

いつもは割と冷静でいられる男（自称）が飛び起きて慌てる様子を見て、ゲイルは寝たままの姿勢で面白そうに笑った。

「だから、あの時俺は『床で寝るからいい』って何度も言ったろ」

「俺には、お世話になってる人を床で寝させることができなかつたんです！ だから俺も『俺が床で寝るからいい』って何度も言ったのに……っ」

「お前はそう言うがな、俺だって小さい子どもを床で寝させることができなかったんだ。それであーなつたんだろっが」

「……っ」

何も言えなくなつて悔しそうな顔をするキョウウゴを見てゲイルは苦笑する。

「ほら、もういいから寝るぞ。 電気消すからな」

「……はい……」

そんな会話がついに終わつて、電気が消える。

キョウウゴは会話が終わつてもなお、む……とした顔をしていた。

……まったく、素直じゃない男だ。 本当はゲイルとたくさん話せて、嬉しかったくせに。

一方ゲイルは昔のその光景を思い出して、楽しそうに笑みを浮かべた。

『……なんだかんだ言っ、お前幸せそうな顔して寝てたじゃないか。』

まあ……それを言ったらキョウウゴが怒るだろうから、あえて言わないでおこうか。

## 第二章 I Birthday . . . Part 7 (後書き)

これで2日目がやっと終了です。

結構長くなってしまいました(汗)

次回の更新は、後ほど活動報告のほうで書かせていただきますので、そこを参照してください。

あと、誤字・脱字があれば順次訂正をいれますので…!!

まったくスリルのない『カメの徒競走』のような逃走劇ではありませんが、次回もよろしく願います！

第二章 I Birthday . . . Part 8 (前書き)

これはリセラの夜が終わり、朝日が昇る明け方のお話。

前のPartに比べて少し短いですが、本編へどうぞ。

## 第二章 I Birthday . . . Part 8

「視点：ゲイル」

朝のまだ早い時間に俺は目覚めた。

寝室はしんと静まり返っていて、他の者はそれぞれベッドの上で眠っている。

結局あれから後輩たちはいつ寝たんだかな。

そして隣のベッドで眠るキョウゴの寝顔をのぞく。  
幼い頃の面影が残るその表情は昔と変わらず可愛いものだ。

昔のクセで、その髪をそつと撫でた。

キョウゴは、「……………ん……………」と声とも言えない声を発し、少し寝返りをうつ。

……………やっぱり起きないんだよな、こいつ。

昔と変わらない反応に俺は無意識に微笑んでいた。

次に窓の外を見る。

まだあまり明るくはないが、遠くの空の方が微妙に明るくなってきている。もうすぐ夜が明けるのだろう。

ちょっと散歩でもしてこようか。

俺は誰も起こさないように静かに脱衣所に向かう。

軽く着替えて鏡をのぞき、前髪をいつものようにオールバックにしようとしたが…止めた。

なんか面倒だし、たかが散歩だ。たまにはこれで外に出よう。

俺はあくびをひとつして部屋の入り口にかけていた黒のロングコートを羽織り、静かに部屋を出て行った。

\*

「…ん？ こんなところにバーがあったのか」

今さらだが宿の中にバーを見つけた。

開店時間は…PM12:00… …喫茶店の間違いじゃないか？  
でも軽食は置いてないのか…

そう思って首をかしげてしばらく立ちすくむが…

……別にどうでもいいことだよな。  
悩むだけ無駄というか、なんというか…

ああ、あれだな。寝起きだから思考力がどこかおかしくなってるんだよな。

（思考力どころこの問題ではない気がするが。 by 筆者）

そんなセルフツッコミを入れて再び歩きだし、宿の入り口のドアに手をのばしたとき。

「…どこに行くんですか」

静かな声が背後で聞こえた。

振り向けばそこには。

「キョウゴ…、起こしたか？ すまん」

不安気な瞳を向けてたたずむキョウゴがいた。

「いえ……」

どこか歯切れ悪く答える様子を見ると、どつちらそんなことよりも俺がどこに行くのが気になるようだ。

「ああ、別にどこに行くとかはない。 適当にそこらへんを散歩してくるよ」

そう残してドアを押したとき、

「俺も」と聞こえてもう一度振り返れば。

「…俺も、ついて行っていいですか」

少し視線を外したキョウゴがそうポツリと言った。

俺はたぶんまだ眠気が残っているからなのかぼんやりとその言葉を聞き、

「……ああ、いいよ」

軽く微笑を残して先に宿を出る。

\*

「視点…キョウゴ」

パタンとドアが閉まり、俺は刑事さんの後を追おうとするけど一度足を止める。

きつと外は寒い。コートが要るだろう。

でも俺は起きてすぐに刑事さんの姿を探しに行ったから、コートを置いてきてしまった。

『力』を使ってここに持ってこようかと一瞬考えるけど…「それはだめだ」と首を横に振る。

だからと言ってわざわざ部屋に引き返して取りに行くとするれば、その間に刑事さんが自分を置いてどこかに行ってしまう気もした。

でも俺…寒いのが苦手だし…

そんな葛藤を心のなかで繰り返したあと、結局何も羽織らずに宿を出て行った。

\*

「視点・筆者」

外の空気は想像以上に冷たく、もともと寒さに弱いキョウゴを凍こえさせた。

薄いワイシャツ一枚だけの上半身から順に熱を奪われる。

（さらに付け加えると、キョウゴはワイシャツのボタンを普段からきっちり留めていなくて鎖骨や腹のあたりが微妙にチラ見せ状態であるから、寒いのはもつてのほかである）

キョウゴは白い息をはいて空を見上げ、ぼんやりと昔のことを思い出した。

この世界で季節が正常に移ろつのは、もともと住んでいたロンドンだ。

ゲイルと出会ってから初めて向かえた彼の誕生日は夏だったのに、正反対の今日に違和感を覚える。

そして微かに震えながら先に歩いていってしまう彼の方へ走り、その横についた。

ゲイルはキョウゴの格好を見て目を見開き、足を止める。

「キョウゴ…お前寒がりなのに上にコート着ないで来たのか？」

それに対しキョウゴは少しむすつとした顔を見せた。  
こいつにしては珍しい表情である。

「…それを取りに戻っていたら、あなたは先にどこかへと行ってしまっていたでしょう？ 実際、今もあなたは先に歩き始めてた」

その言葉にゲイルはポカンとして、数秒後にようやくハツとして頭をかいた。

「…あ。…あー…悪いな、気が利かなくて。寝起きで頭が働かなかった」

その様子を見たキョウゴはため息をひとつ。

「…別に、いいですけど」

そして…俺がついてきたかっただけだから。と、心の中で付け足す。

だからゲイルには特に非はない…そついう意味だ。

しかし、そうは思っても寒いものは寒い。

体の震えは隠せそうにもなかった。

それに気が付いたゲイルは、

「じゃあ、今はこれを着てろ。 ちよっとお前には大きいが……」

自分が着ていたロングコートをキョウゴに羽織わせる。

キョウゴは「え……？」とゲイルを見あげるが、同時に冷たい頬に彼の温かい手が添えられ、

「……だって寒いのが苦手だろ？」

と、微笑されたらすぐにうつむいて視線をそらした。

少し顔が赤くなったように思える。

…なんだかんだ言っつて、この刑事はかつこいいのだ。

前髪を下ろしているからなのか、いつもとは違う雰囲気微笑されるとこれはこれでキョウゴはどっしりようもなくなってしまう。

その様子を見たゲイルは、「どうしてこうも視線をそらされるのかな」と笑って歩き出し、キョウゴは一瞬ギクツとした後に足早にその姿を追うのであった。

ゲイルの少し後ろを歩きながらキョウゴはそのコートに少し顔を近づめる。

コートに残る彼の体温は温かくて、そつと安心したように白い息をはいた。

「俺との約束、まだ覚えてくれてるんだな」

「え？」

「俺の前ではできるだけ『力』を使わないでくれって言っただろ？」

それは10年前、ゲイルがまだ幼かったキョウゴに『力』のことを初めて聞いたときのことだ。

『俺といえる時はあまりその『力』を使わないでくれ。約束だ』

『…なんで……?』

『お前は人間だ。人間が人間らしく生きないでどうする』

ゲイルの推測は正しかった。

キョウゴの心にはいつもこの約束が刻まれていたから。

街と街を移動する手段に『力』を使わないのは、『疲れるから』という理由よりもこの言葉があったからである。

それが今になっては『力』を使って街を移動することをプライドが許さないまになった。

さつきも、『力』を使ってコートを持ってこなかったのはこの約束があったからだ。

「それで俺がああ言ったから、今回もお前は『力』を使わずにここまで来たんだと俺は思ってるんだが」

ゲイルの言葉に対してキョウゴは顔をそむけた。

「……、別に」

…この男、やはり素直ではない。

普段のゲイル以外に見せる好青年な雰囲気はどこへやら。

しかし、これはさすがに。

「…当たってるんだな」

「……っ」

ゲイルでも見破れる嘘であった。

「…っそれよりも、いいんですか？ 刑事さん寒いでしょ」

するとゲイルはなんでもないようにサラッと笑う。

「俺は平気。なんかもう慣れた」

「慣れたって……」こんなに寒いのに？

「あ、そうだ。俺たちの班のコートとか一式、結構質が良いからお前の分も用意してやるよ」

「え…、いいんですか？ 班のメンバーじゃない俺がもらっても」

「ああ。たぶん細かいことは班長あいつらも気にしないだろ」

「…！ ……ありがとうございます」

キョウゴの声のトーンに微かな変化を感じたゲイルはそつとその表情を盗み見ると、彼は少しうつむきながらも嬉しそうな顔をしていた。

ゲイルもつられて笑う。

……そんな2人の頭上の空は朝焼けに染まり始めていた。

\*

街は日中のにぎやかさとは違ってかわって人影はひとつもなく、静まり返っている。

キョウゴは薄紫色だった空が紅くなっていくのを歩きながらぼんやりと見上げていた。

「刑事さん、これからどの方向へ行きますか？」

もともと、宛先のない散歩である。

それはキョウゴにもわかっていて、どこに行ったっていいと思っただけなのだ。

…宛先を決めないと、すぐにこの散歩が終わってしまう気がした。

ゲイルは未だに眠そうな目をしながらゆっくりとあたりを見回す。

「ん……なんとなく日の出を見たいから……、  
お、あそこの  
高台に行こうか」

そう言いながら指を差したのは2人の左前方の坂の上にある高台。

高台というか、広場のようにも見える。

だがそこは2人からは割と高い位置にあるため、結局何なのかはまだ判別できない。

キョウゴはそこを見あげながら微笑を浮かべてうなずいた。

「…はい、そうしましょう」

\*

「視点…キョウゴ」

気の向くままに進む、そんな彼のやり方に昔から憧れていた。

『俺もいつかはこうなりたい』って。

見失わないように、離れないように、いつも彼の背中を追いかけて

いた。

でも、その延長線上にいるはずの今の自分は、彼のような人間になれていなかった。

一見、自分の気の向くままに進んでいる。

好きな街に行つて、好きなように過ごして、好きな時にその街を去つて。

でもそれは見せ掛けで。

…逃げてるんだ。

逃げてるんだよ。気分が向くまま進んでいるんじゃない。

本当は怖いんだ。怖くて逃げてる。怖いからこそ、逃げる。

どうか、わかって。

でも、気づかないで。

…俺はいつも、逃げるだけなんだよ

\*

「視点：筆者」

同時刻、宿の部屋にて。

「…ラス、ラス起きろ。起きろって」

「なーんだよお…べつに食ったっていいだろが…」

「なに寝言言ってんだ、そして手を放せ…」

噛むなっ、俺は

食べ物じゃない！！ …それより、キョウゴ君と先パイが居ないんだ」

その言葉にラスの寝ぼけて虚ろだった目がパチリと開く。

「マジか」

「……マジだ」そこで反応すんのか。

「…シリウス」

「なんだ？」

「…おはよ」

「…ん、おはよう」

その会話の数分後、

バタンッ

ドアの音と誰もいなくなった部屋を見れば彼らがどう行動したかがなんとなくわかるだろう。

…「あの2人の邪魔すんじゃないよ」と思ってくれる読者の方も居れば筆者としては嬉しいのだが、どうかそこは大目に見てほしい。

\*

ゲイルとキョウゴはくねくねと曲がっている少し急な坂道を上りながら、その道に沿うように建てられた家を眺めていた。

アンティークドールハウスのような家々の壁のレンガはフランドル積みになっており、道もレンガを使用しているからか雰囲気が出ている。

(フランドル積みというのはレンガの積み方のひとつである。他にも小口積みなど、レンガの積み方でも色々な種類があるようだ)

「…なんだか人形の世界にでも入ったみたいだな。日本に伝わってた物語で言うところ…『一寸法師』?」

「え……『浦島太郎』じゃないですかね…」

ゲイルの表現力の無さ(…というよりもボケ)に対してツッコミ(…的な役割をしているキョウゴだが、どっちもどっちだ。

…というか、お前ら2人とも天然かという話である。

いずれにせよ、せつかくのメルヘンチックな雰囲気静かにぶち壊したのは言うまでもない。

\*

数分後、ある程度坂を上ったところに広場が現れた。

簡素な緑の三角屋根の下にはベンチが2つあり、他にも広場のあちこちにベンチがある。

その広場からは街のほぼ全景が見渡せた。

「まだ坂は続くんですね…」

キョウゴは広場からまた伸びている上り坂を眺めてゲイルはうなずく。

ふと、キョウゴが自分の脇に建っていた店に目をやった。

広場の向かいにあるそれは古いアンティーク店のようにも見え、そっと古い窓から中を覗く。

「何か見えるか？」というゲイルの問いにキョウゴはさらに目を凝らした。

「……楽器が見えます。ほとんどが弦楽器ですね」

窓の内側にあるぼうつと儚げに灯る消えかけのランタンの光が静かに暗い店内を照らしている。

ゲイルはその店の全体に目をやり、微笑んだ。

「なかなか良い場所に建てたな。2階にバルコニーがあるし、ここで演奏する人は気持ちがいいだろう」

「そうですね……。あ…刑事さん、日の出が始まりますよ」

広場から見える海に朝日の光が差し始めている。

「本当だ。…広場で見ようか」

\*

「視点：ゲイル」

広場の欄干に腕を置いて体を支えながら俺たちはしばらく何も話さずにそこから見える景色を眺めていた。

昇り始めた太陽が海を、空を、街を、まるで夕焼けのように優しく照らす。

冷やかだった風がほんの少し暖かみを帯びたように感じた。

キョウゴは静かにつぶやく。

「……綺麗ですね」

俺もそれに頷いた。

「ああ。こつやって朝日を見ながら深呼吸するとすっきりして気持ちがいい」

「…はい」

「それで、すっきりして気が付いたんだが」

「？」

キョウゴが不思議そうな表情をして、俺はクスツと笑った。

「…いつもは俺がお前を追いかけてんのに、今日はお前が俺を追いかけてきたんだなって思ってた。この街に来てからいつもは無いような色んなことが起こって、なんか楽しいよな」

「……………別に」

キョウゴはその言葉に顔をそむける。

一体こいつはこの街で何度その反応を見せるのだろうか。

俺は困ったように苦笑した。

「そんなに怒らないでくれよ」

「……………怒ってませんよ、別に」(どこかふてくされた態度)

「だって口調が……………つくく……………」

「あなた今俺のことからかったでしょ」

「……………さあ、どうか」(笑いをこらえてる)

「……………。……………聞こえましたよ、笑い声」

笑いの余韻を残した心地よい沈黙が流れ、しばらくしてからキョウゴが俺を見つめる。

「…ん、どうした？」

すると、普段あまり見せないような優しい笑みを見せて一言言った。

「……刑事さん、誕生日おめでとういじゅいます」

「……………」

呼吸が一瞬止まった。

そっだ、今日は俺の…………。

すっかり明日のことに気を取られて忘れていた。

なんとなく…………いや、かなり嬉しい。

それは「おめでとう」って言う言葉にか？

それともキョウゴがそう言うてくれたから？

…わからない。

俺は一度思考を止めてもう一度キョウゴの笑顔をしつかりと見る。

改めて、綺麗だと思った。

こいつはもともと顔立ちが良いからどんな表情でも様さまにはなるが、俺は今のこの表情が一番好きだ。

はにかむ様な笑みではないけれど。

これ以上なく優しい表情。

「…………綺麗だ」

無意識に口を突いて出た言葉にキョウゴは首をかしげた。

「え？」

「ああいや、なんでもない」

…お前は、気づかなくていいんだよ。

「あ、それで俺…」

キョウゴはそこまで言いかけて一度口を噤んだ。

「ん？」

俺の好きだった表情はスッと消えて、代わりに思いつめた表情になる。

しかし、キョウゴはすぐに笑みを俺に向けた。

……取り繕つくろってる。

瞬時に俺の直感が告げた。

その表情は、偽物だ。

「…あなたに、プレゼントを用意しました」

「…プレゼント？」

キョウゴは左手を楽器店の方に向けて綺麗な青い光を発生させる。

「キョウゴ」……?」

そう言いながらその手の先を見た俺は……今まで以上に息を止めた。

だって、その先には。

「……久しぶりですね、あなた」

「パパー!!」

……自分の妻と、娘の姿があったから。

「お前、これ……!!」

「刑事さん、行ってきてください。……今日は一日中一緒に過ごせます」

キョウゴはそっと俺の背を家族の方へ押した。

そのまま現れた2人の方へ足を運ぶと髪を2つにしばった3歳の俺の娘…ハルカが走ってくる。

「ハルカ……！」

俺はその体を抱き上げて目を見開いた。

体温も腕に感じる体重も、確かにあった。  
まるで今生きているように。

信じられない……！

そして奥にたたずみ優しく笑うセミロングヘアの俺の妻、マキの元へ向かう。

「マキ…なんでここに…！？」

「…あの子に呼ばれたんです。あなたの誕生日を一緒に過ごしてほしいって。『刑事さんはきつと、あなた方に会いたいですから』って言っていました」

「キョウゴが…？」

しかもマキの話からすると、これはキョウゴが作った幻ではないとわかった。

この2人は、本物だ…。

ありえない、と思った。

でもよく考えれば、前の街でもキョウゴは『亡くなった宿主さんに最後まで書いてもらいました』と言って完成した遺書を渡してきたことがある。

ということとは、キョウゴは天国（というような場所があるならば）にも『力』を使って行くことができるということになる。

でも今は、そんなことよりも。

「パパにあいたかったよー！」

「俺もだよ…ハルカとマキに会いたかった…」

二度と会えないはずだった家族に会えたことの方が今の俺には重要で。

「あのね、あのね？ あたらしいおうちのちかくのね？」

「え、いやちよつと待て。 ……新しい家って？」

そしてさっそくハルカの話についていけずにマキを見る。

「私たちは今別の場所に住んでるんです。 天国……だと思うのですが。 そこには住む家もあって、それで」

「?? ……はあ、なるほど…。」

……実のところ、よくわかってないが……まあいいか。

「……で、それで？」

「ちかくにすんでるおともたちと、おままごとするの…！」

その言葉に俺は笑顔になる。

ハルカは生きていた頃とまったく変わってなかったからだ。せつかく会えたのに反抗期だったら…、さすがに父親として悲しいものがある。

「そうか…。 ハルカは何の役なんだ？」

「かせいふー！」

「え」

…家政婦？

マキ「最近の子どもって結構シビアなんです…。この前なんてお  
ままごとの中でお父さん役の子が『会社が倒産した』って言って…  
驚きました」

ゲイル「いや…遊びなんだから、もう少し夢のある内容にしないか  
…？」

「あとねー、ハルカのおうちのまわりはおもしろいひとがたっくさ  
んいるのー！」

「…そうか、楽しそうで良かったな」

「うんー！」

マキ「あつ…そういえば、近所のタイ人の方が最近やってる健康器  
具がほしいのだけれど…買おうか迷っています」

「マキ…そういうのは買う前によく考える」（健康器具にツッコミをいれない）

「大丈夫ですよ、あなたに仕込まれた買い物術は健在です」

（…この期に及んでなぜどうでもいい話ばかりするのが謎である。  
by筆者）

\*

「視点：筆者」

一方その頃。

シリウス「聞いてる感じ…あの人がマキさんであの女の子がハルカちゃんか」

ラス「なんつーか…買い物の話になってね？」

ミオ「うーん、っていうより根本的にいろいろおかしいよね」（冷静）

この3人は坂の少し下方に隠れてゲイル達の様子を見ていた。

ミオ「ねえ、刑事さんは（天然だから）さておき、シリウスもラスも驚かないの？」

シリウス「…何にだ？」

ミオ「だって亡くなったはずの人がそこにいるじゃない」

その言葉にラスとシリウスは目を見合わせる。

ラス「あー、まあ確かにそうだけど、世の中は何が起こるかわかんねえし…なあ？」

シリウス「…な。それとも俺たちが感覚鈍ってきてるのかな」

ラス「さあね… いや、鈍ってない。冴<sup>さ</sup>えた俺の感覚が言ってるぜ、ハルカちゃんも可愛くてマキさんは美人だ！」（まったく話が繋がってない）

ベシッ！！！（シリウスがラスの頭を叩く音）

「いつつてえ！！！！　　っなんだよお前！！　別に浮気とかしねーから安心しろや！！！！」

「浮気も元も子もあるか！！！！」

「じゃあなんで叩いたんだよ！！！！」

どういうわけか夫婦の痴話喧嘩のようになってきた。

……この中で常識人なのがミオだけに見えるのは気のせいだろうか。

ミオ「……………（絶句）　それにしても……………なんかキョウゴかわいいぞう……………」

ラス「……………なんで？」

「だって……………キョウゴは刑事さんと話したいはずだもん」

シリウス「……………きっとキョウゴ君はそれを隠してマキさんとハルカちゃんを呼んだんじゃないかな。　それが一番先パイが喜ぶことだと思ってる」

ミオ「むうー……………」

シリウスの言葉にミオはどこか不満げにうめく。

ラスはその声を聞きながらじっと遠くのキョウゴの後ろ姿を見つめてサラツと言った。

「んー…それなら後で楽しく過ごせばいいんじゃないかな。

…たぶん、先パイはキョウゴ君を取るよ」

そうして先に道を引き返していく。

その様子にミオは「え？ え？？」とラスとシリウスを交互に見つめて動揺を隠せないでいた。

「え、ちょっと…今のどっいづこと？」

ミオがシリウスを見あげると、彼は去っていくラスの姿を見つめている。

「イマイチわからないが……たぶん、ラスなりに何か考えがあるのかもしれない。それが、何かに気付いたか…」

「そうなの…？」

首をかしげるミオにシリウスは微笑んだ。

「…あいつはバカなところあるけど、実は結構すごいんだ。今はあいつを信じて、ついていってみよう」

その表情はどこか自信にあふれている。パートナーを心から信じている目だ。

ミオもつられて微笑んだ。

「…うん！」

\*

「…そろそろ、真面目な話をしましょうか」

そう話を切り出したのはマキだった。

ハルカを少し遠くに行かせたマキは、ひとつのベンチにゲイルと座る。

「…あなた、そろそろ私たちの存在に捕らわれるのはやめてください」

「…え？」

ゲイルが目を見開いてマキを見ると、彼女は心配そうな表情でゲイルを見つめていた。

「…今でもあなたは夜になったら、私たちのことを守れなかったと悔やむことがあるでしょう?」

「……」

そう、ゲイルは今でも時々…特に事件などで人の死に関わるようなことがあるば、その夜に決まって人の死について考えこんでしまうことがある。

「…私たちが普段生活しているときは、あなた方がどんな日々を過ごしているのかわかりません。でも…死者に紡がれる言葉はちゃんと届いています」

「…!」

「あなたが私たちに紡いでくれる言葉は……いつも悔やむ言葉ばかりでした」

『俺は家族を守れなかった』

数十回、数百回にもものぼるほど、幾度も重ねられた後悔と懺悔<sup>ざんげ</sup>。

この男は家族が殺されてからの3年間、ずっと苦しんできた。

優しい笑顔の裏にはいつも自分に対する憎しみが張り付いていた。

いくら懺悔をしても、何人の人の命を守っても、それは自分自身に課したぬぐいきれない罪だった。

「……もう苦しまなくて良いんですよ。それを悪いことだと思っ人は誰もいません。あなたの好きなように生きてください」

マキの言葉にゲイルは手を組んでうつむき、黙り込む。

「でも俺は…お前たちを殺したあの男を許せない。 ヴイトだって、あいつに人生を狂わされた」

「……………」

「俺はたぶん…いつかあいつに復讐する。 それでも、マキ…お前は俺を許してくれるのか？」

そうして妻を見るその表情はつらい思いを隠した苦笑だった。  
マキはその隠された思いも理解している。 そのうえでしっかりと  
言葉を返した。

「……許すのは私ではなく、あなた自身でしょう」

静かに紡がれたその言葉は凜として強く心に響く。

「あなたが復讐を決めたとしても、私は何も言いませんよ。確かに  
あの人に多少の苛立ちを感じますが、きっとあの人にはその分の苦  
しみが…そして私たちには幸せが巡ってくるかと信じています。で  
すからあなたは、人生を良くするも悪くするもお好きなようにし  
てください」

「……ずいぶん淡泊たんぱくなんだな」

マキの言葉にゲイルが困ったように笑うと、彼女は静かに目を閉じ  
て微笑んだ。

「…どうせあなたのことですから、私たちがどう言おうといざとな  
れば自分の思うままに突き進んで行ってしまおうと思ったので」

「…」

…図星である。 さすがは、妻。

「でもひとつ助言をするならば」

「？」

「…何か行動を起こすとき、少しは考えてくださいね。 あなたがそれを行うことで何が起こって、誰が喜んで誰が悲しむのか」

「……わかった」

「あ、そうそう。 行動といえば…私はあなたが他の誰かと結婚したって別に構わないんですよ？」

「なっ…!？」

平然とした言葉に驚きを隠せないゲイルを見てマキは面白そうに笑った。

「だってあなたは別の誰かを愛したとしても、きっと同様に私たちのこともずっと大切にしてくれますもの」

「いや、そりゃあそうだが…」

「…とにかく、私はあなたが幸せに生きてくれればいいんですよ」

「…ああ、ありがとう」

マキと話すうちにゲイルの表情が変わっていった。

妻と娘は今でも楽しそうに生活していること、自分はもう家族の死に捕らわれなくて良いこと、本当の意味で自分の思うままに生きて良いこと。

それらを知ったということは彼にとって大きな影響を与えたのは確かだ。

…復讐という、重い言葉は未だ残っているが。

それでも、いつかそんな思いも変わるだろうかとゲイルはぼんやり考える。

家族は自分の死を受け入れている。おそらくあの男を恨んでるのはゲイルだけなのだ。

だが。

やっぱり許せないだろうと内心は厳しい表情を見せる。

彼の妻も娘も、生きていればまた別の幸せな時間を得られたかもしれないのだ。

なのにあの男はその可能性を根こそぎ踏みにじった。

これはゲイルの自分勝手な思い込みなのかもしれない。

この復讐は、世間一般から見ると明らかに間違ってる行動なのかもしれない。

それでもこの男の胸の内に巣食う黒い感情はもう戻れないところまで積もってしまった。

そんな冷たい思いを抱えたまま、彼は朝焼けを見つめた。

…今の自分には到底不似合いな、優しく暖かい朝焼けを。

\*

ハルカを2人が座っているベンチの方に呼んで、3人はしばらく時折笑いながら色々な話をした。

これがもともとの家族の形だった。　そう思うと、どこか切ない。

ひとしきり話し終えて沈黙が覆ったとき、マキとハルカは立ち上がる。

「それで、今日はこれからどうするんですか？」

マキの言葉はゲイルに向けられているが、視線は向こうのキョウゴの方に向けられていた。

ゲイルもその視線を追ってキョウゴを見ると、彼はまだ朝日を見つめていた。少しうつむいているように思える。

ゲイルはその背中を数秒見つめた後に、自分の娘と妻を見つめた。

そして、決める。

「俺は… …あいつと、後輩たちと一緒に過ごすよ。本  
当はお前たちも一緒に、と言いたいところだが…」

そこまで聞いてマキは安心したように微笑んでうなずいた。

「…私たちは、本来なら出会えないはずのものですからね。あな  
たがちゃんとそう判断できて安心しました。どうか、あの子の傍に  
居てあげてください」

「ああ……」

「ママ、もうパパとおわかれなの？」

マキのロングスカートを引っ張りながら見上げるハルカの頭を彼女はそっと撫でる。

「ええ。 ……大丈夫、きっといつか会えるわ」

「…ハルカ、これからもいい子でいるんだぞ」

「うん！！ パパ、げんきでね！」

ゲイルもハルカと目線を合わせてその頭を撫でた。

そして腰を上げ、数秒間2人を見つめたあと。

「お前たちにこう言うのはおかしいかもしれないが…元気だな」

「…はい」

…ゲイルはキョウウゴの元へと歩き始める。

その後ろ姿を見つめる妻と娘は、ずっと優しく笑っていた。

\*

「……キョウゴ」

「！」

突然近くからかけられた声にキョウゴはハツとして、いつの間にかうつむいていた顔を上げた。

そしてちゃんと笑えるようにと努力をしながらゲイルの方を振り向き、

「……どうしました？ 今日のはあの方たちと一日中過ごしていいんですよ、あなたの誕生日なんですから……」

そのまま視線がやっと彼の目をとらえたとき。

「……っ」

彼の表情が思ったものとは全く違って悲し気だとわかり、自分がうまく笑えていないことに気付いた。

ゲイルはぎこちなく笑ったキョウゴの表情を見つめたあと、静かに言う。

「…もう充分だよ、ありがとな」

その言葉にキョウゴは驚いたように目を見開いた。

「え………?」

「だから、あいつらを元いたところに返してあげてくれ」

ゲイルの言葉を聞いてキョウゴは何か言おうとするが一度口を閉じ、ひとまず片手をマキとハルカの方に向けて『力』を使い、言われたとおりに元の世界に送り届ける。

そして不安げに聞いた。

「あの…、連れてきてはいけませんでしたか…?」

だがその言葉にゲイルはとんでもないと言うように笑う。

「いや、そんなことはない。でも…もう俺とあいつらの世界は違うから、しょうがないんだ。…これでいい」

「………」

その笑顔をキョウゴが心配げに見上げた、そのとき。

グッ！

キョウゴ「？　??　……っ!!!!?」

その体はゲイルに抱きしめられていた。

キョウゴは目を見開いて顔を一気に赤くして、微弱ながらに目の前の体を押し返そうとするがゲイルは放してくれない。

どんな表情をしていいかわからず手にも力が入らない必死なキョウゴの耳元でゲイルの声が聞こえる。

「本当にありがとう。……すごく、嬉しかった」

その声は微かに震えていて、心からの感謝の思いがこめられていて。

「……!」

キョウゴは抗うのをやめてされるがままになった。

今はきつと、彼の顔を見てはいけないうんだと思うようにする。

「今までずっと背負ってきた重荷が少し軽くなった気がする。…いや、ずいぶん軽くなった。お前のおかげだ」

「……どう…いたしました…」

「……」

「……」

「……あ」

「え？」

「聞きたいことがあるんだが… その、お前が今日わざわざ俺に歩いてきて誕生日祝ってくれたってことは…俺はお前に嫌われてないってことでいいのかな」

「……っ」

不安げに問うその言葉に、『そんなこと聞くなよ』と言わんばかりにキョウゴはゲイルの胸元に軽く額をぶつけて顔を隠す。

そして小さく声をこぼした。

「……嫌いだったら…こんなことするはずないでしょう…」

その言葉を聞いたゲイルは苦笑して、「だよな。よかった」と言っ  
ってばんぼんと抱きしめているその背を叩く。

「……………」  
「……………」

そして、言葉が消える。

キョウゴは自分の鼓動が相手に伝わっていないか何度も心配するが、確かめる術もなくなただ顔赤くするだけだ。

「……………」  
「……………」

「……………」  
「あ、あの……っ」  
「ん？」

その言葉にゲイルが一度顔を胸元のキョウゴへ向けると、彼は顔を真っ赤にしながら視線をそむけて、

「……………」  
「体……痛い、です……………」

と、微妙に口ごもりながら言った。

するとゲイルは一瞬キョトンとした後に、



さっきからゲイルの突拍子もない言動に驚かされているキョウゴだが、その流れはまだ続いていた。

「……俺な、昔お前を養子にしたいって思ってたんだ」

「……、……！！？」

キョウゴは思わず二度見する。

まあ、いきなりそんなことを言われたら大抵誰だって驚くだろうが。

「なっ……い、言ってる意味が……」

突然切り出されたゲイルの言葉にキョウゴは動揺を隠せず、体が身じろぐ。

ゲイル「……だが、そう考えてるうちに家族は殺されて……お前はもう居なくなっていた」

「……………」

「でもな、今考えてみればこのままで良かったのかとも思っ」

「…それは…なぜ？」

キョウゴが静かに問うと、ゲイルは振り返って笑った。

「だって実際お前は今俺の傍に居るし、楽しいじゃないか。それで充分なんだよ」

「……！」

キョウゴが目を見開いているとゲイルは欄干から腕を離す。

「よし、そろそろ宿に戻るか。あいつらが起きてくる頃かもな」

「あ…、…はい」

優しく微笑みながら歩き出すゲイルの後を追うキョウゴ。

さすがに体が冷えたのか、前を歩く彼は両手をポケットにいれて白い息を吐く。

それを見たキョウゴはその背中にそっと片手で触れて…微かに青い光を放った。

ゲイルは「ん？」とキヨウゴの方を振り返って聞く。

「…今、何かやったか……？」

だがキヨウゴは視線を外し、

「…別になにも」

……素っ気なく答えた。もう定番の流れである。

そんなキヨウゴに「そうか……？」と言いながら一度前に向き直るゲイルだが、数歩歩いたところで足を止めて疑惑から確信に変わった目をキヨウゴに向けた。

「……いや、違うな。なんか体が温かくなってきた。…嬉しいけれど、俺なんかのために『力』は使わなくていいんだぞ？」

その言葉を受けた彼は視線はそらさないものの、再び素っ気なく答える。

「……しょうがないでしょう。あなたが俺に心配させるんですから」

「……え、俺が原因なのか……？」（目を丸くする）

「……まあ、だいたいは」（キツパリ）

「そうか……。次からは心配させないように気を付けるよ」

ゲイルはキヨウゴのぶっきらぼうな言葉を素直に受け入れて、目にかかるような長めな前髪を軽く掻き上げながら歩き出した。

キヨウゴは一瞬彼に今着ているコートを返そうか悩むが、あえてそうせずに白い息を吐きながら彼についていく。

…そうしてリセラ3日目の朝が始まった。

## 第二章 I Birthday . . . Part 8 (後書き)

…というわけで、本編でした。

今日もゲイルの突拍子のなさは好調だったようですね(笑)

さて、次のPartで刑事やキョウゴたちはゲイルの誕生日であるリセラ3日目をどう過ごすのか…

活動報告も後ほど更新しておきますね。

それでは次回もよろしく願いします!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3202q/>

---

Chase!

2011年11月16日19時29分発行